

グッドルーザーズ！！  
～球磨川禊と鬼人正  
邪による反逆の学園生  
活！～

ゼロん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「天邪鬼の私が入学した学校にとんでもない奴が入ってきたんだが……」

ひねくれ者のアマノジャク、鬼人正邪。弱者が支配する楽園を作ろうとした彼女は秩序を乱す異端として、あらゆる人妖から追われる身となってしまふ。追手側でありながら正邪の味方をするかつての同志、少名針妙丸。

志半ばで彼女らは力尽きてしまふ。死んだはずの正邪は目覚めた先で会った謎の少女からある依頼を受ける。

それは——最低最悪の過負荷（マイナス）、球磨川禊の来る予定の学園に入学してほしい、とのことだった。

いやいやながら彼女が入学した件の学校、角明（かくめい）学園は……『絶対強者』大  
多羅 全土（おおだらぜんど）が治め、学内のエリートたちが弱者を支配する、まさに  
『弱肉強食』の学園だった……

ひっくり返せ、大逆転！

思い知れッツ!! 負（マイナス）を、弱者の意地つてやつを！

最悪のひねくれ者たちの反逆の学園異能力バトルが今、幕を開ける——！

「さあ、弱者が支配する楽園を作るのだッツ!!」

『僕は悪くない』

←タイトルロゴ

\* 毎話12時半に投稿予定です。

\* 原作を知らない方でも楽しめるようになっております。

その場合はタグの人物のキャラ画像検索をしていただけるとより楽しめると思いま  
す。

\* この作品はフィクションです。実際の団体、人物には全く関係ありません。

# 目次

## 第1章 愚か者達の入学式編

〈プロローグ〉 最低な転校生と最悪

の自己紹介 1

第1話 たった二人のひっくり返す者 4

第2話 謎の少女、安心院なじみとの

会遇 15

第3話 針妙丸との再会、安心院さん

の依頼 20

第4話 目覚めの先、慶賀野功名との

出会い 31

第5話 学園の支配者 38

第6話 大多羅全土の強食論 47

第7話 咬ませ犬と過負荷の来襲

56

第8話 『混沌より這い寄る転校生』

64

第9話 『君は悪くない』 75

閑話 天邪鬼とお椀姫のある

一日 82

第10話 壊された針妙丸 100

第11話 『僕と友達になろうよ』

108

第12話 小さな勇気と大きな野心

116

おまけ 次章予告! 125

第2章 反逆の狼煙編

第13話 生徒会私刑執行部 130

第14話 『これ少年ジャンプだっ

たら規制されかねない、いじめの描写だ

よ?』 135

第15話 球磨川という男。 144

第16話 正邪の作戦 158

第17話 生徒会を……私刑執行する

であります。 169

第18話 天邪鬼の生き様 177

第19話 「知るかバカ。」 190

第20話 『大嘘憑き』 202

第21話 優しい慟哭 213

第22話 「私」と『僕』のそういう関

係 226

第23話 『理由? 別にないけど?』

2章 あとがき 239

2章 あとがき 247

第3章 革命の生徒会編

第24話 似た者同士のベッドトーク

第25話 『戦車』と『恋人』 252

第26話 正邪ボックス 272

第27話 いずれ時が来る前に

第28話 『まあそんなすぐに足並み

が揃うわけではないよね。』 298

第29話 『また会おう、めだかちや

ん』 308

第30話 決別 323

第31話 自分のため、仲間のため

334

第32話 全土の右腕、寒井美

紀 341

第33話 ミイラ取りはミイラに

353

第34話 『単に嫌いな奴が堕ちていく

第35話 二分する道 372

グッドルーザーズ 日常短編 上

383

グッドルーザーズ 日常短編 下

393

第36話 ハロー『悪魔(デビル)』

412

第37話 過負荷vs過負荷 その1

430

第38話 過負荷vs過負荷 その2

悪魔の化学実験 454

第39話 過負荷vs過負荷 その3

最低の仲間意識と

460

第40話 男女平等、顔面驚掴み

489

第41話 小槌の代償

502





## 第1章 愚か者達の入学式編

### ～プロローグ～ 最低な転校生と最悪の自己紹介

——私はなぜこんなところにいる。

つい先ほどまで転校生の自己紹介ジョークを聞き、爆笑していたクラスメート。中にはほくそ笑みで済ますものも、鼻で笑うものもいたが……

皆例外なく死んでいる。全員の胸と腕に大きな螺ね子が突き刺さり、間違いなく絶命している。

——このクラスの唯一の人外少女、天邪鬼あまのじやくである鬼人正邪きじんせいじゃを除いて。

「は……う？」

余りの一瞬の出来事で呆然とする正邪。

——いったい……何が起こったというのだ。

唯一の生存者である彼女を、首を傾げ不思議そうに見つめる転校生。

『あれ？ 君、大丈夫だったかい？ 悪いね、僕としては結構つまらない冗談だったんだけど。みんなの笑いの沸点之余にも低かったみたいだ』

ハハツとこの惨状を些細なことのようにその転校生は笑い飛ばす。この惨状を作った張本人だというのに、だ。

彼の薄気味悪い笑みに、その態度にゾツとした。背筋に怖気が走り、冷や汗が止まらない。

『勘違いしないでくれよ？ 僕が自己紹介して、ジョークを言った瞬間にどこからともなく螺子ねじが飛んで来たみたいだ。全く……悪趣味な演出だぜ』

転校生は三日月のような笑みを口元に浮かべながら、めちやくちやな理論を口走る。

下手くそな探偵小説の犯人でもこんな言い訳は絶対にしないだろう。

『決して、僕が投げたわけじゃないんだよ？ たまたま不幸にも彼らが死んでしまつて……たまたま、幸運にも僕らは助かった。おっと……早とちりしないでくれ……』

暴論の次は被害者面……責任転嫁……些細なことであればまだいい。

だが……この転校生は殺害という外道行為そのものを正当化しようとしている。明らかに殺人に使われた凶器を持ちながら、気持ちの悪い微笑みを浮かべながら、自分がやったことをなかつたことにする。

正邪はこの少年から人間、いや自分たち妖怪以上の不気味さを感じた。今まで会つた

やつの中でも最低最悪な……ナニカの片鱗を味わった。

気づけば足が……震えている。

自分でも理解できない不快感に自分の肩を抑える。

——震えるな、止まれ。ビビるな。怖くない、武者震いだ。これは武者震いなんだ……！

しかしなんだ……!? この人間は……? 狂っているとか、歪んでいるとかそんなじゃない……!

『僕は悪くない』

人間の負の面、そのものであると鬼人きじんせいじや正邪は転校生——球磨川くまがわ 禊みそぎをそう評価した。

# 第1話 たった二人のひっくり返す者

——幻想郷<sup>げんそうきょう</sup>。そこは外の世界、つまり現実世界と隔離された……妖怪と人間が共存する楽園である。

しかしながら、その楽園にも強弱関係は存在する。強き人間は弱き人間を、強き妖怪は弱き人間と妖怪を支配する。

弱肉強食が当然であり秩序満ちるこの楽園を気に入らないものがいた。

それが——『逆襲の天邪鬼』こと、鬼人正邪<sup>きじんせいじゃ</sup>。彼女は最弱の妖怪でありながら、『とある力のある弱者』を利用し、この楽園に反旗を翻した。

『姫、あなたたち小人族<sup>こびと</sup>は……今まで幻想郷の強い妖怪によって苦汁をなめてさせられてきました。今こそ小人族の秘宝『打ち出の小槌<sup>こづち</sup>』を使うときです。共に幻想郷を我々弱者の楽園に作り変えましょう!!』

一人でいた『ある協力者』に正邪はスツと手を伸ばす。

正邪はその人のことは『姫』と呼んでいる。何といっても彼女は有名な一寸法師の末裔らしい。

『……ッ!! うん! やろう正邪!! 私たちレジスタンスで!!』

覚悟を決めた彼女は伸ばされた手を力強く握り返す。

そして二人はニッと笑った。

『さあ、弱者が見捨てられない楽園を作るのだ!!』

『おおーッツ!!』

楽園を自分たち弱者が支配する世界にしようとしたのである。雲より高い上空に浮かぶ逆さの城、輝針城きしんじょうを拠点に。

計画を邪魔をする者には彼女自身の『何でもひっくり返す程度の能力』をフルに活用し、存分に苦しめた。

その結果、彼女は……

『はあ……はあ……クソツ、妖怪の賢者どもめ……しつこすぎだ……ッ!!』

……計画は見事失敗に終わり、彼女は逃亡生活を余儀なくされていた。

彼女の協力者であり、計画の実行犯である『とある弱者』——『小人の末裔』まつえい少名針妙丸すくなしんみょうまるが敗れた後、黒幕である彼女は針妙丸を見捨て、逃げ出したのである。

今まで幻想郷に反旗を翻した者は少なくない。正邪の目的は『楽園の崩壊・支配』であつたためスキマババア……ではなく妖怪の賢者達に追われる指名手配犯となつた。

彼らは容赦なく彼女の捕獲……あるいは抹殺を実行しようとしたが……正邪は抵抗し、ひとまず彼らの猛攻をしのぎ、現在も逃亡中だ。

正邪に利用されていたことに気づいた針妙丸も追手側だったが……暴力ではなく正邪を説得して捕まえる姿勢を彼女は最後まで崩さなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『正邪ツツ！ 止まって！ もう下克上は終わったの！』

『え？ 何を言ってるんですか？ これからですよ。弱者が強者を支配する、本当の下克上は……ね』

正邪は説得をいまだに試みる針妙丸に邪悪な笑みを向ける。

そんな彼女に今にも泣きそうな顔で針妙丸は抱き着く。突然の抱擁に驚き、正邪は目を見開く。

『正邪……お願い。もう逃げるのなんてやめて……私と一緒に降伏しよう……今ならきつとみんな許してくれるよ』

『姫、お言葉ですが……やなことだ！ だあれが降伏なんてするかツツ!!』

降伏の言葉に対し、あつかんべーをする正邪。

降伏勧告の完全否定。つまり力づく以外にとらえる方法は失われた。

徐々に針妙丸の顔が曇っていく。

『ごめんなさい、正邪……みんな、どうかお願いします。正邪を……捕まえてください』

その瞬間、針妙丸の後ろから追手がぞろぞろとやってくる。針妙丸もそれに続く。

『ふん……所詮あんたも強者側か……まあいいさ。我が名は正邪！ 生まれ持ったのア  
マノジャクだ!!』

|||||

それから数年後。

輝針城での針妙丸への態度はお芝居とはいえ、針妙丸と共に幻想郷への反乱を企て、共に笑っていたのも……今では昔の話。

「姫……クソツ……なんであんな裏切り者のチビのことなんか思い出しているんだ。……くだらない」

——芝居とはいえ……反乱の後押しをしてやったっていうのに、あっさり裏切りやがって。

「まあ……あいつを見捨てた私も人、いやアイツのことを言えないけどな。ハハツ、アイ

ツはただの人じゃなくて小人だったなあ……：そういうえば」

正邪は先ほどの自分の思考を鼻で笑う。二本の角が生えた頭を指で搔きながら、やれ、と。

くだらないとはわかりつつも軽口をたたく。何しろ……：腹に大穴があげられているのだ。見事にぽっかりと、隙間風が入るくらいに。

独り言でも叩かなくては……：激痛ですぐにでも意識が飛んでしまう。

口から真つ赤な血があふれ、腹の血が正邪の重ね矢印のワンピースに滲み、吐いた血が履いているサンダルに付着する。

「ゲホゲホッ……あゝあ……まだ終わってないんだがな……：下克上」

心底残念そうな顔で森の木々に囲まれた空を見上げる。そこに赤い影が一つ。

——視界がぼやけてよく見えない。

「チツ……：また私の邪魔をしたクソ巫女か……：来いよ」

動かなくなった足を叱咤して何とかして立ち上がろうとする。

「正邪!! やつと見つけ……ッ!! ひどい怪我!!」

——違う。妖怪退治のあの巫女ではない。こいつは……

「姫……：いや裏切り者が……：今さら、私に何の用ですか？」

「違っ……：！ 私はただ正邪に……：罪を償<sup>つぐな</sup>ってほしくて……」



最後の追手……少名針妙丸は彼女の悪意のある言葉に怯みながらも正邪に食いつく。正邪はそれを鼻で笑う。光を失いかけたその目で、針妙丸をまっすぐに見つめながら。

「はッ！ お口では何とでもってやつですよ……ゴボツ、ゴホツゴホツ!!」

血を吐きながら正邪は悪態をつく。最後の最後まで彼女は頑固でひねくれもの。

たとえば生涯最後に会える相手が針妙丸でも……それは変わらない。

「しゃべっちゃダメだよ！ そこを動かないで！」

針妙丸は来ていた赤い着物の袖を破り、包帯代わりにしようとする。

それを見た正邪の顔が怒りに歪む。

——冗談じゃない。強者側そっちにいったお前なんかは助けられてたまるか……!! 動く

な?! 上等だ。動く!! まだ体は動くんだ! 逃げ切つてやる……!!

正邪は自分の足を何度も叩き、ムリヤリ自分の言うことを聞かせようとする。

結果、立ち上がり数歩だけ歩いて後、生まれたての小鹿のようになっていた彼女の体は近くの巨木の側で力尽き、崩れ落ちる。

「正邪!!」

慌てて正邪に駆け寄り寄る針妙丸。

すでに正邪は虫の息。『なんでもひっくり返す程度の能力』を持つとはいえ、それすら

使えないほど彼女は衰弱していた。

使い方次第では強力な能力の保持者でも彼女は天邪鬼であり弱小妖怪だ。鬼のように強靱な肉体を持つわけでもなく、吸血鬼のように傷を瞬時に治す力もない。ただのひねくれ妖怪だ。

「どうしました？ 絶好のチャンスですよ……私はすでに虫の息。小槌の力がないあなただでも楽勝なんじゃないですか？」

「何言ってるの!? できるはずがないじゃん!!」

「……。そんなに弱かったら仲間を引き入れるまでもないんですけどねえ……けっ」

ふっ、と馬鹿にするような笑みを浮かべ挑発する。アマノジャクとはいえど彼女にもプライドがある。

自分の判断や計画に落ち度はなかったとは今でも思っている。あの反乱が間違っていたなど微塵も思っていないし、相手への嫌がらせも、裏切りも、嘲笑も何とも思っていない。

——それでも唯一の誤算は……

「違うよ！ 違うよ違うよお!! なんでわからないの!? 私は！ 正邪のことが大好きだから!! 死んでほしくないからとどめなんか刺さないの!! ほら、立って!!」

自分の協力者が裏切られてもなお自分を信じるくらい……純粹で、優しい……大馬鹿

者だったことだ。

伸ばされた針妙丸の手を忌々しげに正邪は振り払う。

針妙丸は我慢できずに持っていた針を投げ捨て、血だらけになるのも構わず、正邪の胸に飛びつく。針妙丸の着ていた赤い着物にも血のシミが広がり、正邪の胸につけてあった上下逆さまの青いリボンが彼女の涙でぬれる。

「はあはあ……!! 私……大っ嫌いですよ……! 姫のことなんか……どうでもいいって、ゴホッ……くらいに。どっかで野垂れ死ねてくらいに……!!」

抱き着く彼女をなんとか振り払おうとするが……もうそんな力も残っていない。

度重なる戦闘、負傷、徐々に減っていく自分の力、最も決定打になったのは……最後に負った致命傷。まだ針妙丸の姿が見え、喋れる余裕があるのが奇跡なぐらいだ。

——正直に言えば……針妙丸のことは嫌いにはなれなかった。もちろん強者を忌み嫌い避ける自分とは違い、強者に恭順し順応するその姿勢は気に食わないし嫌いだ。

だが彼女は非常に優しく、純粋な少女だ。どこまでも前向きで、自分と同じように彼女も弱いくせに……別の弱きものに『一緒にがんばろう』と手を差し伸べる。そんな情に厚い所は……甘い、嫌いじゃあなかった。

そんな彼女といったから、この下克上は絶対やり遂げられる、やり遂げてみせる。そう

思った。たとえ……レジスタンスが私一人になったとしても。

下克上が仮に成立したとしたら……彼女と輝針城で、弱者たちが強者を支配する……そんな世界で悪態をつきながら過ごすのも……悪くない。そう思ってもいた。

——それでも、死ぬ前でもそんな本音は絶対に言わないが。

彼女は……最後までみんなの嫌われ者、アマノジャクでいたいから。その誇りが甘えを許さなかったから。

——もう喋る気力も……失せてきた、な……

周りの景色がぼやける中、唯一見えていた針妙丸のぐしやぐしやの泣き顔も見えなくなる。

「……じゃあな。せいぜい強者の世界で楽しくやってろ……裏切り者のお、ひめ……さん……よ」

「正邪……しつかりして……!! 正邪! せいじゃあ!!」

最後まで悪役で……嫌われ者でいい。最後にとどめを刺されるのが強者の中の強者、妖怪の賢者でなかっただけでも幸い、といったところ。

死ぬ間際でも彼女は強者嫌いの反抗者だった。

言いたいことは言い終え、光を失った正邪の瞳が閉じていく。

それを見た針妙丸の顔が絶望の色で染まる。

「いやだ……いやだよ……お願い、目を開けて……!! せいじゃ……! せいじゃあ……!! あ……」

罵られても、悪意のある言葉をかけられても……針妙丸は彼女のそばを離れず、ずっと泣きつき続けた。

そして……正邪はゆっくりと息を引き取った。

「あゝこんなところで終わっちゃつまらないのだよ。アマノジャク君」

——それが最後に私が聞いた言葉だった。

|||||

目覚めたときに自分がいたのは……外の世界では学校と呼ばれるところの教室。

——いや……それに似た空間だ。ここはどこか異質だ。私以外に誰かがいる気配がない。

「( )は……どこだ? 私は確かか……」

——死んだはず。間違はなく針妙丸に泣きつかれて……その後には自分は死んだはずだ。

いつの間にか正邪は机に座っていた。驚いて椅子を引き、席をサッと離れる。

「こんにちは。いやこんばんはかな？ それより……初めまして。鬼人正邪ちゃん」

気がつくとも目の前の教卓の上に見覚えのない……ヘッドバンドを付けた黒髪ロングの少女がチヨコンと座っていた。

## 第2話 謎の少女、安心院なじみとの会遇

「あんた……誰だ。見たところただの人間じゃなさそうだが」

「ああ、自己紹介がまだだったね。ボクは安心院<sup>あしむ</sup>なじみ。親しみを込めて安心院<sup>あんしんいん</sup>さんと呼びなさい」

安心院なじみ。彼女は自らの名を目元にピースサインを決めながらそう名乗った。

特徴的な学生服に肩と太もも近くで結んだ黒髪のロングヘア。ヘッドバンドと黒いソックスを身につけている。

——そうかそうか。絶対にそう呼んでやらないけどな。

「じゃあ、なじみ。ここはどこだ？ 確か……私は死んだはずだ」

「ボクの言うことを完全無視とは。本当にひねくれものだね……僕の友人と同じくらいひねくれ具合だよ」

「そりゃあどうも」

「……難しく考えなくてもいいよ。まああの世つて考えてもらえればいいさ」

よく見ると腹の傷が無くなっている。血がにじんでいたはずの自分の服も綺麗になっっているし、不思議と痛みもない。

——死後の世界っていうのも納得だ。

「ほう……やつぱ私は死んだのか。じゃあお前は閻魔様つてところか？ もつとお堅いのを想像していたんだがな……」

正邪は安心院を値踏みするように見ると、少しうれしそうな表情を浮かべる。

「それにしても格式ばった閻魔への反逆か……なかなかやるなお前」

ほう、と正邪は感心したようにニヤニヤしながら顎に手を当てる。

勝手な解釈に学生服の少女、安心院は苦笑する。

「えーと……なんか勝手に納得しちやっているけど……ボクは閻魔様じゃないよ？ まあ人間でもないんだけどさ……」

おいしょつ、と安心院と名乗る女性は教卓から飛び降り、正邪の前に着地する。

「それはそうと死んだ君にボクからの提案なんだけどさ……」

「やなこつた。断る」

安心院が言い終える前にあつかんべーをして即座に断る正邪。

残念そうに「ええ〜」と彼女は苦笑する。

「いやいや、話はまだ始まってないよ？」

「こういうのは面倒な話だっていうのがお決まりなんだ。絶対に断る。ほかの奴をあたってくれ」



ああ〜しんどいしんどい、と言いつつ正邪は適当に近くの机の上で寝そべり、安心院に背中を向ける。頬杖を突き、自分が行くのは地獄か天国かについてを考え中だ。

「お願いだよ。君にしかできないことなんだ」

「はッ！ やくなこった。私はな、人に嫌なことをするのがだ〜い好きなんだ。絶対にお前のお願いなんて聞いてやるもんか」

「困ったな……これはあの子よりも厄介だ。どうしたものか……」

しばらく顎に手を当て考えた後、そうだ！ と安心院は手を打つ。

「じゃあいいや。君はこのまま何もできないまま死ぬ、それでいいってことで」  
ピクツと正邪の全身が震える。

——よし、食いついた。

安心院は正邪が後ろを向いているのをいいことにガッツポーズを決める。

「ま、ボクの頼みたかったことって君以外の誰にもできることだしね。あくどびつきりの依頼だったのになあ……」

ピクピクツとさらに正邪の反応が顕著になる。

——あと少しだ。

「稀にみるレジスタンスであり、革命家であり、あともう少しで弱者の楽園を作れた君になら……って思ったけど……とんだ期待外れだったみたいだ」

「ぐっ……!!」

「根性なしの負け犬じゃないか……まあ楽園計画に失敗した君に期待したのが間違っていたのかもね……」

わざとらしく「はあ……」とため息までいれる安心院。

「ぐぐぐ……言わせておけば……ッ!!」

我慢できずに正邪はくるりと彼女の方を振り返る。

そして安心院は明らかかな侮蔑と嘲笑でとどめの一発を決める。

「まあ……弱者は所詮、軟弱者。負け犬は負け犬らしく、地べたに這いつくばのがお似合いさ。ずっと遠吠えてれば？」

その瞬間、正邪の中のナニカが音を立ってブチリと切れた。

一瞬の迷いもなく、一気に距離を詰め、彼女は安心院の胸倉を掴む。

「上等だア!! なんでもきやがれ、なじみ!! 弱者の意地! 思い知らせてやる!!」  
唾を飛ばし、馬鹿にされたことへの怒りをあらわにする。

高く上げたその声は少女のものだったが……それには何とも言えない迫力があつた。

さすがの安心院も正邪が激昂することを予測していたとはいえ、これにはびっくりした。

一度死んだとしてもやはり正邪の弱者への執着は並のものではない。

——やっぱり見込み通り。いや見込み以上だ。これなら彼を……

「で？ 私に何を頼むつもりだったんだよ？ 早く言えよ」

正邪は落ち着いたのか、安心院から手を放す。

安堵し、安心院は「ほッ……」と胸に手を当て息を吐く。

「まずは……そこで寝てる彼女の介抱もしなくちゃね。話はそこからだ」

「え……？ ……ツッ!!」

そこには……現世でまだ生きているはずの針妙丸が、机の上ですうすうと寝息を立てていた。

## 第3話 針妙丸との再会、安心院さんの依頼

「なんでこいつがここに……」

正邪は自分の目の前の机でのんきに寝ている小人、針妙丸を指さす。

それを受け安心院は首を傾げる。

「何って……死んだ君の側に飲まず食わずで、ずっとその場に居て、君の後を追って死んじゃった友達じゃないの？」

「は……!?!? なんだ……それ？」

彼女に言われたことを飲み込めず、困惑で顔が引きつる正邪。

——そのことについてはおいおい針妙丸に聞くとして……彼女の何かが変だ……大ききか！

よく見れば普段のアイツはせいぜい私の膝下に届くか届かないかぐらいのサイズなのに……今は下克上当時と同じく人間大の大ききになっている……どういうことだ？

そんな正邪の様子を見て、クスクスと安心院は笑みを浮かべる。

「全く……はたから見ればこの子は男の子のようにも見えるのに、女の子なんだよね。こんな可愛い子が友達なんて羨ましいぞお、この、このっ」

——なるほど。こいつの仕業か。

安心院はふざけて正邪をひじで小突いてくる。

バカにされ、いら立ちを隠せない正邪は体を寄せてくる彼女を突き飛ばす。

「よるな！ 馴れ馴れしい。それに……私とそいつは『友達』なんてお綺麗な関係じゃねえ」

正邪は苛立たし気に安心院をにらむ。それでも安心院の人を食ったような態度は崩れない。

「死別した友達が目の前にいるんだよ？ もっと喜んだらどうだい？」

「ふん……まあ、このおバカさんをまた利用できるっていうんだったら、利用できるだけ利用させてもらうってだけさ」

——このお人好しの馬鹿は一度騙されたとしても、また何度でも私に騙されるだろう。さて次はどう使ってやろうか……

眠る針妙丸を見つめながら、邪悪な笑みを浮かべる正邪。

安心院は「はあ……」とあきれたようにため息をあげる。

「またまたあ……なんで君は自分の気持ちに素直になれないのかな……」

「あ!?! お前に私の何がわかるっていうんだあ?」

正邪は安心院の態度に我慢できず、声を荒げて彼女につかみかかろうとするが……

「ううっ……せい……じゃ……？」

——しまった、声が大きすぎた。

目をゆっくり開けた針妙丸は見知らぬ風景に驚き、辺りを必死に見回す。

「えっ!! ここのどこ!? わたし、また人間と同じくらい大きくなってるし……あつ……」

正邪の姿を目にした神妙丸の薄紫色の目が満月のように見開かれる。

「正……邪……なの……？」

「違います。赤の他人です」

なんとかごまかそうと顔の前で片手を左右にふり、見間違いを指摘する。

「はらら」

下手な嘘をついた正邪の頭をこつんと安心院が叩く。

「やっぱり正邪だ! せいじゃああああ!!」

感極まって正邪に向かい全速力で走りだす針妙丸。顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら向かってくる。

正邪は彼女の突進をよけきれず、自分の胸に激突。

「ぐえっ! おい、くつつくな!! はなれろつての!!」

「会いたかった……! 会いたかったよう……せいじゃ……せいじゃああ……!!」

「はあ……」

もうどうしようもない、と観念し正邪はげんなりする。

針妙丸の涙と鼻水でせつかくの綺麗になった服が一気に汚くなっていく……

「おい……姫、もういいだろ。いいかげん離れろ」

やっと気が済んだのか、正邪に戻った針妙丸はハツと正邪の拘束を解き、離れる。

「あ、ごめん……だって、また正邪と会えたことがうれしくて、つい……」

「私は全つつぜんツツ！ うれしくありませんけどね。……あの世に行くなら私一人で行きたかったよ……つつたく」

心底嫌そうな顔をして正邪は床に唾を吐く。お前と一緒になんて死んでもごめんだ、と言いたげだ。

「本当は嬉しいくせにね……ぶぶぶぶ」

堪えきれず安心院は嘔き出してしまふ。

それを正邪がギロリとにらむと、「おお怖い怖い」と薄ら笑いを浮かべる。

「じゃあ本題に入ろうか。正邪ちゃん」

「早くしろ。いいかげんお前の気持ち悪い笑顔を見るのはごめんだ」

明らかに敵意のある正邪の態度に針妙丸はむっとする。

「正邪！ 初対面の人にそんなこと言わないの！ ごめんなさい、えーと……」

安心院の名前がわからず彼女は困惑する。

純粋な彼女に対して好印象を覚えたのか、安心院は優しく微笑みを返す。

「私のことは安心院さんって呼びなさい。私は現実世界……君たちの言うところの外の世界で箱庭学園って学校の創設者をやっているだけどね……」

「へえーそりやすーいすーい」

明後日あさっての方向を向きながら棒読みで応答する正邪。……安心院の話をまともに聞か気が全くないようだ。

誰かとのそんなやり取りに慣れているのか、気にすることなく安心院は話を続けようとする。

逆に針妙丸の彼女の話を書く態度は真剣そのものだった。さらっと出た彼女の『学園の創設者』の肩書かたがきに顔をばあつと輝かせる。

「つてことは……安心院さんって学校で一番偉い人なの!? すごい!」

「ああそうだよ。そう言ってもらえるとボクもうれしいよ」

安心院の話によると、彼女の創った学園……箱庭学園に来てほしい生徒がいるそうだ。その生徒が今回の依頼において非常に重要であるとのことだった。

「そいつは正邪ちゃん、君よりもはるかに厄介なひねくれ者だね。いつまでたつてもその子の宿敵がいるボクの学校に来ようとしないうけさ」

「あくわかった。その問題児を何とかしてこいってのがアンタの頼み事か?」



「いや、違うよ。たぶん……ぶん殴られたり、話して動いてくれる子じゃないだろうからね。それは期待してないよ」

見当違いと言われ、正邪の顔がたまったイラつきをあらわにする。

「は!?! じゃあ何をすればいいんだよ?」

「正邪! 話は最後まで聞く!」

「チツ……だからお前が嫌いなんだ……」

しかりつけてくる針妙丸にはかなわないのだろうか、拗ねて机の上であぐらをかいて正邪は黙る。

「針妙丸ちゃん、本当にいい子だね。君と違って」

「うっさい! 親かてめえは……前置きはいいから早く依頼を言えよ」

正邪は安心院に話を進めるように彼女を顎で指示する。

彼女はそれを受け、やれやれ、とすこしもったいぶってから正邪達に向かって腕を広げる。

「君たちにはね……その問題児が来る予定の学園に彼より一足早く入学してもらいたいのさ!」

「は……!?! はあああああああ!?! お前……何を言っているかわかっているのか!?! 私たち妖怪が人間の学校に通えっていうのか!?! 冗談じゃないぞ!」

机から降り、安心院に食いつく勢いでつめ寄る正邪を針妙丸がおさえる。

「正邪！ ちょっと落ち着いて！ ……だけど安心院さん。本気なの？ 人間大の大きさで人間の姿に近い私はともかく……角のある正邪とか外見的にアウトだと思うよ？」  
 暴れる正邪の腕が針妙丸のかぶっていたお椀に当たり、針妙丸は正邪を抑えている方とは別の片手でそれを抑える。

それを見てクスクスと笑う安心院。

「そこに関しては大丈夫だと思う。コスプレキャラって現代じゃ普通だし」

「適当すぎだろ（ですよね）!!」

自然と息が合ってしまったのか、正邪はあわてて口を両手でおさえる……すごく不機嫌そうだ。

それに対し針妙丸は顔を赤らめ、ハハハ……と笑っている。

「もちろん、君たちを完全蘇生させるし、存在もボクの方で何とか安定させるよ。存在自体が幻想の君たちにボクや妖怪の賢者のサポートなしじゃ外の世界はきつそうだしね……」

——幻想郷の賢者……スキマババア……もとい『境界を操る程度の能力』を持つ最強の妖怪、八雲紫やくもむらかりのことまでお見通しか。どうやら私たちのことについては、ほとんど調査済みのようだな。

「じゃあ……私たちの能力についてはどう説明する……!?!」

今の針妙丸には『打ち出の小槌』がないため、彼女の『打ち出の小槌を操る程度の能力』は使えない。その代わりに自分の体の大きさを人間大から人間の膝下ぐらいの元のサイズまでコントロールできるようになったようだ。

現に彼女は「やったよ正邪! 自由に体の大きさを変えられるよ!」と教室の端で喜び、新たな能力を使って遊んでいる。

——おそらくこの安心院とかいうやつの仕事だろう。

しかし、自分の『全てをひっくり返す程度の能力』はどうやら健在のようだ。

——この手のひらにある感覚でわかる。傷が無くなり、体力も万全の今ならこの能力を百パーセント使いこなせる。

試しに近くの机と椅子を指を鳴らし、『ひっくり返す』。すると椅子が机の上に、椅子の下に机が。見事に二つの位置が『ひっくり返った』。

——いける。今なら物の位置だけでなく、事象ですらも『ひっくり返せる』気がする……パーフェクトだ。

……だが、そこが問題なのだ。第三者から見る私の『ひっくり返す』能力は超能力染みている。加えて、第三者は人間だ。

異能力を持つ魍魎ちみもろりようが跋扈ばっこする幻想郷ならばともかく、外の世界の人間に私の能力

をうかつに見せるのはマズイ。

それに必然的に私が出くわすことになるのは、このおかしな空間を生み出している安心院が『厄介』と言う程の相手だ……少なくとも私の能力を使わずに済むほどの相手ではないだろう。

「ああ……君たちのこれから行く角明学園かくめいは異能力を持つ人間も少なくない。むしろそういう学生を好んで入学させる異質な学園だ。そういう点ではボクの学園も似たようなものだけだね」

幻想郷の強者の中には妖怪だけでなく、人間もいた。その全員が当然、能力持ちだ。『空を飛ぶ程度の能力』や『魔法を使える程度の能力』、『時を操る程度の能力』といったようにバケモノ染みている。

しかも一人一人が強大な力を持つ妖怪とタイマンを張れるだけの実力者ぞろいだっ

た。  
そんな人間が何人もいるかもしれない角明学園は、弱小妖怪の正邪にとってみれば地獄に等しい。

その情報を前に正邪は――

――ほう、それはなかなか楽しめそうだ。

愉悦<sup>ゆえつ</sup>で顔を歪<sup>ゆが</sup>ませていた。

「なるほど……逆に私たちが能力を持っていた方が都合がいいわけか」

「その通り。特に君の能力は使い方次第では非常に強力だ。けど……学内ではうまく立ち回ってね。彼らに目を付けられるから」

少し引つかかる言い方に疑問を覚え、正邪は警戒する。

——考え方が単純な針妙丸は聞き流すだろうが、天邪鬼の私からすれば……これはきな臭い。きな臭すぎる。何か裏がありそうだな……その学校。

嫌な予感を感じ、口元に手をあて、少し考えこむ正邪。

「へえ……人間の学び舎か……行ってみたいなあ……正邪！ 行ってみようよ！ 安心院さん、その学校に入学するだけでいいんでしょう？」

「ああ、入学して単位を取ってくれば構わないし卒業まで、とは言わない。ただ件の問題児と会うだけでいいからさ。もちろん、終わった後は生き返らせた状態で幻想郷に戻してあげるから」

「ふむ……」

——どの道生き返らなければ私の下克上は完成しないままだ。ならば……たとえ飛び込むのが蛇の腹でも飛び込んでみるか……？

「そうと決まれば早速!! あ、手続きの方はボクの端末……もとい分身が済ませておくからさ! 心配しないで行ってきてね!!」

「あツ!! 待て!! まだ聞きたいことが残って……!!」

安心院が指を鳴らすと、急な眠気が正邪たちを襲う。

くらくらして立っているのもやつとだ。

「クソツ……本当に何者だおまえ……!!」

「何者かって聞かれればボクはボク。安心院なじみさ……じゃあね正邪ちゃん。○○○  
君によろしくね」

肝心な人物の名前があまりの眠気で聞き取れずに終わり、正邪は再び重くなった瞳を閉じた――

## 第4話 目覚めの先、慶賀野功名との出会い

「……じゃー……せ……じゃー……正邪！ 起きて！」

「ぐっ……なじみは……!? ここはどこだ？」

「外の世界……みたいだね。幻想郷でも見たことがない景色だし……」

目覚めた正邪が周りを見渡すと、辺りには草木もない。目の前に正面の島に繋がる真つすぐな道が広がっていた。

よく見るとその道の先に大きな塔のそびえたつ人工島が見える。自分たちのいる道の端に行ってみるとその向こうには海が広がっている。

——「どうやら私たちは大きな橋の上にいるようだな。」

「そうみたいだな……ん？ 頭の上に何か乗っかっているな……」

正邪は頭上に妙な感覚を覚え、手を伸ばし頭上にあつた何かを掴む。

「これは……手帳？」

「生徒手帳だつて。あ、私の分もある！」

開いた本の中にはそれぞれの手帳に正邪と針妙丸の写真がある。

「わあ……きれいに映ってるね……」

——あの女、いつのまにこんなものを……!!

手に握っている生徒手帳をぐしゃぐしゃにしたくなる衝動に駆られる正邪だが、そこは手帳を持っているのは別の腕を握りしめグツと堪える。

ここでこの手帳を無くしたらさすがに困ったことになるだろう。

中身をよく確認してみると一枚のメモがはさんであつた。

『正邪ちゃん。針妙丸ちゃん。贈り物は気に入ってくれたかな？　ちなみに二人の可愛

い寝顔の写真もバッチリとっておいたぜ☆』

「うぜえ……今時手紙に星マークなんて使うやつあんまりいないぞ……」

イライラしつつもメモの内容を読み進める。

『角明学園では制服は指定されてないからそのままの恰好で大丈夫だよ。あと一時間後に入學式が始まると思うから、教室棟のそばにある皇庭こうていつてところに集合してね。教室棟はこの橋をずっと真つすぐに進んだところにあるよ。じゃあ、いい報告を待っているよ　く安心院さんよりく』

——皇庭つて……校庭じゃなくてか？　名付けた奴、ネーミングセンス皆無だな。

「あの……すみません……新入生の方ですよね？」

「あ？」

突然後ろから呼びかけられ、つい殺気を向けてしまう正邪。



先ほど呼びかけたであろう生徒が腰を抜かして怯えている。

「あ、あわわわ……ご、ごめんなさい！ 待って、殺さないで！ ただ道が正しいかを聞きたかっただけなんですウ!!」

「知るか、道端の草にでも勝手に聞いてろ、そんなもん」

「こら正邪！ ごめんなさい……うちの正邪が迷惑かけちゃって……」

針妙丸が対応の悪い正邪を押しつけ、腰を抜かした女子生徒に手を伸ばす。

「い、いいえ、あたしの方も……知らない人なのに馴れ馴れしかったですよ……」

針妙丸の手を取り名無しの女子生徒は立ち上がる。肩にかかった茶髪の三つ編みが立ち上がる際に大きく揺れる。

——よかった。この人、いい人みたいだ。

針妙丸は外の世界で初めて出会う人間が善良であったことを神に感謝する。

彼女は生まれも育ちも幻想郷育ちなのだ。旅立った先が悪人だらけの巢窟そうくつでは不安すぎてやっていけない。

……まあ、友達を利用した挙句見捨てるような悪人がすぐ自分の隣にいるのだが。

「ううん、全然気にしてないよ。私は針妙丸。あなたは？」

「あ、あたしは……けがの、慶賀野功名けがのこうみやうです。はじめまして……です、針妙丸さん」

三つ編みに赤枠の太い丸眼鏡をした黒セーラー服の少女は名乗り、針妙丸に対しおじ

ぎをする。

礼儀正しい人でもあるようだ。

「功名さん、こつちが私の友達の鬼人正邪。正邪つて呼んであげて？」

「はああああ!!? 友達い!!? どこどこ? お前なんかそんなのいたっけ?」

わざとらしくそこら辺をきよろきよろと見まわす正邪。

彼女の反応に功名は苦笑している。「はあ……」と針妙丸はとぼけている正邪の様子にため息をつく。

「ごめん、いつもこんな風だから気にしないでね」

「あ……はい。正邪さん、面白い人ですね……えっと、ちなみにその角つて……コスプレか何かですか? 服も……二人ともすごい特徴的だし……」

功名はおそろおそろと正邪の頭の角に指をさす。

げっ、やっぱり聞いてくるよな、と針妙丸は困った顔になる。

——一体どう説明したらいいものか……

これから登校するというのに正邪が着ているのはリボン付きの矢印模様のワンピース。針妙丸は赤い着物に大きなお椀。どう見ても怪しすぎる。

いくら制服が無指定の学校とはいえ、格好が奇抜すぎだ。どこかのパーティー会場に行くのわけではないのだから……

「う、うん！ そうなの！ 変わってるでしょくははは……気にしないで！ 角を付けてるのも……そう！ 彼女のフアツションなの！」

「フアツションですか……なんかすごいユニークなフアツションですね……」

——笑ってるけど慶賀野さんドン引きだよね……ごめんね正邪。

なんとか正邪が妖怪であることと自分たちの服装をごまかすことにし、同じように苦笑いを浮かべる針妙丸。

——私たちは変人コンビということで彼女には納得させよう。

そんな浅はかな考えだった。

腹のすかせた狼でさえも逃げ出しそうな鋭い目つきで針妙丸をにらむ正邪。

——天邪鬼であるこの私をただの変人扱いだとツ……!!

「おまえ……あとで覚えてろよ……!!」

「あ、それよりも功名さん！ 角明学園の皇庭つてどこだかわかる？ あの島のどこかに学校があると思うんだけど……正確な場所が私たちにも分からないの」

「え？ あの島全部が角明学園ですよ？」

「え……」

「え？」

あまりにも非現実的すぎて二人は自分の耳を疑った。天邪鬼に小人と、存在している

こと事態、非現実的な自分たちが思うのもどうかと思うが……

学生寮以外にも島のあちらこちらに校舎やスパーマーケットとおぼわしき巨大な建物が立っている。島の下側には居住区もあるようだ。

よく見るとケーブルカーやバスなども走っている。

——嘘だろ。あれ全部が……!? 学校つてよりも学園都市じゃねえか……

正邪はあり得ないものを見たような目つきで針妙丸の方を振り返る。針妙丸も正邪と同じ目つきで振り返り、二人の目が合う。

「えつと……功名さん、冗談は良くないですよ?」

「ええつ! 冗談なんて言つてないですよ!」

「……生徒手帳にも『校内の施設を生徒は自由に使用してよい』って書かれてあるな。それに地図を見てみる……針妙丸、どうやらこいつの言うことは嘘じゃないみたいだぞ?」

針妙丸も同じく生徒手帳を開くとそこには学校の地図が書かれており、地図には眼前の島が書かれてあった。島の中心にある塔の側に皇庭がある。

「うそ……!」

「やっぱり……あの安心院のことだ。まともな学校に私らを送るとは思ってなかったが

……( )までとはな」

「あの……二人とも……そろそろ行きませんか？」

話し込んでいる二人にしびれを切らしたのか慶賀野が声をかける。

二人はそれに気づき、彼女の方を振り返る。

確か入学式の集合時間は生徒手帳によると……十時半。

二人に示すように慶賀野が持ち上げた携帯電話には、はつきりとこう書かれていた。

――10:20

## 第5話 学園の支配者

「はあ……はあ……はあッ……なんで……私が……こいつらを……おぶつていかなきゃいけないんだよ……!!」

「えつと……ありがとうございます針妙丸さん……道を確認したもらった上におぶつてもらうなんて……」

「いいの、いいの。話し込んじゃった私たちが悪いんだから」

「針妙丸、何もしてないお前の手柄みたく言うんじゃない……! お前たちを運んでるのは基本的にこの私なんだよ……!!」

生徒手帳の規則によると、入学式に参加しなければ、入学は認められないらしい。無論、替え玉も聞かないし病気による欠席も認められない。

この学校に入学する人間が普通に歩いて、初見の場所に十分以内にとどり着くことは難しいだろう。人を背負いながら、入り組んだ島の中心まで行くのだから尚更だ。なわさら

ただの人間である慶賀野のペースに合わせずには絶対の間に合わない。

しかし……正邪も最弱とはいえず、妖怪の端くれ。人一人背負うくらい何ともないし、

減速もしないで済む。それに逃亡生活のおかげで走ることはかなりの自信があった。針妙丸が何とか交渉して、正邪に慶賀野を背負わせ、小さくなった針妙丸が彼女の肩に乗っかる。

そして針妙丸が地図を見て方向を確認し正邪が全速力で走る。といった形に落ち着いた。

——走る本人はすごく嫌そうな顔をしてたが。

「クソツ……!! それにしても何でこんなところに学校なんか……!」

「おおだらぜんど大多羅全土って人がこの人工島を作らせて、そのままこの学校を移設させたらいいですね……手帳にはそう書いてあります」

「へえくしかも経営破綻寸前だった学校や企業を吸収してどんどんかくめいがくえん角明学園を大きくしているのも、この人みたいだね」

「私の背中で雑談とはいい度胸だな、ええ? ……それより早く降りろ。着いたぞ」  
残り三分というところで無事、集合場所に到着。

慶賀野は正邪の背中から降りてペコリと正邪に頭を下げる。

「あの……正邪さん、ありがとうございました。女の子なのになにすごく力持ちなんですわね」  
「気色悪い!! お礼なんて言うんじゃないよ! おえツツ!!」

「ええええツツ!? そこは喜ぶところじゃないんですか!?!」

「慶賀野さん、正邪とはまともな会話できないって思つたほうがいいよ……あ、入学式の会場だつて！　じゃあここが皇庭なんだ！」

『入学式会場』と大きく書かれた看板のむこうに広大な敷地に広がる芝生が見える。その芝生の上にはパイプ椅子が並べられており、すでにそこには何百人もの生徒が座っていた。おそらくは正邪達以外の角明学園の新入生だろう。

「……そうみたいだな。」

「正邪？　どうしたの？　あつ、立札の前で人が座つてる……あれ？　あの人寝てる？」

「いや……寝息が聞こえない。遅れたやつを入れさせないための見張りか何かか？」

『角明学園 入学式会場』と書かれた看板の真下で、トレンチコートを着た男が目をつぶって椅子に座っている。

怒られるのでは、と心配し慶賀野は正邪の方に視線を向ける。

「だ、大丈夫ですよね……？　ギリギリだけど間に合いましたし……」

「あえて……遅れてみるか？　私たちが遅刻した時のアイツの反応も見てみたいもんだな」

座っている男を指で指しニヤリと正邪は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「ちよつ！　正邪さん、なんであなたはそんなにひねくれてるんですか!?　あえてしないでいいですから、そんなこと！」



慶賀野はあたふたと慌てて正邪の腕を引つ張る。

「ここまで来たからには絶対に一緒に入学しますよ、と言いたげだ。」

はッ！と正邪は慶賀野の悲鳴を意に介さず、彼女を小馬鹿にしたように笑う。

「それは私が天邪鬼だからだよ」

「アマノジャク……すごいひねくれ者つてことですか？ 自覚があるんだつたら自制し

てくださいよ……」

——わかってないな……私のひねくれ具合はそもそも人間のようにならな物じゃないんだよ……

三人はスタスタと入学式の会場に足を踏み入れる。

入口にいた男は……彼女らに対し、特に何も言わなかった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新入生の中には正邪達に負けず劣らずの個性的な者もいた。一番前の席にいる、ジャケットを羽織った金色のリーゼントの男性がその代表だ。

「何ジロジロ見てんだよ」と言われ、慶賀野は悲鳴をあげていたが正邪達は彼を無視して、自分たちの番号が書かれた席に向かった。

皇庭の奥には大きな特設ステージが設置されており、さらにその奥に巨大な塔がそび



特別良いことを言うわけでもなく、すごく普通で長い話なので、まあ当然……

「すう……すう……」

「むにや……正邪、もう食べられないよう……」

「つてちよつと二人とも！ なに寝てるんですか!? 本当にこう行動がマイペースっていうか、独特というか……!」

慶賀野は注意されないように小声で二人に呼びかける。

校長兼理事長の話が始まって十五分ほど。寝ているのは正邪だけではなく、さすがの針妙丸も長い話と睡魔のコンボ攻撃には敵わなかったようだ。

——いくらすごい人とはいえ、普段はあんな感じで普通のお爺さんなのかな……?」

慶賀野が想像していたのはもつと……

「ですから……皆さんは今日この日はたいへんめでたい……」

彼女は話しかけても起きない二人をゆすつて起こそうとするが……

「親父、貴様の話は終わりだ」

「え？」

突然聞こえた重々しい声に緊張し困惑する慶賀野。

声に反応し、先程まで鼻ちようちんを浮かべていた正邪が跳ね起きる。

するとステージの裏からえんじ色のトレンチコートを羽織った男が現れる。

——あの服や風貌ふうぼうに見覚えが……カーテンが邪魔でよく見えない。

正邪は頭の中で今まで会ったことのある人物とステージ上にいる男との照合を開始する。

「む、息子よ……まだ話は途中で……」

「耳が腐ったか？ 交代だ、と言ったのだ」

校長はしぶしぶ手に持っていたマイクを『息子』と呼ばれた男に渡す。

男はステージ上に上がり、カーテンで半分ほど隠れていた姿が露わになる。

その男は入学式会場の入り口で見かけた人物だった。

——間違いない。すぐに忘れるには印象的すぎる風貌だ。

『百獣の王』であるライオンを連想させる逆立った銀髪。見るものをゾツとさせる鋭い目つき。

顔立ちは整っており、体つきも校長以上にたくましいはずなのに、全体的にシュツとした印象だ。

羽織った濃い紅色のトレンチコート。その下から黒いタンクトップがちらりと見える。

そして何よりも……この遠くにおいてもわかるほどの威圧感。

実際の大きさよりも……彼がはるかに巨大に見える錯覚を味わった。

——見張りのためにいるただの学生かと思いきや、校長の息子だったとは……

正邪は顎あごに手を当て、コートを羽織った学生をにらみつける。

「えく……皆さん。息子の全土から君たちに話があるそうです。ありがたく、ためになる話なのでしっかりと聞くように」

——なにい!? じゃあ……コイツが大多羅 全土……!?

先ほどまでの眠気が完全に吹っ飛び、正邪達は目を見開く。

——確かにびっくりしたが……あの存在感なら納得だ。間違いない。あの男がこの学園の支配者。

全土は校長から差し出されたマイクをとり、ステージの中心に立つ。

「安心しろ。オレは親父のように長つたらしく………ためにならないスピーチをするつもりはない」

ふつと笑う全土の後ろをすたこらサツサと校長が走り去っていく。どうやら自分では役不足と判断したようだ。

「新入生諸君、オレからまず一言言っておこう」

全土の侍たなすまいに圧倒されているのか、新入生全員がゴクリと息をのむ。

「貴様らは家畜だ」

そう彼は『断定』した。

## 第6話 大多羅全土の強食論

「……はあ？」「あいつは何を言ってるんだ？」「……う？」

全土ぜんどの一言、もとい暴言によつて新入生の間にごわめきが広がる。

「聞き取れなかつたようだな。貴様らは……強者オレ達の下で管理され喰われる家畜に過ぎない、と言つたのだ」

「何……あの人……？ 自分の言つてることがわかつているの……う？」

三人の中で一番人の悪意に敏感な針妙丸しんみょうまるがたまらず小さな悲鳴を上げる。慶賀野けがのもたまらず口元を両手で押さえている。

「……!!」

言葉も出ないようだ。

「しかあし……ただの家畜からその飼い主になる方法がお前たちには残されている」

全土は片手を振り上げ、チョップでステージの教壇を音もなしに真つ二つに叩き割る。

綺麗な切断面を見せながら、教壇だったものがステージ上にカラリと床に崩れ落ちる。

「それは強者となることだ」

コートに付いた木の粉を彼は手で払い、右手の人差し指をスツと持ち上げる。

「腕の立つ者は戦士に、頭の回るものは策士に、料理が上手い者は料理人に。金への執着が強い者は商人に……自分の長所を他人の追隨を許さぬくらいに伸ばせ。それができぬ奴には……地獄が待つだけだ」

話が終わったのか全土はマイクを床に置く。

その瞬間、全土のいるステージに一番近い席にいたりゼントの男が立ち上がる。

「てめえ……ふざけやがって……理事長の息子だからって好き勝手言うのもいい加減にしゃがれ!!」

全土は機嫌が良さそうに、立ち上がった不良少年を値踏みするように見つめる。

「ほう……確か貴様は……桜街さくらまちだったか。オレの一番近くにいたというのに怯まず、意



見するとはな……」

彼が不良らしき男の名前を言うのと、さらに周りにざわめきが広がる。

「桜街……桜街つてあの……?」「『素手つぶしのコウジ』? こんなところまでケンカを売りに来たのか?」「地元で暴走族を一人でつぶしたつて噂の……?」「しかも素手でだつてよ」「マジかよ……」

「ああそうだ。そのコウジだ。おめえが偉いのかどうかは知らねえが……要するに弱肉強食つてことだろ。てめえが言いてえのは。くだらねえな!」

全土は余裕の笑みを浮かべながら桜街との距離を詰めていく。

「ふむふむ……その勇猛さ、気に入ったぞ桜街。もう一つお前にいい話を聞かせてやろう……『蜘蛛の糸』という話を知っているか?」

「ああ? なんだよいきなり?」

「ある一人の罪人が天国に続く一本の糸にしがみつくと話だ」

「……他にもその糸を掴んでくる亡者がいて、それを突き落としたり糸が切れたつてやつだろ? 欲張る奴は損をするつて教訓の」

「違うな」

「なにい!?!」

頭に血が上り、とんがりリーゼントの男……もと桜街はステージに上り、全土に飛

びかり

——全土の胸倉に手を伸ばした瞬間、桜街の体が突然ひしゃげる。

「あ、ぐあああああああああアツツ!! がアツツ!! あアツツ! ああああ!!」  
叫び声をあげながら、地に伏し、四肢の骨があり得ない方向に曲がつていく。まるで何かにつぶされたみたいに。

桜街の全身から血が噴き出し、噴水ができあがる。

「あれはな、他者を振り落とし、切り捨て、糸が途中で切れたとしても……天国の糸にしがみ続けるものこそが強者であり勝者……というメッセージだ」

「あ……がツツ……」

骨があらぬ方向にへし折れ、人間アトとなつてしまつた桜街を見ても全土は動じない。それどころか「短く、ためになつたらう?」と一笑している。

無残な桜街の姿を見て、新入生全員の心が折れたのか……皇庭は完全こゝろでいに静まり返つていた。

ある者は口元を手で押さえ、繊細な者は朝に食べたものを戻しかけ、そしてある者は現実から目をそらし逃避する者もいる。

この場で響くは全士の声と桜街の小さくなったうめき声のみ。

「さて……と、これで話は終わりとしよう。どうした？ 何を静まり返っている？」  
「全土様」

ステージ上にまた新たな男が現れる。現れた男は長身で、全土に比べればはるかに細身の男だった。だが容姿は明らかに美男子に入る部類だろう。

「おお、神井<sup>かのい</sup>生徒会長。どうした？ 今日はお前たちは休みのはずだが？」

「全土様が出席なされる舞台に我々生徒会がいけないなど……考えられません」

「物好きめ。あくまでもオレは生徒の一人だぞ？」

「だとしてもです……それよりも」

長身のイケメン……生徒会長は先ほどまでの優しそうな笑顔から一転。獰猛な肉食獣のような鋭い目つきで、文字通り潰された桜街を見つめる。

「この無礼なゴミはいかがいたしましたでしょうか。もっと重力を強くしてミートボールにでもいたしましょうか？」

「いいや、よせ。せつかくA組の生徒と超能力者<sup>アルカナ持ち</sup>達が作ってくれたステージだ。これ以上血で汚すのももつたいない。それにまだ桜街は入学したてだ……コイツをすぐに保険棟に連れて行き、『法王』に治療させろ」

「寛大なご配慮……!! まあ……これでこいつも全土様に逆らう気も失せるでしょう。」

すぐに能力を解除させます」

生徒会長が手招きをした直後に、彼と同じく白い学ランを着た学生が担架たんかを運んできた。うう……気持ち悪い、と言いながら重症の桜街をステージの外へ運んでいく。

「ここからは生徒会が指揮をとる。各自、生徒会メンバーから指示があるまでここで黙って待機すること。以上だ」

皇庭の外に運び込まれていく桜街。しかし、無残な姿になった彼の姿を見るものは誰もいなかった。

新入生は皆顔を伏せ、少しでもつらい現実から目を背けようとする。針妙丸も慶賀野もみんなそうだった。

ただ一人、正邪を除いて。

皇庭から消えていく桜街の姿を最後まで真つすぐと……その目に映していた。  
全土も教室棟に歩き、棟の中へ消えていく。

「う、うわあああああああああああああああああツツ!!」

全土が視界から消えて、精神のタガが外れたのか新入生の一人がパニックになり、必

死の形相で皇庭を飛び出そうとする。

「黙るであります」

知らない男の声が聞こえた瞬間、逃げ出した生徒が糸が切れた人形のように崩れ落ちる。少年の血で地面の芝生の色が徐々に緑から赤色に染まっていくな。

席を立ちかけた他の新入生も口を手で押さえ、席に戻る。

「席に戻れとまでは言っていないであります……自分は『生徒会 私刑執行部』庶務、百々千太郎であります。ちなみに剣道部部长であります」

青い着物を着た男、百々千太郎は手に持つている、そこらにあつたのだらう棒切れに ついた血を払う。

「しかし、アレを見た後に早速会長の命令に逆らうとは……寮に移る前に見せしめにもう一人、斬つといた方がいいのでありますでしょうか？」

百々は目に見えない勢いで近くにいた適当な生徒との距離を詰める。突然目の前に現れた百々に生徒は「ひつ……！」と悲鳴を上げる。

「まあ深くは斬らないし、『法王』の治療を受ければ死なずには済むでありますから。恨むなら、最初に逃げようとしたアイツを恨むでありますよ」

先ほど斬った、血だまりの中にいる生徒に指をさし、目の前にいる生徒に冷笑を浮かべる。

「君はこれからあの世を見れる貴重な体験ができます。良かったでありますなあ。君たちも！ これ以上この子のような犠牲者が出ないよう！ 尽力するでありますよオ!!」

百々は手に持っていた棒きれを頭上に振り上げる。傍から見れば簡単に折れそうなただの棒きれ。今から犠牲者となる少年にはそのただの棒きれが、人体を容易に切り裂く刀に見えた。

——そして少年の体は斬られ、体は音を立てて地面に転が……

『リパースイデオロギ  
ひつくり返れ』

「あれ？ なぜ……椅子が代わりに斬れているのでありますか？」

——らなかつた。あつたのは百々にどうどう両断された椅子のみ。

「……!? え？ 俺なんで……?」

少年と近くにあつた椅子の位置が『ひつくり返っている』。

「おい、保険棟つていうのはどこにあるんだ？」

「え……あ、ああ。保険棟ならお前たちの寮のすぐ隣にあります。さあお前たち

！ 寮に案内するであります！ 遅れぬよう早く進めであります!!」

そうやって百々は先陣を切って歩いていく。その後には正邪を含めた新入生達も続く。「むむ……おそらくさつき何かしたのはアイツでありますな……十分な警戒が必要であります」

鷹の目のように鋭くなった百々の目は前から正邪の顔をじつと見つめていた。

## 第7話 咬ませ犬と過負荷の来襲

「見事な咬ませ犬つぶりだったぞ。おまえ」

「見舞いに来た奴の第一声がそれか！ ていうか誰だお前！」

包帯でぐるぐる巻きになり、四肢を吊り上げた桜街さくらこうじは叫ぶ。

怒った桜街を物ともせず正邪はニヤニヤとほくそ笑む。

百々に寮を案内されてから数時間後。正邪は一人で保険棟にいた。もちろん重傷を負った桜街に会うためにだ。

「聞きたいか？ 私が何者かそりや聞きたいよなあ。よく聞いておけ。我が名は鬼人正邪きじんせいじや！ 生まれついできんのレジスタンスだ！」

「は、はあ……そのレジスタンスさんがこんなところに何の用だよ？」

自己紹介の時のテンションと比べ一気に覇気がなくなった正邪。頬杖をつき、テープテープに置いてあったリングをかじる。

「別に。ただの暇つぶしだ」

「ふ、ふざけてんのかてめえ!! こっちは全身骨折なんだよ！ あまりしやべらせんな

……ああああ!! いててえててツツ!!」



「おいおい、あんまり興奮すると治りが遅くなるぞ?」

「誰のせいだと思つてやがる……!!」

痛む足を手で抑える事もできず、さらにいら立つ桜街。

「……………患者をいじるのやめてもらえる? 傷増えて治す気無くなる」

医務室の扉を開き入ってきた女性はため息を漏らす。

桜街は助けを求めるように女性の方に顔を向ける。

「先生、早くこいつを帰らせてくれよ。マジで」

「無理だし、いやだ。しんごい」

「なつ……………それでも先生かよ!? ……しかもめんどいつて言つたよなあ!」

「そういうことだ。好きなかだけここにいさせてもらう。まだ果物はあるのか?」

「……………たくさん。バナナ……………いる?」

「なんでこの学園にはまともな奴がいねえんだ……………」

桜街は正邪の医務室追放を断念し、黙つて寝ることにした。

「で? あんたが全土の言つていた『法王』つて奴なのか?」

「……………ん、そう。名前は人首ひとかべ 繫けい。みんなはわたしのことをツナギつて呼んでる。まあ

その方が読みやすいんだらうけどさ……………」

ふう……………と息を吐きながら白衣を着た女性、人首 繫は明後日の方向を向く。

「アルカナだか何だか知らないが、そんな称号が付くことは……ただの人間じゃないってことなんだろう？」

「……そうね。わたしがこの保険棟の主治医を任されているのは『肉体を正常な状態に戻す』って能力のおかげ」

「ほう、便利な能力だな」

「……ここではそうでもないよ？」

悲しげな表情を浮かべ人首は目を正邪からそらす。

「他にも聞きたいことはある？ 新入生」

「二つある。お前は全土の味方なのか？ あとアルカナ持ちって一体何なんだ？」

「一つが良かったな……じゃあ簡単に」

人首は適当に近くににあった椅子に座り、ベッドに顔を仰向けに寝かせる。

「……私はどっちでもない。中立。ただこの学校に雇われてるっただけ……生徒会みたくアイツに服従はしてない」

「あつそ」

人首に聞いたところ、アルカナ持ちとはこの角明学園のなかで規格外の能力を持つ生徒のこと。そしてその異能力者の多くが生徒会に所属しているらしい。

「それで……俺のけがは治るのか？ 一生ミイラ状態とか死んでもごめんぞぞ!？」

「聞いてなかったのか？ こいつの能力について」

「う、うるせえ。寝てたんだよ。で、どうなんだよ先生」

正邪に向かいわめく桜街の方に体を向け、人首は再びため息をつく。

「まあ……普通だったら後遺症が残ってまともに動けないでしょうね……けど、大丈夫。三日あれば完治できる」

「三日!?! 一瞬では済まないのか？ 魔法みたいにパパッとよ」

「どんなファンタジー脳してんだ？ おまえ」

「ち、ちげえって！ 生徒会がここまで生徒に大けがをさせたんだ。一瞬で治癒できる能力を持つてるやつがいるのかって思ったただけだ！」

——なるほど、ただの馬鹿ではなかったか。

「はあ……それで済んだだけでもラッキーよ。なかには『生徒会』に逆らって殺された生徒も数多くいるもの。……たぶんあなたはよっぽど全土に気に入られたのね」

「嘘だろ……! そんなの警察や政府が黙っているわけが……」

「……いいえ。黙る。……むしろ黙らざるをえない」

「はあ!?!」

人首は席から立ち上がり、諦観を込めた目で虚空を見つめる。

「……この角明学園の卒業生の数十人は政界や報道機関の重役に携わっている。その全

てが全土の息がかかった者たち。その影響が卒業後も残らないとは限らない」  
「う、嘘だろ……?」

ガツクリと肩を落とす桜街。チャームポイントのリーゼントも元気をなくしたかのようになだれる。

「……まあ怪我の方はわたしのスキルを使えばすぐに治るから。心配しなくてもいいよ」

医務室のドアを開き、去っていく人首。残されたのはバナナを食う正邪と憔悴しきった桜街だけだった。

「ああそうだ。確かお前だったよな? 最初に全土つてやつに飛びかかったのは?」

「……それがどうしたつて言うんだ。あっさりやられてこのざまだ。情けねえ……」

桜街は歯ぎしりをする。腕も足も折れた今彼にできるのはそれだけだ。

「……どこが情けないんだ?」

「はあ? 聞いてなかったのかよ。でしゃばって飛び出して……あんな自信があつたえのにな。まじで雑魚みてえにやられちまって……このざまだ」

桜街は自分の手足を見て、顔を下に向ける。

「そうだな。あんなに周りに噂うわさされておいて、あっさりやられたお前は最高にダサかった。もう、笑っちまいそうだったぜ」

「クソツ……言いたいだけ言えよ。どうせ俺は……」

「その姿に私は最高に感動したぞ?」

「え……」

正邪は椅子から立ち上がり、桜街の前に立つ。

「お前はあの場にいた誰よりも早く行動し、『お前が気に入らない』と怒号を飛ばしたんだ。大したもんだ。お前には私と同じ、反逆者の素質を感じるぞ?」

「な、なに言ってるんだよ……俺は……あんなかつこ悪い負け方したんだぞ……俺よりも……あの場でじっとしていた他の奴の方が賢いに……」

「はあ!? あんなビビって何もできない奴らが? 賢い? 冗談じゃない、あんなの死んだほうがましだな」

吐き捨てるかのように正邪は怒鳴り、桜街はそんな彼女の姿に困惑する。

「で、でもよ……」

しつこく自己嫌悪をやめない桜街に対し、彼の頬を両手で思いつき叩く。子気味のいい音が医務室に響く。

「でももへちまもなあー! ツツ!! とにかく! お前はダツツサかったが、人間のくせになかなかやる奴だ! ……私が言いたいのはそれだけだ」

「……!」

正邪は桜街に背を向け、医務室から出ていこうとする。

「お前確か……コウジだったよな？　またクラスで会おう未来の同志よ」

後ろ姿で手を振り、正邪は桜街にしばらくの別れを告げる。

そして桜街以外に誰もいなくなった医務室は静寂に包まれた。

「なかなかやる奴……か。……ありがとよ、正邪の姉御」

何といえぱいいのだろうか。

残念な負け方をしたのに、その上自分よりも身長の高い少女に気圧されたというのに

……先ほどよりも心が自然と軽かった。

非常にすがすがしい気分を桜街は感じていた。

我に返り彼はハア、とため息をつく。

「けどやっぱ、ダサイ……か。がんばらなきゃ……」

|||||

それから数週間後、生徒会メンバーに目立った動きはなく正邪達は最底辺のクラス、D組に所属することになった。

この学校の新入生は初めは必ずD組から所属することになっており、生徒会から認め

られたものはC、B、A組の順に昇格が認められ、A組となり一年の単位をとれた者のみが卒業できるという。

つまり、生徒会に認められA組に入らなければ卒業できない。たとえ三年が経つたとしてもだ。

この学園を出られるのは超優秀な者、天才のみ。これが角明学園かくめいがくえんの優秀人材の輩出の秘密の一つであり、世間では全く知られていない真実である。

そして……覚えているだろうか。

この学園にやってくる者は正邪達だけではないことを。

『……が転校先つと……随分と規模が大きい学園だね』

——最悪の転校生がやってくる。

## 第8話 『混沌より這い寄る転校生』

『週刊少年ジャンプから二次創作サイトに転校してきた球磨川禊です！ みんなよろしく仲良くしてください！』

「ぷっ……」

転校生。学校ではありがちのイベントの一つ。いつ来るかもわからず、クラスの誰にも予想できないイベントの一つである。

二週間が経ち、この学校と外の世界と両方についてを知ることができた正邪せいじやにとって  
は程よい刺激なのかもしれない。

|||||

慶賀野けがのの話によると、この世界には大きく分けて四種類の間人まにがいるとのこと。

超平凡イノーマルの通常、秀才スベンヤルの特例。そして……異常な能力をもつ異常アブノーマル。

これが四種類のうちの三種らしい。

アブノーマルは何かしらの超常的な能力、スキルを持っている。『異常な殺人衝動』で



あつたり『電磁波を操る』ものであつたりと多彩だ。

……もつとも、自他かわからず被害が甚大で、理解不能なスキルを持つ人種は四種類目に分類されるのだが。

|||||

——おそらく、ここにいるモブたちは普通ノーマル。全土たちのほとんどは異常アブノーマルの部類に入るのだろう。余計に全土達が気に食わない。

今日、転校してきたのは黒髪以外に外見的に目立った特徴のない普通の少年に見えた。

ある一人の生徒曰く、彼の着ている黒い学ランはすでに廃校となつた名門学校、水槽すいそう学園の物らしいが……

ここは制服無指定なのであまりたいしたことはない。

少し奇妙なのが……この少年の言葉には心がこもっていないように聞こえること。

普通、人間の言葉には感情が乗る。喜び、悲しみ、怒り、安らぎなど様々だ。

この少年の言葉からはそういった感情はない。どこかフィクション染みている。

——まあどうでもいいことだが。

「はっはっはっ！ おいおい、また変な奴が入学してきたなあ？」「ていうか可愛くね？」  
「ジャンプ好きなのかな？」

D組の教室が笑い声であふれる。笑う中にはほくそ笑むものも、鼻で笑う奴もいる。  
——私は無論、笑うこともなく、つまらなそうに頬杖をつくだけだったが。

つまらない人間の授業を受けてもう疲れているのだ。ホームルームが終わったら  
やっと帰れるのでさっさと自己紹介など終わらせてほしい。

それが正直な感想だった。

針妙丸は疲れて正邪のポケットの中で寝ている。慶賀野けがのはというと……

「なんか……また面白いのが来ちゃいましたね……」

新しき変人に苦笑していた。頬が引きつっている。

——人間の苦勞する表情はいつ見ても飽きないな。けどやっぱり眠い。  
あくびをし、ポケットの中にいる針妙丸を起こしてからかう直前——

『笑うな。』

——すさまじい殺気が目の前から迫ってきた。

「…………ツ!!」『ひっくり返れツツ!!』

目前に迫る冷たい気配に反応し、自分の位置と座っていた椅子の位置を『ひっくり返す』。

自分の上に乗った椅子に先端の尖ったナニカが当たり、教室の端に吹っ飛ぶ。

——螺子ねじだ。

正邪が反射的に慶賀野の机の方を見る。

……慶賀野は死んでいた。全身を先ほどの螺子に貫かれて。

「な……!!」

よく見ると慶賀野だけではない。桜街を含めクラスにいた生徒全員が無数の螺子に貫かれ、絶命している。

血が四散し、教室はどす黒い赤一色だ。

——まさか……こいつの仕業か……!!?

正邪は新しく来た転校生……球磨川くまがわ 禊みそぎの方を振り返る。

『全く人の冗談を笑うなんて……人として最低だぞお前たち！ 恥ずかしくないのかっ!!』

真剣な顔で怒る球磨川は正邪を見てポカンとした表情になる。首を傾げて『ん〜?』と言っている。

『あれ? 君大丈夫だったかい? 悪いね、僕としては結構つままない冗談だったんだ』

けど。みんなの笑いの沸点があまりにも低かったみたいだ』

ハハッ、とこの惨状を些細なことのようにならざるにその転校生は笑い飛ばす。この光景を作った張本人だというのに、だ。

彼の薄気味悪い笑みに、その態度にゾツとした。背筋に怖気が走り、冷や汗が止まらない。

『おっと、勘違いしないでくれよ？　僕が自己紹介して、ジョークを言った瞬間にどこからともなく螺子<sup>ネジ</sup>が飛んで来たんだ』

転校生は三日月のような笑みを口元に浮かべながら、めちやくちやな理論を口走る。下手くそな探偵小説の犯人でもこんな言い訳は絶対にしないだろう。

『決して……僕が投げたわけじゃないんだよ？　たまたま不幸にも彼らが死んでしまつて……たまたま、幸運にも僕らは助かった。どこのところつまり……』

暴論の次は被害者面……責任転嫁……些細なことであればまだいい。だがこの転校生は殺害という外道行為そのものを正当化しようとしている。微笑みを浮かべながら、なかつたことにする。

正邪はこの少年から人間、いや妖怪以上の不気味さを感じた。今まで会った中でも最低な……ナニカの片鱗を味わつた。

気づけば足が……震えている。

自分でも理解できない不快感に自分の肩を抑える。

——震えるな、止まれ。ビビるな。怖くない、武者震いだ。これは武者震いなんだ……！　しかしなんだ……！？　この人間は……？　狂っているとか、歪んでいるとかそんな言葉じゃ足りない……！

『僕は悪くない』

人間の負の面、そのものであると鬼人正邪は転校生——球磨川禊をそう評価した。

「好き勝手いいやがって……消去法でどう考えてもお前しかいねえだろ、犯人」

『いや、僕じゃないよ？　それに生存者の中に犯人がいるのなら、君も含まれるでしょ？　えーと……ちよつと痛い人……さん』

「お前、コメントに困ったからって私を馬鹿にするんじゃねえよ」

——なんで揃いも揃って私をコスプレ好きの痛いヤツ呼ばわりするんだか。

『まあ気にすることないよ！　それも君の少ない個性なんだから！　周りよりも自分を大事にしていこうよ！　それにほら、コスプレって着ている人が可愛いければ何でもいいじゃん？』

「おい、やめろ！　色々な意味で！　おまえ何に喧嘩売っているんだ!？」

『それにしても……へえ。すごいね、この角。つるつとしつつかつとして……いったいどんな素材使ってるの?』

「!? さ、触るな!」

横に振るわれた腕を避け『わ、怒られちった』と後ろに下がる球磨川。

「ーこいつ、いつの間に後ろに回り込んだんだ!」

自分の角を触られ顔を赤くする正邪。少し彼女と距離をおいた球磨川は人懐っこい笑みを浮かべながら再び正邪の方に近づいてくる。

「なに勝手に角に触っているんだよ! くすぐりたいだろうが!」

『すごいや! こんな細かいところまでこだわっているとか、どんだけ自分の建てた設定にこだわっているの? 今の君も十分魅力的だけど、僕はそんな君の素の姿も見てみたいなあ』

「コレが素だよ……で? お前は私に何をしようとしているんだ?」

『え?』

急に飛びかかってきた球磨川の腹を蹴りつけ、教室の端に蹴り飛ばす。ドアが外れ、ボーリング玉のように教室の外に転がっていく球磨川。

蹴り飛ばされ、よほど驚いたのか手を頬にあてワタワタと慌てる。

『ぶ、ぶつたな! 親父にもぶたれたことがないのに!!』

「うるせえ。あんな殺気を放っておいて被害者面とはな。何をしようとした?」

『……別に? あいさつ代わりに顔を引きはがそうとしただけだけ?』

「予想もしなかった返答にびつくりどころの話ではなかった。何のために彼女の顔を引きはがそうとしたのか……」

「……一応聞いておくけど、なぜやろうとした？」

『だってえ、もしかしたら僕が君のことを好きなのはその顔だけかもしれないでしょ？ 体つきとか言葉遣いだとか全部じゃなくて』

——何ということだ。こいつ正真正銘のシリアルキラーか？ いや……こいつは……

『だから確かめたかったんだ！ 君の顔を引きはがしてもなお、僕は君のことが可愛いつて言えるのかをね』

……それ以下だ。こいつはすでに人間として終わっている。

「冗談じゃないぜ……聞かない方がよかったかもな」

『そうだ！ まだ君の名前を聞いてなかったね？ よかったら聞かせてくれると嬉しいな！』

先程までの自分の発言を当然のごとく流す球磨川。

正邪は逃げずにこの男に話しかけたことを今さら後悔し、顔を手で抑える。

——付き合つてられるかってーの……

「せいじや きじんせいじや  
「正邪だ。鬼人正邪」

『正邪ちゃんか……うん！ クラス一番の女子が話しかけてくれたんだ！ 僕の方からも自己紹介をしなくっちゃね！』

「勝手にちゃん付けすんじゃないよ」

球磨川は手に持っていた螺子をしまう。いや、突然消えたといった方が正しい。

『混沌より這いよる過負荷<sup>マイナス</sup>』球磨川禊。僕の名前だぜ。……よろしくね！ 正邪ちゃん！』

シリアス調からまた一変。すぐにまたのほほんとした笑みを浮かべる。

とことんまでマイペースな男だ。周りに溶け込めないほど絶望的に。

——なるほど、これが慶賀野の言っていた四種類の人間の四種類目——過負荷<sup>かふか</sup>。

『……あれ？ ノーリアクション？ ぼっちり決まったと思ったんだけどなく』

生まれつき異常な才能をもつ異常と違い、環境などが原因で性格が歪み後天的に超能力<sup>スキル</sup>を得た者達。

他人の害にしかならない能力を持つことが多い。仮に得たソレがプラスに働く能力であつても、自分が幸せになるためには決して使おうとは思わない。

またの名を過負荷<sup>マイナス</sup>。

加えて、過負荷のほとんどは社会不適合者または人格破綻者だ。

他人も自分と同じくらい不幸になることを何とも思っていない。



プラスの異常。マイナスの過負荷。頂上から下を見下す正<sup>プラス</sup>。底辺から上を忌避する負<sup>マイナス</sup>。

全くの正反対だ。

この男、球磨川禊は過<sup>マイナス</sup>負荷の代表であり、極めつけだろう。

「おまえ、その制服の学校、水槽学園は廃校になったって聞いたんだが……」

『え？　正邪ちゃん。何で僕を疑念の目で見てるの？　なんてこつたい、正邪ちゃんが僕みたいな善良な一般市民を疑うなんて……!!　友達を疑うなんて最低だよ!』

——私がいつお前と友達になったよ？　そんな日、絶対に来るか。

『全国一の名門校が、生徒会長や全校生徒を螺<sup>ねじ</sup>子伏せられたからって廃校になんかなるわけじゃないじゃないか!』

——やっぱりこいつの仕業か。安心院がこいつは厄介という理由がうなずける。

『せっかく同じ学校にいるんだ。仲良くしようよ、正邪ちゃん。あと……そこに隠れているお友達も一緒にさ』

「……ツツ!!」

正邪のポケットのふくらみを見つめ、全身を凍り付かせるような薄気味の悪い笑みを浮かべる。

球磨川の鋭い指摘に正邪は確信した。

——やっぱりこいつ、ただのクレイジーじゃねえ……!!

## 第9話 『君は悪くない』

「……正邪！<sup>せいじや</sup> 逃げてツツ!!」

正邪のポケットから小さくなっていた針妙丸<sup>しんみょうまる</sup>が飛び出し、球磨川<sup>くまがわ</sup>に突撃する。

無論、出た瞬間に人間大の大きさになっている。

『うわあ、驚いたな。「体のサイズを変える」スキルかあ』

「うるさい！ みんなに何をした!」

針妙丸の針の剣をよけ、冷静に彼女の能力を分析する球磨川。のほほんとした表情は崩れない。

その一方で針妙丸の顔には慶賀野達を殺されたことへの憎悪が浮かんでいる。

『うわっ、あぶなっ。ケガしたらどうするのさ!』

「いい気味よ!」

針妙丸の針が球磨川の頬をかすめる。

先ほどまで笑っていた彼が焦りの表情を浮かべているように見える。

『落ち着いて! 話せばわかるって! 僕たちは友達になれるはずだよ! 努力・友情・

勝利! ジャンプの三大原則の一つじゃないか!!』

「姫！ それ以上そいつの相手をするな！！ 攻撃をやめて戻ってこい！！」  
「うるさいツ！！ 黙って！！」

冷静さを失い、怒りに身を任せる針妙丸に誰の声も届かない。

「返せつツ！！ 功名さんたちを返してツツ！！」

『だから、僕は悪くないって。でもどうしてもって言うんなら……』

突如として球磨川の動きが止まり、そして――

「え……？」

針妙丸の針が球磨川の体を貫いた。彼の口元から血があふれ、着ていた黒い学ランに赤いシミが広がり始める。

「なんで……なんでよけようとしなかったの……？」

球磨川の行動が理解できずに目を見開く針妙丸。

『い、痛い。痛いよお……なんで……どうしてこんなことするの……』

「え……？ え？」

刺されたときはピクリとも動かなかった球磨川が急に苦しみ始め、目元に涙を浮かべる。しずくが零れ落ち、床に雨のように降り注ぐ。

針妙丸は動揺し、球磨川から針を引き抜いてしまう。

当然、彼は床に倒れ苦悶の表情をさらに濃くする。胸から出た血が床にも広がり始め

る。

致命傷を与えたことに困惑し、針妙丸は……

『なーんてね、大丈夫だよ。君は何も気にする必要はないんだよ』

「!?」

針に貫かれたまま先ほど同じ笑みを浮かべている球磨川に怖気をおぼえた。

——うそ。なんでこの人は笑っているの？ 死にそうになっているのに、なぜ笑っていられるの？

『友達が襲われそうになったら守ろうとするのは当然のことだよ』『君は悪くない』『それに他の友達も酷い目にあつた』『だから君は悪くない』『それをやったかもしれない人が目の前にいる。敵意を覚えるのは当たり前だよ』『君は悪くない』『それがたとえその場にいただけの人だとしても』『君は悪くない』『たとえその人を刺殺したとしても』『君は何も悪くないよ!』『だって僕は怪しいんだもの!』『君は何をしたっていいんだ!』『どれだけむごい殺し方してもいいんだ!!』『だって……友達を守るためなんだもの!!』『あ……ああ……ああ、い、嫌』

球磨川からあふれ出した過負荷に耐え切れず、手に持っていた針の剣を針妙丸は落としてしまった。

針が落ちるのを見た瞬間、彼はさらに笑みを濃くしていく。

壊れた人形が立ち上がるかのように、血を流しながら世にも不気味な動きで【混沌よりも這いよる過負荷<sup>マイナス</sup>】はその場から立ち上がった。

『あれ？ もう痛くないや？ これはもう治ったつてことかな？ いや、もうすでに治療不可能？ まさか！ 壊死の兆候かもしれないなあ！』

|||||

——マズイな。このままだと針妙丸が壊れちまう。

正邪はすぐに教室を出られる範囲から二人の戦いを観察していたが……勝負は圧倒的だった。一瞬で針妙丸の勝ちが決まった。

だがすでに勝敗は問題ではなかった。

「針妙丸！ どっかいつてろ！ 余計なことはするな!!」

「あ……あ」

『ひどいなあ。人に致命傷を与えておいて逃走とかー。この人殺し！ 恥ずかしくないのか!!』

「お前が言うな!!」

正邪の言葉に反応し、少し目に生気が戻る針妙丸。再び落とした針を拾い、身構える。「そうだ……！ あなたはどう考えても部外者なんかじゃない！ 人殺しはあんたよ！！」

『だーかーらーやったのは僕じゃないって。まあ……どうしてもそう言うんだったら、しょうがないなあ』

「……？」

球磨川は足元に落ちていた螺子を拾い、手の上で弄ぶ。

『これでおあいこにしようよ。針妙丸ちゃん』

そして、自分の頭に躊躇なくその螺子を突き刺した。骨の碎ける鈍い音が周りに響き、彼の頭の横から血がほとぼしる。

「い、いやあああああああッツ！！」

針妙丸は天を割くような悲鳴を上げる。部屋中に反響し声が消えた後、彼女はその場に崩れ落ち、倒れ伏す。

反対に、球磨川は立ったまま正邪の方を振り返る。

——これが……過負荷の中の過負荷。

この男にとつて勝敗などどうでもいいのだ。ひたすら相手を苦しめ、勝ちを譲り、そして……

「……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。私が悪かった、私が悪いの、私が悪いのは……悪いのは私……」

……相手の心を壊すのだ。

現に針妙丸は虚ろな目で延々とうわ言をつぶやいている。

『今日は転校初日だから疲れちゃった。そうだ！ 正邪ちゃん。下校途中の本屋さんでエロ本を買いに行こうと思っただけけど、一緒に行かない？』

「遠慮しとく。誰かさんのせいで用事ができちゃまった」

正邪は壊れた針妙丸を抱え、教室のドアを開ける。

——とりあえず、針妙丸を部屋で寝かせよう。その後のことはその時になったら考える。

息を吐くように人を傷つけ、その場にいるだけで嫌悪感を抱かせる。

誰もが近づかず、敵対する形でも関わりたくない。そういつた気持ちを持たざるを得ない。



それがこの男、球磨川禊なのだろう。

正邪はそんな彼に対して……

——なんて素晴らしいんだ。

……かなりの好評価だった。

『残念！　じゃ、また明日とか！』

正邪は去り際に教室の方を振り返る。おぶっている針妙丸はまだにうわ言をつぶやいている。

すると教室の方で、まるで何事もなかったかのように慶賀野達が困惑の声を上げているのが聞こえた。

## 閑話 天邪鬼とお椀姫のある一日

深く不快な暗闇の中、その少女は逆さの城、輝針城きしんじょうの奥でぼんやりと佇んでいた。その少女に向かい……歩くものが一人。

少女が目を開けると、光も感情も失ったその瞳に一匹の小鬼が映った。

「……だれ」

「へえ……ただの人形かと思いきや喋るんだな。あ、やべ声に出ちまった」

小鬼はあたふたと困った様子を見せたと思つたら、急にピシツと少女の前で姿勢を正す。

「初めまして、輝針城の城主よ……お会いできて大変光栄でございます」

「……消えて。小鬼に興味はないわ」

暗闇の中でチツと舌打ちが響く。

舌打ちの音に反応し、輝針城城主の少女が顔をしかめる。

「今、舌打ちしたわね」

「い、いいえ！ めっそもない」

小鬼は困ったように辺りを見回す。

「……………ここは暗いですね。あ、そうだ。ある骨董屋から盗んできた珍しいものがあるんですよ……………ちくしょう、暗くてスイッチがよく見えないな」

「……………いいから早く消えて。目障りだから」

——どうせ、あなたが狙っているのはこの『打ち出の小槌』のくせに。……………上つ面の敬意なんて不愉快だ。

「あ、あつた。……………へえ、結構美人さんじゃないですか」

小鬼が懐中電灯を取り出したことで互いの姿が明らかになる。

城主は赤い着物を着た、薄紫色の短髪が特徴の小人。

対する侵入者は黒髪に赤と白のメッシュの小鬼。

逆さ矢印の模様のワンピースに腰と胸元に青いリボンを身につけている。……………なぜかりボンは上下逆さまだ。

「そう、満足した？ ならさっさと出て行って。小物妖怪さん」

「いえいえ、そうはいかないんですよ。私がここに来た目的をまだ果たしていませんからね」

「……………どうせあなたの目的はこの秘宝でしょ？」

小人の城主、少名針妙丸すくなしんみょうまるは乾いた笑みを浮かべ、自分の後ろにある黒い箱を見つめる。

「いいえ。私の目的は別にあります」

「へえ……そう言つて信じてもらえると思つてるの？ 小物の小鬼さん」

少しだけ明るくなった秘宝の間にブチツと何かが切れる音が響く。

「姫、私をあの強く……忌々しい鬼の一種と考えてもらつては困ります」

「ふーん。じゃああなたは何者だというの？」

ふふふ、と笑みを浮かべ小鬼は両手を横に広げ——その場から消えた。

異変に気づいた針妙丸は、今までの能面のような無表情から驚愕の表情を顔に浮かべる。

「!? 消えた!? あいつはどこに？」

「どこですよ、姫」

針妙丸が天井を見ると、そこには両手を大きく広げた小鬼が……天井に足をつけて立っていた。

「天井に……立ってる!? あなたは一体……」

目を見開いて自分を見つめる針妙丸に、小鬼は勝ち誇るように目一杯の笑顔をその顔に浮かべる。

「我が名は鬼人正邪きじんせいじゃ！ 全てをひっくり返す誇り高き天邪鬼だ!!」

それは……久方ぶりに暗い針妙丸の目に光が灯った瞬間だった。

——これが私とお椀姫の初めての出会い。

|||||

目覚めた正邪の目に映ったのは笑顔を浮かべた針妙丸の顔だった。

——目覚めの悪い朝だ。

「正邪、起きて。朝だよ?」

「……わかったから布団から降りろよ。うっとうしい」

針妙丸のくつついた自分の布団から身を起こし、寝間着から普段の一帳羅に着替え針妙丸の布団を押し入れにしまう。

ついでに針妙丸を自分の布団にくるんで、しまっておく。

ぐぐもった叫び声と押し入れを叩く音が聞こえるが、きつと気のせいだろう。

朝食用に簡単に作った味噌汁をすすり、コンビニという店で買ったふりかけをご飯にかけて食べる。

小さなちやぶ台の上で食べる二人の朝食。

頬張ったご飯をよく噛んで飲み込み、針妙丸は正邪に話しかける。

「ねえ正邪」

「ん？　なんだ？」

「そういえば最近、正邪はたまに私のことを『針妙丸』って名前で呼んでるよね？　『姫』

じゃなくてさ」

「……!!　そ、それがどうしたんだ？　名前で呼んで何が悪い」

動揺し、そっぽを向く正邪を見て針妙丸は『ふふっ』と笑う。

「な、なにがおかしい！」

「ごめん、つい嬉しくって……少しは私に心を開いてくれたのかなあって」

「はあ!?!　私が……お前にい!?!　冗談じゃない。裏切り者のお姫様に心なんか一ミリも

開くか」

「裏切ったのはお互い様でしょ？　頑固者の天邪鬼さん」

嫌そうに顔をしかめる正邪と、彼女に対し意地悪そうな笑みを浮かべる針妙丸。

いつものようにいがみ合う二人。共に憎まれ口を飛ばし合い、食事の時もおかわりをめぐつてくだらないケンカをする。

正邪は『針妙丸と友達なんて真つ平ごめんだ』針妙丸は『もつと素直になつてよ』と互いに譲らない。

……そんな光景も第三者から見れば仲のいい友達同士に見えるのだが。

ご飯を食べ終わった正邪は、自分の食器と使い終わった針妙丸の皿をスポンジで洗う。舌打ちをして眉をひそめながら。

「……ちつ、安心院あじむのやつも私一人を外に出させてくれりゃあよかつたんだ。なんでお前なんかと……」

「あつそ。けど正邪？　じゃあ、なんで私をムリヤリ追い出さないの？」

あなたの本音などお見通しだ、と言わんばかりにニヤニヤする針妙丸。一瞬だけ彼女をにらみ、正邪は手に持った食器に視線を移す。

「……お前みたいなの面倒くさい奴を適当に相手するより、追い出す方が手間がかかるからだよ」

——二人分の料理を作ったり、二人分の洗濯物を干す方が遥かに手間がかかると思うんだけど……頑固だなあ。

「食材が余るんだよ」

「え!? 聞こえてた!？」

「全部口に出てた。しばらくしたら当番は全部お前に任せて、私は寝ることができる。あとは姫の役に立つところと言ったら……荷物持ちですかね?」

「む〜!!」

針妙丸は頬をふくらませ、ポカポカと正邪の腕を殴りつける。

——あのクソみたいにムカつく能面顔から、よくもまあ表情豊かになったものだ。こちらとしてはからかい甲斐があつて、天邪鬼冥利あまのじやくに尽きるのだが。

彼女に叩かれても全く痛くないため、針妙丸の泣き顔を見ながら薄ら笑いを浮かべる正邪。久しぶりに針妙丸が不機嫌そうな顔を見れて嬉しそうだ。

「おつす! 姉御、学校一緒に行きませんか?」

「あつ、コウジ君ダメだよ……ノックなしで入っちゃ……お邪魔します。正邪さん」

ドアを開けて正邪達の部屋に無神経に入ってくるリーゼント男キョウジこと桜街。遠慮がちに黒セーラー服の少女、慶賀野けがのも彼に続いて入ってくる。

「咬ませ犬にビビり眼鏡。よく来たな」

「酷くない(です)か!？」

二人のリアクションを無視する正邪。



食器置き場に自分の分の皿を置き、学校用の手提げカバンを持つ。もちろん教科書などは準備済みだ。

「じゃあ行くぞ」

「ちよつと正邪!? 私の分の皿は!? 洗ってくれないの?」

「流し台に持って行っただけで洗うとは言ってない」

ベーツと蛇のように舌を出し、部屋から二人を連れて出ようとする。

針妙丸がドアに向かって駆けだした直前、正邪にドアを閉められ、三人に伸ばした手がむなしく空を切る。

「正邪のいじわるーーーッツツ!!」

……なお、さすがに針妙丸をかわいそうに思った慶賀野と桜街が皿洗いを手伝ったとか。

|||||

「正邪さん、少し……すこーしだけ針妙丸さんへの対応が悪すぎませんか?」

「いや慶賀野。あれは『少し』とは言わないぞ。『かなり』だ。姉御、少名さんへの扱いが雑すぎないですか？」

朝のホームルーム終了後、授業が始まる十分前。正邪の座る机の周りに集まる慶賀野と桜街。

ちなみに針妙丸は今朝の件ですねて自分の机に突つ伏したままだ。

「もちろん。雑にしてるからな」

「意図的っすかっ!? 陰湿っすね!」

入学して一週間だというのに、特に距離感なく近くに居る慶賀野と桜街を不思議に思いい、顔をしかめる。

「それにしても……入学してからあんまり経ってないのに、おまえら仲いいな。……もしかしてデキてんのか?」

「ち、ちがいますよ!?! コウジ君と私はそんなのじゃなくて!!」

勝手な結論を出され、大げさにあせってしまう慶賀野。チャームポイントの三つ編みが激しく上下に揺れる。

大声を出した慶賀野を面白がり、周りの生徒が『ヒューヒュー』と口笛を吹き始めた。

それを聞いて彼女の顔がりんごのように真っ赤になる。両手で頬を抑えて必死に体温を下げようとしている。下がらないのに。

一方、桜街は慶賀野から目をそらしている。自慢のフランスパン……いやリーゼントで顔が隠れて顔色がよく見えない。

正邪は満足げな笑みを浮かべ、慶賀野達をからかい続ける。

「じゃあ……慶賀野はコウジのフィアンセなのかなあ？ い・い・な・づ・け？」

「ちがいますよッ！ お・さ・な・な・じ・みです!! 幼馴染！ 彼とはただの幼馴染です！ それ以上でも以下でもありません!! ……入学式の時最後に彼を見た時と余りにも変わっていたから……その、気づかなくて」

そうとうショックを受けたのか、桜街はさつきまで立っていた場所で体育座りをしてる。……耳をすませば、少しすすり泣きの声が聞こえる。

正邪が彼をゆすつても彼の姿勢はそのままだ。

さすがに気の毒だと思っただのか、哀れみの目を込めて、桜街を慰めるために正邪は彼の横に近づき肩に手を乗せる。

「……ドンマイ」

「うっせええええ!!」

大暴れしそうになった桜街とのどきくきに紛れて、正邪は針妙丸に丸めた紙くずをぶつける。

『あう』と小さな悲鳴をあげ、針妙丸は顔を机から起こす。



「何でお前は私を追って死んだんだ？」

それは……避けては通れない質問だった。

|||||

針妙丸の目が大きく見開き、正邪のみをその瞳に映す。

そんな正邪の姿のなんと弱々しいことだろう。

いつものしたり顔で嘘をつき、針妙丸をからかう普段の姿は……そこにはなかった。

「答えろよ……針妙丸。なんで私なんかを追って死んだんだよ？」

「……」

沈黙。二人しかいない空き教室は静寂に満たされる。窓の外から太陽の光が物に当たり、教室を陰で満たす。

「……わからないや」

「……は？」

針妙丸の煮え切らない答えに納得ができないという風で正邪は針妙丸をにらむ。

対する針妙丸の顔はどこか儂げだった。吹けばすぐに飛んで行ってしまいそうなほ

ど。

「正邪がいなくなっちゃった後……私の頭の中は完全に真っ白になっちゃったの」  
言葉が続ける針妙丸を静かに正邪は見つめる。

「……たぶん、正邪が死んだことを……あの時の私は、受け止めきれなかったんだと思う。気がついたら……もう三日が過ぎてた」

針妙丸は正邪に向かって、『おかしいよね、私』と悲しげに苦笑を漏らす。

淡々と話す針妙丸の言葉を聞き、正邪の顔に苦痛の色が現れる。

「その時はもう自分の体が動かなくなってた。正邪の膝の上で」

「……ツツ！」

「あとになってすごく後悔したの……なんで、なんで正邪ともっと話さなかったんだろうって」

窓の近くにいた針妙丸は正邪に背を向け、窓の外に視線を向ける。ここではなくどこか遠い、手の届かない何かを見ているようだ。

「……もつと一緒にいればよかった。もつと正邪のことをわかってあげるべきだった。一人でいることのつらさを私も知っていたはずなのに……」

「あんたは一人じゃなかっただろ……お前にはもう居場所があった。私を倒したあの巫女のところでも行けばよかったじゃないか」

——私と違って、お前は……幻想郷に居場所があつたんだ。

「霊夢は……なんだかつた言つて優しいもんね……しばらく彼女と一緒にいて、全く退屈しなかつたし……楽しかつたよ」

「だろうな。お尋ね者の私というよりも、ずっと良かつたんじゃないか？」

「……良くないよ」

「……ああ!？」

背を向けていた針妙丸は正邪の方に振り返る。目をうるわせて、それでも泣くのを必死に堪えて。

悲しい顔を打ち消すように、針妙丸は穏やかに微笑む。

「だってそこにはあなたがいないもの」

正邪は針妙丸の一言にショックを受け動きが止まる。

「口が悪くて、素直じゃなくて……頑固者で、卑怯な……私の最初の友達がいけないもの」  
「……根は優しい天邪鬼とは言わなかつた。言えば、きつと正邪はそれを認めないだろうから。」

——私を退屈で深い闇から引つ張り上げてくれた天邪鬼。

あなたが輝針城に来てから、冷たい牢獄だった私の城は……暖かいお家が変わったの。秘宝を守るためだけにいた私を……少名針妙丸にしてくれたのは紛れもないあなただった。

ケンカにしながら一緒に食べるご飯も、後から見れば嘘だらけだった私たちの関係も、正邪にとっては偽りだったかもしれないあの笑顔も……私にとっては絶対に色あせることのない大切な宝物。

自分をじつと見つめる針妙丸を正邪は鼻で笑い、あざけり笑う。

「は……私を忘れて他の奴と楽しく過ごせば良かったじゃないか。……初めからお前を利用しようと近づいた、偽りの友達を忘れてさ」

「そうかもね……けど、私は正邪みたいに器用になれないよ」

「他の友達がいたとしても、その友達と過ごするのがどんなに楽しくても……きつと正邪のことは忘れられない」

|||||

針妙丸の頭の中を過去に正邪が言った言葉が反芻する。

『姫、ご飯ができましたよ！』



『つたく……めんどくせえガキだな……あ、いいえ！ 何も言ってますんよ？ 空耳ですよう、嫌だなあもう』

『それは私の分だ！ よこせお腕姫!! 「あなたは居候でしょ!! 城主の私に譲つてよ！』』

楽しかった輝針城での日々。

『我が名は鬼人正邪!! 生まれついで天邪鬼だ!!』

『……姫のことが大っ嫌いでしたよ。最初っからね』

|||||

「……私が死ぬ前に一番後悔したことを言ってもいい？」

「お好きにどうぞ。ま、聞きませんけどね」

予想通りの正邪の反応に針妙丸は小さく笑う。

「それは……最後まで正邪を信じなかったことなの」

「……ツツ」

「私が信じていたのは自分の中の……勝手な理想のお友達だって、ようやく気づいた」

絶対に自分を裏切らない、嘘をつかない、何でも正直に話してくれる……そんな友達。

「ちよつと前の私は正邪ときちんと向き合っていないなかったんだって。本当の正邪を受け入れられなかったから私は……」

——お触れを出したのだ。友達としてではなく、異変の黒幕。自分をだました外道。大罪人を捕らえよと。

「それが普通だろうが……！　誰もが言う友達ってそんな意味だろうが……!!」

——間違っている。針妙丸の言っていることは間違いだらけだ。自分のような負の存在マイナスと関わるのがそもそも間違いなのだ。天邪鬼の私を受け入れることなど……できるはずがない。

針妙丸は首を横に振る。

「私は……正邪と今みたいに本音で話したい。正邪の本当の言葉で話したい。わかり合って……向き合って、私は正邪と本当の友達になりたい」

針妙丸は正邪に詰め寄り、手を差し出す。

「もし、友達になれたら……また、やり直してくれる？」

正邪は差し出された手を乱暴に振り払い、そっぽを向く。

「……もうやり直してるだろうが」

「え？」

「なんでもない！　教室に戻るぞ！　せっかくの昼休みが終わっちゃう」

針妙丸に背を向け『きもつちわるい宣言だったわく吐き気がする』と、あえて針妙丸に聞こえるように正邪は独り言を言って教室を後にする。

「……ありがとう、正邪」

——私、正邪と友達でよかった。

丁寧な態度をとらなくなったのも、名前で呼ぶようになったのも……彼女なりの歩み寄りだったのだと。再び気づかされた針妙丸だった。

——今日も一日よろしくね、正邪。……大好き。

## 第10話 壊された針妙丸

球磨川との接触の後、正邪は精神崩壊した針妙丸を背負い『D組寮』と看板に書かれたボロアパートに戻る。

二人の寮の部屋は余った二人部屋を使っている。

女子二人ならば特に問題ないと生徒会からは判断され、要求はあっさり通った。

「おいしよつと。随分と軽いもんだな。小さくなってくれればもっと楽だったのに……」

正邪は奥の和室の床に針妙丸を寝かせ、部屋の出口手前にあるキッチンに駆けだす。蛇口をひねり、近くに置いてあつた茶碗に水を注ぐ。

「いつまで寝てんだ。起きろ」

「うえっ!! づめだいッ!!」

正邪は容器に入っていた水を針妙丸に容赦なくぶっかける。茶碗の水は空になり、当然床と彼女の着物は水浸しだ。

「……ッッ!!」

一瞬我に返り、針妙丸が運ばれる直前の記憶が再びフラッシュバックする。

——外の世界で初めてできた友達の惨死体。血みどろの教室。犯人とおぼわしき少年の言葉が頭にずっと響き続ける。

『相手を殺してもいいんだ！ だって……友達を守るためだもん!!』『君は悪くないよ』  
『君は悪くない』『君は悪くない』『君は悪くない』『君は悪くない』『君は悪くない』

自分がつけた致命傷を負いながらも、彼は自分に向かって歩いてくる。血を流しながらゆっくと。

「ああ……ああ……ああ」

針妙丸はたまらず自分の顔に両手を当てる。肩が震え、寒気が止まらない。

——水のせいではないな。

「参ったな。こりや重症だ」

頭をポリポリと掻き、ため息を吐く。

黙っていても埒が明かない。荒療治に出るしかない。

正邪は針妙丸の両手を彼女の顔から力づくで剥がす。

「え……う？」

「いつまで自分の世界に閉じこもっているつもりだ針妙丸つ!!」

声を張り上げ、針妙丸の顔に思いつき張り手を喰らわせる。針妙丸は衝撃で床に倒れ伏す。

「ううっ!!」

「情けない。そのぎまで私と向き合うだけ？ 友達になるだけ？ 呆れてものも言えな

くぜ!」

「……」

まだ虚ろな目をしている針妙丸に正邪は呆れ果てる。正邪は和室でうずくまっていた針妙丸に近づき、彼女の隣に座る。

濡れた畳の感触が正邪の手のひらに伝わってくる。

「本当に私と向き合いたいなら……あの程度の過負荷マイナスにビビってどうするんだ。あんたは口ばかりだよ」

「う……………」

「姫……あんたは……そんなに弱い奴じゃないだろ？ 私も見込みがあるって思ったからお前を下克上の時に利用したんだ」

——なんで私はこの裏切り者にこんなことを言っているんだろうな……

持っていた茶碗を自分の横に置き、正邪は針妙丸の薄紫色の瞳をしっかりと見る。

「かつての私の同志なら自分の足で立って、アイツに復讐でも何でもしてみろよ」

「でも……」

「ん?」

「でも、もう死んじやった功名さんたちは帰ってこないんでしょ……!? コウジ君も……クラスのみんだって……」

針妙丸は目を潤わせ、正邪の腕を力強くつかむ。

「……姫」

「それに……もし正邪がまた死んじやつたら……! 私のせいでもし正邪が死んじやつたら……わたし……」

自分の名前が出てきたことに正邪は驚愕する。

大嫌いとまで言った自分を、針妙丸はまだ心配しているというのだ。

球磨川と彼女が対峙した時も正邪はすぐには彼女を止めようとしなかった。球磨川の戦い方を観察し、彼を利用できるかどうかを確かめたかったのだ。

そんな最低な考えを持つこの鬼人正邪を針妙丸は心配しようというのだ。

——全く。本当にお人好しだな。このお姫様は……呆れてものも言えないぜ……

何も変わっていない。幻想郷で下克上を起こした時と、何も。

裏切っても……彼女のやさしさは何も変わっていないかった。

「なめられたもんだな……」

「え?」

「我が名は鬼人正邪ツ!! 幻想郷の全てを敵に回した妖怪だぞ? そんな私が、簡単に

やられると思っているのかあ？」

できる限りの邪悪な笑みを浮かべ、腕を広げる。

「私は決めたぞ針妙丸！ 私は再びこの世界で反逆する!! この学園を、我々弱者の樂園に変えてやろうじゃないか！ あのふざけたエリートどもをぶっ潰し、この私が学園の支配者になってやる!!」

正邪の突然の宣戦布告に呆然とする針妙丸。「どうだ？」と正邪が顔をこちらに向け  
てくる。

「私も弱者が圧倒的強者をぶっ潰すなんていう大きなことをやるんだ。お前もそれくらい  
の過負荷、乗り越えてみせろ」

ふん、と鼻で笑う正邪を見て、クスッと笑う針妙丸。

「ふ……ふ……ふ……ふ……そうだね、それもいいかもね……うん！ 私やる!! やってみる」

「その意気だぞ、針妙丸。それに……」

「針妙丸（さん）!!」

正邪の言葉に割って入り、死んだはずの慶賀野と桜街が部屋になだれ込んできた。二人とも息を切らし、額に汗が浮かんでいる。

「良かったです……! ああの転校生の攻撃を受けて重症だつて聞いて……!」

「姉御は!? 少名さんは大丈夫なのか!」



「え……？　なんで……どうして？　ゆめ……な、の……？」

幻を見ているのではないかと勘違いをし、固まって動けない針妙丸。

「ちがう。二人とも無事だ。D組の教室にいた奴らも全員な。私が確認したから間違いはない」

針妙丸はすくつとその場から立ち上がり、二人に向かって飛びかかる。

「うおっ！　少名さんんん!？」

「針妙丸さん!？」

「よかつたあ……うそ、でも……いい……また……ふたりに……あえたあ……!!」

二人に抱きつき嬉し涙が止まらず、わんわんと泣く針妙丸を見て、正邪は思わず満足げに彼らを見つめる。

「はあ……ようやく泣き止んだと思つたら……またこれか。ほんと、泣き虫姫だな……全く」

——それでいい。彼女達みたいなプラスに……私みたいなマイナスは、似合わない。

「姉御……球磨川は人首先生みたいな、何かしらのスキルを持つてる。……たぶん、幻惑とか幻を見せるタイプの能力だと思うぜ」

フランスパンみたく突き出たリーゼントをいじり、桜街は重々しい表情を浮かべる。

何を思い出したのか、慶賀野も目線を下にそらしている。

「幻覚ねえ……なるほど」

「姉御も気をつけてくれ、絶対にこれ以上あいつと関わらない方がいいと……」

……ピンポーン！

突然、部屋の外のインターホンが鳴り始める。

——人首ひとかべけい 繋つなだろうか？

そしてスピーカーから声が響く。

『もしもしー！ 針ちゃーん！ 正邪ちゃーん！ いる？ 体調が悪いって聞いたか

らお見舞いに来たんだけど？』

——ヤツからだった。

「……ツツ!!」

針妙丸の肩が再び震え始める。無理もない。ついさつき、やっと持ち直したばかりなのだ。

——この状態の針妙丸を球磨川に会わせるわけにはいかない。

入口に向かい、歩き始めた正邪を桜街達は止める。

「だ、だめです姉御！ 球磨川はヤバイ！ ヤバすぎるー！」

「そ、そうですよ!!」

この二人も正邪が知らない間にトラウマを植えつけられたらしい。証拠に『行かせま

い』と必死に正邪を押しとどめてくる。

無論……針妙丸もだ。

「正邪……!! だめ……!! あなたまで壊れ……」

ドアを開ける前に針妙丸の方を振り返る。

「大丈夫ですよ、姫。『幻惑を見せる程度』の能力者にやられるほど、柔いアマノジャクじゃありませんから」

## 第11話 『僕と友達になろうよ』

日が沈み、空が赤くなり始める時間帯。

正邪はアパートの階段を降り、再び球磨川くまがわと向かい合う。

——針妙丸達には『幻惑を見せる程度』の能力と言ったが……あれほどの過負荷マイナスを持つ球磨川の能力がその程度だとは思えない。

あの場で殺した人物を生き返らせることができる程の……とんでもない能力を持っている方がよっぽど納得がいくのだ。

『やあ、正邪ちゃん。針ちゃんの調子はどう？』

『あれだけメンタル破壊しておいてよく言うよ』

『嫌だなあ、彼女の方から襲い掛かってきたんだよ？』『僕は悪くない。』『さっきのは正当防衛ってやつさ』

『お前の場合は口撃だけでも過剰防衛って言うんだよ。で……今度は何の用だよ。顔の皮を……所望ならお断りだ』

ははは、と球磨川は仮面に書いたような笑顔を崩さず、笑い声をあげる。

それを怪訝な様子で正邪は見つめる。

『大丈夫。正邪ちゃんに僕の方から何かをするつもりはないよ。……僕が用があるのは針ちゃんの方さ』

「へえ、針妙丸しんみょうまるにねえ」

正邪はちらりと針妙丸のいるボロアパートの方を見つめる。

「ちよつとアイツは疲れてるらしいからな。布団で寝てるよ」

『それは大変だ！ じゃあ、僕が会って元気づけてあげよう!!』

球磨川は善は急げとボロアパートの方へ駆け出す。

——言外に部屋に来るなって言っただがな……こいつ、針妙丸にとどめを刺す気か。

彼がアパートの方へ向かってても正邪はびくともせず、ただじつと球磨川をつまらなそうに見つめている。

そんな正邪を不思議に思ったのか、球磨川は階段の手すりに手をかけ彼女の方をゆっくりと振り向く。

『……止めないの？ 針妙丸ちゃん、精神病院でもお手上げのグロッキー状態になっちゃうかもよ?』

「だから?」

『えっ? 君ら友達じゃないの?』

「他人がどうなるうがどうでもいいだろ？ それにお前は私に何かをするつもりもないんだし。ならどうだっていい」

興が冷めたとしても言いたげに腕を頭の後ろに回し、正邪は球磨川に背を向ける。

球磨川は『これは驚いた』と言いたげに目を白黒させる。

『意外だね。君はもつと仲間想いかと思っただけだ』

「あれは駒だよ。将棋でいうところのただの歩兵。飛車や銀将みたく優秀で重要な駒じゃないんだ。やられても何の問題もない。むしろ王将である私の身代わりになれてアイツも本望だろうよ」

『……』

——所詮、アイツは私の道具。どうなるうがどうでもいい。

球磨川は薄く口元に笑みを浮かべ、正邪の元に向かい歩き始める。

『……へえ。驚いたよ。ここまであっさり仲間を切り捨てられる人がいるなんてね。僕は感心したよ。正邪ちゃん』

「試したのか？ 私を」

『試すなんて人間きが悪いなあ。僕は知りたかったんだ。君がどういう人間なのかを、ね』

「なるほど、趣味が悪い」

——ついでに言うとは人間じゃなく天邪鬼なんだがな。

球磨川は正邪の前で歩を止めると、ニコツといつものように薄気味の悪い笑みを浮かべる。そして……彼はおもむろに正邪に右手を差し出した。

『正邪ちゃん。改めて僕と友達になろうよ』

|||||

「正邪……」

「針妙丸さん……少し休もう。たぶん、今の状態で私たちが行っても何の意味もないよ……」

正邪と針妙丸の部屋。慶賀野は狼狽しきった針妙丸を和室にしいた布団に寝かせる。出て行った正邪を見送ってしまった針妙丸、慶賀野、桜街の三人は部屋の和室で正邪の無事を祈るしかなかった。

針妙丸が寝たのを確認した後、二人は和室への扉を閉め、桜街と慶賀野は扉の前で正邪の帰りを待つ。

「けどよお……不思議なんだよな」

「何がですか？」

「慶賀野、俺は球磨川に初めて会った時、確かに全身をでかい螺子で串刺しにされた。痛みも確かに感じたし、それ以降は意識もはつきりしてなかった」

「……球磨川君の能力のことですか？」

顔色を青くした慶賀野に向かって真剣な顔でうなづく桜街。

「姉御に心配かけるのは悪いかと思つて、アイツの能力は『幻覚を見せること』だつて言つちまつただけだよ……」

「うん……」

「もしかしたら……考えたくもないけどよ。アイツの能力つて、使い方次第では『人を生き返らせることもできる』とんでもない能力なんじゃないかと思つたんだ」

「まさか……そんなむちゃくちゃなスキルの持ち主がいるはずが……」

慌てる慶賀野の反応に桜街は沈黙で返す。

「……俺が入学式で全身骨折の大怪我をしたところは見ただろ？」

「あ、はい。あれが何の関係があるんですか？」

「あれはおそらく『重力を操る』能力持ちの仕業だ。俺はそいつに復讐するためにこの学校に入ったんだ」

「え……？　重力を操る……？　そんな非現実的な力が……」

『あるはずがない』と現実から目を背けようとする慶賀野に桜街は首を横に振る。



「ある。俺は……一回もそれを実体験した。仕組みは意味不明だがそんなスキルを持つてんのはよほどの異常か……」

——過負荷<sup>マイナス</sup>。そのどちらか。その過負荷たちが持っているのは、より人に害を及ぼすことに特化した負の過負荷<sup>スキル</sup>。

その極めつけであろう彼の過負荷<sup>スキル</sup>は……『重力を操る』より非現実的で、より危険性を秘めたスキル。

「う、嘘です……『人を生き返らせる』なんてそんな神様みたいな力……」

「ありえなくないって話だ。話によると過負荷<sup>スキル</sup>つてのは、でたらめで危なすぎる能力持ちがほとんどだ。『人を生き返らせる程度の能力』で済むはずがない……」

「そんな……!」

そんな二人の話す姿を——針妙丸は扉をこつそりと開けて覗き込んでいた。

|||||

「友達にねえ……お前は私のどこが気に入ったって言うんだよ。仲間を平然と切り捨てる私の」

「うん、それだよ。その冷酷さ。加えて君は誰にも従わず、誰の思うがままにもならな

い。そんな君が僕は好きになったのさ』

「好きな女の趣味まで悪趣味か。お前の言葉や性格全般には『悪』って付くものばかりだな」

『悪？ 僕は『負』<sup>マイナス</sup>さ。負は最低で、それ以上の何者でもないよ。それに……僕は人とも思わない過負荷<sup>マイナス</sup>には幸せ者のお友達<sup>プラス</sup>は似合わないと思うんだ』

球磨川は顔の笑みを濃く、その惣闇色<sup>ツツヤみいろ</sup>の目を細くし、彼女の全てを見透かすかのよう  
に正邪の赤眼をのぞき込む。

『このまま彼ら<sup>マイナス</sup>といても、君の居心地は悪くなるだけだ。正<sup>プラス</sup>しかない針ちゃんはいずれ負である君を否定する』

『そうなたら優しい君は自分を偽って、ずっと幸せ者<sup>プラス</sup>の仮面をつけなければならない。こんなに素敵<sup>マイナス</sup>な欠点を持つ君を否定されるなんて……僕は我慢ならないよ。だから正邪ちゃん』

「……」

——居心地が悪い、と感じていないわけがなかった。

私は……目的のためなら……自分が勝つためならどんな手段も厭わない。

たとえ卑怯でも、どれだけ汚くても、勝てばいい。自分だけが勝てばいい。他人などどうでもいい。

それが私の信条だ。

少名針妙丸、桜街義和、慶賀野功名。

全員、私とは違う。いずれもが私の信条には合わない。犠牲と割り切つて捨てるには彼らは正しくすぎて、優しすぎる。

最低な私を受け入れ、普通に彼らは私に接してくるのだ。だからこそ彼らを切り捨てにくくなつてしまう。

……恐ろしい。

優しくされることが恐い。褒められることが恐怖だ。『気に入らない、お前といると気分が悪くなる』と彼らも私を捨て置いてくれればいいのに。

彼らといることで……もし私が私でなくなつたら。天邪鬼が天邪鬼でなくなつてしまつたら……自分是一体何者になつてしまうのだろうか？

『つまらない針妙丸ちゃん達なんか放つておいてさ、僕と友達になろうよ』

「……」

正邪は少しためらいを見せた後、ゆっくりと彼女は自分の左手を球磨川の右手に近づける。

『同じ過負荷同士、仲良くしよう』

## 第12話 小さな勇気と大きな野心

「……悪いな、球磨川くまがわ」

『え……?』

正邪せいじやは球磨川の腕を掴む直前に、自分の腕を下ろした。

「お前とは友達にはなれないな」

『……どうしてだい?』

「もう少し見てみたくなつたんだよ」

『何を、……!!』

アパートの階段の近くにいる球磨川が後ろを振り向くと……

「……正邪に……それ以上私の友達に近づかないで!!」

そこには震えながらも球磨川の前に立つ針妙丸しんみょうまるがいた。

トラウマのせいで肩は震え、瞳には涙が滲んでいるが、それでも必死に恐怖に抗い、震える足を叱咤し友達を救おうとする勇者の姿だった。

『針妙丸ちゃん……?』

正邪は針妙丸を呆然と眺める球磨川の肩に腕を乗せ、彼の前を通り過ぎる。

「私と向き合おうとしてくれてるこの馬鹿の姿をもうちよつと見たいんだ。その結果コイツが私を拒絶するか、受け入れるのか……見てみたくなつちまつた」

正邪は悲しそうな笑みを浮かべ、球磨川の方を振り返る。

「悪いな球磨川、私はコイツらを捨てられない甘つたるい過負荷<sup>マイナス</sup>だ。お前の友達に、甘すぎる私は似合わない」

『……………ま、いいや。実はあんまり期待してなかったしね。いいよ、今日はもう帰るか』

球磨川は負け惜しみを言いながら、沈む太陽を背に正邪達とは反対の方向に歩き去っていく。

「帰るぞ、針妙丸」

「……………うんー」

正邪は階段の近くで待っていた針妙丸の手を握り、階段を登る。

正邪の手を握る針妙丸の様子はひどくご満悦だった。そんな彼女を見つめる正邪も……………どこことなく嬉しそうに見える。

先程まで沈みかけていた太陽が地平線の向こうに消え、空を闇が覆い始める。

『甘えよ』

球磨川は後ろを振り向かないまま手に持った大量の螺ねじ子を針妙丸と正邪の二人に容赦なく投擲とうてきする。

油断しきつた正邪に猛スピードの螺子が直撃――

「……ああ、そうだった。言い忘れてたな」

『!?!』

……するように思えた。

正邪達の方に向かっていた螺子が空中でびたりと動きを止め、そして……その方向が投擲した球磨川に向かって古びた時計の針のようにゆっくりと向きを変えていく。

――螺子の進行方向が『ひっくり返る』。

球磨川は異変に気がつき、正邪の方を振り向く。すると彼女も自分の方を向いているのに気がつく。振り向いた正邪の顔は美しくも……

「じゃあな。生きていたらまた明日」

――醜悪に歪み、これから死にゆく哀れな球磨川を嘲笑っていた。

そんな彼女を見て、球磨川はやれやれと肩を落とす。その様子はどこか満足気だ。

『……君には負けたぜ、正邪ちゃん』

正邪が部屋の扉を開ける直前、彼女の背後から誰かの骨と肉がナニカによつてズタズタに引き裂かれる音がしたが彼女は気にも留めなかった。



「……正邪。それ本気で言ってるの……？」

「本気の本気。超本気ですとも。球磨川を利用すれば学園支配どころが幻想郷の支配だつて夢じゃない……くくく、素晴らしいじゃないか！」

思考の暴走を始める正邪を見ていられず、針妙丸は机を両手で叩く。

机からの大きな音を聴いた正邪が顔を上げると、そこには今にも泣きそうな顔をした針妙丸がいた。

「何考えてるの!? 馬鹿なことはやめて! 球磨川君とは友達にならないって……さつきはつきり言ってたじゃん!!」

「……利用する相手に『お友達』なんてお綺麗な関係は似合わないとも言ったんですよ、  
姫」

「けど……!」

「いいですよ? 臆病な姫は彼と関わらなくて。元々幻想郷の支配は私の野望ですからね。ああ……素晴らしいんだ。あれほど純粋な負の存在は一度も見たことがない! アイツなら妖怪の賢者や博麗の巫女だろうと私に向かってくる奴らの精神をぶつ壊してくれそうだ! ははははっ!!」

「——もう、止められない。」

すでに針妙丸にはわかっていた。正邪の野望は誰にも止められない。たとえ一度野



望が潰えたとしても、この天邪鬼は絶対に諦めないだろう。

いくらそれが惨めでも、醜くても、滑稽に見えたとしても、彼女は決して歩みを止めない。

それが逆襲の天邪鬼、鬼人正邪なのだから。

ーーだけど、わかっているからこそ。彼女の友人である私だからこそ……やらなければならぬことがある。

「正邪、もし正邪が間違ったことを、みんなを悲しませることをするつもりなら……私は全力であなただけを止める」

「へえ〜かっこいいー。正義の味方気取りですかね？ 私の友達になるつもりはもうないってことですか？」

「友達が間違った事をしようとしているなら、私はそれを全力で止める」

「……私とその『間違ったこと』をすることを望んでいるとしてもですか？ ただのエゴじゃないですか。押し付けがましくて素晴らしい友情だなあー」

正邪に反論する針妙丸だが、正邪はその志を真つ向から否定し、折ろうとする。それでも針妙丸は怯まず、正邪の赤眼をしつかりとその薄紫色の瞳で見据える。

次に口を開く針妙丸の姿は……どこか哀愁に満ちていた。

「……もう、友達に死んでほしくない。そう思うことの何がいけないの？」

「……」

針妙丸の口から出た言葉に驚愕し、目を見開く正邪。

——全てを敵に回して、一人寂しく死んだ天邪鬼。

誰の心に残ることもなく、ひっそりと転がる自分の屍を正邪は容易に想像できてしまった。

溜息を吐き、正邪はその場から立ち上がる。

押入れにあつた布団を取り出し、寝る準備をする。

「……私に逆らつた罰だ。夕食は自分で作れ」

「ええ!? 意地悪う……」

正邪は寝巻きに着替えず、そのまま布団を被り横になる。

針妙丸は冷蔵庫付近の戸棚から、レンジでできる即席ご飯を漁り始める。コンビニで買った『サ〇ウのごはん』は見つかったものの、ご飯のおかずになるものが見つからずエサをお預けされた犬のような顔になってしまう。

「うう……」

「……あと、お前にも言い忘れてたな」

「ええ?」

正邪は仰向けの姿勢から、針妙丸のいる方とは逆の方向に首を向けて顔のほとんどを

布団で覆う。

「……頑張ったな、針妙丸。不格好だったけど……お前が来てくれて本当に嬉しかった」  
当然、顔を真っ赤にした正邪の姿を針妙丸が見ることはできなかったという。

|||||

「ちつ……なんでアイツの下着も私が干さなきゃならんだ……自分のならともかく」  
眠そうに目をこすりながら正邪はベランダで洗濯物を一つ一つハンガーに吊るして  
いく。

優しく朝日が辺りを照らす。

「……よしこんなものだろう。いや、針妙丸の着替えだけベランダの真下に落としてや  
ろうか……」

『おーい！ 正邪ちゃーん！ いい朝だね!!』

ーああ、最悪の朝だ。

やっぱ生きてたか球磨川。

正邪は球磨川を無視して窓をベランダのドアをさつと開けて部屋に戻ろうとする。

『無視なんてひどいなあ。少しお話ししようよ。こんなにいい朝なのに』

「地獄に帰れ」

『またまたあ、僕が相手だからってそんなに照れなくてもいいんだよ?』

「……ハア」

「……これ以上こいつと話したくない。」

『そういえば……そこにぶら下がっている横シマのパンツは正邪ちゃんのかい?』

「……ッッ!!!」

『やっぱいいー。けど、正邪ちゃんには青のしましまパンツよりも赤シマパンツの方が似合うと思うんだ。……そうだ! 今度よかつたら一緒に可愛い下着を買いに行こうよ!』

「……きつと楽しいー」

「もういつペン死ねえええええええ!!!」

翌日、球磨川は学校を欠席した。

教師によると、頭部に投げつけられた洗濯かごが原因で脳震盪を起こしたらしい。



「なんとかしてアイツを利用する方法はないものか……」  
「やめときなよ……正邪……」

「あれは密告システムって言ってな、c組以上のクラスの生徒全員に許された特権なんだよ」

『ふーん』

「またお前、ロクでもないこと考えているな……」

『教えたのは正邪ちゃんじゃないか』『僕は悪くない。』

「好き勝手言ってくれるでありますなあ……!」

「球磨川さんは……なんでそんなにエリートを憎むんですか?」

『えーとねえ……慶賀野さん、ちよつと待ってね。今日中に考えてメールするから。そうだ! 親友をエリートに殺されたとか。妹が凌辱された上に、両親を殺されたとかもドラマチックだね』

「理由なんて……ないんですね……」

|||||

「ははっ……痛い。死ぬほど痛いに決まってるだろ。けどな、苦しくても悲しくても、それでも私は笑うんだよ! だって私は鬼人正邪!! 生まれついで天邪鬼だからなあ!!」

|||||

「弱い。弱すぎるでありますよ……滑稽すぎるほどに」

||

「お前の反則攻撃の正体がわからん」

「わからなくていいでありますよ。ただ……先輩として一つだけ教えておくであります」

「へえ、なんだ。優しいじゃないか。早く教えろよ」

「たとえば自分のスキルの正体がバレたとしても、攻略は不可能ということでもあります」

||

「な、なんでありますか……それはあ!？」

「さあな……とっておき、らしいぜ」



『オールフイクション「大嘘憑き」名前だけでも憶えて逝つてね』



## 第2章 反逆の狼煙編

### 第13話 生徒会私刑執行部

角明学園大教室。

皇庭近くにある教室棟の最上階付近にある大教室である。生徒会メンバー、アルカナ持ち達が揃って集うところから会議室といってもいい。

教室の暗闇の中に丸型の大きな机が存在感を放つ。巨大なスクリーンが光を発し、辺りを黄緑色に照らしている。

教室の肘付きオフィスチェアに腰掛ける人影は……七人。

「これより生徒会私刑執行部、第九十八回目の会議を行うであります」

侍のように束ねた灰色の髪と青色の和服を着た男、百々どうどう千太郎せんたろうが初めに声を上げる。庶務であり、彼の持つアルカナは……『戦車』。

『『悪魔』と『死神』はどうしたでヤンスか？　もう集合時間はとつくに過ぎてるでヤンス』

黒い特攻服を着たオールバックの男が百々に続き、口を開く。自分の緑髪をいじりながら、机を指で叩く。

――庶務長 六合くにくずし崩

「ああ、彼らは今放課後の特別授業に出てるから。先に始めてって」

学生服の少女は自らのツインテールを揺らし、ケラケラと笑う。白く透き通った肌と桃色の髪が艶っぽく輝く。

「さすが『恋人』の美妃。人脈がお広いでヤンスねえ」

「当然。国王が国民を監視するのは当然。女王様が兵士を管理するのは当たり前だつて」

――会計 寒井さぶい 美妃みき

「それよりも早く会議を始めてくれる？ この後早速作りたいオモチャがあるのよね」

緑色の作業服に身に包んだ青髪の幼女が退屈そうに、ペン回しの要領でスパナを指で回す。

「こちよこちよ……」

「……!! ちよつと！ 美妃さん……やめ！」

寒井が短髪少女の脇をくすぐると、少女の様子が一変。先程までの作業服を脱ぎ捨て、急いでビジネススーツに着替える。四角い縁取りのメガネをかけ、仕事ができそうな聡明幼女に。

「手計のこの人格交代の瞬間が本当に飽きないの♪ 癖になっちゃうって」

「……早く会議を始めましょう」

——生徒会書記長。手計てばかりさね札

「百々さん。今日の会議の内容は先日の転校生の件……についてだよね」

茶髪の素朴そうな少年が自信無さそうに百々に話しかける。黒ブレザーのボタンが閉まっているか気になって落ち着かない様子だ。

——行方なみかた ようへい陽平

「……行方氏。急いで出てきたせいで制服が乱れているであります」

「ひっ……!!」

怒った百々に斬り殺されると思ったのか、行方は座っていた席から転げ落ちる。

「今回は不問にするであります、次の会議ではキチンとした格好で来るであります」

「千ちゃんは真面目だねえ。今日は緊急の招集だからしょうがないんじゃないの?」

Tシャツとカウボーイハットを被った男が飄々と百々に軽口を叩く。

——広報長 新あらいけん剣

新の軽口が気に障ったのか百々は普段から刃のように鋭い目をさらに鋭くする。

「あまりふざけていると……新、お前から斬り殺すでありますよ? マナーを舐めるなであります」

「お、おいおい、勘弁してくれよ」

「……新君、今は茶化すのはやめて、百々君の話を聞こうじゃないか。百々君。……落ち着いてその転校生のことについて話してくれるかい？」

白い学ランを着た赤髪の美少年は席に座ったまま、片手を挙げる。そして席を立つている百々々に向かつてニツコリと微笑む。

——神井 大成 生徒会私刑執行部 生徒会長

神井は百々々に比べればさらに細身だが、彼が発言をした瞬間、百々々は身震いをする。「……か、会長。老神副会長が戻る前にこの無礼者を……!!」

神井がため息を吐いた次の瞬間、彼の顔から笑みが消え、目から一切の光がなくなる。先程までマイペースに振舞っていた他のメンバーも会長の豹変に戦慄する。全員口をつぐみ、顔を下に向ける。

足をテーブルに乗せていた新でさえも、今は姿勢を正し、会長から目をそらす。

「言つたよね、百々君。……私はその転校生のことについて早く話すように言つたんだ。それでも新君を斬りたいなら……私と『勝負』をしようじゃないか」

「……ッ!! そ、それだけは……!!」

百々が振動マツサージ機のように身体を震わせ始める。百々の無抵抗のサインに神

井は再び笑みを浮かべる。周りからは安堵の声漏れる。

「そうか、よかったよ。私もアルカナ持ちにはこの能力を使いたくないんだ。……全土ぜんど様に忠誠を誓う者を疑いたくはないからね。じゃあ続けてくれるかい？」

「は、はい！　で、では早速。今回の議題は……警戒対象。新入生、鬼人正邪と……転校生、球磨川禊についての議題であります」

——暗闇の中で件の二人の姿がテーブル中央のスクリーンに映し出され、会議は続行された。

第14話 『これ少年ジャンプだったら規制されかねない、いじめの描写だよ?』

朝日が照らす教室。

窓や黒板付近の机に何人かの男子と女子が雑談をして、共に笑い合っている日常の光景。

「呑気なもんだな。入学式のことをもう忘れたのか」

そんなクラスメイトの様子を気だるげに見つめる天邪鬼、きじんせいじや鬼人正邪。

「しようがないよ……怪我をしたクラスメイトには申し訳ないけど、あんな凄惨な光景を見せられたらすぐにでも忘れたくなるよ」

苦笑し、すくなしんみょうまる少名針妙丸は未だに空いた机を見つめる。桜街と同様、肉体は回復している

のだが精神的な問題でまだ退院できていないようだ。

「はっ、幻想郷も外の世界も人間にはヌルい世界であることは変わりないってことか」  
ため息を吐き、窓の外を忌々しげに見つめる。

「おはよーっす! 姉御。調子はどうっすか?」

元氣よく声を上げて、フランスパン並みに長いリーゼントが教室に入ってくる。

桜街さくらこうじ 義和よしかずだ。

「よう、かませ犬。慶賀野のやつはどうした？　いつも二人でイチャついて登校して  
るんじゃないのか？」

「変な言いがかりはやめてくださいよ！　……慶賀野けがののやつは風邪で休みだつて聞  
いたつす。一応部屋にも行つたんすけど相当酷いみたいで……」

バッグを持った桜街が残念そうな顔をする。

それを見る正邪は興味なさげだったが針妙丸は心配そうな顔をしていた。

「功名さん大丈夫かな……？」

「ほつとけ、あとでお見舞いにでも行つてやれ」

「冷たいんだか優しいんだかわかんないつすね姉御」

正邪は教室を見渡し、窓際の端にある席に目をやる。

「……球磨川くまがわはどうした？」

「ああ、姉御がのしたつて聞いたんすけど。……何かあつたんですかい？」

「……聞くな。それ以上口を開くと球磨川と同じ所に行くことになるぞ？」

「あ……はい。自重します……」

——干した自分のパンツを球磨川に見られた、なんて本当に口が裂けても言えない。  
目つきを鋭くした正邪に向かい、桜街は素直に頭を下げる。入学前に暴走族を潰した



不良は一体どこに行ったのだろう。

「テメエ! どこを見てやがる!」

教室の外から男の怒声が響く。

扉が震えているところを見ると、かなりの声量で怒鳴っているのがわかる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「アニキ、こいつジャンプ持ってますぜ!」

「漫画読んで俺にぶつかっただあ!」 舐め腐つてんのかあ? ああ!」

正邪が教室を出て廊下の方を見ると、二人の生徒がD組の生徒に暴行を加えているのがわかった。

出っ歯と巨漢の男が一人の男の胸ぐらを掴んで殴り飛ばしている。

「いいかあ? D組の屑。俺たちは?組。テメエらクズどもと違って、俺らのバックには生徒会がいる。どういふことかわかるか?」

「D組は俺たちの奴隷つてこった。『密告』されたくなきや、絶対に無礼は働かないこつたな」

二人の男はD組の一人の男をさらに理不尽に痛めつけながら、嘲笑う。

絡まれている相手が普通のD組の生徒ならば、まだ戦力が揃ってない今、面倒ごとを

避けるために無視するところなのだが……

『……僕は悪くない』

……虐められている相手が球磨川なら話は別だ。

正邪は男二人に向かって早歩きで駆け出す。

「おい、あんたら。悪いことは言わないから……そいつに手を出すのだけはやめておけ」

「ああ!?　女あ、なんだテメエは？」

「俺たちに楯突こうっていうのか？」

正邪にため息をつかれながらストレス発散の邪魔をされた二人は苛立ちの声を上げる。自分たちが手を出している相手がどれだけ危険な地雷なのか、全く分かっていないようだ。

『……正邪ちゃん?』

「よう、いい朝だな球磨川。調子はどうだ？」

『……普通だよ。いつもと変わらない朝さ』

「そうか。これがお前の普通か。随分とスリリングな毎日だな。……私も経験者として同情するぜ」

暴力を振るった相手が目の前にいるというのに平然と会話をする正邪と球磨川。

その様子に二人は余計に怒りを蓄積させ、正邪に詰め寄る。

「お前……俺たちの前で楽しくおしゃべりとかふざけてんのか」

「ん? ああ、悪いな。今お取り込み中でさ、後でもいいか?」

女の子は約束事には

厳しいんだぜ?」

「……ぶつ殺す!」

正邪のふざけた態度が気に障ったのか、でかい方の男が拳を正邪に向かって振り下ろす。

——鈍い。

「レディーに暴力とか最低だな」

「!?!」

巨漢の拳が正邪の顔に触れる直前、正邪は最小限の動きで拳を避ける。

手馴れた正邪の動きに巨漢の男は動揺する。

——幻想郷での不可能弾幕よりも遥かに鈍い。

easy以下のクソ難易度だ。

男は正邪に向かって追撃の蹴りを喰らわそうとするが、正邪に軽々と避けられる。

「へえ……ならこれはどうだ!!」

男は正邪から距離をとり、大きく息を吸い込む。

「で、出た! アニキの声帯砲! 異常な肺活量を利用して出せる大技! 大咆哮

から繰り出される広範囲の衝撃波は避けようがない！ 終わつたな、女あ!!」

「……」

巨漢が口を開き、出っ歯の男が言った大技を繰り出そうとする……が。

「……!! ……あ……が」

「ア、アニキ!!? どうしたんですか?!」

大男は喉を抑え、必死に声を出そうとするが全く言葉が口から出てこない。出っ歯の男は恐る恐ると、口笛を呑気に吹いている正邪の方を見る。

「お前!! アニキに何かしたな!」

「なんの話だ? それよりどうしたどうした? ご自慢の喉は使い物のならんのでちゆか?」

正邪は憎たらしい笑顔を浮かべながら喉を抑えている大男を嘲笑う。

「……!! ……が!!」

「あ? 聞こえねエよ。もつと大きな声でせーの! さんっはいっ!」

指揮者のように手を振り上げながら、正邪は大男への挑発を続ける。

よほど頭にきたのか、大男は再び息を吸い込みできる限りの大声を出そうとする。そして……

ーブチッ

「\*%\*%!/?/ ( ( \$ ? > % ……」

「うわああああああ!! アニキイイイ!!」

無理に大声を出そうとした結果、大男は言葉にならない声を上げてその場に倒れてしまった。どうやらご自慢の声帯が完全にいかれてしまったようだ。

「元々『超小声』しか出せない奴が無理に『超大声』を出そうとすれば……まあこうなるよなあ」

「——これが私の能力……いや、この世界では過負荷『全てをひっくり返す能力』というべきか。」

この男の横にいた馬鹿がベラベラと説明してくれて助かったぜ……おかげで勝手に自滅してくれたよ。

出っ歯の男は再起不能になった大男を肩で担ぎ、『覚えてろく!』と三流の悪役がよく言う捨て台詞を残してその場から去っていった。

||||||||||||||||||||||||||||||||

「おい、大丈夫か?」

正邪はボロ雑巾のようにボロボロになった球磨川に手を伸ばす。

——ぶわっ！

「!?」

すると急に球磨川が号泣し始めた。目元から血の滝があふれ廊下に落ちる。

『ありがとう、正邪ちゃん。僕、こんなよくあるいじめの場面から助けてもらったのは初めて……』

「あ、ああ。嬉しくて感極まったのな。急に泣きだすからビックリしたぜ」

——本当は目から血の涙とかビックリじゃ済まなかつたんだが……

『……誤解しないでね正邪ちゃん。僕は別に痛くて泣いてるんじゃないんだ。僕は嬉しくて泣いているんだ』

球磨川が学ランについた汚れを手で払うと、ボロボロになっていた制服が一瞬で新品同然になる。……だが傷はそのままだ。

『僕はこんな風に命がけで自分を救ってくれる人をずっと待っていたんだ』

球磨川はゆつくりとその場から立ち上がり、頬についた血を拭う。

『本当になんて嬉しいんだろう』

パアツと太陽のような笑みを浮かべ、顔を上げる。

『おかげで目が覚めた！』

『人を傷つけるなんて間違っているんだ！』

『傷つけられる立場になつてやつとわかった。これで改心したぞ。ありがとう！ 正邪ちゃんには本当に感謝するよ』

——? 何かおかしいな。球磨川の周りの空気が急に螺<sup>ね</sup>子<sup>じ</sup>曲<sup>ま</sup>がって……!?

普通の人間であれば、

『だからこの痛みの恨みは』

この痛みの恨みをすぐに忘れて、

『君に迷惑をかけないように』

歡喜の涙を流し、助けてくれた相手に友情を感じて、めでたしめでたしなのだろう。

しかし——

『彼らとは何の関係もないその辺の誰かに何かして晴らすとするよ』

——球磨川は最低である。

## 第15話

## 球磨川という男。

「全土様。会議の結果、件くだんの新生と転校生が警戒対象となったであります」

百々どうどうは片膝をつき、黒椅子の前で座る全土ぜんどの前で頭を垂れる。数枚の報告書を全土に手渡し、一歩後ろに下がる。

そんな彼の様子を全土は満足気な目で見つめる。

「報告こ苦勞だったね、百々くん。そうか、そうか、そう決まったか……件の内の一人は……ほう」

全土は指をこめかみに当て、興味深そうに報告書を眺める。

「ど、どうかしたでありますか?」

「百々。君は……黒神くろかみめだか、という人物を知っているか?」

「は、はい、もちろんであります! 確か……箱庭はにわがくえん学園にいるバケモノ生徒会長のことでありますよね?」

百々は全土の期待に応えようと緊張しながらも声高に返答する。着ている和服を少しでも見栄えよくしようと手ではたく。

「ああ、その黒神だよ。では君は彼女がどうして『化け物』と周りから呼ばれているか



「……わかるかね？」

百々は疑問を顔に浮かべ、知らないと言を横に振る。

「それは……あまりにも彼女が人間として『完成』し過ぎている、常軌を逸した異常アブノーマル上の異常だからだよ」

「完成……し過ぎてている？ それは全土様、あなたよりもありますか？」

全土は滑稽と百々の発言を笑い飛ばす。

「はっはっは！ 面白い事を言うな。そうだな……もしかしたら黒神とやらは、私より圧倒的に異常アブノーマルなかもな」

「……そうでありますか」

「……失礼ながら全土様。自分は……あなた、いやあなた様が誰かに劣ると考えたこともないであります。世界中の誰にもあなたを超えられるとは……正直思えないであります。」

「私も認めざるを得ないのだが……彼女の影響力は凄まじい。正直言つて、この私も脅威を感じるほどだよ」

相手の脅威を語る全土だが、その余裕は崩れない。

「だが、敵味方構わず自身の色に染めてきた彼女にも……唯一染められなかった男がいたのだよ」

「……!? 存じないであります! 話を聞く限りでは黒神を屈服させられる者など全土様以外において……!」

「いるのだよ。いかなる強さをも、理不尽な能力者をも……全て螺子曲げてしまうような男が……たった一人」

全土は報告書に貼られていた写真を取り、写真ごと腕を突き出し百々の前に見せる。

「球磨川……禊?」

百々が見せられた写真には一見普通の男子高校生が写っていた。ゴツい……というよりも中性的な顔立ちだった。

「彼の目付け役を任されることになったそうだな? なら……用心しておくことだ、

百々」

「こんな……どこにでもいそうな奴を、でありますか? どちらかといえば……もう

一人の方が危険因子だと自分は思うのですが……」

彼が机に置いたもう一枚の写真。心底つまらなそうな顔で写真を撮られた少女、鬼人正邪の資料を百々は睨んだ。

全土はふむ、と納得した様子で百々の方を振り返る。

「……なるほど、なるほど確かに。確かにこいつもこいつで引つかかるのだよ。最もおかしいのが……この女、鬼人 正邪の情報や記録がどこにもない、ということだ」

彼女についてあらゆる手を使って調べ上げたが……彼女の戸籍以外なにも情報が見つからなかつた。

その点においては少名針妙丸すくなしんみょうまるとやらも同様だが……正邪ほど目立った動きをする素振りはない。

「自分が生徒会を執行しようとしている時に妙な事が起こったのであります。おそらく彼女は……自分達と同じく能力スキルホルダー持ちであります。それも強力な」

「……そうか。……ふむ、非常に興味深い。よくやった百々くん。現場から見ている君たち生徒会の意見は非常に参考になる」

「もつたいないお言葉であります……！」

全土は百々に背を向け、机の方に戻る。

「引き続き警戒を続けてくれ。彼女のスキルの詳細が分かり次第報告してくれるか？」

「も、もちろんであります！　ではこれで自分は失礼するであります」

「あと百々くん。彼、球磨川 禊には……特に細心の注意を払うようにな。なにせ彼はまるで何も無かつたかのようにあらゆる学校を廃校にしてきた男だからな」

球磨川という男に警戒を払う全土の気迫に、百々はゴクツと息を呑み理事長室を後にする。

「し、失礼しました……であります」

——なるほど、さすがに神井会長が心酔するだけある。全土様が自分に背を向けた時……彼を斬りつけることも愚か、勝てるなんて……微塵も思えなかつたであります。

「……良い報告を待っているよ」

——たとえ自分の持つスキルを使つたとしても。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

薄暗い校舎の裏で一人のD組生徒がC組の生徒二人組に絡まれていた。もちろん、三人以外には誰もいない。敢えて誰も来ないような場所を選んでいるのだから。

「……う、かはっ……!! やめて……ぐっ!?!」

大柄の男と出っ歯の男が大人しそうな男子生徒に暴行を加えている。

「ああ黙れよこのクズめ!」

「うぐっ!!」

「ちくしょう……ムカつくぜ。あの女あ……」

殴りつけているのは球磨川相手に絡み、憂さ晴らしをしていたC組の二人だったが、正邪に邪魔をされてからはさらに苛立ちが溜まっていた。

「あ、アニキ。大丈夫ですかい? まだあまり声を出せないんでしょう? 一緒に

「こいつでも殴ってストレス発散といきましょうよ」

「……………ああ」

「……………あ、ぐう……………！ やめ、やめて。あぶつ!!」

巨漢の男は少年の腹を思いつきり殴りつけ、悶絶させる。

「つたく。クソ女をぶち殺す前に憂き晴らした……………この礼はたつぷりとー」

青アザだらけになった少年の顔を容赦なく蹴り上げようとする巨漢。足を上げる直前に巨漢の肩を誰かが掴む。

『えつとごめん、トイレってこっちで合ってる?』

後ろを振り向くと、二人が朝にボコボコにしたはずの少年……………球磨川 禊が立っていた。

「ああ? テメエは朝のD組か。なんだ? 仕返しにでも来たってか?」

睨まれているにもかかわらず、球磨川はのほほんとしている。

『え? えーと、君……………誰だっけ?』

「はっ。」

球磨川の予想外の返答に出っ歯の男は呆然とする。

『ごめん、今思い出すからさ。えーと……そっか！　中学の頃の知り合いのタカシくんだったっけ？』

「ちげえよっ!!　　テメエ、なめてんのかこのクズ一号!!」

出っ歯の男が怒号を上げるも球磨川はニヤニヤと笑う。

『……あつ、ごめん。君たちみたいなのモブキャラに見覚えなんてなかったよ！　いやあーお楽しみのところ、邪魔して悪かったね！　どうぞ僕のことなんて忘れてね！』

てへぺろ、と嬉々として暴言を言う球磨川に出っ歯の男があっけにとられるも、大柄の男は間髪入れずに球磨川を殴りかかる。

「……死ね」

『僕は悪くない』

腕が球磨川の顔に届く瞬間、巨漢の拳が螺子ねじによってグシャグシャになる。

「ーな」

『だって』

大柄な男が声を出す間も無く顔に容赦なく螺子ねじをぶち込まれ、絶命する。頭蓋骨が完

全に碎かれるグロテスクな音と共に、周囲に脳漿のうしょうが飛び散る。

「ーっ」

大柄の男は糸が切れた人形のように仰向けになって倒れる。

C組の二人組に先程まで理不尽な暴力を受けていた少年は顔を悲痛で歪ませ、彼の横にいた出っ歯男は口をパクパクとせわしなく動かす。目の前で起こったことが信じられないようだ。

『僕は悪くないんだから』

「あ、うわあああああああつっつ!!」

出っ歯の男は血も凍るような光景に競々きょうきょうとする。震える指を球磨川に向け、すでに惨死体となった大柄の男から必死に目をそらす。

「お、おえっ! う、うう……お、お前え!! ななな何をしたのか分かってんのか!」

『え? 何が? ああ……わあお!! こんなところに遺体が!! 一体どこの誰がこんな酷い事を……!』

「え……え、は?」

白々しくとぼける球磨川にかえって出っ歯の男は怖気を憶える。

「ーこの男、マジでいかれてやがる……」

『こんな……ひどい! あんまりだよ! 全く人をなんだと知っているんだ!!』

涙を流し、遺体の身を案じるような素振りを大げさに見せる球磨川にこう思わずには  
いられなかった。

「――絶対に関わりたくない。」

『ところでさー』

「ひっひっ!!」

大げさな嘘泣きをやめてへらへらと笑いながら出っ歯の男に振り返る。

「――、殺される。」

『えーと……出っ歯くん。君の名前は?』

「こ、小西こにしです!」

『そっかあ、小西くんか』『ところで小西くん』『……君の大切なあの人は元気かい?』

小西はゾツとした。自分を見つめる闇色の瞳に。いいものも悪いものも全部混ぜて  
台無しにしたかのような……人間として終わっている目。

「――ま、まさか……!!」

小西は彼の瞳に恐怖を覚えずにはいられなかった。あのような危険すぎる男が復讐  
のために自分にしてくる行為がなんであるかを……自然と、冷静じゃない自分の頭が  
『ある答え』に導いてしまったからだ。

「お、お前! 俺の妹に……母さんに何をした!!!」



小西はみつともなくヒステリックに叫ぶ。家族に危険が及ぶとなれば黙ってははいられない。

自分がやられた方が何倍もマシだと疑わなかった。その直後、彼は後悔することになる。

『いや、別に?』『何もしてないけど? ……小西くん。なんで君はホラー映画さながらに、ヒステリックに叫んでるんだい?』

「へ……………ええ?」

つい変な声の小西の口から漏れる。球磨川は相変わらず笑っている。いや、むしろ先程より彼の笑みがより濃くなっていく。

『けど、ふうーん』

『きみの大切な人は可愛い妹とお母さんなんだね』『おぼえとこーっつと』

「……………!!」

おぞましかった。ひたすらにおぞましかった。常人ならば絶対にやらぬであろう事を、あろう事かこの男は平然とやっつてのける。

ーくるつ、狂っている。まるで人間の負という負で固めて練り上げたような存在だ。

何故こんなヤツに自分たちは関わってしまったのか。今になって後悔した。

球磨川は嫌味つたらしく笑みを浮かべながら小西に向かって歩く。小西は金縛りにあつたかのように動かない。

『あはっ、小西くんつたらみつともない』

『ただ自分の憂さ晴らしをするために』

『関係もない他人を「虎の威を借る狐」みたいに』『誰かと一緒になつて痛めつける。』『痛めつけられた本人から、どんな報復が来るのか』『誰にその報復が飛んでいくのか』『そんなことも考えずに』『こんな無駄以上に最低で』『愚かな事をしていたんだね。』

『その挙句にビビって、お漏らししちゃうとか』『なっさけねーでやんの！』

「……………やめろ、やめてくれ」

小西は自分の濡れたズボンを御構い無しに耳を両手で押さえつけ、頭を左右に振り球磨川の言葉を聞くまいとする。

『けどね、小西くん』

「ひっー」

球磨川は小西の腕をどける。弱々しく細すぎて折れてしまいそうな彼の腕を、何故か小西は払い退けられなかった。

『いいんだよ。最低で。』

「……………へっ?」

先程と打って変わって優しい声を出す球磨川に……小西は安心した。いや、安心してしまったのだ。

——悪魔のささやきがこだまする。

『情けなくて、みつともなくて、恥ずかしい』『なーんにもできない役立たずの弱い最低な奴』『それがきみのかけがえのない個性なんだから!』

『無理に変わろうとせず自分らしさを誇りに思おう!』

『きみはきみのままでいいんだよ』

優しい、球磨川は優しい。だが、ここまで世にも歪んだ『易しさ』があるだろうか。

「あ、……あ、あああああああああああああああつつつつつつ!!!」

小西は球磨川を、彼の「易しさ」を押し退け、堰を切ったように流れるしよんべんを垂れ流しながら、彼は必死に球磨川から逃げた。

『あちやーフラれちゃったよ。……また勝てなかった』

『……それで結局誰だったっけ? さっきの小西くんとこのゴリラは? どこで会ったんだっけなあ』

本当に球磨川は先程のC組の二人が朝に自分を殴りつけたことなど覚えていなかった。『自分によくわからないけど何か嫌な事があったから、ただの他人に八つ当たりした』。

ただそれだけである。

『まあ……いつか！ よくわかんないけど。あーなんかスッキリした』

彼、球磨川 禊にとっては本当に息を吸うように日常茶飯事のことだった。

『あれ？ 君、ボロボロじゃないか。どうしたの？』

「……あ、球磨川、くん」

『ああ、君は！ ……えっと、ごめん。同じクラスだつてこと以外忘れちゃった』

ガクツと虐められていたD組男子が頭を地につける。球磨川は彼に触れた瞬間――

『うん、とりあえずは。これでもう動けるよね』

「……え？」

少年の傷が……跡形もなく無くなっていた。まるで初めから何も無かつたかのように。

「あ、ありがとう。けど……どうする？」

C組の生徒を殺しちまつたんだぞ……？」

『嫌だなあ、人を殺人犯みたいに。僕みたいな温厚な生徒がそんな乱暴なことをできるはずがないじゃないか！』

球磨川は腰に両手をあて、ぶんぶん！と効果音が出るような怒った素振りを見せる。

「けど、死体が……」

『ん？ 何を言ってるの？ 死体なんて……どこにも無いじゃないか』

死体は……どこにも無かった。先ほど起こったことが嘘のように無傷のC組の生徒が倒れている。

「え……？ だつて……」

『それに誰のことを話してるの？ 君はあの出っ歯くん一人に殴られてたんでしょ？』

「球磨川、お前何を……あ……そうだった。何を言ってるんだ、俺」

記憶の混乱に戸惑い、思考を繰り返そうとするD組の生徒。

球磨川は身体をせわしなくモジモジさせている。

『えーと、悩んでいるところ悪いんだけど……トイレってどこかな？ 本当に限界なんだけど……』

「お、おいおい！ 勘弁しろよ！ こっちだよ。ついてこい！」

『ありがとう！ クラスメイトA君！ いやあーこの学校広くなってさあー』

なお、倒れていた大柄のC組生徒は……みんなの記憶からさっぱりと初めからそんな人はいなかったかのように消えていたという。

## 第16話

## 正邪の作戦

「うーむ……むむむむ……」

「せいじや正邪？　何か考え事？　さっきからすごい眉間にシワを寄せてるけど……」

本日の授業は終わり放課後。ショートホームルームも終了しD組の生徒はカバンに荷物をまとめ始めている。

現在、正邪は机の上で額に手を当てウンウン唸っている。そんな彼女を怪訝そうに見つめる針妙丸。しんみょうまる

「何かないか……」

「へ？」

机から立ち上がり、悔しそうな顔で正邪は自分の机を叩く。

「球磨川を何とかして利用する方法はないものか……！」

「ええ……」

『またロクでもないことを……』と針妙丸は呆れられずにはいらなかった。

「正邪……悪いこと言わないからやめときな？　絶対にアイツに関わってもロクな目に遭わないから」

「何を言ってるんだ針妙丸！ あんなに優秀な人材じんざいを放っておくだど!? 馬鹿なのかお前?」

——『人災じんざい』の間違いじゃないの? ……使い方違うけど。

針妙丸はハア〜と大きくため息を吐く。呆れる針妙丸の様子に関わらず、正邪は野望に目を光らせている。

「……それにしても正邪。学園支配なんて言ってたけど、それ本気?」

「とーうぜん! 私のスキルと球磨川の凶悪性! この二つが組み合わされば敵なしだ」

「もう完全にその気になってるよ……正邪、幻想郷に戻る気は無いの?」

「戻ろうにも安心院あしむに会えないんだ。あいつがいないんじゃないや帰るに帰れん。考えるだけ無駄だ」

——球磨川にあった時点で既に依頼は達成したのだが……一向に安心院が迎えに来る気配がない。おそらく彼女は他にも私たちに何かをさせたがっている。

「なら、しばらくは外で遊ばせてもらうさ。そんなことよりも球磨川を利用し尽くす良いアイデアは無いか?」

正邪はケラケラと笑いながら針妙丸の方を向くが、針妙丸はあまり彼女の作戦に乗り気では無い。

「……あつたとしても言わない。勝手にやれば？」

当然だ。彼女は球磨川に一生物のトラウマを植え付けられたのだから。できるなら今後も絶対にかかわりたくない。

「ちつ……まあいい。じゃあホールルールとやらの時間で考えた私の画期的アイデアを使うか。驚けよ？」

「ホームルームでしょ？　正邪ったら……あの時間中ずっと真剣な顔してるから何かと思ったら……」

『どうしても聞いて欲しいのね……』と観念して正邪の近くの空いた椅子に座る針妙丸。聞く姿勢を見せた彼女に満足し、正邪は堂々と作戦内容を語り始める。

|||||

プランA：消しゴム

「あつやべー。消しゴムがー」

明らかに棒読みの悲鳴。隣の席にいる球磨川がわざと落としたり消しゴムを拾う。

『僕が取ってあげるよ正邪ちゃん』

「おお、助かるぜ」



正邪が落とした消しゴムを渡そうと球磨川が正邪の方に手を伸ばす。

「ありがとう球磨川！」

『あつ……』

伸ばした球磨川の手を正邪の手が優しく包む。可憐な少女の手の柔らかい感触が少年の大きい手に伝わる。

「あとで一緒に消しオトでもやろうぜ！」

『ア、ウン。……ヨロシクオネガイシマス』

緊張しきってガチガチになってしまう球磨川。

——よし。オチた！

|||||

「どうだ？ 女である私の魅力をアピールしつつ、距離を近づける完璧な作戦だ！」

「……」

あまりのアホらしさに聞いた針妙丸の方がゲンナリしてしまう。もう言葉も出てこない。

「えーと……どっから突っ込めば良い？」

「どこがだ？ 完璧な作戦だろうが」

これで男子のハートはイチコロだとバンと指鉄砲を打つ仕草をする。

「ーこいつアホか。」

「な、なんだその顔は！ いいだろう。じゃあこの作戦はどうだ！」

「ーまだあるのかよ。」

|||||

プランB：告白

屋上に球磨川を誘い、正邪は頬を赤らめながら球磨川に手を伸ばす。

「球磨川君！ 私と付き合ってください！」

『うーんと……まず友達からかなあ？』

|||||

『計画通り』とニヤリと笑う正邪。

「流石の球磨川も好意を持つている女性に危害を加えようとは思うまい？ ここから奴

との距離を近づけていくという……っておい！ 帰るな針妙丸！」

騒ぐ正邪を放っておいて教室からスタスタと出ようとする針妙丸。逃がさぬ、と出て行こうとする針妙丸の赤い着物を引っ張る正邪。

「まず断られてるし……失敗前提じゃん」

「何を言っている！ 私の戦いは失敗から始まるんだ！ ほら！ 『私の戦いはこれからだ』というやつだ！」

「友達どころか『ごめん無理』って言われた場合どうするのか考えた？ それにそのフリーズからして打ち切り臭がすごいよ？」

「くっ……!!」

氷のように冷えた目で針妙丸は正邪を見つめる。完全に論破され正邪はぐうの根もでない。

「それにどっちの作戦も球磨川君と友達になろうとしてるし」

「そう！ だから問題なのだ。恋人関係だったら、男を切り捨てるといふ手段も取れるかと思つてのものだったんだがな……」

「最低だね」

「それはどうも。私には最高の褒め言葉だ」

『いいから帰るよ』と針妙丸は正邪に帰宅を促す。正邪はとつと準備を終えていたのかカバンを持ってすぐに教室から出てきた。

「まあ……ちよつとした冗談だよ。なに本気にしてんだお前？」

正邪はハツと針妙丸をバカにするような目で見てくる。

「……正邪。恥ずかしいからつてごまかしちゃダメだよ？」

——長い付き合いだからわかる。今の彼女の顔は特別恥ずかしい事を隠したいときにする顔だ。

現に心中を見抜かれ、正邪は動揺している。動じるあまり、焦りの色が顔に出てしまっている。

「はは……はあ？　べ、別に？　こんなアホらしい作戦を本気でこの私がやるとでも……」

「そのつもりだったね」

『ははは、んな訳ねーだろ』と正邪は顔を見られないように針妙丸の前を通り過ぎていく。

「はあ……やっぱりやめといた方がいいよ。球磨川君と関わってもきつと良いことないから——」

針妙丸が忠告を言い終える前に一人のD組の生徒がこちらに走ってくる。

「た、大変だ!!　うちのクラスの生徒に密告システムが!!」

——!!

D組教室、付近の廊下にいた生徒の表情が全員凍りつく。誰も時が止まったかのように動かない。

「……まーた生徒会のいぶりショーか。さてどこのバカがほかのクラスに喧嘩をふっかけやがったんだか」

「噂によると暴力沙汰を起こしたって。その上、密告されたのはあの転校生らしいぜ!!」

——マジかよ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

『ふふふん、ふふん、ふんふーふん。ふふふん、ワンテユビウイナ〜♪』

その頃。球磨川は授業をサボり、寮の自室でジャンプを読んでいた。ちなみに今の彼は学ランは脱いで白シャツと水色の半ズボンというラフな格好だ。

一見、球磨川の部屋はどこも変哲も無い普通の部屋である。むしろ部屋の主の性格が出ているのか、どことなく清潔な感じがある。

『今週のネガ倉くんは面白かったな。後でコミックスも買つとかなきゃ』

「おい球磨川!!」

ドアが叩かれる轟音と共に甲高く荒々しい声が聞こえてくる。球磨川はジャンプを片手に居間から玄関に移動する。

『はいはい！ わぁお正邪ちゃん！ 僕に何か用？ 新聞ならお断りだよ？』

ドアを開けた先には仏頂面の正邪がいた。

「ちげえよ。お前、自分が今どういう状況か、わかってねえのか？」

『僕は今、友情と努力と勝利の尊さについて学んでる最中なんだけど』

「全くわかってねえのな」

正邪は呑気すぎる球磨川にイラつき、自分の頭をかく。

「いいか、手短にどうぞ？ お前は学園の秩序を乱す存在として生徒会にマーキングさ

れちまってんだよ」

『ひどいなあ、誰がそんなことを』

「他のクラスのやつだろうな。密告システムつってな、C組以上の生徒がもってる権利

……事件を起こしたやつを片っ端から密告できるってやつだよ」

『いわゆるチクリシステムってわけかい？ けど、僕は何も悪いことはしてないぜ？』

球磨川は心底興味なさそうにジャンプを開き始める。

「……言っとくがただの警戒態勢じゃねえぞ？ 無実だろうと何だろうと。チクられ

たからには生徒会のメンバーが黙っちゃいけないからな」

『んー？ 生徒会？ それってすごいのかい？』

正邪はため息をつき、ジャンプを読み生返事をする球磨川の頭を無理やり彼女の方へ向かせる。左耳を思いっきり横にひっぱる形で。

「簡単に言えばアホみたいに強い能力持ちの集団だよ」

『いつってててたいたい!! わかったよ！ まじめに聞くから!!』

「……密告された奴はそいつらからトラウマものの肅清を受ける、いわゆる異分子排除だよ」

球磨川の頭から手を離し、わかったか？と腰に両手を当てる。

『なるほど。要するに、この角明学園かくめいがくえんが誇るエリート集団が僕をリンチしてくる、と』

「そういうことだな。で？ お前は どうするつもりなんだ？」

球磨川は『うーん』と少しの間、顎に手を当てて考える。

『……。正邪ちゃん。襲いかかってくる生徒会っていうのは……みんな強力な能力持ちスキルホルダーなんだろう？』

「ああそうだ。この学園の支配者、大多羅おおだら 全土ぜんどってやつが中心アブノーマルの異常な超天才児ども

さ」

『そっか』

球磨川は再び黒い学ランに身を包み、意を決した様子を見せる。乱れた髪を櫛で整

え、決めポーズも忘れない。

『じゃあ、会いに行こっか！ その生徒会って連中にさ』

急にやる気になった球磨川に戸惑い、正邪は目を見開く。

『もしかしたら……彼らの中に、僕の探している能力持ちスキルホルダーがいるかもしれないからね』



## 第17話 生徒会を……私刑執行するであります。

『……あれ、正邪ちゃん。君まで行くことはないんだよ？ 彼らがお呼びなのは僕なんだし』

「うっせえ。気分だ気分」

球磨川と正邪は寮を抜け、皇庭に向かっている。

『それと……針ちゃん。そんなに嫌なら、君だけ寮に戻つてもいいんだぜ？』

正邪のワンピースのポケットから小さくなった針妙丸しんみょうまるが顔を出す。たいそう機嫌が悪そうだ。

「……。正邪があなたに会うって聞かなかつたのよ。正邪がいなければ誰がアンタなんかと……」

『おやおや、随分と嫌われたもんだ。僕は悲しいよ！』

「白々しい……ほんと、声を聞くのも嫌になるってくらい不快」

笑う球磨川と心底嫌そうな顔をする針妙丸。二人の口喧嘩を尻目に正邪は足を止める。

「二人とも。どうやら向こうがこつちに来るつて事はもうなさそうだ」  
 皇庭の中心近く。目の前には生徒会庶務、百々どうどう 千太郎せんたろうが目つきを鋭くして笑つてい  
 た。

「自分の方からやつてくるとは……いい心がけでありますな。球磨川 禊、それと……  
 鬼人 正邪」

『違うよ？ 僕は彼の弟の球磨川くまがわ 雪だ。兄はまだ寮にー』  
 「嘘は嫌いでありますなあ!!」

百々は一瞬で和服の袖に隠した木の棒を間もなく取り出す。

「……!! 危ねえ球磨川!!」

『!?!』

正邪は球磨川を横に無理やり横に突き飛ばす。

百々が棒を振るうと、大気が揺れ一直線上に衝撃が走る。進行方向にあつた岩が真つ  
 二つに切り裂かれる。

『正邪ちゃん……!?!』

「……勘違いするな。お前にここにくたばつてもらつちやあ困るんだよ」

「はあ……やっぱりお前、邪魔でありますなあ」

百々は正邪の方をギロリと睨む。正邪はとてつもない量の殺気に当てられ、一瞬怯

む。

「どういうつもりだ？ 生徒会っていうのは辻斬り集団かなにかなのか？」

「それはその男に聞くでありますよ。球磨川 禊！ お前は角明学園のC組生徒二人に暴行を加えたであります。……よって！ 自分が学園の秩序を乱す貴様をここで私刑に処するでありますー」

球磨川は百々が言い終える前に背後から奇襲。両手に持った二つの螺子が百々を貫「なるほど、気配を察知させずに不意打ちとは大したものであります」

『!!』

かなかった。百々は球磨川の一撃を隠していた箸で容易く受け止める。

「だが……それだけであります。最後まで言わせて欲しかったでありますがあ」

『決め台詞中に攻撃しないなんて誰が言ったの?』『僕が君の長話に』『最後まで付き合おうと思ったのかい?』

「なるほど……肝に命じておくでありますよ」

球磨川は後ろに後退し、百々も球磨川から距離を取る。ついでに百々は地面の砂を正邪の方へ巻き上げる。

「正邪!! 危ない!! 避けて！」

「何を……ツツ!!」

百々が飛ばした砂利が勢いを増し、正邪に襲いかかった。紙一重に避けるも顔に擦り傷を負う。

彼女が後ろを振り向くと、正邪の真後ろにあつた木が……ハチの巣のように穴だらけになっていた。

「気をつけて正邪！ あいつ……すごく危ない……！」

「今のはただの砂利じゃねえな……まるで散弾銃だ。おい百々！ どういうつもりだ!? 私はまだ問題行動を起こしていないぞ」

正邪は百々の不可解な行動に荒々しい口調で抗議する。

「理由が必要でありますか？ なら簡単に！ 二つあるであります。貴様は先ほど自分の仕事を妨害したであります。もう一つは……貴様が全土様にとって邪魔と自分が判断したからであります」

「ーなるほどね。おとなしくしていたのもあんまり意味はなかったってわけか。外の世界でも幻想郷でも……私に安寧の居場所なんてないんだな。」

「なるほど……私はここでも邪魔者ってわけか」

「……正邪？」

正邪は顔を伏せ、ニヤリと笑みを浮かべる。

「……それはいい！ 厄介払いなんていつものことだからなあ!!」

正邪はいつでも攻撃を避けられるように身構える。球磨川もニヤニヤと笑いながら螺子を構え直す。

『……角明学園D組所属、球磨川 禊』

「同じくD組所属。鬼人 正邪」

「生徒会庶務! 『戦車』百々 千太郎!!」

百々は手に持っていた棒切れを左手から右手に持ち替え、獲物を見つけた虎のように彼の目がより鋭さを増す。

「……生徒会を!! 私刑執行するであります!!」

|||||

「おい! おい慶賀野<sup>けがの</sup>! 大変だ! 起きてくれ!!」

金色に染めたりーゼント、もとい桜<sup>さくら</sup>街<sup>まち</sup>がD組寮、慶賀野の部屋のドアを激しく叩く。流石に起きたのか慶賀野がゆっくりとドアを開けて出てきた。

「コウジ君……。ごめんなさい。待たせてしまって。どうかしましたか?」

「……!」

出てきた彼女は……余程重い病気だったのか、ひどい有様だった。

いつもかけているメガネは外れかかっけていて、綺麗な三つ編みはボサボサ。あまりの

高熱で寝れなかったのか目元に真っ黒な隈ができている。

顔面蒼白で、また倒れてもおかしくないような状態だった。

「慶賀野……！ すまねえ……！ けど今は緊急事態なんだ！ 球磨川と……正邪が生徒会に！！」

「……！！ 早く、早く行かな、うつ……！」

「落ち着け無理すんな。あの姉御が簡単にやられるわけがねえ。……ひとまず人首先生のところに。きつとすぐに良くなるさ。姉御たちの様子を見るのはその後だ」

桜街は慶賀野に肩を貸し、保健棟まで向かう。

「正邪さん……針妙丸さん……！ お願い、どうか無事でいて……！！」

|||||

「どうしたでありますか!? 避けるばかりではつまらないでありますなあ!」

「このっ……！！ 調子に乗りやがって……！」

「……先ほどから私が必死に避けつつ、球磨川が奴の不意を突いて攻撃してるっていうのに……！！」

百々は球磨川の螺子を木の棒でいなし、袖に隠したシャーペンが暗器のように正邪の

方にすごい勢いで飛んでくる。先ほど飛ばした砂利と同じ、またはそれ以上の威力が襲ってくる。

「……ひっくり返して攻撃を跳ね返そうにも上手くできない……！ やはり強力な分、不安定な私の過負荷スキルは連続では使用できないようだな……！！」

「……うん、少し安心したよ。見たところ……安心院さんを倒せるほどの能力スキルホルダー持ちはなさそうだ。やっぱり期待外れの大したことがないスキルだね」

「安心院……！！」

「ほう………たったこれだけで自分のスキルを測れた気になつていてありますか？」

球磨川は怪訝そうに顔をしかめる。普段の無表情な球磨川とはまとう雰囲気が一味違う。

「それにしても……二人、か」

「球磨川？ 何を考えている？ 今は目の前のこいつに集中しろよ」

「ごちやごちや言わないでかかってー」

「はい、また油断した」

気がつくくと、百々の正面にはおびただしい数の螺子ねじが雨のように迫っていた。

「……！！ これは」

『僕が話してるからって攻撃されないと思った？』『余裕ぶつてれば安全だと思った？』

『僕が一度失敗したからって』『また不意打ちを仕掛けないでも思った?』

百々の両足に螺子が直撃し、身動きが取れない状態になる。

「いつの間に……!?!」

『甘えよ』

駄目押しにより多くの螺子を飛ばす球磨川。いくら百々の放つ攻撃が強力であつてもこの数を全て叩き落とすことは不可能だ。

「……!?! バカ、球磨川!」

しかし百々は……ひどく冷静だった。

「言つたでありますよ? 貴様は測れた気になつていただけだと」

今まで一度も抜いたことのない背中の竹刀に手を伸ばし……百々はそれを両手で振るつた。

竹刀が振るわれるのを球磨川が直視した瞬間……投げられた螺子ごと、球磨川の身体は半分に裂けた。



## 第18話 天邪鬼の生き様

生徒会庶務、百々どうどう 千太郎せんたろうは幼少期からこう思った。

『人はどうしてこんなにもか弱いのだろう』と。

自分の能力に彼が気が付いたのは小学一年生の頃。お楽しみの給食の時間、自分のデザートはこんにやくゼリー。彼の好物であり、学校に行く唯一の楽しみだった。

だがその楽しみは奪われた。いじめっ子の圭太けいたが自分のゼリーを盗ったのだ。

非常に悔しかった。が……仕方がないのだ。圭太は自分よりも体が大きくケンカも強かったから。当時の自分では逆らえなかったのだ。

けど強いはずの圭太はこんにやくゼリーをのどに詰まらせてあっさり死んだ。この頃からすでに自分の異常性は開花していたのだ。

友達にシャーペンを貸したらシャーペンの芯が心臓に突き刺さり死んだ。刺した血管から芯が入り込んでしまったのだろう。

中学時代、大嫌いな奴に廃材をぶん投げたら相手が脳震盪を起こした。そいつは今でも目覚めない。

高校時代。大好きな剣道で相手の小手を突いた。するとびつくり、相手の手に風穴が

空いてしまった。高校生になって、百々はようやくよく自覚したのだ、自分の持つ異常性に。相手に重傷を負わせる度、百々はこう思った。

『人って、すぐ死ぬんでありますな』と

今まではただの偶然だと思ひ込んで現実から目を背け続けてきたが、自我が中学の頃よりもはつきりとしていて、相手に風穴を開けたとなると。もう自覚せざるを得ない。

自分はその気になれば簡単に人を殺せてしまう異常者なのだ。実行するに十分な力を不幸にも持つてしまった事を。

以来、彼は部屋に引きこもり学校に行くことも家族と関わることもやめた。

ひたすらに怖くなったのだ。人と関わらなければもう誰も傷つけなくて済む。誰も嫌な思いをしないと。

するとある日、考えることすらも放棄しようとした彼はある一人の人間に出会った。

「君は……他の人と違う、特別な何かを持つているな？ 少し見せてみてくれ」

その男は全土ぜんどと名乗り、彼と話そうとした。知ったような口が百々の琴線に触れたのか、足に穴をあけてやろうと百々は石つぶてをぶん投げる。

「少し怒らせてしまったか？ これは済まないことを言ったな」

「!? な、なんで……」

彼の足に穴は開いていなかった。それどころがいつの間にか百々の背後に全土は

回っていた。

「ち、近づくな！ 自分にもう関わらないでくれ!!」

「近づくな、関わるな、か。私には君の言葉がひどく薄っぺらく聞こえるよ」

「なに……!!? で、でたらめを言うなであります！ お前に自分の何が……!!」

「本当の君は誰かと関わりたがっているのにな」

「!?!」

「誰も傷つけない、だから人と関わらない。嫌われたくないと考えている人間ほど友を、人とのかわりを欲している」

「う、うるさい！ 黙れ黙れだまれえ!!」

「自分の持つ恐ろしい能力スキルを、君自身を、誰かに認めてもらいたがっているんじゃないかね？ なあ……百々 千太郎」

語り続ける全土に本人も意識していなかった本音を言い当てられ、百々は動揺した。  
なのでつい

「死ね」

自分の持っている木刀で全土の顔を吹き飛ばそうとした。

「その証拠に君は……人を殺すことに、傷つけることに何のためらいも躊躇もないじゃ

ないか」

「は、放せ!!」

その木刀も全土に受け止められた。全土は左手でがっしりと木刀を握り、引き抜こうとするも……何故か一ミリも動かすことができなかった。

「百々君。君は何も怖がることなどない」

「え……」

全土は木刀を放し、百々に手を伸ばした。逆立った銀髪をたなびかせ彼に向かって微笑みかけたのだ。

「そんな君を……この全土は許容しよう。君のその力、私のために役立てる気はないかね?」

百々は唾然としました。この人はもろくない。自分といってもきつと壊れない。自分を受け止めてくれる。親以上に自分を理解してくれる存在に出会えた。

「私のメールアドレスと電話番号だ。あと……住所も後で送っておくよ。いつでも私の家に来てくれ。一緒に普通の高校生らしく遊ぼうじゃないか」

この時、肉親の言葉にさえ一度も揺さぶられなかった百々は初めて誰かに心を動かされた。

全土と会ってから、百々は毎日、自分の人生を素晴らしいと感じるようになった。彼

以外にも自分を理解してくれる彼の仲間が多かったのだ。

「なるほど……百々。確かに君が傷つけてしまった者にきみが罪悪感を感じるのも仕方がないことだろう。だが……気に病むことはない」

「全土、様……どういうことでありますか」

だが彼以上に自分を安心させてくれる存在はいなかった。

「誰かの犠牲がなくては……世の中も人生も成り立たないとは思わないかね？ 権力者が人民から金を搾取するように、親が子供のために身を削るように。何かを犠牲にして世の中と我々の生活は保たれている」

「……お言葉ですが、自分たちはその世の中からも阻害……邪魔者扱いされているのでは」

『消えてほしい』とでも誰かに言われたのか？

ビクツと百々の肩が大きく揺れる。

「他人が言うことや周りを気にすることなどない。人間は……本音のところ自分を一番に愛するものなのだ。自分が傷つかないように強き者を自分と同じように弱くしようとしているのだよ。……孤立させてな」

「では……強き者のままでいるにはどうしたら……」

「簡単だ。お前がやっていて楽しいと、やりたいと思うことをすればいいのだよ」

この日から百々が周りを傷つけることへの罪悪感が……一切消えた。

「強いものだけが……好きなことをできるのだよ。優れた頭脳を持つ者がバカ者を上手く使うように、肉食動物が自分より弱い動物を喰らうように。権力を持つ者が民衆を操るように……な」

全土の支配する学校へ転学し、生徒会庶務として学園の問題児を叩き潰し、相手にトラウマを植えつけた後……百々は度々考えた。

『人を傷つけることは楽しい』と

|||||

「く、くまがわあつー……つー！」

百々は真つ二つになった球磨川を見て、ため息を吐き自分の持つている竹刀を肩にあてる。

「弱い……弱すぎるであります。……滑稽すぎるくらいに」

正邪は球磨川の元へ駆け寄るのを見て百々は口元を歪める。

「空気を切っていた方がまだ手ごたえがありますね？」

「く、球磨川！ おい！」

「ダメだよ……正邪。もう球磨川は……」

針妙丸の言葉に反応し、正邪の顔が青ざめ、現実を受け止めきれず首を横に振る。「そんなはずがない！ くっそ、どうしたんだ!? いつものように蘇って来いよ！  
なあ!!」

半分になった球磨川の体をゆするも当然ピクリとも動かない。

——まさか……こいつの謎の能力が、発動しなかったのか……？

「なあに、なにも怖がることはありませんよ？ 鬼人正邪」

「くっ……」

正邪は『絶対に出てくるな』と針妙丸をポケットに強く押し込む。

百々は肩にあてていた竹刀を正邪の方へ向ける。

「どうせ、お前も同じところに逝くことになるでありますから」

「……そうはならねえな」

「ん……う？」

静かにその場から立ち上がった正邪に百々は眉をひそめる。

「だって逝くのはお前だけだかんなあ!!」

「!!」

正邪は両手に先ほど百々が投げつけてきたシャーペンを指の間に挟み、前方から雨あ

られと投げつける。

「てめえの能力はズバリ！ 『あらゆる武器の威力を上げる』程度の能力う!! シャーペンや木の棒だって使い方次第では武器だからな！」

「……」

百々は忌々し気に正邪をにらむ。正邪は嬉々として彼のいら立ちの顔を眺める。

「飛び道具は効かないとまだ分かってありますか？」

「……え」

百々は器用に竹刀をプロペラのように振り回し、飛んでくる全てのシャーペンを弾き飛ばす。

「ダメ押しにもう何本!!」

「むだつつつてるでありますよマヌケがあ!!」

正面から再び投擲されたシャーペンが正邪に跳ね返される。

「いいっ!? 馬鹿な!! 私の妙案が通じんだとお!?」

「自分のスキルに対策しようとも無意味であります。……まっどうせ、自分が威力が上げた武器を使えば大ダメージを与えられると踏んだのでありましようが……」

百々は勝負は決したと正邪に向かい勝ち誇る。

「……つて言うんでも思ったか? ばあーか! 周りをよく見てみな!!」



「ツツ!! これは……」

自分のはじき返したシャーペンが地面に落ちる直前、進行方向が地面から百々へと全てひっくり返っていく。

「き、貴様……」

「お前は私の策にはまったんだよ!! 題すれば!! 『どうしようもない処刑法』つてところかな!!」

——以前戦った『時を操る程度』の能力を持つメイドがやっていた手法の再現だ。彼女は時を止めて自分の四方八方にナイフを投げていた。今回はその物まねだ。

私が投擲すれば反射的にはじき返そうとする。自分とは別の方向に飛ばすために。相手がはじき返した武器は当然四方八方に飛ぶ……が、逆に! その進行方向をひっくり返せば……防ぎきることが難しい檻の弾幕の完成つてわけだ。

しかし百々は跳ね返ってきたシャーペンを……避けもせず、はじき返そうともしなかった。

「……訂正。よく考えるでありますな。自身のスキルをここまでうまく使うとは。だが……無意味に変わりないであります」

一瞬。正邪の胸から赤い華が咲く。

「うっ……!! がはっ!!」

「正邪あ!!」

心臓を何かで撃たれ、足の力が抜け地面に仰向けに転がってしまう。血が地面に広がる度、正邪の体温が冷たくなっていく。

「う、が……なに、が……!! かはっ!」

「せ、正邪! しやべっちゃダメ! ツツ! 急所の位置……!!」

「くら! 出てくるな……ぐっふっ!」

ポケットから出ようとした針妙丸を引き止めるも、百々に頭を踏みつけられ地面に頭をこすりつける形になってしまう。

さらに口から血が漏れ出し、呼吸をすることも難しくなる。口元の血が自然と外にあふれ出る。

「せつかくの奇襲も奇策も無駄になったでありますな」

「お、まえ……!! なんで」

「……スキルの解除くらいできなくてはやっていられんでありますよ。まあ、操作可能になったのはつい最近のことでありませんがな」

百々のいた場所にはただのシャーペンがゴロゴロと転がっていた。威力の上がつたシャーペンが暗器並みというなら跳ね返せばいい。その作戦はただのシャーペンに戻った時点で完全に失敗したのだ。

百々は自分の片手に持っていたのは……エアガンだった。

「さっきお前は自分のスキルについて言い当てようとしていたでありますが……さきほどお前が言ったのは、ズバリ使い方の一つに過ぎないであります」

「……!? なん、だ、と……!!」

「正確には自分のスキルは……『殺傷力を上げる』能力であります。自分に触れたものは石ころや食べ物や薬であろうと全部!! 殺傷性の高いものに早変わりであります」

「……あ……!!」

おもちに触れれば相手の喉に詰まらせ窒息死させる危険物へ。薬は毒薬へ。シャーパーンは相手を死に至らしめる凶器へ。

「しかも……元々殺傷性のある物は倍倍の強さの物になります。刀であればその分切れ味が。貫通力も威力も、物によって倍倍であります」

百々のスキルがなくても、箸だろうと棒切れだろうと使い方によっては大けがを負わせられる。木刀や竹刀も廃材も使い様によれば人だつて殺せるのだ。エアガンのBB弾も……撃ちようによつては鳥を一撃で殺すこともできる。

百々は正邪の頭にエアガンを突きつけるが……その顔は勝ち誇つたかのような顔ではなく、当惑の顔だった。

「くく……ハハッ。ふふふ……」

「貴様……なぜ笑っているではありませんか？　死への恐怖で気でも狂ったではありませんか？」

正邪は顔を上げ、負けているはずなのに自慢げに顔を引きつらせながら笑っていた。「笑わずにはいられるかってんだ。つらくて泣きたいってときは……私は笑うことにしてるんだよ」

「……理解しがたい習慣でありますな」

怪訝そうに顔をしかめる百々に正邪は血の混じった唾を吐きつける。百々の顔に『不快』の二文字が浮かび上がってくる。

「習慣じゃねえ。生きざまだよ。正直、死ぬほど痛えし……つらくて泣いちまいそうだ」  
正邪はその赤い目を細め、口元についている血をぬぐう。

「けどなあ!!　どんなにつらくて苦しくて泣きたいときでも、私は逆に笑うんだよ！　私は鬼人正邪!!　生まれついで天邪鬼だ!!」

吠えた後、正邪は憎たらし気にニヤニヤと笑う。だれがお前なんか命乞いなどするか、と。

「……それで満足か？　じゃあ……死ねであります」

百々が引き金を引く直前。自分をかばおうと腕をよじ登ろうとする針妙丸を遠くに投げる。針妙丸の悲痛に歪んだ顔が鮮明に正邪の目に映る。

——今度こそ、死んでくれるなよ。……姫様。

「いやあああああアツツ!!」

針妙丸の悲鳴は虚しく、容赦なく引き金は再び引かれたのだった。

## 第19話 「知るかバカ。」

「……」

「やあ！ また会ったね正邪せいじゃちゃん。ボクのことか恋しくなっちゃったのかい？」

一度見た教室……いや、安心院あんしんむなじみの部屋つてところか。

「別にまた会いたくなつてここに来たわけじゃねえよ。なじみ」

「もう……少しぐらい素直に『嬉しい』とか言ったらどうなんだい？」

「本音でも思っちゃいねえよ。それより、球磨川くまがわはどうした？ 同じところに来ているんじゃないのか？」

「ああ、球磨川君なら別の部屋で待機中だよ。それに……ここは君の夢の中のようなものだからね。漫画でも死んだら夢の中で……つていうの。よくあるだろ？」

安心院は穏やかに微笑みながら正邪を見つめる。教卓の上に座っているのは相変わらずだ。

「それにしても……また死んじやったんだね」

「ほとんどお前のせいだな。お前が依頼を果たした私を、さっさと送り返さないからだろ？」

「『私』、じゃなくて『私達』でしょ。君だって、本心ではまだ帰りたとは思っていないはずだ」

正邪は安心院から目をそらし、苛立たしげに舌打ちをする。

「こらこら。女の子が舌打ちなんて、可愛くないぞ?」

「……うるせえ。御託はいいからさっさと話したらどうだ? ……私達をあの学園に送った本当の目的を」

安心院は『よつと』と言いつつ、教卓を降り正邪と同じ目線で話をする。

「なんだ。気づいていたのかい?」

「……お前みたいなのを持った奴が私は一番信用ならねえ」

「ふーん……」

——球磨川や私のような濁り切った目でも、針妙丸のように澄んでるわけでもねえ。妖怪であろうと人間であろうと、全て文房具売り場の消しゴムを見るような目をしてる奴なんかをな。

「正邪ちゃん。球磨川君が角明学園かくめいがくえんに残っている間……彼の側にいてやってくれないかい?」

「……はあつ!?!」

「じゃないとストーリーが進まないんだよ。この物語の」

物語？ ストーリーとは……一体どういった意味なのだろう。正邪は訳が分からな  
いと机から立ち上がり抗議する。

「ストーリーだあ!?! 訳の分からねえこと言ってんじゃねえよ!! きちんと話せ!!」

「球磨川君が箱庭学園に行ってもらわないと、ボクの封印が解けないんだよ。いい加減、  
他人の夢をうろちよろするのにも飽きちゃったしね。ボクは早く『新しい不可能探し』  
をしたいんだ」

「……ツツ!! わからねえ。アンタ一体……何を考えてるんだ……!!」

正邪は目の前にいる『彼女』が、『負』の化身、球磨川 禊よりも不気味で妖怪の賢者  
八雲 紫よりも胡散臭く見える。

正邪は顔を引きつらせ、嫌悪感が態度に現れる。

「まあ、わからなくてもいいよ。この依頼を果たしたら『本当に』君達を幻想郷に送り返  
してあげるよ。これだけは確かだ。約束するよ」

「……」

選ぶ権利はない。目の前にいる化物は気分次第では死んでいようと生きていまいと、  
こちらを遠慮なく『消す』ことができるのだから。

「よし・じゃあ君をもう一度生き返らせてあげよう! ドラゴン○ールの神龍みたく  
一回だけしかかっていうのはないからね」



「……いいから、早くやってくれ」

「あれ？ どうしちゃったんだい？ ボクはいつも元気な君の姿も見たいんだぜ？」

「自覚なし、か……どうかしてるぜ、あんた」

もう下の名前で呼ぼうとも思わなかった。

「ちよつと萎えさせちやつたみたいだね。そんな君にボクの『とっておき』をあげよう！  
「いっけいぶん一京分の一いちのスキルを使つて作つたんだ。これがあればたぶん大丈夫さ。しばらく死なずに済むでしょう」

「一京分の一……？ はは、冗談きついで……」

「じゃあ、いつてらつしやい！」

正邪の意識が再びおぼろげになる。先ほどあつた教室が無くなり、辺りには暗闇が広がる。

「……正邪ちゃん。球磨川君を頼んだよ？」

不可解だった。いつも誰に対しても『悪平等』な態度なのに、球磨川の名前を出すときは……どうしても不平等で、ひどく優しげで……見た目相応の少女だったのだ。

「アイツは君同様、超ひねくれ者で嫌な奴だけど……。ボクのかわいい弟みたいなものだからね」

「本当になんなんだよ……アンタ」

安心院の心からの笑顔を見た刹那、正邪の意識は暗闇の中へ消えた。

|||||

「針妙丸さん!! 正邪ちゃん!!」

「……なんだよ。これ……!?」

慶賀野と桜街が駆け付けた時には、皇庭の周りは見る影もない姿になっていた。

整った芝生はえぐれ地面の土がむき出しになり、校舎の一部には大きな切り傷、辺りにある岩にはきれいな丸型の穴がびっしりとあけられていたのだ。

「いや、いやだ……」

「あ、おい! 少名さんだ!」

「けど、様子が……!! それにあの子が抱えているのって……!!」

二人が駆け付けた時には……頭に大穴を開けられ死体となった正邪にしがみつき、慟哭する針妙丸の姿だった。

「あ、あね……ご……!!」

「う、うそ……!!」

「正邪の、正邪の馬鹿……!! また私を置いてくの……? まだ私を近くで見てみた  
いって……一緒にやり直そうって……言ったのに……ツツ!!」

針妙丸は憎々し気に正邪の着ていたワンピースを握りしめる。慶賀野達が駆け付け  
たことなど……彼女は気づけなかった。

人目をはばかることなく彼女は嗚咽を漏らす。

「なあに、泣くことはないであります。ご希望なら今すぐにも同じ場所へ送ってやる  
でありますよ」

針妙丸が殺気を百々に向ける前に、桜街が百々の前に飛び出した。

「ど、百々!! てめええツツ!!」

「ギャーギャーギャーと……やかましいでありますなあ」

百々は近くにあった小石を掴み、飛びかかる桜街に投げつける。

「咬ませ犬は大人しく黙っているでありますよ」

百々が投げた小石は桜街の足を穿つ。

「がツツ……!! なんツツの!! これしきいいいツツ!!」

「なっ!?!」

足の痛みを無視し、桜街はそのまま百々の顔を殴りぬける。殴られた衝撃で百々は地  
面を転がり、着ていた和服に泥がつく。

「あがつ……!!」

「どうだ!! こちとら『重力使い』殴りに来てんだ!! 咬ませ犬なめんよお!!」

「コウジ君……最後までなんか決まってるよ……」

苦笑しながら言葉を漏らす慶賀野だったが

「う、ぐほおツツ!!」

「コウジくんツツ!!」

そう簡単にやられる百々ではなかった。どこからか放たれた数個の小石が桜街の残った手足を的確に穿つ。ゆらゆらと百々はその場を立ち上がり、竹刀を構えていた。青筋を浮かべながら。

「クリーニング代は後できつちりと払ってもらおうであります……!! この劣等生が!!」

瞬時に桜街との間合いを詰め、百々は彼の腹を思いつき蹴飛ばす。

「ぐあああつっ!!」

正邪達とは別の方へすつ飛んでいく桜街から針妙丸の方へと視線を移す。

「……功名こうみやうさん。桜街さくらがへさんを連れて逃げて」

「針妙丸さん……?」

「私が気を引き付けるから。……その間に」

針妙丸は針の形状をした剣、輝針きしんけん剣を構え慶賀野の前に立つ。

「だ、だめ!! これ以上彼らに逆らわないで!!」

「ごめん。ここで引き下がったら、正邪に怒られちゃうから。だから……行つて?」

慶賀野は必死に首を横に振る。ここで逃げたら確実に針妙丸も死体になってしまう。

「お願い。もうこれ以上、仲間に……友達に傷ついてほしくないの」

「針妙丸、さん……!!」

「また後でね。功名さん」

輝針剣を握り、向かってくる針妙丸に嬉々として百々は竹刀を向ける。

「ほう? かたき討ち……というわけではありませんか? ま、斬れる相手が増える分、自分

には構わないでありますか」

「……どうしてあなたは人を傷つけるの?」

「……あ?」

いら立ちを顔に浮かべる百々に対して、針妙丸は静かに語り掛ける。

「人は傷つけられたら悲しむんだよ? その人を想って泣く人だっている。なんであなたは他人の気持ちを分かってあげられないの?」

「まるで道徳書にでも書いてありそうな言葉であります。素晴らしい。あー感動した

……普通の奴ならでありますか」

百々は皮肉を込めて悪意を針妙丸に叩きつける。

「傷つたくもないのに傷つけてしまった者の気持ちの何がわかるでありますか？」  
「……………」

「お前は善意で行った行動が……知れず知れず人を殺してしまった者の気持ちがわかる  
でありますか？」

竹刀を握る手にさらに力が込もり、きしむ音が周りに響く。

底知れぬ百々の感情に、針妙丸と慶賀野は戦慄する。

「カツとなつて人を殺しかけた人の気持ちが変わるでありますか？ 両親からものけ者にされ裏切られた気持ちが変わるでありますか？ いるだけで人を殺してしまうこの能力を背負う者の気持ちが……お前に分かるでありますか？」

「あなた……」

「わからないでありますなあ!! だってお前は!! お前たちは!! 持つていないんだから!!」

百々が言っている言葉は果たして針妙丸に対してなのか……それとも。

「自分の気持ちを理解しようとしめない連中と理解し合えると思うでありますか？ 人間は共通点のある奴ばかり好きで！ 自分と違う奴は遠ざけるか排除しようとするんですから」

積年の想いがあふれたのか徐々に百々の語気が強くなつていく。

「だけど、全土様ぜんどは他の奴らとは違った。ほかの奴と違う自分を受け入れてくれた！彼の周りの連中もそうだった！ そんな彼らの役に立ちたいという気持ちの……どこが悪いのでありますか」

針妙丸が彼に返す言葉はなかった。彼女も……孤独を知っているから。おそらく正邪と出会わなければきつと自分は百々と同じようになっていたかもしれないから。

「役に……立つって……？」

「貴様ら危険分子の心を折り、学園の不安要素を取り除くこと!! それが自分の使命!! その邪魔をする奴は誰であろうと……」

「嘘だ」

針妙丸は怯まず百々に向かい歩き続ける。自分の闇に動じない針妙丸に百々は狼狽する。

「な、なにを」

「あなたの言っていることは間違ってる。あなたも……本当はそのことに気が付いていないんじゃないの？」

「だ、だまれ!!」

圧倒的に優位に立っているはずの百々が弱者であるはずの針妙丸に怯えていた。震える手で竹刀を針妙丸に向けている。

——もし彼の言っている全土というのが彼をここまで歪めたのだとしたら……なん  
と人の心の隙間を突くのがうまい奴なのだろう。

「本当は人を傷つけることに罪悪感を感じているはずなのに……それを使命と誤魔化し  
て、あなたは自分をだましてる」

——この人は、自分の能力のせいで人を遠ざけざるをえなかった……とてもかわいそ  
うな人なんだ。

「あああああああああつっ!!!」

錯乱した百々は竹刀を針妙丸の頭に振り下ろす。対する針妙丸は輝針剣を構えるも、  
殺傷力が倍にもなった彼の一撃を防げるはずがないことを彼女は悟っていた。

「いやあーッツツ!! 針妙丸さああん!!!」

——もし……正邪がこの人のこと聞いたら、なんて答えただろうな……。

「知るか、ばあーッツツか!!」



「かあつつ!? なにいいつつ!?」

銃声が響き、百々の竹刀が『何かに』弾き飛ばされる。直撃したのか百々の右腕に力が入らない。

「き、貴様は……なぜ!? それに何でありますか……それはあ!?!」

血を流しつつも起き上がった正邪の手には……黒いハンドガンが握られていた。

「さあな、『とつておき』……らしいぜ?」

## 第20話 『大嘘憑き』

「もう……!! 遅いよ。正邪あ……!!」

「おう泣き虫姫。元氣してたか？」

——早速使ってみてわかった。

正邪はちらりと自分の持っているハンドガン……安心院の渡した『とっておき』を見る。

——これは私が外の世界で弾を……弾幕ごっこで使っていた妖力を弾丸にできる装置だ。

正邪がここに来てもう数週間。彼女は外の世界において、幻想郷の住人であり、妖怪でもある自分が実際に存在を保っているとはいえ、だいぶ自分の力が弱まっていることに気がついた。

一番大きかったのは、以前なら体力の続く限りできた……能力の連続使用ができなくなっていたことだ。

——空を飛ぶことも、弾を放つこともできなかったが……この道具を使えば弾幕とは

言えないまでも、銃のように弾を撃つことができる。

「全く……こんな道具があるなら最初からわたせってんだ」

「正邪？ どうかしたの？」

「いや、なんでもない。時間稼ぎご苦労だ針妙丸。後は……私がやる」

針妙丸を下がらせ、百々どつどつに向かつて銃を構える。

「ほーお、随分と動揺してるじゃねえか。らしくねえ」

「……蘇った。いや死んでいなかったただけでありますかな」

「さあ、どうかな？」

「いずれにせよ……貴様に自分のスキルを破ることなど不可能であります」

百々は竹刀を再び構え始めるも

「易しい先輩。私に土産をくれるなんてよ」

再び正邪は銃を放つと銃口から矢印の形をした弾が飛び出し、百々の持つ竹刀を弾き飛ばした。

「しまっ……！」

「お前の能力の正体はさつき自分で言っちゃったなあ？」

——そう、道具の殺傷力向上。そのスキルは道具無くしては機能しない。

「撃ち落としやあ使い様がねえんだよ!!」

「……!! クソオツツ!!」

百々はエアガンを取り出し引き金に手をかける。

「遅え!!」

「……くっ!!」

百々が撃つ直前に弾を放ち、エアガンを遠くへ弾き飛ばす。

「銃は剣よりも強いつてなあ。あんたがハジキを持ち出すつてことは読んでんだよ」

——悪いが幻想郷じゃあ弾幕ごっこなんて日常茶飯事なんだ。人生……いや妖生、撃ち落とすか撃ち落とされるかだ。

「降参しな。もうあんたに手札はねえよ」

正邪はにいつと笑いながら銃を構える。

——むろん、弾幕ごっこで使われる弾には殺傷性はない。死なないとこ甘々だが、当たるとすごく痛いぜ？

「……さあて、それはどうでありますかなあ？」

いつの間集めたのか、百々の両手には大量の砂が握られていた。

「なっ!!? しまっ……!!」

「細かすぎる物ならあ!! 弾き落とせないでありますよなあ!!」

——まさか動揺している精神状態でそれに気がつくとは!! 私のみ！ 私のみ過負荷は

まだ使えないのか!?

慣れ親しんでいる何かを『ひっくり返す』感覚。それはまだ正邪の手元にはなかった。  
——うそ……だろ……!?!? こんな時にい!

打開策がない事態。正邪はその事実<sup>に</sup>気が付き、絶望する。

「どうやら貴様のスキルは発動できんらしいなあ? 負け犬の劣等生にはお似合いの能力<sup>スキル</sup>であります。じゃあ……蜂の巣になるがいいであります!!!」

百々の無慈悲な殺人弾幕がその手から乱れ飛ぶ。

正邪はせめて痛みだけでも和らげようと両腕で顔を覆い——

『全く……可愛い女の子達を泣かせたり、いじめるなんて』『許せない奴だぜ。』

「え……?」

正邪が腕を下げた時には、正面に砂はなく……代わりに球磨川<sup>くまがわ</sup>が平然とそこに立ち、

正邪に背を向けていた。

「球磨川……!! おせえよ!!」

球磨川は正邪の方を振り向くと、いつものように呑気な表情を見せる。

『うん。しばらくぶり! 正邪ちゃん元気してた?』

「相変わらずだな……少しは緊張感つてもんがねえのか……」

空気になりつつある百々は苛立ちつつ声をあげる。

「く、球磨川禊……き、貴様まで……!!」

『オツス! 百々君! 君も元気してたかい? ずいぶんとお疲れのようだけど、何

かあったのかな?』

「き、貴様……!! 砂はどうした! 自分の投げた——」

『……何のことかなあ? さつき飛んで来た砂利なら……「無かったこと」にしたけど』

「それは……どういう……!?!」

動揺した百々の隙を突き、正邪は急いで百々の能力のことについて伝えようと球磨川の元へ駆け寄る。

——しめた! 球磨川がいればこの状況を打開できる!

「それよりもアイツのスキルのことなんだが……」

『ああ彼の「道具の殺傷力を上げる」ってスキルのことかい? のんびり聞かせてもらっ

たよ』

「ん?」

正邪は球磨川の言葉にどこか引っかけかりを覚えるが……すぐにどうでもよくなってしまった。球磨川の纏う雰囲気がいつもととは違っていたからだ。

——なんていうか……別人ってわけじゃないんだが、より彼の持つ凶悪さが顔に現れたような……?

『百々君。ついさつき……君のスキルを大したことがないって言ったけど……訂正するよ』

「ほう、さいでありますか。自分の『キリングチャリオット戦車』を認めると」

『ああ。自分で喰らってみてわかったけど』『君のその『キリングチャリオット戦車』は恐ろしいスキルだ。人を殺すのにそれほど最適なスキルはなかなかないだろうね』

言った内容とは逆に、球磨川はすこしがっかりしたように見えた。

『だけど人を殺すためのスキルじゃあ』『人外である安心院あんしんいんさんは倒せない』

「安心院……!? だ、誰だそいつは……? いや、今はどうでもいいでありますな」

『そっか。ならいーよね。おかげで説明する手間が省けたよ』

驚くべきことに球磨川がいつの間にか百々の背後にいたのだ。まるで……『球磨川が百々の背中に移動するまでの時間』が『なかったこと』のように。

「貴様!? い、いつの間に!!」

『これが僕のマイナスだぜ。百々君』『すべてをなかつたことにする』『この世で最も取り返しのつかないスキルだ』

百々は絶句し、尻が地面についてしまう。戦意喪失だ。

「すべてを……なかつたことに……!?!」

『そう、だから……』

『君の持つ道具の殺傷力を』『なかつたことにした!』

「え、う、嘘だ……そ、そんな……」

試しに木の枝を近くにあつた木に振るうも、効果はなかつた。

『あれー? 何してんの! うわーただの木の棒で木が切れると思つてんの? うわ  
恥つずかしいー』『フィクションどんだけ虚構にあこがれてんの、君?』

球磨川はヘラヘラと笑いつつ絶望した百々の肩に手を乗せる。

『ま、よかつたじゃん。百々君。だつて君がなりたかつたのは特別な人間なんかじゃなく……』



『本当はそこら辺にいる普通の人間に』『君はなりたかったんだから』  
「……」

最初、百々は最も警戒すべき対象を鬼人 正邪だと思っていた。

『僕がかわいそうな君の姿を見ていられないから』『君の願いを叶えてあげたんだよ！』  
『だから』

しかし、それは間違いだった。

『僕は悪くない』

最も警戒すべき対象は……いいも悪いもすべていつしよくたにかき混ぜて台無しにするこの男、球磨川 禊だったのだ。

「……殺せ」

『ん？』『どうしたの？ 急に暗くなっちゃって』

「いまさら……生徒会の役に立てなくなった自分に……価値なんてありません」  
正邪はすっかり憔悴しきった百々を冷めた目で見ていた。

——決まった。もう、百々の心はぼつきりと折れた。

『おいおい、人を犯罪者にするなよお』『人殺しなんてできるわけないじゃないか』

「……」

『だけどいいのかな?』『僕的能力や彼女的能力の情報を』『君の仲間は欲しがっているんじゃないのかい?』

「!!」

百々の目に急に光が戻るが一瞬で消える。目の前にいるこの男に見逃してもらえない保証など、どこにもないのだから。

『しかし……戦意を喪失した君にとどめを刺すのは気が引ける』『……だから交渉してあげる』

あつさりと言つてのける球磨川の言葉に飛びつく百々。『自分はどうすればいい』と言いたげな目をしている。

『君らは今後、僕の行動を見逃してくれるだけでいい。その代わりに今、僕は君を見逃そう』

「あ……ああ!! わかった!! それでいい!」

『うん。じゃあ交渉成立だ』と球磨川は百々を起こす。

『さあ消えな』『僕は帰ってジャンプの続きを読みたいんだ』

「……わかったであります。すぐに消えるでありますよ」

百々は球磨川に背中を向け全力で走る。

——馬鹿め!! 貴様らの能力さえ知れば全土様にとって大きな助けになる!!  
しかし百々は今後は見逃すつもりはなかった。

——自分が潰さなくとも、他の生徒会メンバーが必ず貴様らを潰すであります!!  
ざまあみろ鬼人正邪! ざまあみろ、くまが

『ごめん。今のなしで。』

「!?!」

百々の背中に容赦なく一際巨大な螺子が突き刺さる。螺子に鮮血が付着し、百々はえずき口から血を垂れ流す。

「な、んで……?!? や、約束は……?」

『悪いけど、僕は気分屋なんだ』『ごめんね。百々君』

百々の体が痙攣を始め、口から血を吐きながら地面に倒れ伏す。

「このお……!! ……おお……うそ……つき……めえ……あ」

百々は完全に意識を手放した。沈黙した百々に向け、球磨川は凶悪そうな笑みを浮かべる。

『そう』 『「オールフイクション大嘘憑き」』 『名前だけでも憶おぼえて帰ってね』

## 第21話 優しい慟哭

正邪せいじやと針妙丸しんみょうまるがまだ百々と交戦している間。またまた死んでしまった球磨川君くまがわは安心院あんしんいんの空間へ。二人で現世の様子を安心院の出したモニターで視聴中だ。

『へえー。百々君がまさかあんな闇を抱えていたなんてね。いいね！ 感動的な話だ』  
球磨川は感心したように気楽に笑う。

誰とも仲良くできず友もできずたった一人。百々の話をまとめるとこんな感じだ。

「いや、全く笑えないよ？ むしろ悲しいお話なんじゃないの？」

球磨川の場違いな笑いに苦笑する安心院。まだこちらの方がまともな反応だろう。

『それにしても……彼のスキルが「あらゆる道具の殺傷力を上げる」スキルの持ち主だったとはね。正邪ちゃんもうまく聞き出したもんだよ』

「確かにね。言い換えれば「なんでも武器にできる」ってことだからね。暗殺者には喉から手が出るくらい欲しいスキルなんじゃないかな。ま、それでも本人にとつては重すぎるスキルだったのかもね」

百々のスキルは異常性アブノーマルというよりも、どちらかと言えば過負荷マイナスよりのスキルだ。持つ者を不幸にしかない不要の長物だ。もつとも、そういったスキルを持たない者には彼

の能力の少ない利点にしか目を向けないだろうが。

「それよりもさ、球磨川くん。いつになったら君は箱庭学園はこにわに行くんだい？ 愛しのめだかちゃんと決着をつけにさ」

『……何を言ってるのさ、安心院さん。どのめだかちゃんのことを言ってるんだい？』

小学校の頃、僕が飼ってたメダカちゃんの話？』

「またまたあ。中学校の頃に君の部下だった阿久根あぐねくんをとった上に、当時生徒会長だった君をボコボコにした黒神くろがみめだかちゃんだよ」

『思い出した』と言いたげに球磨川は手のひらをポン、と叩く。

『ああ、そっちの。悪いけど僕は彼女には何の興味もないんだ』

「本当かい？」

『別に。ちつともないけれど？ ……それがどうかした？』

『そつか……』と安心院は横にあったモニターを消し、教卓に頬杖をつく。

「そういえばあの侍ボーイがなんか妙なこと言ってたよね。確か……」

『二人。僕がなかったことにしたはずのもう一人の記憶がそのまま百々君の中に残っているんだよ』

球磨川は少々苛ついた声色で安心院の言葉を続ける。彼は彼女に背を向けているので、安心院から顔は見えないが……一体どのような顔をしているのだろうか。

「そうだね。ボクが君に貸した、いや課したスキル『手のひら躰し』ハンドレッド・ガンレットを改造した  
オールマイクシオン『大嘘憑き』。君のそのスキルでなかったことにしたものは二度と元に戻らないはずなの  
 にね」

『……』

「よかつたじゃないか球磨川くん。君のスキルを破るほどの人物……もしかしたら、ボクを倒すことのできるスキル所有者が角明学園にいるってことじゃないかな？ おめでどう」

球磨川はふつと笑い、微笑む安心院の方へ振り返る。

オールマイクシオン『大嘘憑き』なんて、ただの手法だ。ネタがバレれば大したことのない、危なっかしい  
マイナス過負荷さ』

「なーんて言つてえ、本当は楽しみにしているんじゃないかな？」

『まあ……少なくとも百々どうどうくん本人の能力じゃないことは確かだね。殺傷力をなかつた  
 ことにすれば無力化できるなんて、大したスキルじゃないよ』

「辛い評価だなあ。もしかしたらあの『道具の殺傷力を上げる』スキルだったら……」  
 安心院は両手を開いて広げ、ニコツと球磨川に笑いかける。

「7932兆1354億4152万3222個アップーナルの異常性と、4925兆9165億26  
 11万0643個マイナスの過負荷、合わせて1京2858兆0519億6763万3865個

のスキルを持つボクに勝てるかもしれないぜ?」

『……。お世辞で言っても勝てるとは思えないよ……。安心院副会長』

球磨川は再び安心院に背を向け、教室の外へ出ようとする。

『じゃあね。近いうちに……。また挑戦させてもらうからさ』

「ボクへの挑戦、楽しみにしてるよ……。球磨川生徒会長。けど……。君、ずっとここに残ってなくてもよかつたんじゃないかい?」

『ああ……。それね。どんな漫画のポジションのキャラでも、できるなら格好良く登場したいと思うでしょ?』

『君らしいね』と安心院は一言を返し、球磨川は再び蘇る。いつものように。

|||||

「はあ……。はあ……。つつ。百々の野郎……。あばら何本か言つたんじゃないやねえか? いてて  
て……………」

桜街は百々にぶつ飛ばされた後、彼はゆっくりと身を起こし腹を腕で抱えた。そんな彼が横を見ると。

「うわあ!! く、球磨川……。なのか? うぶえ……。!!」



彼の横には球磨川の真つ二つの死体があつた。見事に身体が割れ、絶対に普段目にすることはないモノが見えてしまっている。

桜街は口元を手で抑え、戻しかけたものを飲み込む。

「はあ、はあ……もうこの学校、普通じゃねえな、ほんと」

桜街はゆつくりと立ち上がり、両手を合わせて祈る。

「球磨川、安らかに眠れよ……ひでえ奴だったけど……後できちんと埋めてやるからな」  
 「ひどいなあ、僕を勝手に生き埋めにしようとするなんて。度が過ぎるいじめだよお」  
 「……え？ うわあツツ!!」

目を開くと、何もなかったかのように平然とその場に球磨川が立っていた。桜街は震える指で球磨川を指す。

「お、おまえおまえ……!! さっきまで、たしかに……!!??」

『うん、その反応見飽きちゃったからさ』

球磨川は桜街の胸に螺子を突き立て、その場で釘付けにする。

「うばあ……かはっ……!!」

『ごめんね、けど僕は悪くない』

球磨川は軽く身体を伸ばし、ふうー……と息を吐く。

『さて、正邪ちゃん達はあつちかな？ さあ、ショータイムだ』

|||||

「す、すげえ……あの危なっかしいスキルを持つ百々を……あつさりと……！」

——いや、百々以上に球磨川が危なっかしかったってだけか……。それにしてもなんだよ『すべてを無かったことにする』スキルって!! めちゃくちゃにも程がある!

「こんな奴を私に押し付けようとしたのか……あの女……!!」

『どうしたんだい正邪ちゃん。頭でも痛いのか?』

小声でつぶやく正邪を見て不思議そうに首を傾げる球磨川。

『良かったよ。二人とも無事で——』

球磨川の頬が手のひらで叩かれ、子気味のいい音が周りに響く。

「ひどいよ!! もう百々さんは戦う気なんてなかった! それなのにあなたは……!!」

『いやだなあ、針ちゃんは。あんなの口約束だよ。え? もしかして、本気で信じてたのお? バツカでえ〜!』

「あなた……!! ふざけるのもいい加減に……!!」

再び手を振り上げようとする針妙丸を、正邪は彼女の脇を腕で挟み羽交い絞めにする。

「落ち着け。あんたも学習しないな。アイツに手を出すと倍以上になって返ってくるっていうのがまだわからないのか？」

「おちつけ……!!? おかしいのは正邪の方だよ!! 人が死んだっていうのに、どうしてそんなに落ち着いていられるの!?!」

「どうせアイツも『大嘘憑き』で生き返れるんだ。殺されたってどうなるうが、どうせなかつたことになるんだ。少しはかんがえ——」

針妙丸は自分を抑えている正邪に頭突きをかまし、拘束から逃れる。正邪は鼻を手で抑えつけてその場でもだえる。

「痛ってえな!! 何しやがる泣き虫姫!」

「わかつてない……!! 正邪は何もわかつてない!! 何が『どうせなかつたことになる』よ!! 死んだときの痛みは絶対に無くならない!! 死ぬことがどれだけ辛くて苦しいのか、私達が一番よく知っているじゃない!!」

「ちつ……!!」

正邪は舌打ちをして針妙丸から顔を背ける。

「球磨川くまがわさん、あなたは百々さんの約束を破っただけじゃない! 無抵抗な人を容赦なく殺したのよ!?!」

『ふう〜ん……。で?』

激昂する針妙丸に対し、冷たすぎる態度で当たる球磨川。針妙丸は彼の態度にさらに怒りを爆発させる。

「あなたは……………！ 何も思わないの?! 罪悪感も……………何も!!」

『だって僕は人を殺してなんかいない。僕は悪くない』

球磨川は白目を向いて倒れている百々に指をさす。もう螺子も何も刺さっていない。それどころか与えられた傷も全て完治している。

しかし針妙丸の憤激は収まりがつかない。

「そうやって全部なかったことにして……………！ 罪の意識も何もなかったことにするんだ

……………!!」

『そもそもさく……………「罪悪感」って何?』

「……………えっ」

絶句する針妙丸の前に球磨川はニコニコと何時ものように笑っている。

『まあ確かに僕は無抵抗で何もできない彼にとどめを刺したし、彼との口約束も破ったよ。けど……………それが君に何か関係あるの?』

「……………百々さんは確かに非道なことをしたよ。それもたくさん。けどー」

『関係ないよね。君と百々君は。今の今まで何の接点もなかったよね』

「それは……そうだけど……！」

うろたえる針妙丸を目にして、正邪はなぜ彼女が百々に肩入れするのか。その理由を確信した。なぜなら……百々は針妙丸のあったかもしれない姿だからだ。

『君はただ、彼と自分の共通している部分しか見ていない。彼の自己満足のために大怪我をさせられた人達のことなんて、何も考えちゃいない』

「ち、違う！ 私……！！ どうどうくんにも……！ 理由が……」

『……理由があれば暴力は正当化されるのかい？』

「う……ツツ!!」

針妙丸も元々は『何でも願いのかなう秘宝』を操る力を持っていた。今まで近寄ってくる奴らは正邪を含め、ろくでもない奴らばかりだったのだ。

ただ正邪と全土の利用の仕方に違いがあっただけで、結局は針妙丸と百々は同じ。自身が持つ能力に翻弄され、他人に利用されてしまった者なのだ。

『そもそも、口約束や交渉なんかしたって結局はみんな、裏で破ってるものなのさ。約束なんて空しいだけ。相手が約束を破っていることなんて……わかってるのに笑って許して……誤魔化していく。そういうものだよ？ 針ちゃん』

針妙丸は何も言葉が出なかった。

——なんて……冷え切ってるの……？ この人は、世界をどこまでも醜く歪んだもの

にしか見れないのか。

『いや、現実だよ』

「!?!」

針妙丸の心の内を見透かすように、球磨川は針妙丸の薄紫色の瞳を黒く濁り切った眼で見つめる。

『賢い大人たちはルールって縛りの概念を決めつけて、最終的にはどんなルールだって全部、緊急措置って言って破っているんだ。口約束や交渉事だってルールの一つさ。みんなもそうしてるよね?』

『だから、僕は悪くない』『そもそも』『ルールなんて概念を決めつけた奴らが悪いのさ。』  
「……」

悲痛に歪み切った針妙丸の顔を正邪は見ながら思った。あきらめろ、と。

——お前がどんなにこいつの良心に訴えても意味はない。そういう奴だって……世の中にはごまんといえるんだ。

「球磨川さん」

針妙丸の小さな声に反応し、ピクツと正邪の体が震える。

——まだわからないのか、針妙丸。お前みたいな幸せ者ブラッスにこいつの心は絶対に理解できな

しかし針妙丸が口に出した言葉は、正邪も球磨川も予想がつかないものだった。

「じゃあ何であなたは自分の身をもっと大切にしないの……う？」

針妙丸が案じたのは百々だけではない。球磨川も、だったのだ。

『……ん？ 僕？』『だって「大嘘憑オルフイフシヨき」があれば僕の死もなかったことになるし——」

「私が一番怒ってるのは……『そこ』だよ……!!」

針妙丸の沈下したはずだった憤怒は消えてはいなかった。腕を震わせ、目元には涙まですで浮かんでいる。

「なんであなたは人の命をそこまで軽く見られるの!？」

『……』

「他人の命なんてもちろん！ 自分の命だって軽くて薄っぺらいものだって、あなたは思ってる!!」

球磨川の笑みがぴたりと止む。

「球磨川さん。さつき私の心を読んだよね……だったら私もやってあげる」

針妙丸は息をのみ、震える唇で言葉を紡いだ。

「あなたは何で人の人生をそこまで無価値に……無意味に見られるの……!?!」

静かな怒りを込め、針妙丸が言った言葉。球磨川はその言葉に対しても笑い一蹴――

「五月蠅い」

しなかった。

正邪は初めて露わにした球磨川の本来の『マインド負』に圧倒される。自然と身体が震え、鳥肌が立つ。

「か、はあ……っ!」

球磨川は針妙丸の心臓に螺子を突き立て、四肢を数本の螺子で穿ち地面にはりつける。



『ふうん、人に心を読まれるのってこんなにも腹が立つものなんだね。覚えておくよ』  
球磨川はいつものように……笑っていなかった。

「ツツ……!?!? くま……が、わ……!?!」

正邪は驚愕する。球磨川の顔が……確かに笑み以外の感情を示していたが……それはとてつもない『怒り』だったのだ。彼は穏やかそうな丸い目は剣のように鋭く、整った目尻は歪み、口を尖らせていた。

「くま、がわ……さん。あなたは……どう、して……」

『甘えよ。少名針妙丸。僕は君の……そういう所が一番嫌いだ』

針妙丸の腕が力なく地に落ち、首も垂れ下がる。

球磨川は慶賀野のいたところにくるりと向きを変える。

『慶賀野さんは……ありゃー気絶してるや。けど、手間が省けて助かるなあ』

球磨川は再び正邪の方へ向き直る。

『……さて、正邪ちゃん。お話をしよつか! 今度は……お邪魔なしで二人だけで、さ』

## 第22話 「私」と『僕』のそういう関係

針妙丸が……死んだ。球磨川に心臓を貫かれて。

『相変わらず動じないね、正邪ちゃんは。お友達がやられたっていうのに』

「何度も言わせるなよ。私以外はどうでもいいって」

『……そうだね。君のそういう所が変わってなくて良かったよ』

球磨川は今の正邪に安堵した素振りを見せるとニコツと微笑む。

『まったく』『針ちゃんも的外れなことを言うよねえ』

『過負荷ほくに行動の真意を問うなんて』

「まあ、そうだな。お前のやることを為すことの大体が無意味なことだもんな。台無しにして結局なかったことにしちゃうんだから」

『あはっ。やっぱり正邪ちゃんは分かっているね。さすが過負荷側こっの思考は違うよ』

正邪はクスツと笑いかける。突然の彼女の笑みに怪訝な顔を見せる球磨川。

「けど……そんなお前も結構、負けず嫌いなんじゃないか？ さっきお前が見せたのはそういう顔だったぜ。言われればなしじゃないってさ」

『……。いやだなあ、正邪ちゃん。マイナスがプラスに勝てるわけじゃないじゃないか』『悪

「冗談だよ全く。」

「冗談じゃないさ」

正邪の言葉に反応し球磨川の笑顔が……止む。

『……どういう意味だい？』

「お前にだつて本当は幸せ者に勝ちたいんじゃないのか？ さつきだつて不意打ちだろうとなんだろうとお前は勝ちたかつたんじやないのか？ どれだけ死んでもどれだけ過負荷マイナスだろうとな」

『あんなのを勝つたつて言わないよ、正邪ちゃん。降参した相手に追い打ちをかけるなんて、精神的に負けてるよ。だから僕はまた勝てなかつたんだ』

はっ！ と球磨川の一言を正邪は鼻で笑う。そんな彼女の姿はどこか満足気だ。

「勝利を選び好みか。贅沢だが……いいね。負けるとわかつていても最低マイナスなままで幸せ者に勝とうとする。そこんとこ、私は好きだよ」

『ええ!! うれしいなあ。「好き」だなんて。惚れちやうぜ？ それで……君は何が言いたいんだい？』

「黒神 めだか」

ピクツと球磨川の眉が動く。

——やはり。思つた通りだ。

「完全に最も近い人間。不完全……いや、不完全のあんたにピッタリの対戦相手じゃないか。もしくはさらに上、安心院なじみ。あんな化け物を倒そうって言うんだかー」

正邪の四肢が地面に螺子ではりつけにされ、身動きが取れなくなる。それでも正邪の邪悪な笑みは絶えない。痛みで口元が少し引きつってはいるが。

「どうしたよ？ 随分と動揺しているじゃないか？」

球磨川の顔は先ほどのように苛立ちで歪んでいる。明らかに動揺している。わかりやすいぐらいに。

『……めだかちゃんの話は驚かないよ。君が僕のことを調べようとすればすぐにわかることだ』

「へえ、やけに人間臭いなお前のその顔は。私があつた誰よりも人間臭いその表情、それも気に入ったぞ」

ニヤリと正邪はさらに笑みを濃くする。

「表向き誰よりも人間っぽく見えなくて、本当の部分は誰よりも人間臭い。球磨川 禊、お前はなんて矛盾してて……なんて反逆的なやつなんだ」

『それよりもさ、「安心院さん」のことをなんで知っているんだい？』『君は……彼女の「端末」なのかい？』

「さあなく？ それよりも、それよりもさ……球磨川 禊。私と一つ取引をしないか？」  
『……言っておくけど、僕は守る気なんてさらさら』

「私が差し出すのは情報だ。私についての、な。だから私を生かさなきや絶対に情報は手に入らない。それは私以外には知りえないからだ」

自分のことは自分がよくわかっている。その言葉を的外れというものもいるが、それは自分の全ては自分だけではわからないということでもある。自らの体験、経験、得た感情。知識、好み。それらは全て自分にしかわからないだろう。

球磨川はさらに苛立ちを深め、螺子ねじを片手に持つ。下手をすればさらなる苦痛を正邪は味わうだろう。

『聞こえなかったのかい？ 君の取引とやらの内容を守る気も聞く気も、僕は一切ないよ？』

「そっかー残念だなく。お前が得られる私の情報の中には当然……私の能力スキルについても入っているのになあ」

球磨川は正邪の顔に突き刺さうとした螺子を引つ込め、興味深げに彼女を見つめる。

『へえ、確かに……それについては興味があるよ、うん。……君がろくでもないこと考えてるっていうのは分かるけど』『いいよ、正邪ちゃん』『ここはあえて』『僕は君の口車に乗ってあげる』

「そうか、やけにあっさり話を呑むんだな」

『うん。安心してよ正邪ちゃん。僕はエリートは大っ嫌いだけど……弱い者と愚か者には優しいから』

「ははっ。私はどっちなんだろうな？　ま、どっちもだろうけど。いや、どちらかと言えば『愚か者』寄りか」

手足が螺子に貫かれる激痛を感じながらも、正邪はニタニタと球磨川を見て笑っている。

『で、僕のメリツトは正邪ちゃんの好みの下着情報と全裸写真でいいとして』

「おい待て。私の個人情報ともかく、純潔をやるなんて言った覚えはないぞ？」

『……っっていうのは冗談でえー』

先程と変わらず笑う正邪から今までにないぐらいの殺気が飛んでくる。

螺子で彼女を磔はりつけにしているとはいえ、さすがの球磨川も身の危険を感じたようだ。彼は

誤魔化すように咳ばらいをする。意外と男女関係に関しては彼は純粋ピュアなのだ。……「ちえっ」とつぶやく声は聞こえるが。

『君が僕にお願いしたいことって……何だい？』

「さすが球磨川。よくわかってるじゃないか。『取引』には交換条件が憑き物だ」

正邪は一呼吸置いた後、覚悟を決めて口を開く。

「お前の能力所有者探し。それ、私にも協力させろ。これが私がお前に求める利点だ」

どや、と自信に満ちた顔で正邪は球磨川の返答を待つ。

『……は』

「……ん？」

球磨川の肩がプルプルと震え、口が開かれる。

『ハハッ……はっはっはっはっはっ!!』

「!？」

しかし彼の口から出たのは怒声でも罵声でもなく……大きな笑い声だった。

——球磨川が……爆笑した……。微笑んではあっても、こんなに声を出して笑うことなんて……

そう、一度もなかった。突然笑い出した球磨川に困惑の表情を見せる正邪。

腹を抱えるくらい笑った球磨川は『ははっ、は……はあくあ』と落ち着きを取り戻していく。球磨川は目元に浮かんだ涙を拭き、再び正邪に向き直る。

『……いいよ』『ちょうど仲間がほしかったんだ』

「ほ、本当か!? ……いや、お前の場合信用できないな」

『安心して。僕は君の味方だ』『歓迎するよ。正邪ちゃん、過負荷へようこそ。こつちの水は甘依存よ?』

球磨川は心底嬉しそうに片手を出し、正邪は迷いなくその手をとり握手をする。

——ブワツ!!

「!? また泣き出した!」

『……ごめん。僕、前にいた学校でも握手なんてしてもらったことなく。みんなすぐ手を引つ込めちゃうんだよ! ほんと失礼だよね!』

「あ、ああ。そうだな相手がお前とはいえ、さすがに失礼だよな」

——まあ理由は分からないでもないが。

正邪には球磨川の普通の手が……毒蛇が周りに巻き付き、手の平にはびつしり禍々しい色の猛毒がついた呪いの腕に見えた。一度相手に触れて絡みついたら決して離れず、触れた者を内側から呪い腐らせていく。そんな腕に。

『……けど。そこに転がつてる針ちゃんは生き返らせないよ? それでもいいかい?』

「どうぞご勝手に。そいつはいつも私のために、自分から進んで犠牲になってくれる大切な仲間だ。私のために死んだとなりやあ、こいつも本望だろうよ」



——よし、まだ手は届くな。

正邪は悪女を思わせるような手つきで動かなくなつた針妙丸の頭を優しくなでた後は『じゃあな、おバカなお姫さん』と正邪は亡き針妙丸を冷たく見放していく。

『……』

球磨川は顔を下げ、正邪から彼の表情が見えなくなる。

——さすがに怒つたか？

『正邪ちゃん……!! 僕は今、猛烈に感動しているよ……!!』

「え？」

球磨川は引き気味の正邪に詰め寄る。熱意を伝えるためなのか、両手で彼女の手をがっしりと掴む。

『死した仲間の行動を無駄にしないなんて……!! 君にも仲間想いな所があつたんだね

!! 素晴らしいよ! 君は少年ジャンプの体現者だ!』

「へ? あ、うん?」

——よくわからんけど感動された。お前だからいいけど……そろそろ手、放してくれねえかな……?」

正邪は苦笑して球磨川の気持ち悪さに目をつぶる。もし両手で彼女の手を掴んできたのが球磨川でなかつたら、正邪は遠慮なく履いているサンダルで頭に天空かかと落と

しを決めていただろう。

『もう不満はないよ！ 君は僕のパートナーだ！ これで晴れて君も過負荷ほくの仲間入りだね！』

感極まったのかブンブンと腕を振って握手をする。

——こいつ、いつも以上にテンション高くねえか……？

「仲間じゃねえよ。……共犯者だ。お前とは利用し合う関係でちようどいいんだよ」  
『いいよ、それでも。君が僕を手伝ってくれる限り』『君は僕の共犯者だ』

正邪は針妙丸の遺体に指をさす。

「私がこの学園に溶け込むにはこいつらの存在が非常に役に立つ。だからもうしばらくこいつらを活かしてもいいか？」

『うーん……いいよ。僕は嫌だけど』『君がそこまで言うならしょうがないなあ』

球磨川が手を針妙丸に向かってかざすと、針妙丸に突き刺さっていた螺子ねじが消え、傷も跡形もなく無くなっていった。

『うん。これで大丈夫なはずだよ。たつぷりと、いつものように彼らを利用してね』  
「嫌味はいらんおまけだが、ありがとうな。……私もたつぷりと恩を返すよ」

正邪は倒れた針妙丸を抱え、その場から立ち去ろうとする。

「たつぷりと仇で、恩を返すよ」

『…………え？ あれ？ 正邪ちゃん、君がどうして動いて…………？ ん？』

球磨川が気づいた時にはもう…………先程まで正邪を打ち付けていた螺子が、球磨川の手足を貫いていた。

リバースイデオロギー  
「革命返し」

「私とお前の立場を」「ひっくり返した」

手足に螺子が刺さり絶体絶命の正邪、余裕で佇み自由に動く圧倒的な球磨川。この二人の立場を逆転させ、自由に動け余裕で有利な正邪、四肢を封じられ敗北同然の球磨川へとひっくり返したのだ。

「すべてをひっくり返す」「熱いお茶を冷たくするぐらいしか使い道がない、私の過負荷<sup>マイナス</sup>だ」

リバースイデオロギー  
「…………革命、返し」

球磨川は手足から血を流しながら正邪に言葉を返す。

「約束通り、教えたぜ。じゃあな球磨川。また明日」

『…………正邪ちゃん』

球磨川との距離を離しているというのに彼の声が耳元に響く。

——距離をなかつたことにしたのか。

「安心しろよ。おまえが裏切らない限り、私はお前を裏切らないよ。利用できるまで利

用するリサイクル。私は環境にも優しいんだ」

『僕は何度でも言うよ』

球磨川の言葉に引つ張られるように正邪の足が止まる。

『君にプラスは似合わない』

「……」

『彼らとずっと付き合つてちゃ』『君もプラスになっちゃうよ』

——そうだな。私もここに来てからずっと悩んでいたことだよ。

『僕だったら死んでもゴメンだね』

『おいおい、ジャンプの三大原則は『努力、友情、勝利』じゃなかったのか？ こいつら

とつるんでて私に悪いことはねえだろ。どうせ勝ったら捨てるんだし』

『うん。けど現実リアルと漫フィクション画は違う。「無駄な努力、ぬるい友情、空しい勝利」、これが現実

だよ』

「かかつ、なるほどな。仙人みてえに悟り開いてんな、お前」

——現実……か。確かに、お前の言ってることは極端に言えば正しい……いや、事実

なんだろう。まあ努力は無駄とか、友情がぬるいつてのは否定しないよ。

「球磨川、聞こえてんなら耳かっほじつてよく聞け」

『……この状態じゃ耳も搔けないけどね。なに？』

「勝利は空しくねえ」

正邪は再び前に向かって進む。針妙丸を背負って。

「卑怯者だろうが何だろうが最終的には笑ったもんが勝ちなんだ。私は勝ちが欲しい」  
正邪の履いているサンダルが芝生に当たり、静かに音が響く。

「だから私はお前やこいつらをとことんまで利用する。雑巾を絞り切るように使いきって使いきって、気に入らねえ全土<sup>エリア</sup>どもに勝つ」

『……』

「私とお前は共犯者だ。お互いに利用し合おうじゃないか。私もお前を邪魔とわかったらすぐに捨ててやるから、それだけは覚えとけ」

口を開かず黙っていた球磨川は……正邪からは見えないが、笑っている。そんな気がした。

『油断しないでね、正邪ちゃん。いつかきみの寝首を』『かくかもしれないぜ』  
「それでいい。お前と私はそういう関係なんだから」

正邪もふつと笑い、後ろを振り返らない。

『じゃあね、正邪ちゃん。絶対に幸<sup>フ</sup>せ者にな<sup>ラ</sup>つちやあダメだよ?』

「……まあ無駄な努力、してみるさ」

## 第23話 『理由? 別がないけど?』

「——く、球磨川くまがわさん! 球磨川さん! しっかりしてください!」

『あれ? 君は……確か……』

茶髪の三つ編みに眼鏡。球磨川の前には先程まで気絶していた慶賀野けがのが彼の手足に刺さった螺子ねじを抜こうとしていた。

「うくん……っ……! 抜けない……ツツ!! どれだけ深く刺さってるんですか……!!」

『思い出した。功名こうみやうさん、だったね。どうしたのかな?』

「どうしたって……!! 球磨川さん、また正邪せいじゃちゃんとかんかしましたね……!? じゃなきやこんな状態で放置されるわけじゃないです……!!」

『単なるスキンシップさ。大したことじゃないよ』

「大ありですよ……!! こんな痛々しい状態で放置されるわけもないです!!」

慶賀野は顔が赤くなるくらい力を入れるも地面に刺さった螺子は抜けず。

「んっつ！ あっ！！ いっつっ……！！」

ついに悲鳴をあげて尻もちをつき転んでしまう。

『……いいよ。そんなに必死にならなくても』

「わっ！ 螺子が……」

慶賀野が立ち上がろうとすると、球磨川は手足に打ち付けられていた螺子を消してみせる。

「とにかく早く手当しないと……！ とりあえず人首先生のところへ……」

『あ、ごめん。僕帰ってジャンプの続き読みたいから』

球磨川が再び螺子を取り出し、慶賀野に向かつて走り出す。

慶賀野は両手で肩を抑え、せめて痛くないようにと祈る。

「ひいっ!!」

攻撃してくるかと思いきや、慶賀野の横を素通りする球磨川。予想外の行動に慶賀野はあっけにとられてしまう。

「え……」

「ぐあああっ!!!」

時間差で見知らぬ男の絶叫が響く。慶賀野が振り返った先に忍び装束の男が地べた



に磔はりつけになっていた。

「こ、この人は……」

『うん、この影の薄さ。副会長っぽいね』

「ぐっ……!! 間違つてはいないが判断のされ方に納得がいかなぬ……!!」

忍者っぽい副会長は歯ぎしりをしながら顔を上げる。

「だが、いかにも!! 拙者せっしゃこそ生徒会副会長、おいが」

『えいつ』

「きやあああつ!!」

自己紹介の最中でも容赦なく球磨川は副会長の頭に螺子を叩き込む。血しぶきがあがり、副会長は言葉を残すことなく絶命した。

慶賀野は球磨川のとんでもない行いに悲鳴をあげてしまう。どうしてこうも躊躇なく非人道的なことをやれるのか。

「ど、どうして……。まだ名乗っている途中だったのに」

『いやあ隙だらけだったからさ。つい、ね』

はっはっはっ、と笑う球磨川に慶賀野は引き気味に尋ねた。

「球磨川さん……あなたがエリートを憎む理由ってなんですか……!?!」

『ん?』

慶賀野は死体となった副会長をちらりと見る。

「理由が……あるんですよね……？　こんな容赦なく人を殺せるなんて……絶対『普通』じゃないです……!!」

『……。そうか、わかってしまったんだね。僕がエリートをどうしようもなく憎んでるって』

『やっぱり』と慶賀野は息をのむ。なにが彼を人殺しにまで駆り立てるのか。彼女はその理由が知りたかった。

『わかった。君はどうしても知りたいんだね』『今こそ告白する時だ。君にだけは話しておこうと思ったんだ』

『……それはね』

「それは……」

球磨川は真剣な顔つきでじつと慶賀野を見る。

『趣味』

「……。えっ……!?!」

予想もつかない球磨川のぶつ飛んだ答えに啞然とする慶賀野。

——今、なんと言ったのか……? 趣味、シユミ……しゅみ……!?

『いやいやいや、冗談だよ。功名さん。あ、そうだ!』

球磨川は『思いついた』と言いたげにポンと手のひらを叩く。

『親友をエリートに殺されたから……いや、生き別れの妹を目の前で凌辱された上に、両親までエリートに殺されたからってのもいいね、ドラマチックだ』

「……!?!」

『ちよつと待つてね、功名さん』『今日中に考えてメールするからさ』

慶賀野は気づいてしまった。この球磨川という男が他人<sup>エリート</sup>を傷つけるのに……

『あ、あとでメールアドレス教えてよ! ついでに電話番号も!』

理由なんてないことを。

「理由なんて……ないんですね」

『……。ま、強いて言うなら……僕はわかってほしいだけなのかもね』『幸せでプラスなみんなに』『汚くて卑怯なマイナスの気持ちってやつをさ』

「……」

『じゃあ僕はもう帰るね!』『ジャンプが僕の帰りを待つてるからさ』

球磨川は転がった副会長を捨て置き、寮に帰ろうとする直前――

『……ああそうだ。さつき君は僕のことを「普通じゃない」って言ってたけどさ』

「ツツ!!」

慶賀野の肩を触れ、耳元でささやく。

『君も……「普通」じゃないんでしょ?』

|||||

教室棟屋上、理事長室にて。

「全土様……百々と老神おいがみ副会長が……やられました」

「ほう。そうか二人も……思ったよりもあつさりだな」

全土は黒椅子に腰かけ、報告に来た神井かのい生徒会長を見やる。

「私が自ら出ていった方がいいのかな?」

「い、いいえ全土様!! あなたが出るまでもありません!!」

神井は赤髪から伝わる汗をぬぐい、口を開く。

「ご安心ください! 我々生徒会が、全勢力をもつて! 必ずやあの反乱分子を潰してみせます!!」

「……。では、引き続き私は学校経営に勤しむとしよう。無能な親父の尻ぬぐいもしなければならぬのでな」

「はっ! 失礼しました!」

神井は敬礼をするとともにゆっくりと音をたてないようにドアを閉める。

静かになった理事長室で全土は机の中にしまっていた一枚の書類を出す。そこには『新生徒会を作ること宣言する』と書かれてあった。

「ふっ、ハハハッ! なるほど、あの鬼人正邪という女。この全土にこんな挑戦状を送り付けてくるとはな」

全土は高笑いをあげて書類を机の上にたたきつける。

「すべてをなかつたことにする『大嘘憑オールフィクションき』、すべてをひっくり返す『革命返リバーサイドオロギーし』。ふふ

ふ、相手としてはなかなか悪くない。面白いではないか」

「老神の報告書は非常に参考になった。届けてくれたお前にも礼を言わねばな。百々は……いい囿ウチになってくれたよ」

全土は笑うのを止め、はあ……とため息をつく。

「全く……くだらん。マイナスもプラスもスキルホルダーも……この私からすれば、た

だの地面ゼロだというのにな」

『普通』と変わらぬよ。と吐き捨てる全土。そして誰もいないはずの後ろを見つめ小声でつぶやく。

「お前もそうは思わないか？ ——よ」

## 2章 あとがき

あつという間に2章終わっちゃいましたね……作者のゼロんです。

今回は更新が遅くなってしまい申し訳ございません。

さてさて！ 次回からは生徒会と全面戦争！

盛り上がってまいりました！

お気に入り数もいつの間にかすさまじいことになっていきますね……

300人以上って……

感謝しかない。

感想でも『正邪ちゃんがかっこよかった』というコメントがありました！

ありがとうございます!! よかったね！

皆さんの心を打ったんですね……。

『勝ちたい』って勝負事では絶対について回りますしね。

これからも天邪鬼な彼女をよろしく願います！

ちよいちよい日間ランキングにも載っていますね。

これも読者の皆さんの応援のおかげです。ありがとうございます！

スマホでスクリーンショットを撮るぐらい嬉しいです。今でも写真はとってあります。

最近はグッドルーザーズ以外にもいろんな種類の二次創作を執筆中です。

ダンガンロンパやモンハンも現在書いております。

興味があつたら見てほしいななんて。

ついでに感想も……（殴

すみません。調子に乗りました。けどもらえると本当にうれしいです。

毎回グッドルーザーズのほうに感想を送ってくださる方には本当に感謝しています。

正直感想が楽しみで書いている部分もあるので……

長くなりましたが、読者の皆様!!

いつも読んでくださってありがとうございます!

次章『革命の生徒会編』お楽しみに!!

いたまえ 河影 御月 oku | y a g i

ふあもにか 鉛鉄砲 王者スライム k7RU

リヨウ23 水面水面水面下 さか☆ゆう ゴージ



葉笛

だっ

はむのすけ

皆様評価ありがとうございます！

公開お気に入り登録者：281人

yusu 火鷹 パレット 屋風魔鉈 阿呆西 積み木の城 KuroSaki  
 スプライト茶漬け Risin93 クマー ふあもにか クナイ WizAs  
 ura イベリコ豚 もくりん kbc 眠猫 園崎礼瑠 魁P monokemo  
 no マタイ Tankman ぐーや おかひじき とまと21 うぐいす ちよ  
 もーい 招き猫 負確定 ジュン1 倫太郎 天神小 逸楽主義者 白結雪羽 いた  
 まえ タケヤマダヒトシ びちやーじ りんりん atusyou はいんちゃん  
 島夢 komika ベルク@チヨモランマ 池ボチャ Jupiter aaaa  
 aa@aaa 歪曲の魔眼 I.i.i 永遠の彼方 Nxy 昏睡ハンター 郷汐  
 @乱雨スペラ あんこ入りチョコ 茶獏 edamameyo RPG大好き ko  
 ndotai 米粒 あめふり 田中陵 ワラキー しやろ りよー様 れーさん  
 青黄赤 かつか 麦蕎那支 appleppp あずんずん ビギナー ミトコン

ドリア大王 狂飯 さぼりやん 幸福 Akila 騎士豚 飽きっぽいニート志望  
 マチマチ ★黒星★ 悠々P@Are We Cool Yet? 後ろ向き前進  
 ウイスタリア 桐生幸 燐鳴神永 たくやんか 筵 水月 総矢倉 のっちゃり  
 りな Nyarlath 御月 端之目 葉下 ポピイ ストレコザ 明延 めめめ  
 んっ ひつじんマーク キヤミぽ tired 地蟲 因幡さん ・ナニカ bixen  
 no いずくん 妄想癖 雷神デス ryon nirvana もじやメガネ  
 やろうと思わない男 死にたがりの獣 cat | 1006 柎襖 豆腐頭 デイアー  
 チェ shibahiro Steamed へんちめん カモシカ fredy  
 ふつくら饅頭 チトニア コク騎士 えれえもん 氷結傀儡 天枷 鎖月 アオタロ  
 ス ほむら1210 ゆう♪ 槭樹 草花内木蔭 なまけ鳥 マスク1856 ka  
 men 夏奈 fw 190 くらんて リヨウ23 壺式 nyd 厨二病青年  
 モブ5090 カラジュン 消火しますか? 闇龍輝 冥想塵製 黒猫@love  
 満塁男 しぐころ 黒の鴉・白の蛇 其のホチキスの針は指穿つ 牡蛎野郎 烏賀陽  
 潮 軍師アイラ sophist tksr0701 風呂屋 けりい ソツタ 韻  
 雅鷹? pail 不可逆の剣 イシカ なかに17 出無 博夜靈貴 がらがら  
 ニルヴァ 六神 カズ@カフカ ショゴス井 白寝巻 雷風 TESSSET キヤ  
 ロット 新人アルバイター 村ショウ みまむよ ささかまぼこ 白瀬湊 ショボン

(・ω・) ドンド・コドーン?!? とりです。 モルさん みつつー 死者喪 怠  
 惰な真祖 河影 御月 つくも センリ 悪趣味なバンダナ はるぼん コーラの化  
 身 水面水面水面下 情報生の劣等生 鉛鉄砲 最後のサイコロ 晩鐘 七夜遠野  
 きのこ派 かるて&カルト 御納忠 御飯のトモ わんりき 晴輝 芹沢 章一  
 り かがかり 鶴兎紙 クロイト はらぺによぺんぼす TOMORE キドアキ いの  
 りよう エヌユル たこガム 安正 ライドウ 聖杯の魔女 蒼哉 大七星 Dクラ  
 ス職員 笹谷 爽 東愛創者 ヒガンバナ ひろポン酢 ZENOS 浮浪人ツール  
 さか☆ゆう ざわサンダー yuma2017 本の精 影行 王者スライム t  
 akatani 柄水 書記長は同志 天谷悠斗 だっ JohnDoeDX やち  
 も アリストテレス シヴァドツグ 東花志津 狛猫 嗚呼唾々 天都輝常 《天津  
 ノ照明神》 いくとみ 病愛卿 S&K リント 白魔道士 きりゆたんぼ れいん  
 ふおくる 味音シヨク Kit@怠い ミン k7RU 劣化人間 ざつきー。 バ  
 イルシユタインテス ト 貧弱 黒石晶 沖田不二乃 index1221 さすらい  
 のエージェント ミュルグ レストレーション ノーススター@ボーダー ていおん  
 meltlove KK ばふまる 風緑 トビウオ一号 yellow200  
 0 もちうどん 野良猫集落 メリールウ 村人J  
 お気に入りがとうございました！

### 第3章 革命の生徒会編

#### 第24話 似た者同士のベツドトーク

革命学園生徒会『庶務』、百々千太郎どうどうせんたろうとの戦いから一日。ようやく目覚めた針妙丸しんみょうまるに

正邪せいじやは事の顛末を全て話した。

「球磨川くまがわくんと手を組んだあ!?!」

「うん」

驚愕を露わにして正邪に迫る針妙丸。怯むこともなく正邪は無表情だ。

「なんで!?!」

「なんでも」

「あんなに警告したのに!?!」

「知ったこつちやない」

『あゝもおツツ〜!!』と薄紫の髪を掻きまわし、悶える針妙丸。

そんな彼女を無視して正邪はコンビニで買ったジャンプを広げる。

——幻想郷にいた時はあのガラクタ屋に置いてあった古本しか読んでなかった

な。

「意外と面白いのやってるじゃねえか。『○魂』はもう終わるけどよ。まだ『僕の○ーアカデミア』とかはやってんだろ?」

「ちよつと! なに漫画雑誌、読んでんのよ! こっち向け!」

針妙丸は正邪の顔からジャンプをどけ、にらみつける。

正邪はため息をつき、つまらなそうに針妙丸を見つめる。

「なんだよ。今『ネガ倉くん』いいところなのに」

「あんな血も涙もない球磨川くんと手を組むなんてどうかしてるって言うてるの!!」

針妙丸の怒号にジャンプから手を離し、正邪は両手で耳を塞ぐ。

「本当に人間かも怪しい奴なのに……」

「私達だつて人間じゃねえって忘れてねえか、姫様」

正邪はちよんちよんと自分の角を指でつつく。

「それによ、球磨川にだつて感情はあるんだぜ」

「けどあんな……。ぶつ飛んだ奴の感情なんて——」

「それだよ」

「えつ……?」

正邪は唾然とする針妙丸に指をさす。彼女に指をさしている正邪の表情は真剣その

ものだ。

「そうやってお前が球磨川を不快だと思ひ込んでいるうちは、真の意味で球磨川には勝てない」

「そ、そんなこと……」

「断言してやる。今のお前じゃ百年かけてもアイツを止めることなんてできやしない」

正邪はクルリとジャンプを拾い、再び読み始める。

「まあ、お前にガッツがあることだけは認めてやるよ。悔しいけどな」

「……どうすればいいの」

——素直に聞こうとする分、ほんといじり甲斐あるな。こいつ。

正邪はケケケと笑いながら針妙丸の方をチラ見する。

「<sup>マイナス</sup>負を受け入れろ」

正邪は口を開きながら『ネガ倉くん』を読み進めていく。

「きつたねえ部分も綺麗な部分も。紛れもない『自分』なんだって。そうすりゃ何か見えってくるじゃねえか？」

「汚い……部分……?」

——ま、ご本人様はまだ気づいちゃいないが。

『知りたいか？ 教えてなんてやーらない』と正邪はクッションを下にして横になる。針妙丸に背を向ける形だ。

「……。私、百々君のところに行ってくる」

「おお。帰ったら夕飯よろしく」

「今日は正邪が当番でしょ!!」

「ちっ」

針妙丸が扉から歩き去った後、正邪はお茶をコップに入れ再び横になる。

『いつも通り、仲良さそうだね』

「やめろ。マジで反吐が出る」

正邪は声のした方向に身体を向ける。球磨川はいて当然かのようにその場に立っていた。

「それとお前、窓から入ってくるのはやめろ。不気味すぎる」

『ははは、いやちよつと正邪ちゃんの部屋に興味があつてさ』

「頼むからドアから入れ」

球磨川はキョロキョロと正邪達の部屋を見回す。

『へえ……でもちよつと汚いな。ダメだよ。女の子なんだからもつと部屋は清潔にしな

いと』

球磨川は部屋の端にあるゴミをちりとりで集め、ゴミ箱へ捨てる。

「で、今日のお前はハウスクリーニングに来ただけか？ それだけなら早く帰れよ」

『いや、掃除以外にも確認したいことがあつてさ』

球磨川はいつになく真剣な表情で正邪の方へ向き直る。

『君のスキルのことについてなんだけどさ……』

ピクツと正邪は目尻をあげる。

「ほう、私の何でもひっくり返す能力。『リバーサイドテオロギー革命返し』に興味があるのか？ ……言つとく

が貞操概念をひっくり返せつて言つたつてやらないからな？ いくら私でも痴女ばか

りの世界とか自殺するぞ」

『そう言われるとやつてつて……言いたくならないな。僕も嫌だしそんな世界』

『裸エプロンは恥じらいがあるからいいんだ』と変態染みた発言をして球磨川は目を閉

じる。

『そんなんじゃないさ。君のスキルはそんな下品なことに使うもんじゃない。君の

『リバーサイドテオロギー革命返し』は素晴らしい過負荷だ』

いつものようにそらそらしい口調で球磨川は正邪に語りかける。



『全てをひっくり返せるってことは……君は女子のスカートをひっくり返せるってことだろう……?』

『つてことは、女子のパンツが見放題じゃないか!!』

この後、右頬を真つ赤に腫らした球磨川が泣く泣く正邪の部屋を出ていく姿が目撃されたという。

|||||

「……。」

「あく……ダメ。精神的な方の傷はどうしようもないや」

保険棟のベッドから起き上がった百々どうどうを看護する人首ひとかべだが、様子は芳しくない。

「だからわたし嫌なのに……こんなところの担当医なんて……」

目が虚ろになってしまっている百々に呆れ、人首は目をそらす。

「因果応報つてやつなのかな……。百々が今まで散々他の生徒を精神的にもぶつ壊してきたツケが回ってきた、か……」

『もう聞こえてもいないだろう』と人首は独り言をつぶやく。

その直後、針妙丸が扉を開けて診察室に入ってくる。今の針妙丸は物憂げで元気がない様子だ。

「……失礼します。ツナギさん」

「あ、うん……あんまり元気がないね、少名さん。バナナ……いる？」

「いいえ。結構です」

バナナを差し出してくる人首に針妙丸は断りをいれ、人首は『あつそ』と言って片手に持ったバナナの皮をむき、食す。

「なんかあつたの……？ またコスプレちゃんとケンカした……？」

口に入ったバナナをモゴモゴと口に入れながら話す人首。

——コスプレちゃん……？ 正邪のことだろうか？

人首ののんびりとした口調について苦笑してしまう針妙丸。

「話なら付き合うよ……？ ちょうど精神面での看護もしたいなあって思ってたしね……。こいつの容態は私にはハイレベルすぎてさ」

そう言つて人首は放心状態の百々に親指をさす。

「いいんですか？」

「精神ケアはまず初級レベルから……。これも仕事だから」

少しためらったものの針妙丸は人首の気遣いに甘え、素直に話し始める。

「実は……正邪ちゃんと彼女にできた友達のこと口論になっちゃって」

「ほほ……青春だねえ。それで？」

「彼女の友達と私はどうしてもソリが合わなくて……。私個人の感情の問題なのかもしれないけど……その友達、すっごい性格が悪くて……」

「正邪ちゃんも十分性格悪いところあると思うけどねえ……。誰なの？ 彼女の新しい友達って」

「球磨川くんのことなんですけど……」

「ぶっっ!!」

人首は椅子から床へ転がり落ちる。

「うあが、あがが……」

どうやらバナナをのどに詰まらせたようだ。しばらく悶えた後、針妙丸が人首の背をさすり、彼女はゆっくりと立ち上がる。

「……ふう、ありがと。そりゃ少名さんが悩むわけだ……解決の難易度が初級じゃなくて最上級レベルだね……」

「でしよっ？」

「で、正邪ちゃんはなんて言ってたの……？」

針妙丸は少し時間を置いた後、冴えない顔でつぶやいた。

「負を受け入れろって……けど、どういうことだか……私にはまったくわからなくて」<sup>マイナス</sup>

『ふむ』と人首は考えるそぶりを見せた後、針妙丸にも柔らかくに語りかける。

「たぶんさ……。少名さんの悪い面のことを言ってるんじゃないかな……？」

「悪い……？」

「そう、誰にだつていい面と悪い面があるでしょ？ 例えば、わたしみたいに怠け者など

ゝころとか……」

『自覚……あつたんですね』と針妙丸は苦笑している。

『まあね……』と新しいバナナを取り出して皮をむき、口の中へ運んでいく。

「たぶんね。少名さんの心のどつかで抑え込んでる部分があるんじゃないかな？」

「な、なんでそう思うんですか……？」

「だつて少名さん、いい子過ぎるもん」

虚を突かれ、動揺する針妙丸。開いた口が塞がらない。

「え、だ、ダメなんですか……？」

「いんやあ。ダメじゃないよ。けど、いい薬でも過剰摂取は毒だなんて思っただけ」

『人間、素が楽だよ』と言いつつ終えた後、人首は椅子に座りなおし、たまった書類を片付け始める。

「わたしも数回彼に会ったからわかるけどさ、球磨川くんは人の弱みにすぐく敏感なの

「さ」

「人の……よわみ？」

「そう。人の負感情、ストレスとか。無意識の内にある負の側面にあの子はすごく鋭い」  
人首は近くにあったゴミ箱にバナナの皮を放り投げ、針妙丸の方へ向き直る。

「自分を理解してあげること。『嫌な部分を見つけて受け入れてあげること。それが他人のマイナスにも向き合えることにもなる』。そう言いたかったんじゃないかな？ 正

邪ちゃんは」

「……」

『まあ、そんなすぐに見つかるもんじゃないさ』とクスクス笑い、人首は針妙丸の頭をなでる。くすぐったそうだ。

「他人の負マイナスと向き合うねえ……はっ！ 笑わせるでありますなあ。ツナギ」

「!!」

針妙丸が診察室のベッドの方を振り返る。百々が醜悪な笑みを浮かべ、針妙丸の方を見ている。

「ど、百々さん」

「やれやれ、やっとお目覚めね……よく寝れた？」

「ぐつすと。おかげで解任通知の現実を何度も夢で突きつけられたでありますよ」  
『神井会長、切り捨てんの早いねえ……』と人首は明後日の方向を見ながらぼやく。  
「言っておくでありますよ、少名針妙丸。……誰にも他人の負の面なんて受け入れられはしない」

百々は重みの乗った言葉の口から吐き出していく。

「見られたくない趣味性癖、歪んだ性根。他人の汚い部分を好き好んで『いいんだよ、よしよし』なんて。そんなの受け入れられる人間なんかいない」

『いるとしてもこの世に球磨川ぐらいであります』と付け加え、百々はベッドの横にあつた愛用の木刀を手取る。

——!!

「さあて。ここで貴様だけでも腹いせにポコポコにしてやるでありますかっ」と

「百々さん、もうあなたの能力は」

「わかつているでありますよ? ……だがなめるな。能力がなくても貴様の四肢の骨を粉々にすることぐらいはできる」

百々はその場で数回素振りをし体の調子を確認。しかし額に青筋を浮かばせ、もう彼は冷静ではなくなっている。

「そんなことをしても、全土達はあなたを……」

「うっせえなてめえ……。言ったでありましょ？ は・ら・い・せだつて、なあツツ!!」  
針妙丸が輝針剣を取り出すよりも早く、百々の木刀が無防備な針妙丸の頭蓋に襲い掛かる。

「女にてえあげるなゴラア!!」

「——ツツ!!」

百々が木刀を振り下ろす直前、見慣れた改造制服の少年が百々の頭に蹴りをいれる。蹴られた衝撃で百々はベッドの手すりにぶつかると、頭をさすつて彼を蹴った男、桜街をにらむ。

「こ、コウジ君!」

「おう、少名さん! 無事で何より……。いででえ!!」

「安静にしてろつて……。言った」

陽気に手を振る桜街の頬を人首が引つ張る。人首は少し苛ついているようで、頬を風船のように膨らませている。

「お前も。病室でケガ人を出すな。仕事が増える……」

「あがつあがつが!!」

忘れずに人首は百々にも制裁（ほっぺつねり）を加える。

桜街は人首に罰されるのを不可解だと抗議する。

「いででで!! なんてあんた、少名さんを庇わなかったんだよお!? わざわざ療養中の俺が蹴りを入れるまでもなかったろうが!」

「バカ……。わたしが怪我して重傷負ったら誰が少名さんの怪我とあんたらの怪我を治すの……? 言つとくけど自分の怪我は直せないからね。わたしのスキル」

「あ、そつ……ででで!!」

人首はさらに力を込めて桜街の頬をつねる。彼の歯茎が見えるくらい引つ張っているため、すぐく痛そうだ。

——人首さん、自分に能力は使えないんだ……。

「百々さん……。少し、話したいことがあるの」

人首の頬つねりを振りほどき、百々は針妙丸をにらみつける。

「ああ? 話したいことお? 貴様と話したいことなんて砂粒の一つもないであります」

「私もあなたと同じような嫌な能力を持っているの」

ピタリと百々は動きを止め、針妙丸の話を黙って聞く。

「『なんでも願いが叶う秘宝を操る』能力。正確には打ち出の小槌って言うんだけど」

「……それがどうした? 字面だけ聞けば、不便しなような能力でありますか?」

「……ちがうの」



『何がだ』と百々は眉間にしわをよせる。

「色んな人が私の元に来た。幸せになりたい人、憎い人を呪いたい人、世界を支配したい人、不老不死を手に入れたい人。……私のところに来るのはとんでもない奴らばかりだった」

針妙丸は思い出しくもないと顔を伏せる。『でもね』と針妙丸は続ける。

「もう誰とも関わりたくもないって思い始めた時に現れたのが……正邪だったの」

針妙丸は顔を上げて穏やかな笑みを浮かべる。

「もちろん正邪も悪い人だったけど……。なんでかな、それこそ彼女は他の人とは違うって、そう思えたの」

『泣き虫姫』と罵りながらも、自分の世話をやきながら笑ってくれた悪友どもの顔を頭に浮かべる。針妙丸は百々との距離を詰めていく。

百々の目つきが険しくなるが、桜街が百々を警戒してくれていた。

「なぜ自分にその話をしたでありますか」

「……私も実はよくわからない。たぶん百々さんと私、どこか似てる場所があるんだと思うの。ただ、もし私が出会った人が全土だったなら……たぶん、あなたと同じことをしてるんじゃないかなあって。そう思ったの」

『それは幸運だったでありますな』と皮肉って百々は針妙丸に背を向け、ベッドに横にな

る。

「自分は全土様に会つたことを後悔なんてこれっぽちもしてないでありますよ。唯一の後悔は……鬼人正邪と球磨川禊、……そして特にお前と関わつたことあります」

『シツシツ』と百々は虫を払いのけるように手を振り、針妙丸に帰るよう促す。

針妙丸は大人しく診察室を後にする。診察室の扉をくぐる前に扉に手を当て、百々の方を淵帰る。

「その……百々さん。ごめんなさい。迷惑、かけちゃつて」

「謝るぐらいならここで切腹して死ねであります。さつさとその面を病室の外へもつていけであります」

冷たい一言を受けた後、針妙丸は苦笑し歩き去つて行つた。診察室には人首と百々、桜街が残される。

—— 『百々さんにも……理由が……！』

百々の意識の片隅に残つていた針妙丸の悲痛の叫びが彼の頭に響く。百々はベッドのシーツを力強く握る。彼の座るベッドに大きなしわができる。

「くそ偽善者が……ツツ!!」

百々は自らの行いに対する報復は覚悟していた。全土に促されたからではない。自分の意志で、『やりたい、正しい』と彼が心から思つてやつていたからだのだと。

「なんで……なんで今さら……」

だが百々は赤の他人に、しかも自分の被害者に心配されるなど彼は考えもしていなかった。

もし……もしもの話。自分が彼女ともっと早く出会っていたなら……自分にもっと素直になれていたのだろうか、と。彼は思わずにはいられなかった。

## 第25話 『戦車』と『恋人』

「……さて、寮に戻るでありますか」

百々が診察室から出られるようになった後、もうすでに日は落ち辺りは暗くなっていた。ちなみに百々を含めたA組を始め上級生の寮は高級ホテルに近い建物になっている。寮での食事や部屋のベッドもD組に比べて遥かに高品質である。

「退院おめでと〜つ、千太郎せんたろっち！」

「……出迎えは頼んだ覚えはないでありますが」

遠目でもわかる桃色のツインテールにセーラー服。

A組寮手前に生徒会メンバー『恋人』であり長身の美少女、寒井さぶい 美紀みきが手を振って立っていた。

百々はため息をついて彼女の横を素通りしようとする。

「ちよつとちよつと、私わたくし様を待たせてシカトは寂しくない？」

「美紀。自分はお前に構ってられるほどの体力も気力もないであります。話ならまた明日にでも聞くであります」

「ああなたの明日はいつの明日よ!? そう言って聞いてくれたことなんて一度だってな

「かったわよ」

『ああめんどくせえな』と百々は眉間に不機嫌なしわをつくる。

「あんたも随分と手こずったのね。そんなにすごいのか？ 球磨川の『大嘘憑き』オールフィクションって」

「思い出したくもありません」

死であろうともいかなるものであろうともなかったことにしてしまおうスキル。存在

もアイデンティティも全て無くしてしまう能力など恐怖に決まっている。

「確かに恐ろしいね。けど私様からすれば無敵ではないように見える過負荷<sup>マイナス</sup>ね」

「ほう。それはそれは。女は怖いでありますな、聴<sup>き</sup>くて。で？ 次はお前でありますか

？ 言っておくであります、アレと戦うぐらいなら逃げた方が賢明でありますよ」

「ちつつちつつ！ 正確には違うね、千太郎っち」

百々が立つ茂みの影から二人の人影がふらふらと現れる。百々の目が驚愕で見開く。

「し、『死神』に『悪魔』?!」

「正確には私達が。あの劣等生どもを執行してやるわ!」

美紀は豊かにある胸を張り、お気に入りの扇子を取り出す。

「私様ごと! 会計係、寒井美紀が! 最いつ高の舞台をすでに整えておいたわ! 『魔

術師』の新<sup>あらい</sup>剣<sup>けん</sup>も前座として向かわせてあるし。時間稼<sup>あひ</sup>ぎご苦労様、千太郎っち」

「……。自分の働<sup>あひ</sup>きがたかが時間稼<sup>あひ</sup>ぎとは納得いかんでありますな。新<sup>あらい</sup>のことはどうで

もいいでありますが」

『まあ気にしない気にしない』と肩を美紀に叩かれる。

「生徒会元『庶務』には恥はかせないよ。それじゃ応援よろしく」

「美紀」

『なあに?』と呼び止める百々に美紀は振り返る。

「いつまでその女王様ごっこを続けるつもりでありますか?」

美紀は先ほどまでの自信満々の表情を崩し、顔を曇らせる。

「全ちゃんか……王様ごっこ、やめたら……かな?」

「なら、半永久的でありますな」

一言をくれてやり、百々は寮の扉の方へ向かう。『死神』と『悪魔』は道の脇へどき、道を開ける。

「それと、美紀。『大嘘憑オールワイクションき』が恐ろしいんじゃないであります。それを使う球磨川が恐ろしい。それをよく覚えておくであります」

「ふーん……。まあ、球磨川くんはともかく。一緒にいた二人は……楽に終わりそうね」  
「あまりあの二人を侮らぬ方がいいでありますよ。お前が楽に終わるなら……自分がすでに仕留めているでありますから」

翌日、朝の教室。

『で、なんだったんだらうね。昨日のかませクールドッグは？』

「さあな。急に『俺っちの手柄いやっほおーい！』とか言つて襲い掛かってきたけど」

『……あの飄々とした切れ者。なんかマグロちゃんを思い出しちゃったよ』

「マグロ……？ 球磨川、あとでそいつのことも教えてくれよ」

正邪達の印象には残ったもの……『魔術師』新あらい剣けん、出番なく再起リタイア不能。

## 第26話 正邪ボックス

百々と桜街が退院した翌日。正邪は桜街、球磨川に針妙丸。そして慶賀野を引き連れ、空き教室の掃除をさせていた。

『で、正邪ちゃん。僕たちは何のために掃除をしているんだい？ まさかただのボラントイア活動？』

「球磨川じゃないが……さすがにこの広い教室をたつた四人で掃除するとか……なにか理由があるんだろ、正邪の姉御」

「もちろんだ、この私がタダでこんなしんどいことをやるはずがないだろ。ただでやるのは自分の部屋の掃除ぐらいだ」

正邪を含めた五人は各自ちりとりと雑巾を手に持ち、置いてあつた机と床をきれいにしていく。

「うわっ！ む、虫い！」

「だ、大丈夫だよ、慶賀野さん！ ただの蜘蛛だから！ こほっ、こほっ……ここホコリっぽいなあ。って、うわっゴキブリ!!」

が、現在慶賀野と針妙丸の二人はゴキブリ退治に専心してしまっている。しまいには



両手に殺虫スプレーを装備し、奇声をあげ一緒に暴れ回る始末だ。

「おい、針妙丸！ あんまり殺虫剤をばらまくな！ ごほっごほっ！ クソ、くつさあつ！」

殺虫剤の鼻を突くような匂いに、正邪はたまらず鼻をつまむ。一時掃除を中断し、全員空き教室の外へ。

「つたく……しばらく入れなくなっちゃったじゃねえか……。で、掃除の理由か？」

『あー肩が痛い』と正邪は腕をぐるぐると回した後、一枚の書類を取り出す。針妙丸は正邪から一枚の紙を受け取る。

「私たちがこれから使う教室を綺麗にするのは当然だろう？」

「えくと……なになに……これ、全土のお父さんからの手紙？」

全土の父であり傀儡となつてしまっている角明学校長の手紙。

球磨川と正邪を除く全員が一驚し、針妙丸の方を向いている。

球磨川の反応はというと……心底どうでも良さそうだ。教室の臭いがまだ残っているかを確認するため、扉の開け閉めを意味なく繰り返し返している。

『現生徒会の横暴が過ぎるといふD組ほぼ全員の総意、確かに受領しました。鬼人正邪殿、あなたの提案である「新しき生徒会の設立」。一考の余地があると存じます』と、針妙丸は徐々に顔を青くして紙を読み上げる。

「い、これって……」

顔色が青を通り越して真っ白に近くなった針妙丸はゆっくりと正邪の方を振り返る。

正邪は小悪魔のようにニタニタと笑って彼女を見つめている。

「姫様、続き続き」

「すごくいやな予感しかしないんだけど……」

『しかしながら急な体制の移行は混乱が生じるため、一ヶ月後の「生徒会選挙」において、全校生徒の投票で詳細を決定するというのはいかがでしょうか。それまでは新生徒会の設立及び活動に従事を。新生徒会の部屋は空き教室を自由に使ってください』

「これって……」

「……生徒会と全面戦争決定だな」

「ふ、ふわああっ!? 正邪、正邪せいじゃあ?!?!?」

針妙丸は正邪の両肩を掴み前後に揺らす。正邪の首が動きに合わせてガクガクと揺れる。

「何やってんの?!? あんた絶対に何かしたでしょ!!」

『『全土ちゃんへ、屋上で待ってます』って手紙出したただけだけど? おかしいなあ、ま

さか挑戦と受け取られるとはね。ラブレターのつもりだったんだが、手が古かったか」

「嘘つけ!! 絶対に送ったのラブレターじゃないでしょ! どうせ生徒会のクレームで

も書いたんでしょ!!」

「わかっているじゃないか。他のD組の生徒の苦情申し立てもついでにな」

『またか』と慶賀野と桜街は苦笑する。

「つてことはなにか、俺達はその『新生徒会』のメンバーつてことで呼ばれたわけか」

「ああ、その通りだ。咬ませ犬コウジ。お前たちはめでたく私の目に適ったつてことだ」

「え、ええっ!? こ、困りますよ。正邪ちゃん……」

当然、正邪の作る『新生徒会』は現生徒会、全土一派が全力で潰しに来るだろう。球磨川と正邪達はともかく、慶賀野はただの一般人。とぼつちりを喰らつてひどい目にあつてはたまらない。

慌てて断ろうとする慶賀野に対し、桜街はむしろ気合が入ったようだ。拳を片手にあてやる気Maxだ。

「コウジ君、あたしはやめておいた方がいいと思うんだけど……あなたもそう思うよね? ね?」

「慶賀野、悪いが俺は賛成だ。もうこつちから狙いの『重力使い』を探す必要がなくなるからな。あつちの方から来てくれるんだつたら好都合だぜ」

「う……」

慶賀野は同じ反対者を探そうとキョロキョロと辺りを見回し、球磨川の方を向く。

——そ、そうだ！ 面倒くさがり屋な球磨川さんなら……。

「く、球磨川さんも困りますよねえ……？」

ははは、と引きつり笑いを浮かべて慶賀野は球磨川に助けを求める。

「ん？ 僕はもちろん、喜んで参加させてもらうよ。その「新生徒会」

「……え」

『正邪ちゃんがわざわざ声をかけてくれたんだ。仲間として断るわけにもいかない

よお』

球磨川はわざとらしい口調で、慶賀野が求めた助け舟が出向する前に沈める。

あまりの驚きで慶賀野の眼鏡がズレてしまっている。

『それにしてもコウジちゃん、「重力使い」って聞いたけど……』

「ん？ ああ、『重力を操る』スキルの持ち主だ。この学園にいるのは間違いないんだが

よお……」

『……ふうん。興味深いね。一体そのスキルでどういったことができるんだい？』

「あく……俺も全部はわかってはいねえんだ。入学式の時含め二回喰らったことがあ

るっただけだよ。わかってるのは、一定の場所の重力を強くできるっただけのことぐらいだ

な」

身体が重くなって気がついたらペシャンコになっていた、と桜街は語る。

球磨川はなるほどね、とあごに手を添える。

『要するに、周りの重力を重くしたり軽くしたりするってところかな。ドラゴンボールで孫悟空がやってた修行に使えそうな能力だね。地球の重力の百倍とかできたりするのかなあ』

「……言つとくが、そいつは俺の獲物だ。誤って倒すなよ」

『やだなあ、僕が勝てる前提で言ってもらっちゃ困るよ。会ってみなきやどうにも言えないけれど……どちらにしろ、僕の勝てる相手じゃないよ』

『もちろん、その子の相手は君に任せるさ』と球磨川はコウジの右肩に手を置く。

『頑張つて。勝てるといいね。コウジ君の勝利を、七夕に短冊でも書いて応援してるよ』

「このっ……!! 本当にムカつく野郎だな」

震える手を抑え、桜街は球磨川をにらむ。球磨川は物怖じせずニヤニヤしている。

「おい、そろそろ臭いがおさまってきたぞ。掃除の続きだ」

正邪の掛け声とともに針妙丸たちは『新生徒会』の教室掃除を再開した。

|||||

「掃除も終わったことだし、役職決めをしようと思うんだが……」

「あ、あたしは入りませんよ、正邪ちゃん！ もう帰りますから！」

「じゃあ慶賀野は会計係ってことで。イメージ的にそれっぽいし」

「勝手に決められた!?! しかもイメージ!?!」

『まあ……数字は苦手ではないですけど……』と諦め半分につぶやく慶賀野を放つておいて役職決めは進んでいく。

「むろん、私が生徒会長だろ。球磨川は……副会長のポストを与えてやろう」

『ぼ、僕が!? ……ツツ、うう……なんて嬉しいんだ……!! そんな重要な地位につかせてくれるなんて……光栄だよ!』

ハンカチを取り出し、涙を拭く仕草を見せる球磨川だが針妙丸は訝しげに彼を凝視する。

「本音は？」

『めんどくさい!』

「やっぱり……」

「ハイ、次! じゃあコウジ。貴様は……」

正邪は指をピタリと止め、こめかみに拳をあてて考える。

「あ、姉御?」

「だめだ。お前に合いそうな仕事か思いつかん」

『明らかにお前、生徒会って見た目に見えねーもんなん！ 生徒会っていうのは僕みたい  
に品行方正でしつかりした人がやるべきだよ！』

「う、うるへえ!! それにお前のどこが品行方正だよ！ 出会い頭に螺ねじ子ぶつ刺してく  
るようなヤツのどこが!」

『ひどいなあ、だれがそんなことを』と白々しくとぼける球磨川を無視し、桜街は『じゃあ』と言葉を続ける。

「俺は庶務職でいいよ。書記とか俺のガラじゃないし」

「そうか。じゃあ決まりだな」

安心しきった様子を見せる桜街を逃さず、慶賀野はわざとらしく思い出したかのように言う。

「あゝ! そういえばコウジ君って、昔習字教室やってたから字がすごく綺麗だよね!!」

「け、慶賀野!! てめ、余計なこと言って……あ……ッ」

——さつき裏切ったお返しです。

慶賀野は『ほら』と桜街のバッグから彼のノートを取り出し、広げて見せる。

それを見た全員が驚愕の表情。

桜街のノートは彼のイメージからは想像がつかないほどの達筆だったのだ。字だけ

でも美術作品にできるのではないか、というぐらいに字が綺麗だった。

「い、意外……!」

『ある意味見直したよ。コウジちゃんの字って、ミミズがのたくったような字のイメージだったんだけど。うわ、似合わね〜……』

「うおああああ! だからバレたくなかったのにいい!! 絶対になんか言われるって思ってたからよお!!」

桜街は慶賀野からノートを奪い返し、急いでカバンにしまう。恥ずかしくて涙目になっっている桜街を正邪はバシバシと彼の背中を叩く。

「あ、姉御まで俺をバカにするのか!?!」

「いや、お前がバカなのは元々だ。むしろ私は見直したぜ。さすが我が同士。周囲が貼るレッテルに反してそんな才能を隠し持つてるとはな。感心したぞ、コウジ」

「姉御おおおっ! 一生ついてきますう!」

「じゃ、お前書記に決定な。書記は字がうまい方が助かるからな」  
「あつ、やつぱさうなるのね……」

とほほ、と肩を落とす桜街。残るのは針妙丸の役職。

「あれ、ちよつと待って。残ってる仕事って庶務職しかない?」

「決まりだな。よろしく雑用係」



「ちよつと！。なんで私は優先順位が低めなのよ!?!」

決める順番を最後にされ、不満な針妙丸。しかしそんな彼女に構わず正邪は話を先へ進める。

「で、票集めはどうするんですか？ あたしたちのD組はまだいいとしても、全校生徒の4分の3は現生徒会に満足しちゃっている人たちなんですよ?」

「いや、満足しているのはせいぜいトップのA組ぐらいだ。少なくともB組とC組は現体制のどこかしらに不満があるはずだ」

『中途半端なエリートに限って、自分より上がいるっていうのは気に食わないもんだからな』と言つて正邪は一体どこから持つてきたのか、大きく立派な木箱を持つてくる。

『それは?』

「生徒の『新生徒会』への依頼を集めるための投書箱、つまり目安箱だ」

正邪は目安箱をバンバンと叩くと自信満々の笑みを浮かべる。

「そもそも私たちはこの学校に来たばかりだ。まだこの生徒が何を望んでいるかなんて雀の涙ほどもわからねえ。なら、ここにいる生徒の方から答えてもらえばいい」

「出す奴なんているのか？ 誰が出したとか突き止められるのが嫌で使う奴なんていないんじゃないか?」

「むろん、匿名で出してもらおう。どの道、出された手紙が書いた本人かどうかもわから

ねえし、出した奴の秘密保持のためにもな」

「なるほど、私達『新生徒会』にやってほしいことを書いてもらって……それを解決し支持を得る……。正邪にしては考えたね」

「おい、針妙丸。私にしてはってなんだ？ 私にしてはって。場合によっちゃあ、今日の夕飯抜くぞ」

『そ、それよりも！』と針妙丸は誤魔化する。

「もうそこまで決まってるってことはさ、なにか目安箱について相談したいことがあるんだよね？」

「そうだ。すごく大事なことだ。この場で話し合わなければ。この目安箱自体が無価値になるほどの重要度だ」

教室にいる全員が正邪の出す議題に対し、息を呑む。正邪はすこし溜めて言葉を続ける。

「この目安箱の、『名前』だ」

正邪以外の全員が問題の小ささに顔を下におろす。そんなみんなを気にせず、正邪はびらりと紙きれを取り出す。

「いくつか候補を絞ったんだが……」

——め、めっちゃ真剣に考えてるー!!

『正邪ボックス』とかどうだ!」

意気揚々と練りに練ったであろうアイデアを暴露する正邪だが、みんなの反応は彼女が思っていたものよりかなり辛辣だった。

「せ、正邪ボックスかあ……」

『……』

「わ、悪くないと思うんですけど……も、もっと……こう……」

「姉御、何にも言えねえわ」

そろって『ネーミングセンスがない』という意見だった。正邪は焦って第一候補から第二候補へ切り替える。

「や、やっぱり『レジスタンスボックス』で……」

『……』

「……うそん」

正邪は衝動に任せアイデアをまとめた紙をクシャクシャに丸め、放り投げる。体育座りの姿勢になり、本格的にいじけ始める。

「……いいよ。おまえらで勝手に決めてくれ」

「せ、正邪ちゃん!? ごめんなさい! そんなつもりじゃなくて……」  
「そうだ! 球磨川! お前は何かいいと思う?」

慶賀野はなんとか元気になってもらおうと謝罪し、話をつなげようと必死になる桜街。落ち込む正邪になんと優しい世界だろうか。

『「箱」でよくね?』

「雑つつツツ! 却下だ!!」

「正邪ちゃん、復活はやっ」

もう適当でいいよ、という態度が露わに出た球磨川。正邪はその場から立ち上がり、球磨川に意見する。

「大体なんだよ、目安箱の名前が『箱』って。せめて『目安箱』そのままとかの方がまだマシだ」

『ほら、今時の漫画の必殺技って案外シンプルな名前の方がウケがいいでしょ?』

「ひゅっ」とか「斬」だけで表現するやつ。技名なしってやつだよ」

「おい、慶賀野。なにかいい名前はないか?」

『……』

球磨川は正邪に相手にされず若干落ち込み気味。

いきなりの指名にうろたえる慶賀野だが、なにか思いついた様子。『あっ!』と人差し

指をあげて一つ思い浮かんだと見せる。

「正邪さんは反逆とか、何かをひっくり返すのが好きなんですよね？」

「ふん……性根もひっくり返っているのが私でね」

「じゃあ、この学園の名前とさっきのレジスタンスって言うのを利用して……」

慶賀野は自分のアイデアを紙にペンで書き、穏やかな笑みと共に教室にいる全員に見せる。

「『革命ボックス』というのはどうですか？」

ほぼ満場一致で正邪が設立した『新生徒会』目安箱の名前は、『革命ボックス』に決まった瞬間であった。

## 第27話 いずれ時が来る前に

「と、ノリで名前を決めてしまいました……」

『参加する気なんかなかったのに……』と慶賀野は肩を落として自分の部屋に入る。ずいぶん気が重い様子。

「本当はこんな事はしてはいけないはずなのに……」

慶賀野の机の上から急に携帯電話の着信音が鳴る。

「ツツ!! う、うそ……」

慶賀野は顔を恐怖で引きつらせ、携帯電話を手に取る。

「は、はい……」

慶賀野は震える声を隠すのを忘れて耳元に携帯電話をあてる。彼女のケータイからぐぐもった声が彼女の耳に響く。

【そう怖がらなくてもいいよ。慶賀野くん】

「……ツ！ はい……。ななにか、ご、御用でしょうか……」

慶賀野は漏れそうになる涙を必死にこらえる。ケータイを持った手が自然と震えている。

【ああ、たまには口頭で定期報告でもと思つてね。首尾はどうだい？ 君が僕らの間者だつてことはバレていないかい？】

「……いいえ。おそらくは」

【そうか。いや、あの球磨川という生徒は侮れないからさ。勘づかれてはマズイと思つてね】

「……ツツ」

慶賀野は漏れそうになる声を手で抑え、動揺を悟られないようにする。

——『君も……「普通」じゃないんでしょ？』

【おそらく、球磨川も……あたしのことに気がついていません】

【ならいいんだ】

慣れない嘘をつくせいか、慶賀野の心臓がバクバクと震える。彼女の体に響く鼓動が体外にも聞こえてきそうだ。

【ところで……全土様も気になさっていたけど、『新生徒会』の動向はどう？】

【今のところ、目立った動きはしていませんでした。あるとすれば、目安箱を作つて生徒からの支持を集めようという動きが……】

【へえ……興味深いね】

——その『新生徒会』にあたしも入ってしまったのだが……。

【そういうえば『新生徒会』メンバーの名簿一覧には君の名前も入っているんだけど】  
「!!」

慶賀野は、まるで心臓が破裂したかのようにその場で飛び上がる。さらに鼓動が早くなる。今ならば車のエンジンの代わりになるだろうか。

【ははっ、大丈夫だよ慶賀野くん。君が『新生徒会』の一員になっているのは、あくまで鬼人正邪と球磨川禊の動向観察のためだろう？ なら大きな問題ではないよ】  
「も、もちろんです」

【スパイの君が裏切ったとすぐ早とちりするほど、僕の器は小さくないしね】  
「……。ありがとうございます」

正邪に巻き込まれる形になったとはいえ、結果的に監視のために敵の懐に潜り込むことができたのだ。そう考えれば幸運だったと言える。

【それに君が我々『生徒会』を裏切ることなど、そもそもありえないことだ】  
慶賀野は愁然として顔を垂れる。

【なにせ君はアルカナ持ち——『節制』なのだから】

それを最後に通話はプチンと切れる。通話終了の電子音が部屋に響く。



「……『節制』、か」

——そんな地位、望んでもいないのに。

「っ！ だれ……？」

突然誰かが戸を叩く音が聞こえ、慶賀野はその場に縮こまる。戸の向こうから鈴を思わせるような元気な声が聞こえてくる。

「功名こうみやうさーん！ いる？ 夜中にごめんね！」

「針妙丸……さん？」

慶賀野は恐る恐る玄関のドアを開ける。すると彼女の目の前には普段の恰好にタオルを巻いた針妙丸の姿が。なぜか着物がビシヨビシヨに濡れていた。床に水が滴り落ちていた。

「正邪ったらひどいのよ!! 私がお風呂に入っている最中に急に着替えを湯船に放り投げてきてー！」

『またか』と怒って頬を膨らませる針妙丸に慶賀野は苦笑する。

「あはは……また正邪ちゃんの悪戯ですか？」

「そうなの！ もうあつたまにきたから部屋を飛び出してきたの。いくら怒ったからつてやりすぎだよね！」

しかし、ここのも露骨な嫌がらせをするとは正邪もなかなか大胆だな。そう思いつつ、

慶賀野は笑つて針妙丸を部屋に迎え入れる。

「つはくちゅん!!」

「あくあ、風邪ひいちゃいますよ? とりあえず替えの着替えを持ってきますね」

慶賀野は新しいタオルを針妙丸に手渡し、リビングへ。

「たしか、ここにもうちよつと着やすいのが……」

「あの、功名さん。その……お願いがあるんだけど」

針妙丸はもじもじしながら慶賀野の方へ身体を向ける。

「その……今日はここに泊めてくれる? ちよつと帰りづらくて」

「え、そ、それって……」

お泊り。しかも布団は一つしかないから共有で使うしかない。

「お、お、お泊りつてことですよね……?」

「ご、ごめんね。急に。嫌なら私もう——」

「ぜ、ぜんぜん!! 迷惑じゃないです!! あたしの布団は一つしかないから、きよきよ、共有で、一緒にくつついて寝る形になっちゃうけど……?!?!」

慶賀野は半分パニックになりながら、落ち込む顔を見せる針妙丸にあたふたと一泊の許可を出す。するとパアツと針妙丸は顔を輝かせる。

「よ、よかったあ……。ありがとう、功名さん! 私、友達が少ないから友達の家にお泊

りなんて自分からできると思わなくて……」

「ふふっ、私は布団の準備をしますから。針妙丸さんはシャワー室で着替えていてください」

「うん！」

針妙丸は元気に返事をする、シャワー室へ着替えをもつて駆けていく。

——あたしも、女友達と一緒に部屋で寝られるなんて……夢にも思わなかった。

慶賀野は針妙丸とお泊りができる嬉しさで穏やかに微笑みながら、押入れから布団を取り出した。

|||||

針妙丸は慶賀野が用意してくれた布団に潜り、慶賀野も最初はためらいつつ彼女に続いて布団の中に入る。

「昨日設置した『革命ボックス』、依頼が入るといいね」

「そうですね。初仕事で変なのが来ないことを祈りますけど……」

先日、学校中にあの目安箱を五人で配置したのだ。球磨川は途中で勝手に帰っていたため実質四人でやったのだが。

「それにしても、正邪ってほんと何考えてるのか全然わかんないよね。球磨川くんもだ  
けど」

「新しい生徒会を作って、あたしたちも入れられて……」

「ほんと、破天荒と言うか人騒がせって言うか……」

「でも、嫌いじゃないんですね」

「不思議と嫌いにならないんだよね」

慶賀野と互いに笑い合い、『むしろ嫌いになれ！』と言っている正邪の顔を思い浮かべ  
微笑する針妙丸。

「……なんで嫌いになれないんだらうね」

「うーん……正邪ちゃん、可愛い子だからじゃないですか？」

「可愛い？」

「ほら、可愛さ余って憎さ百倍って言うじゃないですか」

「それ、たぶん使い方違うと思う」

むしろ逆の意味だ。

「けどあいつ、私にいつもちよっかい仕掛けてくるし」

「たぶん正邪ちゃんは針妙丸さんに構ってほしいんですよ」

——正邪ちゃんは確かに口が悪くて、意地が悪い。けど……なぜか見捨てられない。

仕方がない人だつて思わせてくれるような……。そんな何かは彼女にはあるんですね。

「ま、それが何かはわからないんですけどね……」

「慶賀野さん……?」

「あつ何でもないですよ!? 特に深い意味はなくて……」

突然身を寄せてきた針妙丸に慶賀野は息を呑む。

「……慶賀野さん。正邪と私にいつも付き合つてくれてありがとう」

「え、いいえ、いいえ! だつて私達は、友達じゃないですか」

慶賀野はちくりと胸を打つ痛みを無視し、顔を赤くする。穏やかな顔を浮かべて信じられる針妙丸の笑みを見ているとさらに痛みが増してくる。

「本当は不安だったの。知らない場所で知らない景色。ここに來て私が唯一知っているのは正邪だけで……」

慶賀野は見てしまった。針妙丸の薄紫色の瞳がどす黒く染まっていくのを。彼女の闇が……見えてしまった。

——この子は……重い過去を背負っている。あたしが考えている以上につらい出来事を胸に秘めている。

未来への不安、不信感、そして……孤独。それらの色を慶賀野は知っていた。

「私、慶賀野さんと友達になれてよかった」

「……………」

心臓を矢で射抜かれたかのような激痛に耐え切れず、慶賀野はその場から立ち上がる。突然立ち上がった慶賀野に驚き、目を見開く針妙丸。

——いずれ、私と友達になったことを後悔しなくてはいけない。彼女も……そして、私自身も。

慶賀野は頭上の灯りのスイッチを引つ張る前に針妙丸の方に振り返る。

「さ、そろそろ寝なきやいけない時間ですね。電気、消しますね」

「うん……おやすみなさい、功名さん」

これ以上胸の痛みを感じないように、慶賀野は会話を終わらせた。いや、逃げた。

|||||

慶賀野は生徒会副会長を球磨川が倒した時のことを思い出していた。

「私が……?」じよ、冗談はやめてください。私はただの女子高生で……」

『いや、そういうのいいからさ』

球磨川は手に持っていた螺子を消し、慶賀野に向かって微笑む。いつ何時のように薄

気味の悪い笑みを浮かべて。

『君は……僕と同類だろう?』

「……!?! だ、だれがあなたと——」

『わかるよ』

球磨川はズイツと顔を慶賀野の目の前まで近づけ、彼女をよろけさせる。

『うまく取り繕ったって、僕にはわかる。きみも……きつと人をいっぱい終わらせてきたんだよね?』

「……ツツ!!」

慶賀野は普段では絶対に見せないであろう怒りと悲しみが入り混じった表情を露わにし、歯ぎしりをする。

『それにも関わらず、終わらせた人なくんていなかったことにしてさ。きみは針ちゃんと一緒に何事も「無かった」かのように笑っている。それが僕と同じじゃなくて……なんだって言うんだい?』

「黙って……!!」

慶賀野の手から血が地面に滴り落ちる。爪を手の平の皮膚に食い込ませた先からとめどなく血が流れていく。

『でも』『いいんだよ。それで』

球磨川は慶賀野の肩に手を置き、そのまま歩いて行ってしまふ。

慶賀野は球磨川との格のあまりの違ちがひいに愕然としてしまふ。手が力なく垂れ、頭が真つ白になる。

距離が離れているのに球磨川の声は遠ざからない。

『僕やきみは何をしたっていいんだ』

『……だって世界には目標なんてなくて』『人生には目的なんてないんだから』

|||||

針妙丸が完全に寝静まった後、慶賀野は一人、闇のみが広がる自分の部屋ですつと起きていた。慶賀野は自分がつけた手の平の傷跡をじつと仰向けになつて見つめる。針妙丸が部屋に来てから胸のあたりが痛くてたまらない。

「あたし、ほんと何やっているんだろ……」



いずれどの道「無かったこと」になつてしまふのに。なぜ自分は針妙丸と仲良くなりたのか。バレない嘘なんてない。無意味で滑稽なことだとわかつているのに。

慶賀野はすうすうと可愛い寢息を立てている針妙丸に視線を向け、外す。

生徒会を裏切ることもできず、正邪や針妙丸たちを見捨てることもしたくない。なんと中途半端な心構えなのだろうか。

慶賀野はギュツと強く自分の胸元をつかむ。しわが掴んだ中心から広がる。

針妙丸の寝言が小さく慶賀野の耳に届く。

「……けがの、さん」

——だが、せめて……せめて今は。いずれ裏切りがバレるのならば。

慶賀野は針妙丸がしきりに動いていた手に、自分の右腕を重ねた。

「おやすみなさい。針妙丸さん」

そして小さく『ごめんなさい』とつぶやき、慶賀野は眠りに落ちた。

彼女の頭を置いた枕の一部が、少し濡れていたことに気づかぬまま。

## 第28話 『まあそんなすぐに足並みが揃うわけないよね。』

「諸君！ よく聞け、見て驚け！ 早速の依頼だ!!」

正邪が嬉々として腕を『革命ボックス』の中に手を突っ込み、二枚の手紙を取り出す。汚かった空き教室、もとい『新生徒会』室にいる針妙丸達はおおつ、と声をあげる。

「初の依頼か！ こりゃあ、めでたいぜ」

「やったね、慶賀野さん！ 仕事の内容って何かなあ？」

「……」

針妙丸の横にいる慶賀野だが、少しボーっとしている様子。心ここに在らずといった状態だ。針妙丸は気になったのか慶賀野の顔を覗き込む。

「慶賀野さん？」

「……あつ。そ、そうですね。なんででしょうかね？」

心配そうな針妙丸の顔を見て我に返る慶賀野。焦って笑みがいつもより引きつっている。さらに針妙丸の顔に慶賀野に対する懸念が浮かぶ。

「本当に大丈夫？ 朝起きてからずっと調子が良くないみたいだけど……」

「大丈夫です、針妙丸さん。私は大丈夫ですから、ね？」

針妙丸に心配をさせまいと慶賀野は普段のように穏やかな笑みを見せる。『ならいいんだけど』と安堵する針妙丸を後ろで嘲笑う球磨川。

『……。へえ、功名さんが元気で僕もうれしいよ。やっぱり、何よりも元気が一番だからね』

「心配していただきありがとうございます、球磨川さん」

『それにしても……』

球磨川はちらりと針妙丸の方を向いてから再び慶賀野の方へ視線を戻す。

『<sup>ブラッス</sup>幸せ者は樂觀的でいいよね。悪意なく人を傷つけるなんてなかなかエグイことを平気でやるから、さ』

「あんた……!!」

『別に君のことだなんて言っていない——』

「球磨川さん、黙ってください」

針妙丸が球磨川の挑発的な発言に対し再度口を挟む前に、慶賀野はぴしやりと言いつつ。

慶賀野の怒気に当てられた球磨川は『はいはい』と両手を後頭部に回し二人に背を向ける。

「おいおい……。空気悪いぜ、一夜でなんでこんなに空気が重くなっちゃうんだ？」  
「知るか。それよりこつちを見ろ、お前たち。コウジ、一枚目の紙を声に出して読んでみろ」

正邪はほら、と桜街に二枚の依頼書の紙を突き出す。

「へえ、二枚もきたのか」

桜街は正邪から紙を受け取ると、折りたたまれた紙を開き内容を確認する。

「どれどれ……。……ッ!? 姉御、すまん。俺には……。読めん」

桜街は紙を再び折りたたみ顔を下に下げる。正邪は苛立たし気に見つめる。

「ああ? ついに字も読めなくなったのか?」

「ち、違うそうじゃないんだ! ただ……。その……。声に出して読める内容じゃないって

言うか……」

「もういい、貸せ」

——つたく、何が読めないだよ。読むのが恥ずかしくなるような内容が書いてあるって言うのか。

『じれったい』と結果を急ぐ正邪は桜街の手から紙を奪い取り、中身を確認する。

「……………? んん!?!」

一瞬だけ見えた依頼書の内容を見間違いかと思い、正邪は手紙を何度か開いて確認す

る。

——正邪ちゃんのパンティおくれ。

しかし書いてある内容は変わらずだった。正邪は動揺しているのか顔が赤い。妖怪やつて数百年。こんなふざけた内容の手紙を送られたことなど一度としてなかった。まず送る住所すらなかったから手紙なんて来るはずもないが。

「に、二枚目は……!?!」

——鬼人正邪の裸エプロン姿が見たい。

二枚目も同様、変態が出した手紙で間違いなかった。が、こんな恥ずかしげもなくセクハラの内容を書いてくる奴など正邪の知っている中では一人しか思いつかない。

「……」

『……ドキドキ』

目から光が消えた正邪の横で、球磨川はワクワクと正邪の反応を待っている。『願わくば』と言ったところだろう。

「……球磨川」

『ん? どうしたの? どんな内容だったの、正邪ちゃん!』

少し興奮しているのが誤魔化しきれない球磨川。

正邪は手に持っていた二枚の紙を球磨川に手渡す。そして怒っているはずなのに、二

カッと良い笑顔を球磨川に見せ、

「この手紙を『無かつたことにしろ』」

『え……!!?』

正邪は内面と反して笑顔だ。いつそ不気味に見えるその笑みに球磨川は戦慄する。

「どうした？ 早くお前の『大嘘憑き』オールドファッションでこいつを消せよ。お前なら簡単にできるだろう

？」

『……!!』

「早くしろよ。まさか書いた本人がお前なわけないよな？ まつさか、できないわけな

い・よ・な？」

語気を強め正邪は球磨川に迫る。球磨川は冷や汗を額に浮かべ、能力を行使することを大いにためらっているのだろう。

「球磨川、信じているぞ？ お前はそんなことをするはずがないって」

正邪は悪戯気にニヤニヤと笑っている。間違いなく信じていない。

球磨川は心内で人知れず狼狽しているのか、今までにない焦った表情を見せる。動揺しているのがばれないように何気なく左手で汗を拭き、右手で顔を見せないように抑えている。

正直言ってバレバレである。

よく耳をすますと、小声でブツブツとつぶやいているのが聞こえる。

「……だ、大丈夫。こんな紙、「無かったこと」にするなんて造作もないことだ。自分で書いた字を消しゴムで消すことなんてわけないさ——」

球磨川は紙に伸ばした手を触れる寸前で止め、その場でガクツと膝をつく。

『グツ……だめだ。僕には、僕にはできない……!!』 自分の欠点マイナスをなかつたことにするなんて……!!』

「どうやらマヌケは見つかったようだな」

正邪は「入れる場所を間違えたんじゃないか？」と言って球磨川の依頼、もといセクハラペーパーをゴミ箱へ放り投げる。

球磨川はシヨックを受け、ゴミ箱へ空しく手を伸ばす。

正邪は『ああああ……』と落胆の声をあげる球磨川を見て大いに満足する。

針妙丸と慶賀野の女性陣は言うまでもなく、同じ男性である桜街でさえ、球磨川をフオローしようとはしなかった。むしろ『うわく……』とあまりにも欲望に正直すぎる

球磨川に、若干引き気味だ。

『オーマイガツ!!』 僕の希望がああ!』

「しよばい希望だな、おい」

「うわ……球磨川くん」

「せ、セクハラです、セクシャルハラスメントです……!」

桜街に続き針妙丸と慶賀野も球磨川にドン引きだ。『僕の願いを「新生徒会」のみんななら叶えてくれると思ったのに』と泣くフリをしてチラチラと正邪の方を見る。

全く懲りていない球磨川に堪忍袋の緒が切れたのか、正邪は先ほど球磨川の手紙を放り投げたゴミ箱へ、重い足取りで近づいていく。

「どうやら捨てるだけじゃ足りないらしいな」

正邪はゴミ箱から先ほど放り込んだ手紙を取り出しビリビリに破く。子気味のいい音が『新生徒会』の教室に響く。

字も見えないくらいに無残な姿となった紙を見て、球磨川は両手で頭を抑え込みその場でかがむ。拾ってくれるとでも思っていたのだろうか。

『絶望した!! セツかくありったけの勇気を込めて紙を入れたっていうのに!』

「なんか、正邪がひどいみたいく言ってるけど全部球磨川くんの自業自得だよね」  
『僕は悪くない』

「おい球磨川、あとでちよつと表出ろ」

球磨川達がぎやあぎやあと騒いでいる間に慶賀野が『革命ボックス』の中を覗き込み、もう一枚の紙を取り出す。

「あ、正邪ちゃん! もう一枚依頼の紙が入っていましたよ!」



「なんだと！ どれどれ……」

正邪は慶賀野から紙をひったくり、広げていく。

「『多目的棟が生徒会に占拠されて迷惑しています。立ち去るように言ってきてくれませんか』。へえ、なかなか面白い依頼を持ってきてくれたもんだな」

「多目的棟、ねえ……」

「コウジ君、何か知ってるの？」

難しそうな顔をする桜街に針妙丸は尋ねる。

「ああ、多目的棟っていうのは文字通り色んな目的で使われる教室を集めた建物だよ」

「中にはどんな教室があるんですか？」

「え？ 慶賀野は理科実験室にも行ったことがないのか？」

「ちよ、ちようどその時はお休みで……」

もじもじと恥ずかしそうにする慶賀野。桜街は後ろ髪を搔く。

「しようがねえなあ。多目的棟にあるのはさっき言った通り理科実験室、美術室に大ホール。あとは音楽室に空き教室がいくつかと……昔使われてた体育館ってところか」

「何でもいい、早速……ってコウジ、球磨川はどこだ？」

「え？ アイツならさつき『僕、今日やる気でないからエロ本買いに本屋さんに行ってくる』って……」

「あいつ……!! 私に裸エプロンになりやあやる気出たつてか!!」

——ちくしょう、こいつら三人だけじゃあ戦力不足な上、慶賀野はただの足手まといだ。元々慶賀野は人数合わせだったしな……。やはり球磨川がいなければ生徒会相手にお話にならない。

正邪はちらりと慶賀野の方を見ると、慶賀野がドキッと驚いたような顔をする。

「しよすがねえ、依頼を達成するのは明日だ。今日の所はとりあえず解散!」

|| || || || || || || || || ||

「ああ……心臓に悪いよ……」

部屋に戻った慶賀野は一息をつき、勉強机の椅子にどっぴかり腰を下ろす。

「……けど本当にバレてないのかなあ」

「不安なのかな? 慶賀野っち」

「ひゃっ!!」

耳元で突然響いた声に驚き、慶賀野は椅子から転げ落ちる。起き上がった後ゆっくりと声の主の方を振り返る。

「お、脅かさないでくださいよ、美紀さん!!」

「ゴメンね、あとこんばんは慶賀野っち」

慶賀野の目の前に立っていた美紀は桃色のツインテールを揺らし、その場でクスクスと笑う。

「首尾はどうう？ 順調？」

「……はい。美紀さんの指示通り、正邪たちの目安箱に投書しました」

「よろしい。私様は大変満足よ」  
わたくし様

ふつつつつつ、と美紀は扇子を広げ口元を隠す。

「そうだ、慶賀野っち。もうひとつだけ手伝ってほしいことがあるんだけど」

「……なんででしょうか」

「それはね——」

美紀が言い終える前に、慶賀野は突如美紀の横から現れた大男にボディブローをきめられてしまう。

「うっ……!!? な、なんで——?」

「くつくつく……これで仕込みはかゝりりよう。さあて、あとは球磨川禊と鬼人正邪がこのことやってくるのを待つだけね」

そして……翌日、針妙丸が慶賀野の部屋に挨拶に行くも、そこに慶賀野の姿はなかった。

## 第29話 『また会おう、めだかちゃん』

正邪が新生徒会を発足し、目安箱を設置した日の昼頃。

角明学園に来訪者が。

「——ようこそ。角明学園へ」

全土に顔つきのよく似た老人、角明学園学園長が目の前の人物へ丁寧<sup>ていねい</sup>に挨拶をする。

「これは学園長。こちらこそ、時間をとらせていただいて感謝するぞ」

「いえいえ、まさか箱庭学園の視察代表が生徒会長のあなただったとは——黒神めだか、さん」

学園長室のソファア<sup>ソファ</sup>に座る、絢爛華麗<sup>けんらんかれい</sup>といった言葉が似合<sup>にあ</sup>であろう美少女、黒神めだ

かは大胆不敵な笑みを浮かべる。

「なに、これも他校との親睦をはかるためだ。学園のためなら私は24時間でも48時間でも、休まずに働こう！」

「二日も働けるとは……なんとも頼もしい」

なにせ彼女は学園で24時間、誰からの相談も受け付けると大言壮語を言い放つほどだ。

本人曰く『見知らぬ他人の役に立つために生まれてきた』とか。

「うむ、では早速教室へ案内してもらえるか？ 学内の雰囲気はどういうものか早く見てみたい」

「もちろんですとも。では——」

「——そこから先は、俺が案内をしよう」

二人が席を立った後、学園長室の扉から銀髪の男が入ってくる。彼の鋭い目つきが学園長を射抜いた瞬間、学園長は狼狽してしまった。

「ぜ、全土……」

「む……」

黒神は『何者なのだ』と眉をひそめ、突然入ってきた大男の様子をうかがう。

「じゅ、授業はどうした……？」

「ボケたか親父。授業など、とつくに終わってもう昼休みだ」

「そ、そうだったか。もうそんな時間だったのか……はっはっはっ……」

——親父……？

「この男は学園長の息子……?」

ぼそつと黒神が全土のことを呟くと、全土は首を黒神の方へ向ける。

「初めまして、だな。噂でよく聞いているよ。黒神生徒会長」

「あ、ああ……こちらこそ今日は一日よろしく頼む」

「そういうわけだ。親父、俺が言っておいた案件。きちんとまとめておいてくれよ?」

「……いつもすまないな。黒神さん、申し訳ございません。ここから先は私の息子が学  
校案内をします」

「うむ、生徒から直接聞いた方が学園の様子もよくわかるかもしれん。では全土、行こう  
か」

『レディーファーストだ』と全土は扉の前から退き、黒神を通らせる。その後全土も続  
き、二人は学園長室を去った。



——それにしてもこの男、本当にあの学園長の息子なのだろうか。

学園の広大な敷地を回るため車に乗せてもらっている最中、黒神は彼女の隣に座る男、大多羅全土を注意深く観察していた。

「いい天気の中を歩き回るのも悪くないが——この学園の敷地はとても広い。はるばる来てくれた客を疲れさせざるわけにはいかなからな」

「気遣い感謝するぞ、大多羅三年生。だが私はお前とこの天気散歩したかったものだ」

「——それは失礼。余計なことをしたようだ」

——箱庭学園先代生徒会長、日之影先輩もこのような威圧感を持つてはいたが……この男は彼以上だ。本当にあの柔和そうな大多羅学園長の息子とはとても信じられない。

それどころが……学園長と彼の外見も印象も全くの正反対だ。

射抜けば猛獣でさえ殺せそうな鋭い視線。荒々しくも輝かしい銀髪。

彼の一つ一つの特徴が彼の人間性を如実に表していた。

「次の行き先までにはまだ少し時間がある。少し箱庭の話聞かせてくれないか？」

「ちようどいい。私も貴様に聞きたいことがあったところだ」

「ほう……何を聞きたい？ 一般の生徒である俺に答えられる事なら何でも答えよう」

全土は頬杖を解き、少し興味深そうに黒神の方を見る。

「まず一つ、大多羅三年生は生徒会長なのか？」

「ははっ、いや。俺は生徒会長などという器ではないよ。さっき言った通り、俺はただの一般生徒だ」

「一般生徒の……一人」

——ならばなぜ彼を見た人は道を譲るかのようになに彼を避けるのか。

全土が用意してくれた車に乗る前に見かけた数人のD組生徒。彼らの全土への反応は明らかに『怯え』。信頼や友情などとは程遠い。

あえて言うならば、為政者への絶対順守。

「それで……なぜその質問を？　なにか俺に変な噂でも立っていたのかな？」

「いや。単に気になっただけだ」

全土は含み笑いを浮かべ、黒神の表情をうかがってくる。

「それはよかった。言うのは勝手だが、陰口というのは目の前に出てくると、どうしても気になるものだからね」

「ああ、悪い噂はない。君の陰口ももちろん。学園の悪い噂は一つも。——だがどうしても気になるんだ」

『ん？』と眉を上げる全土に黒神は身体を向ける。

「——悪い噂が……なさすぎるんだ」

視察に行く前に他校の良し悪しを調べるのは当然。黒神はあらゆるネットワークを活用し、情報を収集していたのだが、

「集めた情報の中に角明学園に関する悪い噂が……何もなかった。ソーシャルメディア、他人の書き込み欄の一言にも……なかった」



最低でも一人は、学校のことをよく思っていない人間がいてもおかしくない。

学園の裏サイトの書き込みまでも調べたが、そういった類の発言、『ここが気に入らない』という一言すら見当たらなかったのだ。

「——いいことではないか。特に不満に思う点はない。生徒全員がこの本校の環境に満足しているということではないか」

「……」

間違いない。彼の口ぶり、この学園はやはり何かを隠している。

でなければ先程の生徒が、ただの一般生徒である全土にああも怯えるはずがないのだ。

「黒神生徒会長。私からも聞きたいことがあるのだが……」

「な、なんだ」

——なんだ……心の奥底にまで滑り込んでくるような声。

「——上に立つ者は……どうあるべきと思うね？」

彼が問いを出した瞬間、黒神は頭を上から押さえつけられるような奇妙な感覚を覚える。底知れぬ威圧感が……車内を覆っていた。

「聞けば君は、先代生徒会長である日之影空洞を改心させ、彼に勧められて生徒会長になったとか」

「——!! なぜそれを……」

日之影空洞の異常性アブノーマル『知られざる英雄』ミスターアンノウンによって箱庭学園全校生徒は彼のことを一切認識できないはずだし、記憶からも消えてしまっている。

そんな彼を一体どうやって……

「うちの生徒会には非常に優秀な副会長がいてね。情報を集めるのが非常に得意なんだ。依頼したら、二つ返事でOKしてくれたよ」

「……その副会長は」

「ああ、悪いが彼は今入院中だ。……なにせ、不測の事態があつたのでね……不幸なことだよ」

——今は会える状態ではないということか。

「そうか、先代を見つけるのは容易ではないからな。どうやって調べたのか聞きたかつたんだが……残念だ」

「まあ方法はどうであれ、会うはずの相手を調べておくのは当然のことだよ」  
少し脱線してしまった。

「して、上にいる者はどうあるべきか……だったな。大多羅三年生」

「——ぜひ、君の意見を聞きたい」

全土は含み笑いを黒神の方に向ける。

「——まず私はその問い自体を否定する」

「ほう……」

「全土、人にも上も下もない。全て平等な、一つ一つの命だ。たとえ貧富、能力、人格に格差はあれど、価値など決められない。みんな、かけがえもない個人だ」

黒神は扇子を懐から取り出し、全土に突きつける。

「私が生徒会長なのは、みんなを幸せにしたいからだ。あえて言うなら——他人を幸せにできる。それが皆を導く者の務めだ」

黒神は決意を込めた瞳を全土に向け、まっすぐ彼の目を射抜く。赤く燃える、大きな野心を秘めている彼の目を。

「——それはすばらしい。まさに指導者として理想的な答えだ」

「そうだろう。自分の働きで皆が幸せになれる。これほど快感なことはない」

「だが同時に……残念でもある」

全土は目を伏せ、黒神は怪訝そうな顔を浮かべ次の瞬間、警戒の色に、  
「確かに君の考えはすばらしい。私も君の意見に一理あると思う」

全土は目をカッと開く。呆れと侮蔑を込めて。

「——だがそれは君が言えることなのかね？」

「……」

「言つては失礼だが……私は君のその思想は、その考えはあまりにも理想的すぎる」  
 「そんなことはない！　ただ私は皆を——」

「誰よりも人を壊してきた君が——それを言うのかね？」

「——!!」

「認めるよ。君は誰よりも人を愛している。君ほど人を信じられる人間もそうはいない。だが、黒神めだか。——お前は誰よりも人を見誤っている。……愛は盲目とはよく言つたものだ」

「なに……?」

「——人は、平等ではない」

全土のあまりにも強い『断定』に黒神は怯む。

「君は、『人にも上も下もない。全て平等な、貧富、能力、人格に差はあれど一つ一つが大切な命。』と言つたな」

「ああ……それがどうした？」

「私から言わせれば、それは命の逆差別だ」

「どうして……」

「なら一つたとえ話をしよう。まず二人の子供がいたとする」

全土は人差し指と中指を立て、二人の子供に見立てる。

「二人とも命に関わる重態。君はどちらか一人を治療できる」

全土は中指を折り、一人と。

黒神の答えはこの時点で決まっていた。

『医者を増やして二人とも救う』だ。

「だが一人は身体が弱く、治療しても、もって数日。……そしてもう一人は治療をすれば、その後最低でも六十年は生きられる」

「——!!」

「それと、新たな医者が来るころには子供は二人とも死んでしまう。本当に一人しか救えない。残酷な取捨選択だ」

「なに……」

「さあ、君はどちらを選ぶ？」

「ふざけるな！　こんなの……!!」

黒神は少し腰を浮かせ、怒鳴る。

だが全土は全く動じていない。

「当然、誰でも長く生きられる方の子供を選ぶ。——わかつたろう。皆、人の将来性を考え、無意識に人に価値をつけるのだ」

「ちがう!! そんなのはただの例えだ!」

「そうだ。これはあくまで例えだ。だが……残酷な選択肢は非常に現実的だ」

——バカげた話だ。

もし、黒神がその気になれば二人を治す奇跡ですらやってのけるだろう。しかし——  
「そう、世の中には奇跡を起こせるに足る能力を持つ人間と持たない人間がいる。——さて、人々はどちらを望むかね?」

「全土……!!」

「当然、人々は奇跡を起こせる人間に価値を置く」

全土は黒神の突き出した扇子を手で払いのける。

「もう一度言おう、黒神生徒会長。命は——平等ではない。人の価値は能力と財力、つまり力によって決まる。弱肉強食こそ、この世の全てだ」

「——!!」

「力のある者が弱き者を、能力無き者を虫ケラの如く踏みつぶす。そして——何者にも踏みつぶされず、すべてを支配できる者こそ……頂に立つ者だとは、思わないかね?」

この男は——!!

「ハハッ、そう悪く考えるな。考えてもみてくれ、すべてを支配できるというのは……己の庇護下で他人を不幸にすることも、幸せにすることもできるといふことだぞ?」

「——弱きものを犠牲にしても、か……?」

「フフフツ、そんな場合もあるかもしれない……だが君もそうしてきただろう。己の幸せを求めるため、欲を満たすために」

何を言っているのだ。そんなわけ——

「君は幼少期の頃から、まさに神童、と呼ばれるにふさわしい力を持っていたね」  
ピタリと黒神の動きが止まる。

「そして、君に相談に来た多くの学者の研究を、たった一瞬で『完成』させた。彼らのかけた生涯も、時間も、労力も……全て文字通りに『無駄』にしたというわけだ。君のちよつとした達成感を得るために、彼らの全ては犠牲になったというわけだ」

「ちがう……あれは」

ただ、彼らの助けになると思つて……あんなつもりでは、なかった。

「知らぬ間に数多くの弱者を食い物にしているのだろうなあ。もちろんこの私も。だが……その分、我々強者が幸せになることこそ、その犠牲となつた者にとつても……幸せではないかね?」

「そんなのはタダの暴論だ！ 犠牲が出ないように——」

黒髪は声を張り上げ、胸を張る。この自分しかない男の心を変えるために。

——しかしそれも彼女が窓の外を見るまでの間だった。

『おおつ、このエロスな本。僕の好みをわかっているう〜！』

「——!?!」

——嘘だ。そんなはずがない。

あいつが……球磨川がエロ本片手で、ここにいるなんて。

黒神は全土を手で退け、急いで車の窓を開ける。

「球磨川あああつ!!」

『……?』

反応した少年が本をどける前に、黒神を乗せた車は少年が見えないところまで去って  
いってしまった。

「全土!! どういうことだ!?! 球磨川は……球磨川禊がここにいるのか!?!」

「球磨川……球磨川ねえ。聞き覚えがないな。うちの生徒にそのような名前の生徒はい  
なかったはずだが」

「とぼけるな! 少しか見えなかったが、あれは間違いなく球磨川だ! すぐに私を

下ろせ! 今すぐに確かめて——」



「――暴れられては困るな」

車を出ようとともかく黒神の首元に、全土は勢いよく手刀を放ち一瞬のうちに気絶させる。

気絶した黒神の肩を支え、そのまま席に寝かせる。

異変に気がついた運転手が車をいったん止め、後ろを振り返る。

「全土様、どうかなさいましたか？」

「――ん、いや。教育棟の方へ向かってくれ。確かA組に記憶操作が得意な奴がいたな」

「は、箱庭の使者に手を加えるのはまずいのでは……」

「いや、手を加えるのは『球磨川を見た』という記憶だけだ」

――二人にこの学園で戦ってもらっては困る。

「……ややこしいことになりかねないからな」

「わ、わかりました」



黒神の車が通りすぎた後、球磨川は先ほどの声が聞こえた方角を不思議そうに見つめていた。

しばらくして彼も気が済んだのか、再び球磨川禊はD組の寮に向かい歩きだした。

『……ま、気のせいかな』

懐かしむような、切ないような……そんな静かな笑みをそつと口元に浮かべて。

『——また会おうね。めだかちゃん』

## 第30話 決別

平日の朝、それは学生にとつては登校の時間。日曜日から月曜日へと変わる最もつらい期間ともとれるこの時間に、ジリリリと目覚まし時計のけたたましい音が鳴り響く。

「んん……」

正邪は目覚まし時計に手を伸ばし、

「うっさい」

とりあえず外にぶん投げる。

「二度寝最高。……すう」

そして正邪は再び暖かい布団の中へ。

「正邪！ 起きて！ 起きてってばあ！」

「……もうこいつと同じ部屋はいやだ」

朝。それは一日の始まりであり、起きる者によつては至福の――

「――時なわけねえだろ!!」

毎朝ゆつくり起きようとしているのに、針妙丸にはいつも変な時間に起こされてしま

う。

幻想郷から外の世界に飛ばされてから静かに起きた試しがない。

正邪は布団を両手でつかんだまま、ゆっくりと身体を持ち上げ針妙丸に睨みを利かせる。

「あ、やっと起きた！ あかね」

「うっせえ」

安眠妨害をしてくれた針妙丸の頬に全力でピンタを決める。

神聖なる眠りを邪魔をした者の罪は重い。しかし思ったよりも子気味のいい音がしたので二度寝が非常にはかどりそうだ。

「すう……」

張り手によつて倒された針妙丸を尻目に正邪はゆっくりと自分の身を布団の中へ。

逃亡中の頃に布団代わりになっていた落ち葉よりも遥かに快適だ。全身がぬくぬくとして気持ちがいい。

「う、あいた……。な、なにも叩かなくなつて……」

「——ちつ、あれぐらい力を入れてやれば五分は気絶するかと思つたのに」

「気絶させるつもりでやったの!? とりあえず早く起きて！ 緊急事態なの！」

これ以上うるさくされては敵わないので、正邪は嫌々布団を身体から剥がし身を起こ

す。

「で？ この私の目覚めを邪魔をずるとは、一体どういった要件だ、姫様？ くだらない用事だったら、許さんぞ」

「それが……け、慶賀野さんが部屋にいないの！」

「はあ……どうせトイレだろ？」

「だったら呼ばないよ！ いいから来て!!」

「その前に洗濯物だ。今たたまないと絶対に後でめんどくさくなるからな」

「もおく!! 早くしてよ！ 洗濯物より友達じゃないの!？」

「悪いな。優先順位ナンバーは自分のことなんだよ。それと慶賀野は友達じゃない。

強いて言うならお前のだ」

「——クズ」

「何とでも。むしろ誉め言葉だって」

正邪はどれどれと風呂場に置いてあつた洗濯物に手を……

『あ、正邪ちゃん。おはよう。洗濯物はたたんでおいたよ』

「——お前、何してんだよ」

伸ばす前に風呂場で球磨川がさも当然のようにいた。

正邪がたたもう、と思っていた洗濯物は既にたたまれ、かごに入れられている。たた

まれた衣服に全くしわもなくひどく丁寧であることから、彼の几帳面な性格が出てくる。

「いや、そうじゃない。なんでお前がここに——」

「どうしたの正邪……あつ、変態!!」

『やあ針ちゃん。良い朝だね。それと変態呼ばわりはやめてよ』

「不法侵入の上に女子の洗濯物を漁ってるやつを、他にどう表現したらいいのよ」

針妙丸がひどくうろたえた様子で震える指を球磨川に向ける。

『失礼だなあ。人がせっかく善意で洗濯物をたたんであげたっていうのに』

「嘘つけ。どうせ私たちの下着目当てだろ。こっち来い、針妙丸。目が腐るぞ」

『ひどっ!!』

汚物を見るような目をしながら正邪の方へ後退する針妙丸に、球磨川はその場で崩れ落ちる。

『ひ、ひどい……ひどいよ。僕はただ……二人の神聖なる下着をすごく綺麗に、善意で、しわが全くつかないようにしたっていうのに……うう……』

意外と球磨川には綺麗好きなどころがある。やるからにはキッチリとやる。普段やる気がない球磨川にしては珍しい行動だ。

「……」

「おい欲望駄々洩れじゃねえか。それになんで下着限定なんだよ」

——だが二人に泣き落としは通じなかった。

いい加減本音を言え。本音を、と迫る正邪と黙って立ち尽くす針妙丸に、球磨川の動きがヒタリと止まる。

『……とまあ、泣いてるふりしても、さすがにもう心配してくれないから』

『正直に言うね』

『——下着を見て何が悪い!!』

「全部だ!! なに堂々と言ってるんだ、お前!!」

完全にただの逆ギレである。

『だって! どうせタダのパンツだろ!? 見て何かを失うわけでもないし、ただの下着のどこに恥ずかしい要素があるって言うのさ!! パンツに失礼だろ!!』

「はあっ!」

——なにいつてんだ、こいつ。

全国男子が両手をあげて賛成するぞ、と球磨川は『だから、女子の下着は見てもいいんだ!!』と正論っぽい暴論を展開する。

「お前から男子がいやらしい目で見てくるから、見られる側の女性は嫌なんだよ!! 少しは自重しろ!」

『僕は悪くない』『女子のパンツをエロい物と勝手に決めつける、世の中の男性が悪い!!』  
「だああああ!! パンツパンツうっせえ!! とりあえず風呂場出る、風呂場!!」

暴論を論破していく正邪に対し、『女子の下着を見るのは罪ではない』と断固として主張を続ける球磨川。

「……なに正当化しようとしてんだ、この変態」

加えて、針妙丸が感情のこもつてない罵倒を出して来たらいよいよ末期だ。

「——あれ。ちよつと待つて。つてことは……私の下着も、見た……!?!」

さつき飛ばした罵声とはうって代わり、恐る恐る尋ねる針妙丸。球磨川がまともな答えを出すとは心内でわかっているとしても。

『うん。綺麗な赤い——』

「いやあああああつ!! 言うな言うな言うな言うなアア!!」

針妙丸は拳を振り上げ、勢いよくパンチを何度も球磨川の顔面に叩きこむ。

『グホツ!! ちよ、顔面は、鼻を重点的に狙うのは——グウ!? やめ、いた——グボア!!』

女子の馬鹿力は時には侮れない。針妙丸の拳が当たる度に鈍い音が風呂場に響く。

球磨川を見る針妙丸の目が死んできた上に、状況が混沌としてきたので、正邪はさつさと球磨川を自分達の下着から離れた。

球磨川を続けて殴りつけようと、暴走する針妙丸を羽交い絞めにして連れて行くのも



忘れずに。

|||||

「ぶち殺してやる変態ぶち殺してやる変態ぶち殺してやる変態ぶち殺してやる」

「どうどう。はやくお前も手掛かりないか調べろよ。慶賀野のことが心配なんだろう？」

「正邪どいて！ そいつ殺せない!!」

「あ、ダメだこれ。会話成立してない」

これ以上、正邪達の部屋にさせざるわけにもいかないのです、針妙丸だけでなく、ついでに球磨川も連れてきた。かえって火に油を注ぐ形になっているかもしれないが、どうでもいい。

まあ、なにかの役には立つだろう。

『ていうか何で僕も慶賀野さんの部屋に？ ていうか慶賀野さんどこ？』

「それを今探してんだ、よつと。なんだ、これ？」

荒らされた部屋の中にあつた机の上には一枚の手紙が残されていた。

正邪はヒョイと机から手紙を拾い上げ、封を解いた。

「えくと……」

『新生徒会の皆様、——あんたらムカつくので適当に仲間の一人を拉致らせてもらいま

した〜！ テヘペロ♪』

「ストリートに来たな……いい度胸してるじゃないか」

『名乗る前に殺されんのも嫌だし、名乗るとくね。私様の名前は寒井美紀さびいみき。役職上、生徒会の会計やってます、はい。一言でいえば、私たちの王様、全土様の腹心って感じかな？ 自分で言うのものはずかちい』

「だったら書くなよ……」

『早い話、君のお仲間は預かってるから多目的棟まで取りに来てよ。た〜くさん歓迎の準備はしてあるから、退屈せずに済むと思うよ〜にしし。じゃ！ またね〜！』

「……ふざけた手紙だ」

『なんか頭が楽しそうな差出人だね』

正邪は手に持った手紙をクシヤクシヤにしてポイ捨てる。部屋の中なので環境にも悪影響はない。セーフ。

「正邪、行こう。多目的棟……だったよね」

意気込んで正邪の腕を引っ張る針妙丸だが、正邪は動かさずじつとしている。

「どうしたの？ どの道今日多目的棟に行くつもりだったんでしょ？」

「——パスだ」

「……………え？」

「あからさまに罠だろ、これ。危ないとこに自分から飛び込むとか……バカのことだよ。あくやだやだ。頭単純すぎんだから、お姫様はもう。王子様にでもなったつもりか？」

正邪は針妙丸の手を乱暴に振りほどき、腕を回す。

「ちよ、ちよつと……………」

「さて、私はもつと骨のある会計候補を探しに行くとするか。……今度は敵にあつさりさらわれない奴で」

「——ふざけないでよ！ 慶賀野さんは私たちの仲間なんだよ!？」

正邪のあんまりな態度に憤激する針妙丸。しかしそんな彼女を正邪は鼻で嘲笑う。

「ハッ！ 仲間ねえ。足手まといの間違いじゃないのか？」

「なっ……………!？」

冷酷な正邪の発言に面食らう針妙丸。

あくスッキリする。その顔が見たかつたんだよ。

「まーだわからないのか？ 元々、私と球磨川以外はほんの人数合わせなんだよ。お前らの替えなんていくつくらでもある。もちろん、あんたもな」

「正邪……それ本気で言ってるの……………」

いつもなら針妙丸も正邪の発言が嘘のものか本当のものかがわかった。だが、針妙丸は今の正邪からは全くその見分けをつけられなかった。

「何度も言わせんな。いなくなりやあ、いなくなつたで、そこまで。球磨川さえいてくれりやあ、新生徒会的には……なんの問題もない」

「正邪……アンタどこまで……」

狼狽し、ふらつく針妙丸を後ろから誰かが支える。

『オイオイ、そりやないだろう？ 慶賀野さんも僕らの仲間なんだ。助けてあげなきやかわいそうじゃないか』

「くま、がわくん……？」

そんな球磨川を正邪は解せぬと睨む。

「……どういうつもりだ。球磨川」

『あ！ けど、僕は今の発言聞いても「新生徒会」やめるつもりはないから安心してね。ただ僕は……僕の「仲間」を助けに行くだけだからさ』

『いいよね、会長』と球磨川はしばらく正邪を見つめた後、正邪の方から折れた。

「けっ！ 勝手にしろ。どうせ何言つても聞きやしないんだろ？」

『……まあね。僕は一度決めたことはやる主義なんだ』

「気分屋がよく言うよ……とにかく!! 私は行かないからな。罨がある場所なんかは、

だあれが好んで行くかつーの」

苛立つ正邪を無視し、球磨川は針妙丸の腕を引つ張り、玄関へ歩き始める。

『……。うん、じゃあ行こっか針ちゃん!』

「ええっ、ちよつと!?!」

球磨川は針妙丸の手を掴み、ムリヤリ扉の外へ走って連れ出していく。

慶賀野の部屋には——ポツンと正邪のみが一人残された。

「……なんだっていうんだよ。どいつもこいつも」

## 第31話 自分のため、仲間のため

アパートの階段を下り、針妙丸と球磨川は多目的棟へ向かう。

「……っというか、なんでアンタまで来るの？ 正邪以外とは慣れ合う気はなかったんじゃないの？」

『ひどいなあ。僕だって一応「新生徒会」のメンバーなんだぜ？ 仲間を心配するのは当然のことさ』

「……どうだか」

白々しい球磨川の言動に針妙丸は眉をひそめる。

——ただでさえ慶賀野さんがいなくなっちゃって不安なのに。球磨川くんと一緒に最悪以外の何物でもないよ。

「……それにしても、どういう風の吹きまわし？ 『慶賀野さんが仲間だからだ』なんてアンタみたいな人でなしに」

『おいおい、僕だからって何でも言っただけじゃないんだぜ、針ちゃん。——それに僕なんかを人でなしだなんて、人外の方に失礼だよ』

ははっと笑って球磨川は針妙丸の前へ進む。

『僕は弱い者と愚か者の味方だ。見捨てるような真似はできないなあ』

「……………どうだか」

そもそもこの男自体も、発言も全てにおいて胡散臭い。全てを嘘と冗談で塗り固めたような男だ。

次に球磨川は真剣な顔をして針妙丸に言った。

『それに……………慶賀野さんは、間違いなく過負荷側の人間だしね』

「慶賀野さんが……………過負荷……………?」 冗談もほどほどにしてよ!」

——何を馬鹿なことを。慶賀野さんが球磨川と同類? バカも休み休み言え。

『あつそ、まあ針妙丸ちゃんがそう思いたいなら、そう思うといいよ』

球磨川は意地悪な笑みを浮かべて、針妙丸に横顔を向ける。

『けど……………あんまり彼女を信用しない方がいいと思うよ? 過負荷なんて信じても、痛

い目見るだけだから』

クスツと微笑み、球磨川は口元を三日月のように尖らせる。

——瞬間、針妙丸の背中に怖気が走る。

「……………そうね、あなたに関しては全く信用しないでおく」

『……………あれ? そういう風にとる?』

針妙丸は馬鹿げていると球磨川の忠告を一蹴する。

『……。ま、別に気にしなくてもいいよ。これはあくまで、「学生生活の先輩」としてのアドバイスだから。「効効くも効効かない」も、キミの勝手だ』

「ごちゆうこく、ドーもありがとうございました、下着泥棒先輩」

『……下着泥棒』

以降、がつくしと肩を落とした球磨川と針妙丸は道中黙りながら、目的の多目的棟に向かったという。



「おくい！ 慶賀野、学校行くぞって……あれ？ どうして姉御が……」

「……コウジか」

正邪は慶賀野の身に何が起こったかを簡単に説明する。

「……マジか。だったら早く行かねえと……姉御は行かないんですかい？」

「私があ？ やだやだ。どうせ敵の罠なんだろう？ だったら飛び込んでいくこたあねえよ。人質なんて気にしてられるかってーの」

——ま、どうせこいつも、私に行け、とせがむんだろーがな。

「わかったつす。俺は行くんで、姉御はゆっくり部屋で休んでいてください」



桜街が口にした予想外の答えに正邪はポカンとなつてしまふ。

「お前は行けとは言わないんだな。私に」

「はい。最近俺らは姉御を頼りすぎてますから。たまには休みたいたきもありますよね？」

「ははは、と桜街は苦笑し玄関の方へ歩いていく。

「姉御は……いつもそうでしたよね。何もできなかった俺達をいつも『お前ならでき』って、『一緒にやろう』って引つ張つてくれて。俺も……いつも頑張つてる姉御にたまにはいい所見せたいんすよ」

「……」

「姉御、ここで大人しく待つててください。今回は俺達三人がビシツと決めますんで『けど、今回もどうせ球磨川の手柄かな。トホホ』と少し残念そうにうつむく桜街は、扉をくぐり、球磨川達の後を追いかけて行った。

——『行こつか。針妙丸ちゃん』『今回は大人しく待つていてください』

つい先ほど言われた言葉が正邪の頭の中を駆け巡る。

「ちつ、なんだつて言うんだよ。全く……」

どうしてお前らは、そんなに他人の心配をするんだ。

——仲間など、利用しない限り足かせになるだけじゃないか。

「あく……邪魔くさい邪魔くさい。ほんと、世の中上手くいかない事ばつかだよなあ……」

頭の中で毎朝の光景が浮かぶ。嫌々なつたとはいえ、仮にも生徒故に学校に向かう日々。

『正邪ちゃん！ 今日も学校行きましょう！』

——それは大体はコウジと一緒に、ある日は一人でも部屋にやって来やがった。「ほんと、マジでクソだ」

針妙丸を置いて行くときは、正邪と彼女二人で登校する日もあった。

針妙丸目当てではないのか。

『えっ？ 一人で行って？ 嫌ですよ。アタシは、正邪ちゃんとも行きたいんです』  
ある日、どうしてかも聞いた。

『何でって……。うーむ、答えるのは難しいですね。友達……だからですかね？ 強いと言うなら、なんとなくです。なんとなく、一緒にいて欲しいんです。一緒にいて楽しいんです。正邪ちゃんも、針妙丸さんも』

もし自分たちと会えなくなったらの話もした。

寿命も、帰る場所も妖怪である自分たちとは違う。

『正邪ちゃんが天邪鬼？ 知ってますよ、もう』

——多分、絶対にわかってない。完全に性格の意味でしか見ていないだろ。

彼女らは人間である。死であろうと帰郷であろうと……避けられない別れは、いずれやってくる。

『……ちよつと寂しい、かな。——ですけど、一瞬一秒でも、一緒にいたい。共に時間を過ごせる今が、一番大切だと思うんです』

「……」

『ですから、アタシ毎日迎えに行きますよ！ ……もつともつと、針妙丸さんや正邪ちゃんと一緒にいたいんです』

「……つたく」

——変わり者だな。天邪鬼の私と一緒にいたいだとか、一緒にいて楽しい、だとか。

——どんなDMだよ。悪口で頭叩かれないのか？

『コウジくんも……多分アタシと同じ気持ちだと思います』

「天邪鬼なら、ここで敵に裏切ったり、一人で助けに突っ走ったりするんだろーがな……」

——本当に変わり者だよ。お前らは。

「……まったく丸くなったもんだ。——私も」

そして正邪は一旦自分の部屋に戻り、布団を干してから、

「——さて、これで自分のことは済んだな」

また外に出たのであった。

## 第32話

## 全土の右腕、寒井美紀

「……が多目的棟……」

でかい。ただその一言に尽きる建物だ。

見たところ四階建の建物で横に広く、旧体育館と思わしき古い建物も見える。

あまりの広さに、地図なしで入ったら出てこれるのかも怪しい。

『いやあくこういうでかい建物見ると、爆弾とかでボンって吹っ飛ばしたくなるよねー！ なんかスツキリしそう。爆発とかハリウッドのアクション映画とかじゃ定番でしょ？』

「……本気？」

『嘘嘘。言ってみただけだった。それに僕はテロリストじゃないし。この建物が無くなったら依頼主も困っちゃうでしょ？』

「ほんと、ヤメテよね……」

全てを台無しにしてしまう球磨川なら本当にやりかねない。球磨川がその気になれば彼のスキル『オールフイクンション大嘘憑き』とやらで全人類でさえ一瞬で消せるのだから。

——まあ、流石にそんなことはしないと信じたいが。

針妙丸と球磨川が多目的棟を見ていると、近くにいた男子生徒と女子生徒が近づいてきた。

『ん？ 誰だい、君たち？』

「あつ、あなたたちが新生徒会ですか？」

最初に声をかけてきたのは実験用の白衣を着た赤毛の綺麗な女子生徒だ。

「はい、D組所属の少名針妙丸です！ あなたたちが今回の依頼主？」

「そうですね！ あちしはB組所属、てごまるまるまる手子生丸々！ ほら、キミも挨拶挨拶ウ」

手子生に軽く軽く背中を叩かれ、前に出てきたのは細身の男子生徒。

黒髪が前にかかっている、幽霊のような印象を受ける少年だ。肌も色白な分、余計にそう見えてしまう。

「ぼ、ボクはC組所属の、つぎき次木。つぎきようじ次木要二つて言います。はい」

次木は自身が無さげに何度も会釈をする。

「ど、どうも。こちらこそよろしくね次木くん」

挨拶に応じようと針妙丸が手を出そうとすると、次木はビックリしたのか、急に腕を引つ込める。

「……？ どうしたの？」

「ああ……次木くんはすつごくシャイだね。握手は勘弁してやってくれないかな？」

「そ、そうなんだ。ゴメンね、次木くん」

「いい、いいんです。当然のことなんです。穢らわしいボクなんか、神聖なじよ、女性に  
触るなんて……お、恐れ多い事なんです」

『……』

球磨川は目の前にいる次木という少年をじっと見つめる。まるで物珍しいものにも  
も会ったかのような……

「あ、キミからも名前聞かせてもらってもいい？」

そうしているうちに球磨川が手子生てごまるから声をかけられる。少し反応が遅れたことか  
ら、ただ単にぼうつとしていただけかもしれない。

『僕？ なんてことない、球磨川禊つてどこにでもある名前さ。針ちゃんと同じく、D組  
所属の劣等生だよ』

——苗字も名前も結構珍しい名前だと思っただが。

「つてあんた、さりげなく私まで劣等生に位置付けてない？」

『言葉のあやつてやつだよ』

「あや……」

「そういえば、次木、さつきあなたに触ったけど、あちしのは女性って認識じゃない  
わけ？」

「そ、そういうわけじゃなくて……そ、それよりも、さ、早速なんですけど、ここを占拠したA組の生徒たちを、お、追い出してもらいたい——」

「——あつ！な——んだあ！ おつせいじゃない！ 私様、随分と待ったつて言うくらい待ったつたよ！！」

『!!』

四人は突然聞こえた声の方を向く。多目的棟の屋上の方からだ。

「ヤッホーやつほやつほーう！ でも、よく来てくれました。私様、大変……満・足、です！」

派手な色をしたセーラー服にピンク髪のツインテール。服の色と合わせたハイヒールが音を立てその存在を掻き立てる。

『ハハツ、随分とハイテンションなのが出てきたね』

「この学校つて……まともな人、数えるぐらいしかないのかな……？」

——もしかして、あれが誘拐の手紙の主、寒井美紀なのか。

よく考えれば百々の方がまともだったのだろうか？ いやあちらも辻斬りまがいなことをしているし……。

「あつ！頭おかしい人発言、ちよつと傷つくなあ。……でも、そんな言葉でも飲み込むのが、私様の度量の深さなのです」



「は、はあ……」

——うん、とりあえず、めんどくさい人であることはわかった。

「そ、それよりも……は、早く多目的棟を解放してください！」

「そうよ、あちしも実験室が使えるきや実験ができないじゃない！」

「あー……ごめんね、耳遠くてー。こっからじゃ位置的にも下々達の声が聞こえないわ  
全く」

「さつきバリバリ聞こえてたじゃないですか!？」

「シヤラップ!! アンタらは黙ってなさい。あー聞こえない聞こえない!」

美紀みきに怒鳴られ、押し黙る手子生と次木。

屋上のドアが開き、数人の生徒が椅子に縛り付けられた一人の生徒を連れてくる。

「ん〜聞こえない〜聞こえない〜、聞こえないよね、ね? 功名新生!」

「ツ——!! ンン——!!」

「功名さん!!」

そんな中、椅子にテープとロープで縛り付けにされている慶賀野の様子を思慮深げに  
観察する球磨川。

『……。あれもあれでアリかも』

「何の話よ!? 球磨川、あなたの万能能力でなんとかならないの!？」

針妙丸は球磨川に助力を願うが、

『んじゃあ、この建物ごと消しちゃおっか』

このタイミングで球磨川がロクでもないことを言いだすのは、流石に彼女も予想して  
いなかった。

「は……はあ!?! あんた、そんなことしたら、慶賀野さんが落下死しちゃうよ!?!」

『ん〜……そこは我慢かなあ。大丈夫! 落下死の痛みなんて、ほんの一瞬だから。バ  
ンジージャンプ失敗の経験者の世界一ツイてない僕が言うんだ。間違いない』

……人間としてすでに終わっている発言だ。

痛いのは一瞬だから、殺されるのを我慢しろなど外道にも程がある。

「失敗ってアンタちよつと……!?!」

『じゃあ、改めまして……!!』

球磨川は両手を広げ、高らかに能力発動の宣言を――

『なーんてね! 本気かと思った? ダメだよ、落下死とか。人様に迷惑かかるからね

!』

「ほっ……」

ぶつちやけ球磨川なら本気でやりそうで気が気じゃない。

『そもそも、学校の備品ごと消しちゃうとか、依頼主にも正邪ちゃんにも怒られちゃうからね。流石にそこまではしないよ』

「……正直そんなのお構いなしにやるかと思ってた」

『まさかジョークが通じないなんて人生の半分損してるぜ、針ちゃん。』

——けど……あそこの主催者さんには冗談が通じるみたいだね』

「えっ……？」

針妙丸が狼狽える中、美紀は屋上でドンと構えていた。

絶対の自信を持った目で悠々と。

「——へえ……千太郎っちの言った通り、あんた、なかなか面白いやつじゃない。球磨川禊」

『ハハ、美紀先輩ほどじゃないさ。じゃあ、こつちに降りてきて一緒に話してもどう？』

……できれば慶賀野さんもセツトで』

「バーガーポテトセツトで、みたいな感覚で言わないでくれる？ それと、私様はファ

ストフードじゃないわ、特上ステーキよ」

「気にするところ、そこなんだ……」

「お高いのよ。私様は。ありやとーごございましたー、つてコンビニ感覚で買われちゃ不

満なわけよ」

どこかズレた美紀の指摘に苦笑する針妙丸。

「ま、アンタらが上がってきたら、話は聞いてあげてもいいよ？ それまではここで律儀に気長に待つててあげるからさー」

「ふ、ふざけないで！ あなたがそこから降りてきなさいよ！ みんな迷惑してるの!!」

ふう、と一息ついた後、再び美紀は口を開く。

「——聞こえなかった？ 『上がってこい』って」

——とてつもない怖気。

美紀は横に置いてある慶賀野付きの椅子を屋上から蹴飛ばそうとする。

「ンン——!?!」

「け、慶賀野さん!! アンタ何すんの!?!」

少しでもバランスを崩せば落下する位置で、あえて美紀はスカスカと慶賀野の椅子から蹴りを外している。

「……あなた達に選択権なんて、無い。『私様の言うことを聞く』。それ以外の選択肢なんて——ハナっからアンタらに無いのよ」

下手をすれば本当に慶賀野を屋上から落としかねない。大嘘憑きがあるとはいえ、死の痛みは——

『……しようがないなあ』

迷う針妙丸の思考を断ち切るように、球磨川が前に出る。

「球磨川、くん……?」

『……僕としては気が進まないけど。わかった。……美紀さん、ちゃんとして。そこまで行つてあげる』

「ふふ、階段を使つて、入り口から上つてね? じゃないと、せつかく時間かけて準備した意味がないから」

あからさまに毘だと言っているようなものだ。

『言われなくても、そうさせてもらうよ』

「ダメ……絶対に毘よ!」

『……針ちゃん。人生には、通りたくななくても、通らなきやいけない道があるんだ』  
球磨川はスタスタと建物の入り口に向かって歩いていく。

『だから僕は行かなくてはならない』

『仲間を救うためなら』

『身体の傷くらいわけないさ』

「球磨川……くん」

「はーい! 一名様ごあんな」

『——でも楽には済ませたいよね』

歩く途中で球磨川は螺子を美紀に向かって投げつけた。

「ヤバッ!?!」

高速で迫る螺子に少し体の反応が遅れる美紀。

『——甘いね』

「——アンタもね」

——瞬間。飛ばされた螺子は確実に、

「う、そ………!」

球磨川の頭部を吹き飛ばした。

「ありやりや吹き飛んじやったかー。まあ、でもまた元に戻んでしょ? 『大嘘憑オールフィクションき』  
だっけ? これじゃあ投げ返しても無駄だったな〜」

あー焦った焦ったナイスキヤツチ私、とその割には気楽そうにポケットから取り出した扇子で自分を仰ぐ。

「球磨川、くん………」

「で? そこのおチビさんはどうすんの? 逃げる?」

「………!!」

——逃げてたまるものか……。功名さんを助けるまでは………!

未知の強敵と戦う恐怖を堪え、針妙丸はグツと背中に背負った輝針剣を抜く。

「——その意気だ。さすが元レジスタンスひっくり返す者」

「えっ……?」

突然後ろから伸びた手に肩を掴まれ、針妙丸は目を見開く。

「あとは私に任せろ」

その手はもう何度も見た細くて強い手で。

「正邪……?」

正邪は近くで球磨川の遺体に愕然としていた二人の生徒の内一人を捕まえて、突然お姫様抱っこをする。

「ちよつと体借せ」

「えっ、ちよ——あちし、お姫様抱っこなんて初めてで——」

すると、すぐに正邪の腕から声が聞こえなくなる。そして正邪は背を向けたまま寮の方へ歩き始める。

「……。よし針妙丸。帰るぞ」

「え、け、けどまだ功名さんが……」

正邪はニンマリと笑い、腕の中にあるはずの生徒を見せ——

「こ、功名さん……!? 一体どうして……」

「リバーサイドオロギ革命返し」

「『慶賀野』と『さつきの生徒』の『位置』を、ひっくり返した」



## 第33話 ミイラ取りはミイラに

「へえ……あんたが鬼人正邪。千太郎せんたろうつちが世話になったね」

美紀みきは持っていた扇子を閉じ、正邪に指を刺す。

「ここであつたが百年目！ さあ、私様のところまで登つて来なさい!!」

「さ、帰るぞ」

「……………え？」

正邪は挑戦に応じず回れ右。針妙丸と一緒に寮の方へ戻って行ってしまふ。

「ちよ、ちよつと!? まだこつちには人質がいるのよ!？」

「悪いが、ドラマの再放送があつてな。あんたの挑戦はまた今度な」

「ど、ドラマつて……………あんた……………本当にそれで」

「うっせーなあ。オメーの家がどうか知らねーが、ウチのテレビには録画機能ついてねーの。生で見るしかねーんだよ」

狼狽する美紀を相手にせず、正邪は平然と敵前逃亡。

「お前も来い球磨川……………つて、うわあ……………スプラッタじゃねえか。一応身体だけ……………針

妙丸。おまえ運べ」

「ええ!? ヤダ!」

「お前なあ……こんな時だぞ?」

「ああ、もう! わかったよお!! 球磨川くんには絶対後で文句言ってやる……」

『うえ』と嫌がるつつ頭の無くなった球磨川の腕を掴んで引きずる針妙丸。

そして全速力で走る正邪のあとを追う。

「な、なんてやつなの……人質を置いて逃げるなんて……」

「あ、あの……」

油断をさせる為の作戦かと思ひ、警戒を緩めず様子を見る美紀の足に誰かの足が当た  
る。

そのことに少しイラツときた美紀。

「なによ! 今ちよつとお取り込み中なんだけど!」

「そろそろ、あちしを解放してもらえませんか……」

「……はっ!」

先ほどまで慶賀野けがのが縛られていた位置に下級生が。

「あ、ああっ!!」

いつのまに!? た、確か……

『あいつのスキル「革命返し」リバースイデオロギには、注意しておくでありますよ』

——これが千太郎っちが言っていた、鬼人正邪のスキル……!!

二つの物の位置や場所のひっくり返し。

……そんなことまで可能なのか。

「てじまる手子生と功名こうみやうの位置を……!! なるほど、厄介! 厄介極まれりね!」

もたついている間にも正邪と美紀のいる多目的棟との距離はどんどん離れていく。

「ぐぐぐ……こうなったら、備えあれば嬉しいプランBに変更よ!!」

寒井はパチンと指を鳴らし合図を出す。

「バレたか! だがもう遅い! こんなもうこんなに距離が離れてお前になにができるっていうんだ!」

正邪は得意の逃げ足ですぐさま多目的棟から離れていく。針妙丸も彼女に続いて走る。

「悔しければここまで来てみやがれ、バーカ!!」

「……残念でしたね。コスプレ新会長」

正邪の目の前にタレ目の少年が迫る。

「次木くん!」

「いいっ!? はやつ——」

「——じゃあね」

何を思ったのか、正邪と針妙丸に向かって次木は手を伸ばす。

そんな中……正邪は、

「くっ、どけっ!!」

——隣に居た針妙丸を横へ突き飛ばした。

次木つぎぎの右手は見事に空振り宙を掴む。

「……ちえ」

「残念……だったな。お前が捉えたのは私だけだ」

だが次木の左手は……確実に正邪の足を掴んでいた。

「ま……いいよ。ボクの、目的は……きみだし」

次木がそう言った瞬間、彼の触れた正邪の足が石化する。

「な——か、体が——」

「せい——!!」

「まずひとり……」

触れられたところから徐々に石に変わっていく。彼の能力の影響は肩にまで及び、首

から下は石になりかけている。

「なんでだろーなあ……こいつやお前を囮にすりや逃げ切れたつてのに」

まだ動く首で正邪は石と化した自分の腕の中で眠る慶賀野を見る。

「……………」

そうしてため息をついて……

「ほんと……邪魔だよなあ。おまえ」

次木の能力が首にまで侵食しやがて正邪は完全に石になる。

「……………」  
「……やっぱ石化シーンってそそるなあ……。この状態で持つとずいぶん軽くなるし……。くく、くくくく……っ」

「次木……くん……!?!」

「ああ……そうだ。言つてなかったね、す、少名さん。ボクは……革命学園の誇る? 一番の嫌われ者の能力持ち……スキルホルダー学園のみんなからは、『死神』って呼ばれてるよお……!」

「し、『死神』……アルカナ持ち……!?!」

「さ、寒井さんや全土様ぜんどの邪魔をす……どうしてもするっていうなら……ぼ、ボクも容赦しないよ。今度はキミの石化シーンの番だカラさア……!」

「ひっ——」

信じられない豹変っぷりだ。黒髪で隠れている目が爛々と光っている。

「じゃあね。また今度会った時には握手できるといいなあ……」

二人とも次木にズルズルと引つ張られて行つてしまふ。

「功名さん!! 正邪あ!!」

「ナイスよ、次木。……あとでたつぷり褒めてあげるからねー!!」

針妙丸は彼を追いかけようとするも、思ったより次木の足が早くて追いつけない。

「しししつ。人質が二人に増えて倍々ボーナスつてどこかしら? じゃ、私様は最上階でお茶でも飲んで待つてるから」

「ま、待つて!」

「言われなくてもちやんと待つて。……『最上階』で、ね♪」

『ばいならー』と言葉を残し、寒井は屋上の扉の向こうへ消えて行つてしまった。

## 第34話『単に嫌いな奴が堕ちていくところ』

多目的棟に向かって走る人影が一つ。

「正邪の姉御お!! 少名さーん!! どこだあつー!?」

「あ……うあ……!」

「い、いた!! 少名さん!! それに球磨川も!」

——どうして。

「す、少名さん? どうした? 姉御は?」

『やっぱ……邪魔だなあ。お前ら』

——どうして。どうして!

「コウジくん……私……ずっと、ずっと正邪の」

——どうして私はいつだつてこうなんだ!

「正邪の足手まといなの……!?!」

針妙丸はゆつくりと桜街さくらまちの方を振り向く。ふるふると体を小刻みに震わせ、目元に涙を溜めながら。

「少名さん……それは……!」

『そうだねー。正直に言つて邪魔なだけだと思ふよ?』

針妙丸の後ろに立つのは……すんなりと頭部を戻した無傷の球磨川禊。

「球磨川……!」

『だつてさ、さつき身代わりになつたのだつて。針ちゃんが逃げ遅れちゃつたからでしよ? ——びびっちゃつて』

少しづつ表情に真剣味を帯びてくる球磨川に針妙丸は気圧されてしまう。

「そ、それは……!」

足が一步自然と後ろに下がつて。

『それつて……足手まとい以外の何でもないよね? 結局正邪ちゃん捕まっちゃつたんでしよ?』

「……っ」

「球磨川禊! テメエ!」

桜街が球磨川に殴りかかろうとしたその瞬間、

『——ま、過ぎたことは仕方ないさ!』

「……えっ」

けろつと球磨川は笑顔になつた。

『針妙丸ちゃん。コウジ君。ここは僕一人に任せてよ。バシツと行つて二人を助けに



行ってくるからさ』

「け、けど……球磨川くん一人じゃ」

『君たちはここで僕の帰りを待っててよ。大丈夫。僕には完全無欠の「大嘘憑き」オールワイクシヨンがある』

「……あつ……そつか」

『だからさ、安心して僕に任せてよ。いつだって、僕と正邪ちゃんの二人がいれば、革命学園の能力持ちなんて敵じゃない』

「……うん」

『君たちにはここで、僕を信じて、僕らの帰りを待ってほしいんだ。』

あつ、でも立ってるの疲れたらコンビニとか適当なところで休んでてよ。

少し長くなるかもしれないからさ』

「……そうだね」

『もし無事にこの件が解決したら、みんなでご飯とか食べに行こう！ 次の休みは遊園地とかいいね！』

「ふふつ、それも……いいかも。みんなで……正邪と」

『もちろん僕のおごりさ。この中じゃたぶん一番歳上だからね。それに一応副会長だし』

「珍しく気前がいいね、球磨川くん」

「……」

針妙丸が笑みを浮かべるなか、コウジは黙って口を紡いでいた。

『もちろんコウジくんもさ。だいじょーぶ！ 君だけハブるなんてことはしないからさっ！』

ポンポンと桜街の肩を叩く球磨川。

「……おお」

しかし彼に対する桜街の反応は著しいものではなく。

『おや、元氣ないね？ まっ、いっか。それじゃあ僕行ってくるね！』

球磨川は二人に手を振りつつ多目的棟の入り口扉へ向かう。

『じゃあ、二人は僕に任せて！ 後のことだって、僕と正邪ちゃんですんなり解決してあげるからさっ！』

そう言つて球磨川は入り口扉のドアノブを握る。

「——待てよ、球磨川副会長」

桜街の声に反応しピタリと手の動きを止める球磨川。どうしたのだろうか。そう思

い針妙丸は怪訝な顔をする。

——だって後のことは球磨川くんが、

「少名さん、あんたは……本当にそれでいいのかよ?」

「……へっ」

桜街に両肩を捕まれ、針妙丸はふつと我に帰る。我ながら間抜けな声を出していることに気がついた。

「球磨川副会長に……言われっぱなしで悔しくないのか?」

「……こ、コウジくん。一体何を言ってるの?」

「少名さんは……『自分が正邪の姉御の足手まといでしかない』って、本当に思ってるのかって聞いてんだ!!」

桜街の突然の大声に肩を震わす針妙丸。

——どうして……どうして怒っているの? コウジくん。

「だ、だって……コウジくん。私が行ったって、何も。どうせまた……誰かが私の代わりになって」

「今はその話をしてんじゃない。あんたが本当に姉御の足手まといでしかないって、自分でも思ってるのか聞いてんだっ……!」

——質問に答えやがれ!!」

静かな声色から徐々に強く剣幕を張る。

「——思ってるよっ!!」

——ずっとずっと……そう思ってた……!!

「そのせいで……正邪は死んだ……!! 何度も! 何度も何度も!!」

彼女の一度目の死は……私の罪も被って死んだ。

二度目も……私を庇って死んだ。

今回も……私をまた……!!

「だって……!! 正邪はいつも言ってたもん!! 邪魔だって! うっとおしいって!! 邪険にするし、イタズラするし、家事も押しつけられて! 私のことなんか……!!」

「っ……少名さん……」

『……』

針妙丸が引きつった笑みを浮かべるなか、球磨川はドアを開けようとせず静止したまま動かない。

「今回だって……私が功名こうみやうさんを助けに行こうって言い出さなきゃ、こんな事にならなかった……!!」

私は何も言わないで一人で行けばよかったのに……！ 私がああいう風に言ったから……正邪は反発してついてきたんだよお……！！」

「っ……………」

鬱憤を晴らすかのようにまくし立てる針妙丸に一步後退する桜街。

———「なんで、正邪。どうして？」

最後に言われた正邪の言葉が頭に響く。

『やっぱ……………邪魔だなあ。おまえ』

「なんで私なんかを助けるのよおっ！！ 正邪のバカアツ！！！」

肺の酸素を絞りに絞った。もうこれ以上大きな声は出ないと針妙丸が思ったところ  
で、

「——バカは少名さんの方だろっ！！」

もつと大きな声が、針妙丸の頭を通った。

「そんだけずつと一緒について……………！ なんて姉御と付き合いの浅いオレでもわかること

がわっかんねーんだよ……!!」

「はあ……?」

「正邪の姉御は!! アンタを足手まといでしかねえとか思ってるはずがねえだろ!!  
ずつと……誰よりも大切に思ってたんだよ!!」

「う、嘘だよ。だって」

「あつあああああつ!!! ざっけんじゃねえ!! ほんとは心ん中ではその事に気づいて  
んだろ!」

じゃなきやとつくにオレたちのことなんか見捨ててるはずだ!!

「テメエの自信無くなったところを球磨川副会長の甘言に惑わされやがって! メン  
タル紙かあんたは!」

『……』

球磨川は二人にバレないように少し下がった口元を隠す。

「か、紙って……」

「いいか、弱虫庶務。オレは行くぜ。本当に姉御の足手まといだろーが、それでも行く。  
足にひつついても行く。」

——いつか、姉御の隣に立てる時のために」

ハツと針妙丸は桜街の顔を見て、

「オメーはどうする？ 助けに行くか!? 行かねえのか!？」

「……」

押し黙った針妙丸に桜街は呆れたそぶりを見せて。

「はあ……。球磨川副会長。というわけで、オレは行くぞ。おふくろに頼まれる以外の留守番は嫌いなんだよ」

『……そ。じゃ、行こっか』

「——待って、球磨川くん」

鈴の音色のような声に球磨川は立ち止まった。

「私も行く。いえ、行かせて」

んー、と針妙丸の言葉を受けて球磨川は悩ましげな声を出す。

『……足手まといが、いくらくつついて来ても正邪ちゃんや僕らの邪魔になるだけじゃないかな。ここで大人しく——」

「イヤ。絶対にイヤ。……私は、私の責任をとらなくちゃいけないの。慶賀けが野のさんを、正邪を助けたいの」

『責任？ 君に責任なんてないよ。』

「——「君は悪くない。」」

君には無い責任をとる必要も、負う必要も無いんだ』

「あるよ。言い出しつぺは……私だもの」

そう言つて、場はしんと静まりかえる。しかしそれも一時の間。

『君はどうしてそこまでするんだい?』

水の上で波紋を打つように場面は再び動き出す。

『君は自分が正しいことをしてれば、いつか正邪ちゃんが素直になつてくれるつて思つてるんだらうけど、

——とんでもない誤解だよ』

負の波紋は球磨川を中心に広まり大きく波を立たせる。

『多少の幸せがあつたからつて、不幸を打ち消せはしない。覚えておくといいよ。』

——1京+1は、所詮——だつて』

「——それでもつ!!!」

枯れかけても、肺から酸素を絞りに大声を張り上げる。だつて——

「それでも私は正邪の隣に居たい!!」

ずっと友達で居たい。嫌だつて言われても、ずっと一緒にいたい。

——我ながらストーリーカーじみてるよね。



いずれ一緒にいてって言われるように、言ってくれるって信じてるから。  
『もうとつくに……やり直してるだろーが』

きつと……互いに分かり合えるって。信じてるから。だからその時のために。

「球磨川くん、あなた一人では行かせない!! 私も行く!! 正邪と慶賀野さんを助けに!! たとえ今が足手まといでも!

——いつか胸を張って正邪の隣に立てるように!!」

……言った。

「はあ……はあ……」

……言ってやった。

「だとさ、球磨川副会長」

けどその瞬間、

私たちの身体は凍りついた。

「……球磨川く、」

後ろ姿でも振り返らなくてもわかるように、

『ツ……!!』

青筋を浮かべて不愉快の文字をその顔にベツタリと貼り付けていたから。

『……』

だがそれも一瞬。彼が顔を手で覆うと、ぱつと元の柔らかな表情に戻る。

『惜つしい〜』

『もうちよつとで針妙丸ちゃんを』

『一般にすることができたのに』

くるつと笑顔で針妙丸と桜街の前に振り返る。

『嫌なことから逃げて、全〜つんぶ……それを他人に押し付ける』

『一般人に』

——恐ろしい。

「つ……!?!」

今改めて目の前にいるモノの恐ろしさを痛感した。

『いやあく困るよコウジくん。君さえいなければ、きつとうまくいつてたのにい』

ただ怒りを見せるよりも……今の球磨川の方が恐ろしく感じている。身体が……いつのまにか震えている。

「てめえ……少名さんの志折って何企んでやがる……!!」

『べつつにいく?』

『企むなんて……そんな深い考えなんてなかったよ』

『単に』

『嫌いな奴が堕ちていくところを見たかっただけさ』

ほんのジョークを言ったかのように球磨川はヘラヘラと笑っている。

——球磨川くんは……私を墮落させようと、していた……!?

『まっ、失敗しちゃったけどね』

危ない、ところだった。球磨川くんの言う通りコウジくんがいなかったら……私は。

『せっかく針妙丸ちゃんも、「僕たち」と同じになつてくれると思つたのに。……残念だ

なあ』

「てんめえ……!!」

改めて、球磨川たちは多目的棟に足を踏み入れる。

『まっ、二人とも行くつてことで。行ってみよっか』

## 第35話 二分する道

「……ほう。美妃がみごと正邪を捕らえたのだと?」

『はい、全土様。残るくまが……最重要警戒対象の一人も、時間の問題かと』

全土は携帯電話を耳に当て電話の主の返答に満足する。

「わかった。こちらもすぐに終わる。寒井には『よくやった』と伝えておいてくれ」

『——かしこまりました』

『報告ありがとう』と言って、全土は通話を切る。

「今のは?」

学園の出口に向かって走る車の中。黒神は全土に向かって電話の内容を問いかけるが、全土は『友達からさ』と、さも平然と答える。

「今日の放課後に遊びに行かないかと誘われてな。もうすぐ中間試験だというのに、のんきだな……」

「ははっ、大多羅三年生は友人が多いのだな。紹介してもらった生徒のほとんどはお前の顔を知っていた。特にこの学園の生徒会から非常に慕われているじゃないか」

いいものを見たと言いたげに機嫌よく黒神めだかはシートの背もたれに寄り掛かる。どうやら、記憶操作はうまくいったらしい。球磨川のこととは忘れていたようだ。

全土はちらりと運転席にいる男性に目をむける。運転手は特に何も言わないまま運転を続けている。

——運転手は『どんな嘘偽りをも見抜く』スキル能力をもっている。彼が自分に何も合図を送らないということは。

つまり、黒神めだかは完全に『球磨川禊を見かけた』という記憶を忘却している。

「ありがとう。これでも人脈作りは得意だね。入学した時もうまくやっていけるか不安ではあったが、クラスメイトや友人。後輩のおかげで特に問題なく過ごしているよ」

「そうか……君もいい友人を持っているな」

「黒神生徒会長ほどじゃないさ。私も……君といい友好的関係を築けて本当によかったと思っっているよ」

ちようど学園の出口に着き、車はゆっくりと停止する。

「これから中間テストに向けて備えなければならない。ついていけるのはここまでになつてしまうが……」

「よい。学業は学生の本分。君の身を削らせるほど、私は偉くない。生徒会長である私だって、箱庭学園の生徒の一人にすぎないのだから」

黒神はにこにここと敵意の無い目で全土を見る。扇子で口元を隠し、ふふつと微笑を浮かべている。

全土は車のドアを開けて黒神におじぎをする。

「黒神生徒会長。せっかくのお客様にここから歩いて帰ってもらうのは、こちら申し訳がない。ここからは彼が君を箱庭学園まで送っていつてくれる」

そう言つて全土は車の中を覗き込み、車内にいる運転手を親指で指す。

「疲れただろう。箱庭に着くまでゆっくり休んでくれ」

「心遣い感謝する。大多羅三年生」

黒神もおじぎを返し、車のドアが閉まり全土の視界から遠ざかった。

『——友人との絆を大切に』

「……」

全土は遠ざかっていく車の様子を見て、ふと、黒神に聞いた質問の内容を思い返していた。

『……私の目標？　そうだなあ……しいて言うなら——全人類を幸せにすることだ！』

まるで人の頂に立つべくして自分が生まれたかのような言い草。

「……全人類を幸せに、か」

理想。

あくまでも理想的な響きだ。友達百人できるかなとか、世界を平和に……と言うのもアホらしいレベルの。

「まあ……全人類の頂、という点では……私も似たような考えだな」

と全土は禍々しく笑みを浮かべる。

「よい友人か。——さて、今度は私の『目標』のためにも、生徒会の『友達』諸君にはがんばってもらわなければ、な」

他人も。弱者も。世の中にあるすべての規則も。平等も。

同等の強者も。

——もちろん生徒会の彼らも。

所詮は俺がもつとも望むものを手に入れるための手段コマでしかないのだから。

そう思いながら、全土は再び学園へ足を向けた。

|| || || ||

球磨川禊にうっかりダメにされかけ、多目的棟に突入した針妙丸一行。

「……少名さん、気をつけろよ？ 仲間つつつても……」

「……うん」

——球磨川くんは……どうしようもなく過負荷だ。

『へえ〜ここが多目的棟ね。まあ、籠城戦にはもってこいなのかな、ここ。機材や部屋の数もかなりあるし、監視カメラまでついてる』

決して普通の人に混ざれない、他人を蹴落とし墮落させることで引き下げる。自分と同じ立ち位置に立たせることでしか他人と交わる術がないのだ。

「油断はしないよ。さっきので……たぶんわかったから」

「……あんなの序の口、なんだろうな。正邪の姉御が目にかけるくらいだ」

『きつともつとんでもない本性を隠しているに違いねえぜ』と言う桜街だが、

——『五月蠅い』

少し前に私は、彼の本性をほんの一時の間だが垣間見た。

「……」

あれは、人間の『負』そのものだった。

幻想郷に引きこもっていた自分達でも、この地球上にあそこまで『負』を体現した存在はいないだろう。

「少名さん？ 少名さん」



私達妖怪は物理的な攻撃には人間よりもはるかに強い。

だが、精神はその限りではない。長く生きられる代わりに、妖怪は精神攻撃にはめっぽう弱い。もしあんな男を幻想郷に連れて行ったらと思うと……ぞつとする。

「おーい少名さん?」

その点、正邪は例外なのだろうか?

正邪は他の大妖怪とは違って圧倒的な力は持たないけれど、狡猾さと精神攻撃には群を抜いている。その舌の餌食になって騙された者は数えきれないだろ——

「少名さん!!」

「ひゃっ!」

針妙丸は桜街に耳元で呼ばれ、宙に少しの間足を浮かせる。

「なに敵のアジトの真ん中でボクツとしてるんすか? それよりも分かれ道ですよ。分かれ道」

本当だ。右か左か二手に道が分かれている。針妙丸はちらちらと左右の道を見る。こういう分かれ道では分担がセオリーだが……

『ハン〇〇×ハ〇ターのクラピカいわく! 迷う未知の道は無意識に左を選択するらしいから……ここは右かな?』

「こういう時は一緒に同じ道に行った方がいいと思うんだけど」

いちいちツッコむのも面倒くさいので、針妙丸は球磨川を無視することにした。

『……いや、だけど心理的盲点を突いて左かな!?』

「いや、片方が罠だったら一網打尽だぜ?」

『コウジ君も無視? そこは「漫画知識かよつ!?」ってツッコんでくれるのを期待したんだけど』

「——てめえの冗談なんか知るかつ!!」

『テヘペロ』とあざとい表情を見せる球磨川に『あーこいつぶん殴りてえ』と拳を震わす桜街。

「……はあ、それよりも、やつぱここは二手に分かれて行くべきなんじゃねーの?」

「……そうだね。引き返してる時間も惜しいし……ってあれ?」

やはり二手に分かれようと思を決そうとしたとき、針妙丸はあることに気がついた。

不安を払拭しようとする周りを見るも、その場にいるのは桜街と自分だけ。

——球磨川が……いない。

針妙丸は前後ろとあたりを見渡すが、彼の姿はなかった。

「球磨川くん!? ど、どうしよ! こんなところで……!」

なんということだ。

ねじ曲がり切って性格も歪んではいるが、あれでもこのメンバーの中では最高戦力に

は間違いない。彼を失つてはこの建物にいる敵を攻略することは……不可能ではないものの、かなり厳しくなる。

「いや、少名さん。あれ、あれ」

桜街が半分呆れ気味に左側の通路の方に指をさす。トイレのある方向だ。すると、ドアを開けて球磨川はけろつとした顔で出てきた。

『——おまたせ〜！ ごめんねートイレ我慢できなくてさー！』

「……心配するだけ無駄だと思うぜ？ 少名さん」

「……はあ」

心配したら、これだ。

針妙丸は心の底からため息をつく。なんでこんな緊張感の『き』の欠片もない男を警戒しているのだろうか。馬鹿らしいと自分に言い聞かせる針妙丸。

「球磨川くん……困るよ。勝手にいなくなっちゃ。行くにしてもせめて一言言つてよ」  
敵陣のど真ん中で厠かわやにいく奴がどこにいるのか。

そう思いつつ針妙丸は左側の道に、球磨川の方に向かって歩き出す。

『だからごめんつて。あつ！ もしかして針ちゃん』

「なつ、なによ……」

はつとわざとらしく球磨川は口元を手で隠す。

『さては僕のマル秘シーン目当てでトイレに突撃したかったとか!? ごめんね。気がつかなかったよ、針ちゃんがそんなにエッチだったなんて! はずかしー!』

「——だれがアンタなんかに!! それに私は痴女じゃないし!!」

頼まれたつて見るか。仮に見てしまつたら完全に黒歴史だ。お前を殺して私も死ぬ。

『まつたまたあ〜! あつ、そっか! 針ちゃんの好みは男性じゃなくて「こつち」だもんね』

と球磨川は手を斜め横に向ける。

『百合の方♪』

「ちつがあう!!!」

確かに正邪はどんな形であれ、いつも自分を助けてくれる恩人だ。好きではある。

けど、自分はけつして同性愛者じゃない。けつして『好き』であつても恋人の『好き』ではない。これは親愛の『好き』なのだ。

『……正邪ちゃん。カッコ可愛いもんね。針ちゃんが「そつち」方面に目覚めちゃうのもしょうがないか』

「ああもう! やめてよ! そんなこと考えるアンタの頭が腐つてるよ!!」

『お生憎様、すでに僕は性根が腐つてるから』

頬を赤くする針妙丸にニヤリとする球磨川。できれば球磨川にはあのままトイレに

ずっと隠れておいてほしかった。そうすれば大義名分で球磨川を放置できたのに。

「……おい球磨川副会長。少名さんイジるのもそのくらいにしてやってくれ」

『ちよつとしたジョークだよ、コウジ書——』

球磨川が言葉を言い終える前に天井からシャッターが凄まじいスピードで下りる。

「うわっ!!」

『……!!』

「な、なんだあ!? み、道が……」

来た道がシャッターで完全にふさがってしまった。球磨川と針妙丸は左側の通路。桜街は一人右側の通路だ。

「球磨川副会長!! 少名さん!!」

「こ、コウジくん!! シャッターが……」

『まあまあ、こんなの壁になんかならないって。』

——「大? オールフェイスシオン憑き」

いつものように対象物に手を当て、能力の発動を宣言。球磨川の目の前のシャッターは一瞬にして消え、

『……!!』

消えなかった。当然のようにシャッターは消えず、ただそこに存在する。

「く、球磨川くん……？ どういうこと!? 早くオールフイクション使ってよ!!」  
『……!? な、なん、だ……?!?!? そんな、そんなバカなことが』

球磨川は彼らしくもなく、全身を震わせ焦燥を隠すための手まで冷や汗をかいている。動揺……針妙丸を墮とすのに失敗した時よりも遥かに焦っているのだ。

「球磨川くん……？ ねえ、大丈夫!?!」

……球磨川の顔色が悪い。

オールフイクション

『……「大嘘憑き」で、なかつたことにできない』

# グッドルーザーズ 日常短編 上

## グッドルーザーズ 短編日常集

### 『いつもの登校風景』

普段の登校時、正邪は針妙丸せいじや しんみょうまると一緒に校門をくぐる。最近では校門をくぐると噂話がちらほらと耳に入ってくる。

生徒会の一味を退けた正邪は校内では有名人だ。

「見ろよ……鬼人正邪だ……」

「百々どうどうさんをぶつ倒したってあの……?」

正邪は満足げに群衆の合間を抜け、堂々と胸を張って教室へ向かう。

「ふっふっふ……どうやら、この私の悪名もこの世界に広まりつつあるようだな……」

「いやまあ、ここの生徒の中でだけどね」

正邪が鼻を高くしている間に周りの空気も一変していく。

「けど、百々さんを倒したのは、同じD組の球磨川くまがわって聞いたぜ?」

「まじで? じゃあ正邪はいいところどり?」

だんだん雲行きが怪しくなってきたので、慰めるべく針妙丸は正邪の方を向く。

「……」

「正邪。気にすることないよ？ 正邪だって頑張ってたもん。ね？」

よく見ると、正邪は涙目になっていた。

「べ、べつに……別に悔しくなんかねーし！」

手柄独り占めできなかつたことなんて、そ、そんなの、ぜんっぜん気にしてねーし！」

「そつ。(ああ……正邪が泣きそうだ)」

そんな正邪も可愛いと針妙丸は目を細めた。

一方木の陰から様子を見ていた球磨川は、今日は正邪に『ネガ蔵くん』のコミックスを貸してあげよう、と密かに想いを馳せるのだった。

「……僕は悪くない(……正邪ちゃん。がんば)」

\*\*\*

『教室風景』

——ガラッ。

入ってきたのは学校カバンを持った鬼人正邪。

全員から視線を釘付けにし、あたりには緊張の渦が巻き起こる。



——ガラツ。

「おはようございませーす！」

入ってきたのは少名針妙丸。クラス全体に朗らかな雰囲気が漂い、男子だけでなく女子も彼女に暖かい眼差しを向ける。

それはまるで成長が楽しみなひな鳥を見るような心境で——

——ガラツ。

その雰囲気を断ち切るように入ってきたのは、桜街さくらこうじ義一よしかず。リーゼントを揺らして悠々と入ってくる。

クラスのみんなからは、なに雰囲気ぶち壊してんだ、ゴラア、と冷たい視線を注がれる。

「なにガンつけてんだ。オレのヘアスタイルは見せもんじゃねえぞ」

そつちじゃねえ、と全員心の中で思いつつ、舌打ちをする。奇跡的に全員同時の舌打ちだ。

「……んだよ、この敵意丸出しの雰囲気。オレ何もしてねーつつうのに」

「おお、コウジ。おそよう」

「アネゴ！ おはようっす！ なんスカ、おそようっす」

「ふふん。世間ではお早いお着きでという由来から、朝にはおはようと言う。」

——だが！ この私が世間に反逆するべく考えた挨拶！ 遅いお着きで、おそよう、だ！」

「わけわかんないつすけど、イカすつす!!」  
「だろろう?」

朝から訳の分からない会話が展開され、針妙丸以外のD組生徒は愕然とする。

「そ、そうなんだ……そんな挨拶があるんだ……知らなかった。私もまだまだ世間知らずだなあ……」

まただ。混ぜちやダメあの二人。

少名さんも鬼人さんの言葉に納得しちやダメだよ!?

と、様々な思惑が飛び交うが、こんなのは序の口。——むしろ本番はここから。

ヤツが、来る。

——ガラッ。

来た。正邪たち以外のD組の皆は例の人物の出現に身構える。教室の入り口から現れたのは、

「あ、皆さん。おはようございます」

全員の肩の力が一斉に抜けた。

なんだ、けがの慶賀野さんじゃん、と。

「…………え？ みんな、どうしたんですか？」

D組生徒の一人が安心して慶賀野に近づく。

「いやあくてつきり球磨川かと……」

『——ん？ 僕がどうかしたかい？』

「(フェイントかよおおおおいっつ!!)」

球磨川が来ると——教室は一気に静かになる。

『おはよう、正邪ちゃん！ あとその他の人々！』

「ああ、球磨川か。おそよう」

「誰がその他よ！」

ふつうに挨拶する正邪と球磨川。彼に向かって怒鳴る針妙丸。

『すっかり静かになっちゃったね？』

その三人以外は静まりかえり、視線すら球磨川に向けようとしない。

それらを眺めて慶賀野と桜街は思った。

——いかに球磨川が避けられてるかわかるなあ、と。

…………あと彼と普通に会話してる二人ってすごい。

\*\*\*

『体育』

生徒会私刑執行委員メンバー……もとい敗残兵、百々千太郎は校庭、もとい皇庭に並んだD組生徒に告げる。

「ごほん。担任が本日休養のため、自分が代行を務めるであります」

「なるほど、嫌な役割を押しつけられたつてところか。大変だねえ（ニヤニヤ）」

『ほんと、窓際族つて大変だよね』

「黙り腐れ、過負荷ども!! さっさと走れであります!!」

今回の体育はマラソン。全員が教育棟の周りを長時間走る。もちろん、正邪含め全員体操服に着替えている。

D組の全生徒が走り始めて一分も経たないうちに、正邪は百々の元へ。

「なんでありますか」

「怪我したから保健室」

百々は正邪の手足を見る。どこにもケガらしきケガは見当たらない。

「……怪我なんてしてないでありますか」

「一応確認はするのな」

「早く走れであります!!」

「あ、今ので精神的に怪我した。保健室に行くわ」

「お前、言い訳下手すぎであります」

——「ただサボりたいんねん。」

正邪が渋々列に戻った後、しばらくしないうちに球磨川が百々の元へ歩いてきた。

「球磨川禊。早く列に戻れであります」

『いや……ちよつと、さ』

またか。今度はどんな言い訳をするつもりだ。

『帰ってジャンプ読んでいい?』

「もう言い訳すらしなくてありますか!!」

『いやあ、僕って正直者だからさ』

「早く戻れ!!」戻って走れであります!」

『……走りながら読んでもいい?』

「器用だな……勝手にしろであります。」

——「ただし歩くな」

『わかってる、わかってるって、百々ちゃん。あ……』

「どうしたであります?」

『ジャンプ買い忘れちゃった。お、オラ、ジャンプが無くて力が出ないぞお……』

「——ドラゴンボールの孫○空かテメエは!!」

……ああ、もう！ お前がもう一周走り終わる前に買ってくるから、さっさと走れで  
あります!!」

『あ、百々くんもジャンプ系好き？ 特にどこら辺が？』

『ちようどフリーザ編あたりが……つて、いいから走れ!!』

ちようど球磨川が『ピッコロ大魔王編もいいよね!』と語り続けようとする前に、百々  
はコンビニへ向かって行った。

\*\*\*

百々は走ってジャンプを買ってきた。球磨川も一周頑張つて走った。

『サンキュー！ 僕、もう一周くらいガンバちやおうかなあ!』

『……あれ……なんで自分、走っていたんであります!』

息切れしながら百々はふと疑問に思った。なぜ自分がこいつのジャンプなんぞを買  
いに行ってるんだ？

『……さあ?』

「……。ええい、さっさと走れ!!」

『百々ちゃんって、もしかしてパシリ属性?』

数分後、戦闘以外のスタミナが皆無の球磨川はマジで貧血になり、保健室で週間少年ジャンプを読んでいたという。

あの……ええと、さくら……さくら……。

……劣等リーゼントでさえきちんと走っているというのに。

「調子狂うでありますな……あんなのをいつも相手している体育教師を褒めてやりたいでやります」

今度担任に何かおごってやろう、と百々が額に手を当てている間に、針妙丸がふらふらになって歩いてきた。

「……す、すみません。ちよつとクラクラしちやつて」

「つたく。水分不足であります。ほい、『いろはす』飲むであります（オレンジ味）」

百々に渡された水（ボトルに口つけてない）を飲んだ後、針妙丸はありがとう、とお礼を言っただけに戻っていた。

すると今度は慶賀野が仰向けに勢いよく転んだ。

「つたあ……い」

慶賀野の膝に大きなすり傷ができ、そこから血が足を伝って流れている。

「……」

百々はその場を立ち上がって慶賀野の元へ。

戸惑う慶賀野に肩を貸し、蛇口のある場所まで運ぶ。

「ほら、さっさと水で傷口を洗うであります。その次は応急処置でバンドエイドを……」

その横で呑気にお茶を飲む正邪。

「……お前、乱暴なくせに面倒見いいんだな」

「てめーはさっさと走りに戻れであります!!」

ちなみにこの後、保健室に行った慶賀野にジャンプを読んでいることをチクられた球

磨川は、正邪と一緒にさらに走るハメになった。



## グッドルーザーズ 日常短編 下

\*\*\*

『クリスマス』（本来12月に投稿予定）

ちようどD組のクラスで話題になっていたクリスマスプレゼント。

「幻想郷ではクリスマスは虫かごの中で過すごしてたけど……」

一応、その日は霊夢に渋々ではあったが外に出してもらい、魔理沙と三人で祝っていた。

途中から妖夢や幽々子、咲夜と紅魔館の主レミリアも加わり最終的には大騒ぎだった。

そして誰もいなくなったあとで、こつそり来てくれた正邪にプレゼントを渡す。それが針妙丸のクリスマスだった。

本人は『たまたま寄つただけだ』とは言っていたが、受け取ってはくれた。

「今年は何をあげようかな……」

ふと気になった針妙丸は、ちようどみんなが集まったあたりで、さり気なく尋ねる。

「……クリスマスになにが欲しいかって？ 少名さん、なんだって今日そんなことを  
休み時間に寝ていた桜街が寝ぼけ眼で顔を上げる。

「いいじゃないですか。大切な友達に渡すプレゼント……いい悩みですよ」

「ちよつ……慶賀野さん！」

隣で聞いていた正邪は不満げに声を荒げる。

「ああ？ 誰が友達だよ。こつちから願い下げだつての」

「ほらー……こつち言うから」

針妙丸は涙目で正邪を指差す。

「正邪は天邪鬼なんだから」

ああ……と納得した後に慶賀野はほっこりするような、悲しいような複雑な笑みを浮かべていた。

本当に妖怪の天邪鬼なのになあ、と本当の意味で自分の言葉が慶賀野に通じていないことに苦笑する。

まあ、しょうがないことなのだが。

『クリスマスかあ……プレゼントなんてもらったことないよ。……文房具以外』

「けつこつ辛辣なんだな。お前の家庭」

ヘラヘラと顎に手を当てて、球磨川はさらりと家庭の悲しいクリスマス事情を暴露し

た。

桜街もけっこう同情していた。彼の家ではどうなのだろう。ちゃんとプレゼントは出るのだろうか。

「けっ、くだらん。毎年毎年懸命に、赤服と白ヒゲの不審者が、ちやうど決まった日に『メリークリスマス！』とか叫んで、ピュアな子供たちの家に不法侵入する祭りのどこが嬉しいんだよ」

「一体どうしたらクリスマスがそんな歪んだ解釈になるんですか!? サンタクロースが浮かばれませんよ!!」

慶賀野に突っ込まれたが、正邪も正邪でクリスマスに悲しい解釈を生み出していた。

そんなクリスマスなら防犯ブザーは必須だ。

町中、厳戒態勢かもしれない。

『大丈夫だよ正邪ちゃん。そんなのはただのおとぎ話で、サンタって言うのは本当は、お——』

「オメーはオメーで黙ってる!!」

その続きは言わせまいと桜街は球磨川の口を無理やり塞ぐ。

……何を言おうとしていたのだろうか。

霊夢曰く、サンタクロースは空を飛ぶ妖術を使うおじいさんで、良い子にプレゼント

を配っていると聞いたのだが。

一体球磨川は何を言おうとしたのだろう。

\*\*\*

『じゃあそれぞれ欲しいものを書いていこうよ!』

「てか、なんでオメーが仕切ってるんだよ。球磨川」

『いいからいいから、じゃあはじめは功名こうみやうさんっ! 言ってみよう!』

「えっ!? ええつと……」

もじもじと指を擦り合わせて顔をうつむき、かけているメガネが下がる。

「マフラー……とか」

『……慶賀野さん、質素だね』

「ほ、他にも欲しいプレゼントはありますよ! り、リラックマのぬいぐるみとか……!!」

『ぬいぐるみかあ……いいね』

可愛い……とちよつと思つてしまった。

球磨川の言葉には何か含みがある気がしたが、それを問う暇はなかった。

『で、フランスパンくんは?』

「せめて名前で呼べよ。ん…………とだな」

桜街は突然ポケットに手を入れ、一枚の紙を取り出した。

「あつたあつた。最新ゲーム機と…………スーパーマ〇オブラザーズと…………バイオハザ〇ドリメイクver、あとはド〇クエの最新作も…………」

『…………もしかして、結構クリスマス前に何貰うか考えるタイプ?』

「おう! 俺はその年のクリスマスが終わった後から、既に次の年のプレゼントを考えてるぜ!」

「お前…………変なところ几帳面だな」

桜街はグーサインを出して笑みを浮かべている。見た目に合わない意外な一面を見たせいか、正邪も感心している。

「見た目と髪型と中身の反差…………! 実にいい。まさに反差の使徒」

『見た目完全に不良だしね!』

「正邪の姉御に言われんのはいいけど、オメーに言われんのは腹たつなあ」

桜街は若干引きつった笑みを浮かべて額に青筋を浮かべている。球磨川に怒鳴っても無駄とわかっているも怒りが堪えられないところがあるのだろう。

「そういう球磨川は何が欲しいんだよ」

『ん？ 僕？』

んー、と球磨川は少し考えるそぶりを見せた後、

『地位と、権力？』

「夢のない小学生かつつ!!!」

『冗談、冗談。よく考えてみなよコツペパンくん』

「せめてコウジか、上の名前と呼べよ。もはや髪型関係ねえし」

『不幸の星の下で生まれた僕が、そんなもの望むと思うかい？ せつかくの地位も名誉

もすぐにかっさらわれて剥奪決定さ』

「自信満々に言うんじゃねえよ。てか、なんでオレが的外れなこと言ったみたいになっ

てんだよー」

球磨川は首を横に振ってやれやれと答える。

『僕がクリスマスに欲しいのは一つさ。みんながもらうプレゼントの中で最も汎用性が

あるものさ』

「……んだよ。それ」

球磨川はふつと笑って答える。

『決まってるじゃないか。———お金』

「夢もクソもねえ答えが来たつ!!!!!!」

『だってそうでしょ？ お金があればどんなプレゼントだって買えるんだよ？ 選択肢はいくらでもあるし、好きに自分で決められる。……最高のプレゼントじゃないか』

ぐぬぬぬと桜街が反論できずにいる中、針妙丸は手を挙げる。

「……ちなみに球磨川くんは今言ったプレゼント、貰ったことあるの？」

『……』

球磨川は突然背中を向けると、しゃがみこみ始めた。

『……』

「……？」

顔を腕に埋めて、片手で床にひっきりなしに指で文字を書く。500円、または0円、と書いているようだ。

『……たまたま鉛筆と消しゴムだけ。ああ、ケーキなんて食べたことないや……』

好奇心で聞いた自分が申し訳なくなってきた。

見ていてかわいそうだ。

同じように思ったのか慶賀野がいじける球磨川に近寄る。

「ええと……球磨川さん。小物で良ければ、今度のクリスマスにあげますよ？ 何か欲しい物がありますか……？」

『マジで!?!』

慶賀野の慰めに反応して、球磨川は一瞬で起き上がった。

『ほんとう!? 本当にいいのかい!? なんでも!?』

「小物ですよ? キーホルダーとか、ぬいぐるみとか」

先ほどまでの雰囲気嘘のようにはしやぎ始めた球磨川。

『ありがとう……功名さん。今の君は間違いなく女神様だよ。もうこれからみんな、サ  
ンタじゃなくて功名さんを信仰しようよ!』

と思つたら急に涙目でぐずり始めた。

『ありがとう……本当にありがとう。今まで文房具以外、ろくにプレゼントなんて貰つ  
てないよ……祝つてくれる人もいないし』

「は、はあ……。大変でしたね」

『そうなんだよ! じゃあ慶賀野さん! 聞いてくれるかい! 僕の欲しいささやかな  
プレゼントを!!』

「……二度言いますけど、小物ですよ?」

安心して、大したことないものだから、と球磨川は付け加える。

『——幼い頃に失つた夢と希望』

「おつつつつもつつつ!!!」



全員が口を揃えて呆れ返った。

「なんだそりゃあ!! 取り返せねえし、固形物ですらねえじゃねえか!!」

『夢と希望だけが友達だった僕にはかけがえのないものだよ……?』

「アンパンマンか!! それにオメー、さっき大したことないものって言ってたじゃねーか!!! おかげで慶賀野、呆然としてんじゃねえか!!」

困らせんなよ、と大声で桜街は怒鳴る。

球磨川くんの言動が矛盾しているのはいつものことだ。

「球磨川さん。あたし、裁縫とか得意だから、ぬいぐるみとかでもいいかな……?」

『ほんとう? ありがとう! デザインは僕が決めてもいい? 夢と希望じゃないけど、幼い頃に本当に無くしちゃったんだ!』

柔らかな笑みを浮かべる球磨川に慶賀野はほっこりとした表情を顔に出している。

「失くしたぬいぐるみ、大事にしてたんですね……」

『うん。大事なものを中に隠したり、自分で引きちぎって縫い付けるのが大好きだったんだ』

「ええええええつ!! 『大事にする』の認識が違う!!」

『愛し方、愛で方は人それぞれさ』

「愛するものを引きちぎることの、どこが愛情表現ですか!?!」

『……ヤンデレとか?』

引きちぎらないことを条件に、球磨川のプレゼントは決定した。

「で、正邪は何が欲しいの?」

針妙丸は先程からあまり口を挟んでこない正邪に話しかける。

「ほら、サンタに頼むものとかさ。何かあるでしょ?」

すると、正邪はこう答えた。

「——ばあか。サンタなんて、いねえよ」

嘲る笑みとともに正邪は針妙丸に指を突きつけた。

「え……?」

「いるわけねえだろ、サンタなんて。だいたいなあ。私はなあ、そもそもクリスマスなんて大ッ嫌いなんだよ」

愕然とする針妙丸に遠慮もなく、正邪は言葉を続ける。

「物をもらうのも物乞いみたいだし、惨めで気に食わないし、サンタの性癖も嫌いだ。健全で良い子の子供が好きとかどこのシヨタ好きロリコンだよ。プレゼントもサンタもいらんし、ついでに言うとお前もいらん」

「せ、正邪ちゃん……ちよつと言いきすぎですよ」

慶賀野が止めようとするも、正邪は全く聞きはしない。

「それにプレゼントだとオ？ そんなの自分で選んで買う方がいいに決まって——」  
「——もういいよつつつつ!!」

針妙丸は正邪を軽く突き飛ばし、教室から走り去っていった。

「あつ……針妙丸さん!!」

「アネゴ……今のはちよつと」

『……あちゃー、泣いちゃったね』

「……ちつ」

その日、正邪とはほとんど口を聞かなかった。

\*\*\*

学校が終わり、正邪は一人下校する。

「……と思ったらお前も一緒かよ」

『いやあ、正邪ちゃんが放課後どこ行くか気になっちゃって』

球磨川は相変わらずヘラヘラと掴み所のない態度で接してくる。

正邪は鞆を持ちながら、両手を後ろで合わせる。

「何の話だよ」

『まあ、またあ。寮への道は反対側だよ？ あつちはスーパーとか商店街とかの地区

だよ?』

「……一人で行く。帰れ」

『生憎、僕もたまたまこつちに用があるんだ。道が一緒なのはしようがないでしょ?』  
球磨川は締まりない口もとで笑う。

目は相変わらず笑っていなかったたので本当の表情はうまく読めないが。

『途中まで一緒だし……ついでに付いてついてもいいかな?』

「勝手にしろ」

……どうせ、ダメと言っても来るだろうから。

スーパーへ続く商店街の一本道。

つまらなそうに不満げな顔を浮かべる正邪と、

他人から見て分かりづらいが、

彼女の横には、そこはかとなく嬉しそうな表情を浮かべた球磨川が、そこにいた。

\*\*\*

スーパーでの用事を終えた後、正邪は寮に戻った。球磨川はもう少し吟味したいものがあるとかで、スーパーに残った。

「……ただいま」

「……」

正邪が挨拶をしても頷くだけで、まともに言葉を交わさない。食事も、ここにきてから一番静かなものだった。

「……皿洗い。きちんと当番やれよ」

「……わかってるよ」

ついにまともな会話をしないまま、針妙丸は床に就いた。

布団も、ういつもとは比較にならないくらいに距離が開いている。今の心の距離とでも言うつもりか。

「ちっ……めんどくさい」

そんな中、正邪は布団から出て、学校カバンから小さな箱を取り出し、

「……よっ、そっ、おっと」

抜き足差し足で針妙丸のベッドに近づく。

「気づかないくらいに深く眠ってるな……」

そうして彼女の枕の横に、

「……サンタなんか、いねえよ」

そつと小さな箱を置いた。逆さの青リボンがついた、白と黒の小箱だ。

「——メリークリスマス。……い、いつもクソみたいなプレゼントをくれて……ありが

と

布団に潜って、不機嫌そうに正邪はそう言うのだった。

\*\*\*

翌日の登校は、正邪がかなり早めに出た。

一応、会って挨拶を交わすぐらいはしておいた。

そして朝のホームルーム前。

「ねえねえ！ 見てみて！！ 朝起きたらこんな箱があつたの！！」

針妙丸が満面の笑みで正邪を含め慶賀野と桜街に見せる。球磨川はおそらく保健室でサボりだろう。

「よかつたな、少名さん！」

「わあ……素敵ですね！ 中身はなんでしたか？」

「ま、まだ開けてないの！」

そう言つて箱を隠す針妙丸。その瞬間、なぜか正邪はしかめっ面をしていた。

「この箱の柄とか、リボンとか、正邪の色合いに似てるね！」

「そりゃあ、悪趣味だな。よかつたな。好きな色合いじゃなくて」

「ううん！ 大好き！」

一瞬だけ、正邪は驚いていたがすぐに仏頂面に戻ってしまった。

「……不愉快だ。それより良いのか？ 昨日のこと。一生口きかなくなつていいんだぞ、こっちは」

「ああ、もう気にしてないからいいよ。こっちこそ……意地はつてごめんさい」

針妙丸は素直に謝るが、正邪の方からは特に謝罪はなかつた。ふん、と鼻で返事をするくらいで。

気にしてもいないし、悪い気分もしない。これが正邪とのやりとりの一つだから。

「それにしても不思議だな……クリスマスは二ヶ月前に終わつたつてのに」

桜街の一言に正邪の動きが彫像のようにぴしりと止まる。

ゆっくりと首を桜街の方に向けて、

「……………。コウジ」

「ん？ なんですかい、アネゴ」

「クリスマスつて12月の行事なのか？」

「え？ ああはい。サンタが来るのは12月の24日でやすけど」

「…………は？」

「もしかしてアネゴ……クリスマスの日付、知りませんでしたか？」

今日は、2月2日。

正邪はくると身体の向きを変えて、

「ふふ……ふふふ」

「アネゴ？」

「ふふふつ、あーっはーっはっはっはっ!!」

「どどうしたんですか!？」

正邪は大笑いをした後に、大きく息を吸って、

「クリスマスなんか、嫌いダアアアアアアア………っ  
!!!!!!」

正邪が自分に贈ってくれたのに気づいていたことは——言わないでおいておこう。

それくらい意地悪したっていいよね、と針妙丸はくすつと嬉しそうに微笑むのだった。

\*\*\*



正邪と別れた昨日の夕方。

スーパーに残った球磨川は人目も憚らずに女性用のランジェリー売り場にいた。

『……うーん。これも違うなあ。スタイルとかエロさ、とかじゃなくて正邪ちゃんの良さはあの可愛さにあるからなあ。いや、いつそのこと大人っぽい路線に……』

「何してるんですか」

『あつ！ 功名さん。どうしたのこんなところ？』

「それはこっちのセリフですよ！ 女性の下着売り場で何やってるんですか、あなたは！！」

『プレゼント選び』

「……もつとマシな言い訳ないんですか」

『僕は悪くない。これは正邪ちゃんの今年のクリスマスにあげるプレゼントだよ？』

「パンツをですか!？」

『そう！ 彼女の下着は、僕が選んだものと思えるからこそいいんじゃない——』

球磨川が言い終える前に慶賀野は左ストレートを顔面に喰らわし、彼が倒れたところで、ランジェリーショップから連れ出した。

「……はあ。どうしてこんな人と関わってしまったの、あたし」

球磨川を運んでいる最中は周りから白い目で見られた。

『僕は悪くない。……それよりも、功名さん。気になったことがあるんだけどさっ』

「……なんですか？ 言っておきますけど、商品はちゃんと戻しておきましたからね？」  
いやそのことじゃなくてさ、と球磨川は言う。

『——僕が正邪ちゃんと一緒にいる時から、ずっと隠れてついて来てたよね？ なんか僕らに用でもあったの？』

——自然体での、ゆさぶり。

『もしかして、僕か正邪ちゃんの監視とかが趣味なの？』

本当にわからない。そういう声色で、いつそわざとらしいくらいに球磨川は尋ねる。

一瞬だけ慶賀野の表情に緊張の文字が走るが、すぐに苦笑を浮かべる。

「そ、そんなわけないじゃないですか。ただ二人がどんな会話をしてるか気になっただけ……」

動揺の色が出てる彼女の声色に特に目立った反応も見せず、球磨川は無表情で答える。

『ふうん……ま、いつか。そんな興味ないし』

「そ、それよりも！ さっき正邪ちゃんと何をしてたんですか？」

ええとね、と球磨川は素直に答える。

『ちよつとプレゼント選びしてたんだよ。小槌かお椀とかがついたストラップとか、キーホルダーがないか探してたんだ』

「そうだったんですか……あれ？ プレゼント？ 明日は二月二日ですよね？」

『まあ、正邪ちゃんのことだから、クリスマスの日付でも間違えてるんじゃないかな？

ああ見えて案外世間知らずだし』

ああ見えて、というより格好自体が世間知らずのようなものだが。

「けど……誰に送るんでしょう。クリスマスなんて嫌いだって言ってたし」

『嫌だなあ、功名さん。忘れたの？』

球磨川はふつと笑って言った。

『——正邪ちゃんは、天邪鬼だから』

## 第36話　ハロー『悪魔（デビル）』

「く、球磨川くん……」

『……』

球磨川は先ほどまでの焦り顔をすぐに手のひらで覆い、再びけろっとした顔に戻す。

「なーんてね！」なかつたこと「虚構にする」ことができないんなら、直接ぶっ壊して……」

球磨川は毎度のごとく、どこからか取り出した巨大螺子を振り下ろして、

「せ、生徒会さあ〜んっ!!」

『!!』

だれかが球磨川の背中から抱きついた。

「手子生さん……!! 逃げてきたんですか！」

「ひ、ひどいですよ……!! あのコスプレ新生徒会長お……あちしが一体どんな想いで、あそこを抜け出してきたか……!!」

手子生は涙を拭くように球磨川の背中に顔を押しつける。彼の制服が黒いせいで気づきにくいのが、わずかに涙がにじんできている。

「ほ、ほんとにすみません……うちの正邪が……」

「うう……ぐずつ。ああ、ごめんなさい新副会長さん！ 制服が……」

手子生は身体を離し、球磨川に謝罪する。

『ううん。君は悪くないよ。拉致監禁って本当に怖いからね。泣きつきたい気持ちもわからんでもないし』

「あつ……」

そう言いながら振り向いた球磨川の顔は……鼻血まみれだった。

『僕を失血死させるつもりなのかな、手子生てじまるさんは』

「球磨川くん……普段からエロ本がどうかパンツがどうか言ってるくせに……」

『…………わが生涯に一片の悔いなしっ』

「少しは自重しろおっ!!」

球磨川はなぜかキリツとした顔に、叱る針妙丸。そ、それよりも手子生は二人にすがる。

「さ、先ほどから誰かがつけてきてるんですっ！ こ、このままだと、あちし殺されるう

……!!」

轟音が響いた先から、ドシドシと重い足音が近づいてくる。

「ひいつ……!! きたあ……!!」

すると、一瞬の間に手子生の身体が宙に浮き、目の前から現れた筋骨隆々の大男に担がれる。

「我はラグビー部部长!!! 石垣いしがきイイ!! 『悪魔』の鬼部長と恐れられる豪傑ウウツ!!!」

「ひっひいっ!!! た、たすけてええ!!!」

「手子生さん!!!」

「ぐっぐっぐ……この先で待つぞつ、新生徒会とやら! 全土様や美貴様の邪魔は何人たりとも許さんぞオツ!!!」

逃げ出した石垣を追おうとする針妙丸を、球磨川は黙って右手で制した。

「ど、どうして止めるの球磨川くん!!!」

『まあまあ。うかつに追いかけてつてもいい事ないと思うよ?』

球磨川は針妙丸の小さな肩を掴むが、あっけなく針妙丸に振り払われる。

「けど、悠長になんてしてられないよ! 毘だとしても、早く助けなきゃ!」

『……おや。「毘かも」って言われちゃった。「早く行かなきゃ」だけ言ったら、君も愚か者カテゴライズだったかもなのに。猪突猛進のおバカさんとして!』

ありや、と呆けた顔で球磨川は呑気に構える。そんな場合じゃないというのに。

それと何気なく最後に侮辱を入れてくるあたり、本当に嫌われているようだ。いや彼には挑発も日常茶飯事か。

「……球磨川くんは助ける気なんてないかもしれないけど。手子生さんは依頼者なんだよっ。」

『あれ？ 少名さん、よくわかったね。助ける気なんてないって』

針妙丸は絶句した。まさかここまでの外道とは。いや……薄々わかつてはいたが。

『じゃ、ゆつくりぼちぼち歩こつか。疲れちゃうし』

「ちよ、ちよつと待つてよ……！」

『少しでも進むほうがいいでしょ？ 千里の道も一歩からって言うし。進みたくないの？』

「……ぐぐぐ……!! もういちいち癩にさわるなあ……。それに使い方違うし！」

誰がなにを言つても、彼は言うことなんて聞きそうにない。正邪が適当にいつもあしらっている理由が今の針妙丸にはよく分かる気がした。

\*\*\*

二人が延々と続く回廊を歩いて数分が経つ。

それまでは黙々と歩いているだけだったが、

「……ねえ」

『ん？ なんだい針ちゃん。君の方から話しかけてくるなんて珍しい』  
できればいつまでも話したくない。

「……なんで走ろうともしないし、急ごうともしないの？ 慎重になってるから？」  
『……。まあ、それも無くはないけどさ』

この数週間。彼と曲がりなりにも学校生活を送っているのだ。球磨川は勉強はできないが、別に頭の回転が鈍いわけではない。

むしろ逆。厄介すぎるくらいいの切れ者だ。

嫌われてもおかしくないくらいの。

『手子生さんも、さすがに殺されたりはしないよ。あのシユワちゃん顔負けの筋肉くんからは、特に手子生さんに対する悪意は感じられなかったから』

「……。わたしは、てつきり別の理由かと思ってた。慎重になってるのかって……」

『まさか。メタ○ギアのスネークじゃあるまいし。僕はスニーキングミツシヨンよりも、撃つか撃たれるかのスリリングなゲームがいいなあ。まあ、見つかるかわからないかのスリルもいいけど』

いつも考えなしで行動しているわけではないのだろう。

「……『大嘘吐き』<sup>オールフィクション</sup>。今、使えないんでしょ」

あのシャッターに、特に特別な力が使われているとは思えなかった。理由はなんにせ



よ、今の球磨川は、なぜかあの能力を使えない。

『オールフイクション大嘘吐き』なんて、ただの作品さ。アレだよ。マジシャンが、「あら不思議、消えましたー」って言うのと一緒。……まあ、僕の場合、預けたお金とかは戻ってこないんだけど』

「……そんなの、欠陥マジックじゃん」

『だから過負荷けっかんひんなのさ』

球磨川の完全蘇生と回復。それを支えているのは『オールフイクション大嘘吐き』の効力のはず。それだけじゃない。相手の心を折ることだつて……。

『少名さん。君はたぶん……』オールフイクション『大嘘吐き』を過大評価してると思うんだ』

針妙丸は自分の心臓が跳ねるような心地がした。球磨川には自分の考えが筒抜けのようない感じがして。

『……ブララス幸せ者は思考が読みやすいね。言つたでしょ？』マイナス過負荷に、そもそも能力スキルなんて余計な添え物なんだ。味噌汁にネギがあるか、なめこが無いか……要はそれだけなんだ』よ

ネギがなくても、なめこが無くても。味噌汁は味噌汁。

『味噌汁にはわかめぐらいでいいよね』

味噌汁はともかくとして。

つまり、能力が無くても過負荷は……マイナス過負荷は……マイナス過負荷。  
危険に変わりはない。

『そのとおり』

「……今のわたしの考えも、お見通ししてこと？」

『そうだね。……あとさ。優秀な君だったら、もうとつくに気がついてるんじゃない？』  
球磨川は次の言葉を、まるでポテトは好き？　ぐらいの感覚で気軽に言った。

『僕を単純に殺すんだったら……』オールフイグジョン『大嘘憑き』が使えない今がチャンスだよ？　その腰についてる針の刀で殺すのだから、簡単にできると思うんだけどなあー』

針妙丸はピタリと歩みを止める。球磨川も、両腕を首の後ろに回して、止まる。

「球磨川くん。……たしかに今ここであなたを殺すのは簡単だよ」

『……へえ』

自信满满だね、と球磨川は薄気味悪い笑顔を浮かべる。

針妙丸は腰に刺した針の刀——きしんけんに目を向け、手を当てる。

「……わたしはこの輝針剣を正邪に向けたこともある」

『……ふうん。そうなんだ』

「——けど、見くびらないで。球磨川くん」

針妙丸は、ゆつくりと輝針剣から手を下ろし、目線を彼の濁った目に合わせる。

「わたしは、この剣を仲間に向ける気はない。……あなたが、正邪やわたし達に害を加えない限りは」

『はあ……正当防衛ってやつ？』

「あなたが間違ったことをしようとしてるなら……わたしは剣を抜いても止める。

……仲間として」

『……。ふうん……』

球磨川はしばらく顔を下に向けて黙すると、無表情で、針妙丸に言い放つ。

『結局は、さ。君は……君が受け入れられない部分……僕の理解できない部分が嫌いなんだよね。だから最悪排除する。僕は君のそういうところも嫌いなんだけどさ』

「……なんとも言って」

過負荷にどう言っても過負荷的解釈にしかならないことは言う前にわかっている。

彼には、まだ針妙丸の言っていることが真に伝わっていないことも。

「仲間だつて言ったのは本心だつてこと。それだけは覚えておいて」

『…………』

最後に聞いた彼女の言葉を、球磨川は不気味なくらいに黙って聞いていた。

『……………似てるなあ』

——虚を思わせる光の消えた目で。

\*\*\*

石垣と名乗った筋肉男が逃げ込んだのは、奥の理科実験室。建物にある他の大教室に比べると、随分とこじんまりとした印象を受ける。

「ほう…………このオレ様を恐れずにここまで来るとはな。褒めてやろう!!」

球磨川が螺子を構えたのを見て、石垣はニヤリと顔を歪め腰のあたりに手を伸ばす。

「だが、そこまでだ！ 死ね——」

——球磨川が笑っているのにも気付かずに。

\*\*\*

「ど、どうして地面から螺子が……がくっ」

『いや、構えたからつてぶん投げてくるとは限らないでしょ？』

『悪魔』の能力持ちとの戦いは、球磨川の不意打ちによりあっさりと終了した。

『螺子は使えるように助かったよ』

「……球磨川くん。あなたつて正攻法で勝つことができないの？」

『何を言ってるんだい、針ちゃんは。キミは短距離リレーでフライングしたのを勝つたつていうの？』  
——僕は勝負する前から負けているも同然さ』

「……あっそ」

なんかもう何を言ってもダメそうなので素直に諦める。

『じゃ、行こつか！ えーと……誰だっけ？』

「て・ご・ま・る!! 自分でも結構個性的な名前だと思っうんですがね！」

助けてくれたのは嬉しいですけど、と拗ねながら、手子生はぶいっつと後ろを向く。

「球磨川くん……失礼だよ。そこはもつとさりげなく言わなきゃ。なんて呼べばいいかなとか」

『ごめんごめん。今度から体にメモっとくよ。手子生さん、だから機嫌なおしてよ』  
「しょうがないですねえ……」

と、みんなで理科室を出て行こうとした瞬間、球磨川が螺子を手子生に向かって飛ばした。

「くっ、球磨川くん!? 何をしてるの!？」

『悪魔被い』

すると手子生はフィギュアスケート選手さながら、背中を反らして器用に螺子をかわす。

『わお、エクソシストもビックリの柔軟性だね! 体操でもやってるの?』

「……きひっ」

彼女は口元を三日月の形に歪ませる。

「……て、手子生さん……?」

「きひっ……きひゃ。——きっひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!!」

「ひっ!？」

……手子生の様子が変わる。まるで『悪魔』にでも取り憑かれたかのように豹変している。

「まさか……さっきの人の……?!」

石垣の能力だともいえるのか。もしかして他人に憑依する能力が石垣の真の……

「ブッブー!! ハズレでーす少名ちゃん!! くひやつー!」

「ちや、ちゃん?」

手子生は兩人差し指でバツマークを作り笑い飛ばす。少し落ち着いたのか、彼女は深呼吸をして。

「いやゝ残念! 能力とか関係ないんですわー」

『ハイ! まさかビツクリ、手子生丸々は二重人格だった!!』

球磨川はクイズ番組のようなノリで高く手を挙げる。それと、名前を呼ばれてもいないのに答えるのも若干フライング感がある。

「またまたハズレ!! ……って。クイズやってんじゃねーよ!! ケラケラ……」

全くの別人でもなく、取り憑かれているわけでもない……これは、まさか……。

「けどまあ、いい線いつてるよ。さつすが、禊ちゃん。勘がいいなあ……美妃様や全土様が警戒するはずだね……。あ、もうネタバレいい?」

自分たちは騙された。

新生徒会への投書も、脅迫状も。

手子生や次木を被害者のように見せかけ、本性を隠させて油断させたのも。

——全ては生徒会の罠だった。

最初から次木要二はもちろん、手子生丸々も敵だったのだ。

全てはこの敵だらけの布陣に呼び込むために。

『遠慮するよ。まだ読んでない最新号のジャンプのネタバレされるの、嫌いなんだ』

「そっか——じゃあ、ネタバラししちゃおっか!!」

最初からこちらの要求も意味はなかったようだ。

手子生は体勢をゆっくりと元に戻しその小さな腕を広げていく。

「今時、なぜかネタにならない解離性同一性人格障害者でもなく、あそこの雑魚に取り憑かれた哀れな一般少女でもなく!! では改めましてあちしの自己紹介を——」

『あ、もういいからそのくだけり』



球磨川はまたまた遠陵なく彼女の小柄な身体をぶっ刺しにかかるが、その瞬間、彼の視界は巨大な壁に覆われる。

「……………!?!」

貫いたのは確かに人体。

勢いよく飛んだ返り血の一部が手子生の顔に赤い帯を引く。

しかし手子生は不満げな顔をするだけで、痛みに顔を歪めてはいなかった。

——それもそのはずだ。

「つたく……………使えねえ肉の盾だ。ラグビー部ご自慢の筋肉で螺子くらい弾けや」

「……………!?!」

「あ……………」

手子生は……………そこに倒れていた石垣を盾にして、球磨川の攻撃を防いだのだから。痛みなどあるはずがねえんだよ……………きひひ」

手子生は頬についた血を手で拭い、残りを舌で舐めとる。

ああ、鉄サビの味だ、と恍惚な笑みを浮かべ、

「なんてことない一般的な答え。これがあちし<sup>すがた</sup>本来の素（すがた）であり<sup>すがた</sup>性質」

胸に螺子のぶっ刺さった石垣をゴミのように床に放り投げる手子生。

「『悪魔』の代役ごころーさん、石垣。あちきが手子生丸々てこまるまるまる。能力持ちアルカナホルダー『悪魔』本物でえ  
くす！」

キミが不意打ちしてくるってことは対策済み、と手子生は球磨川に指をさす。

「美妃様からは禊ちゃんがそういう子だつていうのは釘刺されてたけどさ。まあ不意打ちなんてザラだろうなーって思ってたんですよー」

いつもなら、球磨川が、

『僕なんかの対策を考えてくれるなんて光栄だよ！』

とデートプラン考えてくれてありがとうぐらいの軽口をたたくはずなのだが、

『……………』

初対面の態度からあまりの様子の変わり具合に、さしもの球磨川も少し引いていた。

『……………』。別人格ネタは咲ちゃんて慣れたと思っただけど……………これはある意味ヤバイね

……………』

咲ちゃん……………？ いや、今はそれより残虐と化した手子生だ。

知らない名前のことはあとでゆつくりと聞こう。

針妙丸はゴミのように床に投げられた石垣に顔を向ける。鼻と口、そして傷口から血を流している姿には、たとえ敵であっても同情を覚えてしまう。

「……………この人は、味方じゃなかったの」

「ええ……？　このゴミがあ？　冗談言わないでよー少名ちゃん。仲間じゃないし、それにこれでも……結構マシな処置なんだよ？」

狂気に見開いた瞳をグリグリと動かしながら、手子生は死に体の石垣の首を片手で鷲掴み、持ち上げる。

「こいつは、美妃さまからお借りした部下の一人でさあ……。美妃さまのお隣で慶賀野功名をさらってきただけで言うもんだから、ちよつと期待してお借りしたんだけどお……」

手子生はパツと手を石垣の首から離して、床に落とし、

「そしたら……。つかえねえ筋肉だけの役立たずがあつ!!」

「ぐへっ!!」

白衣に返り血がつくのも気にせず、手子生は彼の顔を踏みつける。

気絶していた石垣が跳ね起き、鈍い音が科学室に響く。

「代役をしてくれるつてもんだから、もうちよつと期待してたんだよー？　キミらを疲弊させるどころが、傷一つつけられずにやられるとか……。最低限やれつつたこともできねえの？」

「も、もうしわけ、……。うぐああああ……。もい……。ああ……。つ!!」

それも一度ではやめず、何度も。何度も顔に靴を叩きつける。

構図の完全逆転。

囚われの姫が一瞬で悪魔に早変わりし、さらった魔王が悪魔と化した姫に許しを乞い、号泣する絵図。

「どうか、た」

「——はい、ボツシューツト!!」

助けてと命乞いをする前に、彼の首からゴリユツと嫌な音が。目が完全に白眼になっていて、口からは泡が漏れている。

手子生は彼に容赦なくトドメを刺したのだ。

石垣の横顔を蹴り飛ばし、再び意識を退場させたのだ。

「じゃー、二人とも!! 大人しくしてくれる?」

今度は——こちらに『彼女』の矛先が向くのか。

『……………ここは落ち着こう! 暴力での解決なんて醜いだけだ! そう、争いはきつと話し合いで解決できるはずだよ!』

「きしっ……………おやおやおやおや。おいおいおい、さつきまであちきをぶつ殺そうとしたやつがよく言うよ。でもまあ、お話? 乗ろうか」

乗るんだ……………。

『キミはさ、何で生徒会に従うんだい？ ……キミは……見下されるの、嫌いなタイプでしよ？』

「趣味の協力上ねえ〜。まあいくら気に入らなくても、使えるならその分利用するさあ」

「趣味……？」

手子生は白衣のポケットから二つビンを取り出す。

「そうそう——『美人間ホルマリン漬』の」

## 第37話 過負荷 V S 過負荷 その1

生徒会私刑執行部 本部。生徒会長室。

「……役員が半数に減ると、仕事も多いね」

現理事長の息子である大多羅全土おおだらぜんとに代わり、平時は生徒会長である神井大成かのいさとるが指揮をとっている。

生徒会に回る書類は生徒会役員たちが処理するのだが……

「新井くんも老神副会長おいがみも現在入院中。まったく、ほとんどの書類はボクが処理していたとはいえ……」

「——これで全ての書類を、処理することになりますね」

ボンとメガネをかけた幼女性型……もとい生徒会書記長、手計てばかり。

「……そうだね、手計くん」

「では私は、もう一人の私の用事を片付けてからまた来ますので」

現在は『新生徒会』を名のる組織、その筆頭、鬼人正邪、球磨川禊一行によって、役員が職務妨害および重症。

つまるところ……人手不足だ。

「手計くん」

「どうかしましたか、会長」

「書類処理。すこし手伝つてくれると嬉しいんだけど……」

「いや……べえつくしゆん！——失礼！わたしも嫌だ！ごめんね！」

てへぺろと。手計はかけていたメガネを取る。

彼女の人格が入れ替わった証だ。

神井は残念そうに目を閉じる。

「……もう一人の手計くんにも断られちゃったか」

「分けるってなると半分以上の書類がこっちに回つてきちゃうわけだし……」

「……きみ、忘れてないかい？君も役員の一人だよ？」

まあまあ、と手計はソファアに腰掛けて楽にする。

「そういえば、手子生さん……本当に解き放っちゃって大丈夫なんですかねー？」

「心配はない。美妃のことだ、きちんと彼女をコントロールしてくれてるはずさ」

「だいたいんですけどー」

少し不安げに手計はテーブルに置いてあったカップからお茶をすすする。

「君はどう思うんだい、手計書記長。『悪魔』手子生丸々てごまる（まるまる）を」

「……クレイジーサイコロズの多性癪デビル」

「辛口を通り越して凄惨な評価だ」

手計はカップをテーブルに戻し、ため息と共に言い放つ。

「知つてると思いますけど、わたしも、真面目なもう一人のわたしも彼女のことを苦手な  
んですよ」

「……うむ、性格面は置いておいて、彼女の実力のほどは」

何言つてんだか、と手計は大きいため息をつく。

「……はあ。正直やりすぎなんじゃないかと。過負荷マイナスには過負荷マイナスでつていうアイデアな  
んでしようけど……」

神井は顎に手をあてる。

「やりすぎ、か……まあ、それなら越したことないさ。経過はどうであれ、我々は校内の  
不穏分子を排除できればいい。……全土様の『目的』の邪魔になる不穏分子を」

手計は右手でスパナをペン回しのように振り回す。

「……で、会長は？ 手子生のことはどう思いますか？」

「……ん？ ボクかい？ 先日、やつが寒井さんよりも先に全土様へ進言をしていたの  
は気になるところではあったが……そうだな」

神井かのいは口元に微笑を浮かべる。

「球磨川禊に手子生さんをぶつけたのは、正解だと思ふよ。最善手だ」



なにせ、と神井もペンを回す。

「なにせ彼女は……我が校内で超ド級の過負荷マイナスだからね」

ふふ、と微笑みを浮かべて神井は書類にペンを走らせる。

「やつは何もかもが吹っ飛んでいるよ。ボクが見る限り、その人格キャラは、あの球磨川禊にも匹敵するかもしれないな」

「彼女が入学した時はもう……全土様がいなかったら大騒ぎでしたよ」

笑みを浮かべて仕事をする神井に、手計は鳥肌の立つ肩を両手で抑える。

「正直、今回ばかりは新生徒会の連中には同情しちゃいます……手子生が相手だなんて……異常集団であるはずのA組生徒の多くが病院行きになりましたもん」

「球磨川禊がその気になって暴れば同程度か、それ以上の被害が出たかもしれないな……最近はやつの動きは少ないようだが……そうだと手計くん、僕の仕事の手伝いを」

「あ、そーだ！ わたし急な用事が！」

「ごまかすように手計はわざとらしく声をあげ、生徒会室のソファから立ち上がる。そのまま、そそくさと扉の方へ。」

「……。誤魔化し方へただね、君は」

「でもわたしがいなくても大丈夫ですよね？」

「はあ……働く気がないなら結構。ここにいないだけでも一緒だ」

さつさに行け、と神井はペンで扉の方を指す。

「はい。……ですけど会長」

手計はドアを少し開けてから振り返って、

「会長なら、それくらいの書類なんて——数分で終わるでしょ？」

そう言つて彼女は出て行き、神井はふつと笑い。

「……賢い女だ」

わずか数秒で、書類の三分の二は片付いていた。

\*\*\*

「美妃さまはあちきに約束してくださつたわあ……！——キミらを、あちしの好きに  
 していいよつて!! ああ、なんて素晴らしい!!——こんな嬉しい逸材があちきの机に  
 並ぶなんて！」

当の本人、てしまるまるまる手生子丸々は聞くのもおぞましくなるような歪んだ死生観と美的感覚を  
 延々と語る。

「知つてる……? ホルマリンはね。ステキな素敵な薬品なの。薬品につけた死体の細  
 胞を死滅させることで——」

そのあと五分間長く語っていたが……

要約すると、ホルマリン漬けにすれば物の美しさは保たれるよね。

古い骨となり朽ちることなく、人の持つ美しさと可愛さは永遠に。若いまま、綺麗なまま愛せると。

白衣と赤毛を振り回しながら彼女はそう力説した。

『……。まあわかつたよ』

「ご理解いただけただけだ禊サマ?!? あちきはかなりの綺麗好きなのよ!!」

『見事なまでに破綻者で、壊れてて、悪魔的だね。うん』

見事なまでにブーメランだが。

「大事だから現物は持ってこれないけど……写真なら……ほら! これが渡辺くんの眼!  
! 真つ黒で輝く黒水晶みたいで綺麗でしょ?」

手子生はどこから取り出したのか、コレクションの一部……写真をこれ見よがしに見せつけてくる。

おそらく……正邪を石にしたあの少年も見事なまでの過負荷。

それもおそらく球磨川と同格か。いや、それ以下なのか。

「あとあと! これが中学のクラスで一番綺麗だった吉田ちゃん! 彼女の顔を見てい  
るだけで女としての優越感と劣等感が同時に湧いてくるの!」

——こちらは趣味最低のより重度の過負荷<sup>マイナス</sup>だ。

「今、趣味に対して結構好みにうるさいあちきが、特に欲しいのは——少名ちゃん!!

あなたです!」

「えっ、わたし……?」

ビシツと手子生は指先を針妙丸に向ける。

「うん。だつて……だつて……こんなにも可愛いんだもの!! キミは特に保存しがいがあ  
りそう……どうかあちきと墓まで一緒に付いてきて!!」

「お断りします」

吐き気を催すせつかくのお誘い、喜んで頭を下げて即断った。

「ノ——ツ!? そ、そんなあ……!! あちきが老衰した後はなるべく土葬にしてもらつ  
てさ! あちきの死体と一緒に埋めてもらえよう知り合いに頼むから!」

「そんな知り合いがいても嫌だよ。遺骨になったとしても触られたくないもん」

マイガツ! と膝をついて両手で頭を抑える。何か閃いたか彼女はすぐに顔を輝  
かせて、

「けどけどさ! 遺骨になったら拒否はしないよね! あちきの愛に! 逢いに! 無  
言で答えてくれるよね!」

ダメだ……:会話が成立しない。要するにお前ぶつ殺して墓穴に埋めるってとこだろ

う。

『なるほど。死人に口なしとはまさにこのことだね。針ちゃんの答えなんて関係ないつと』

「ちよつ……!?!」

「おお！ わかつてくれるかい禊サマ！ さすがあちしのシヨタ首椀！ ちゃんとあなたの分も容器は用意してあるのよ！ ほら！」

『……しよ、シヨタ』

手子生は興奮マックス状態で理科室の棚から、生首が余裕に入る大きさの瓶を取り出す。球磨川の苦笑に歪めた口元がさらに引きつる。

『……うん。見せなくていいよ……?』

顔は可愛い方なのに、最悪の性癖と趣味思考。

そして濁りきってドブのようになった目の色が全てを台無しにしている。

せっかくの赤毛お下げの美がついてもいい少女なのに……お宝をドブに捨てるとはよく言ったものだ。

いや彼女が捨てている場所は墓穴か骨塚なのかもしれないが。

数万する金貨がへドロに塗れている。

それくらいにひどい。

そう考えると性癖がまだマトモ？ な球磨川の方が……まだマシかもしれない。  
どっちもどっちか。

「いや待って。感覚が麻痺してきたのかな……」

やっぱりどっちも最低だ。

『……重度の死体愛好家だね。手子生ちゃんは。そこまでいくと逆に感心まで覚えてくるよ。……これ褒め言葉ね』

「……なつ、なんと……!! あちしにちゃん付けなんて……!! 恐悦至極つ、光栄です禊サマー！」

『……うん。様づけはいいけど、マジに怖いから踊り狂わないで?』

狂乱。狂喜。と言った言葉がふさわしいくらいに頭を両手で抱えて上下に激しく振っている。

しかも笑いすぎて口角がすごいことになっている。下手したら悪夢にでも出てきそうだ。

「嬉しいっ！ 有機物じゃなくて生き物に初めて綺麗って言ってもらえたあ……!! しかも、これからは二人に永遠の愛を誓ってもらえるのねえん……ああ……shii—— wa——see……!!」

「うっ……っ、正邪、早くかえってきてえ……」

思考が完全にトチ狂っている。あの世に脳でも落としてきたのではないか？

もうあまりにも不快すぎて、つい泣き言が出てしまった……機会があれば、あの世でこの人間の脳みそが落っこちてないかどうか、三途の川の船頭か閻魔にでも聞いてみよう。

「少名ちゃんといでに禊サマのナマナマのホルマリン漬け……ああ、きれい！——

——できればもう今すぐにでも飾りたいくらいっ!!」

「!!」

手子生は中身の分からない瓶の中身を二人に向かってブチまける。

「うわっ!? な、なにこれ!」

『……硫酸とかヤバイ薬品じゃない……ただの水だ。あーあ。せつかく今朝乾かしたのに。どうしてくれるのさあ』

球磨川は制服を引っ張って飛び散った水をしげしげと眺める。

「正解だよ。禊サマ」

「……!」

こいつ、いつの間に後ろに回り込んだ……!?

針妙丸は手子生にあつという間に接近されたという事実には驚愕。

一瞬の動揺の際に、針妙丸は首に手を回されてしまう。

「少名ちゃん。——あなたは生首だけなんてもつたいない。あなたはあちきが見た中で一番綺麗……だから、その人形みたいに綺麗な全身を綺麗な姿のまま保存させてね」

針妙丸の耳に生暖かい息が吹きかかり、ゾゾツと全身に怖気と危険信号が鳴り響いて悲鳴をあげている。

「身長150センチちよつとお……きはつ……！ 理想的イ……まあだ舐めなあい……あちきの睡で汚れちやうものお……」

手子生は器用にメジャーで針妙丸の背を測り、メジャーの紐をしまう。

「ひいひい……！！」

下手な妖怪よりも……狂った人間の方がはるかに恐ろしいと、彼女は初めて思い知った。

『なるほど、性癖が腐ってるのは、そつちだつ——』

毎度のように能天気の話そうとする球磨川。

言葉を紡ごうと口を開いた次の瞬間、彼に異変が訪れる。

『た……!!? ——うぶつ……!!? ぶうえつ!!?』

急に球磨川がもがいて嘔吐。立つこともままならず、地面に崩れ落ちる。

「く、球磨川く——」



「はい、少名ちゃんはお口ちゃ——つく」

「むぐ——つ!？」

手子生に針妙丸は口を塞がれる。

怯んだ隙に針妙丸の背後に回り込み、嚴重な防護マスクを被せる。

「そんなに鼻大きくして息しないほうがいいよ？ あちしは慣れてるからいいけどお」

『ぐ、があ……つ!？』

白目を剥いて、球磨川の意識が消える。

「まさか……毒……!? さっきの水……」

「いんやあ。あの水は関係ないし、これはあちしのコレクシヨンの中じやあ、まだまだかわい子ウサギちゃんだよ？ どう禊サマ。この世で一番の『悪臭』体験は？」

よく見ると、手子生の指の先から謎の液体が床へと滴っている。

まあこれは可愛いウサちゃんもスカンク以上の異臭を放つようにしちゃうんだけどね、と手子生はゲラゲラ笑う。

「あく……しゆう……!? 臭い……!?」

彼女の指から出ている液体。汗ではない。

針妙丸は手子生に最大の警戒を払い、

——何かこのマスクにも仕掛けがあるかもしれない。

「おおっとお。外さない方がいいよ〜?」

顔全体を覆う防護マスクを外そうともがく針妙丸の腕を、手子生が押さえつける。

「舐めてもらっちゃあ困るさね。聞いたことない?」——『チオアセトン』って

「ちお……………あせ……………!?!」

『……………超危険化学物質だよ。針妙丸さ、うぶえ……………!?!』

説明しようと口を再び開ける球磨川だが、すぐさま顔色を悪くし、胃の中の物を戻し、もがき苦しむ。

「おやおや。勉強はできないくせに雑学は詳しいタイプ?」

「球磨川くん!! 息を止めて!!」

「はっ!! 息を止めるとか……………この悪臭はさあ、そんな次元じゃねーんだよお!!」

罵声を浴びせながら手子生は球磨川の土手っ腹を蹴り上げる。

『うぶえ!!』

我慢の限界のうえ、蹴られた衝撃で球磨川が嘔吐。

「うわ、きったねー。ゲロ禊サマ……………」

手子生はニヤニヤと嗜虐的な笑みを浮かべながら、白衣のポケットからマッチを取り出す。

針妙丸の顔が一気に強張る。

この学園での授業で言っていた。いくつもある化学薬品の中には発火性のあるものが存在すると。もし彼女の言っていた『ちおあせとん』が、その類のものなら。

マツチなんかを近づければ……どうなるかは想像に難くない。

「や、やめて!!」

実験室の水たまりにマツチを近づけぬよう懇願する針妙丸に、手子生は嗜虐的な笑みを見せる。

「……ききひひ、なーんちゃってえ」

手子生は着火したマツチの火を消し、すぐさまポケットにしまう。

「やっぱ可愛いなあ少名ちゃんは。ちよつとからかっただけですぐマジになっちゃうんだカラア。この薬品には爆発も、発火も発ガン性もないよ……ただの悪臭の塊さ」  
ケラケラと笑う。

「効能はヤバすぎる悪臭。アンモニアとは比べもならないくらい超悪臭だけどね……!!」

『……う、ああああ……っ……!!』

針妙丸は思い知らされた。

匂いも度も越せば毒と変わりない。こうしている間にも球磨川の容体は悪化していく。

「苦しい？ 臭い？ 消したいよねえ！『大嘘憑オールワイクシヨンき』で！ けど、ザーンねんでした！！  
キミが自分のスキルを使えないってことは、こっちは知ってるんだけーん！！」

『……………う、……………うあ』

「!? どういう……………!!」

少名ちゃん、ちよつとこつち向いて、とハートマークがつきそうなくらい甘ったるい声で手子生は囁く。

「超危険化学物質の一つ。『チオアセトン』はねえ……………過去にドイツかな？ どつかのマヌケな科学者が、間違つて谷底に落とすただけで、200メートル先にいた大勢の人間が全員嘔吐・失神したんだよ。こんな至近距離で直に嗅いだら、どれくらいヤバイ反応を起こすかなあ……………!」

「……………!!」

「ああ、き……………きひひ……………きひひ……………さいつこう!!」

彼女の話が本当なら。

「わたしはともかく……………なんであなたは平気なの!？」

「ん？ ———慣れ」

普通に考えてれば、嘔吐もしてしまいうくらいの悪臭の中で、平気でいられるはずがない。

「最初はまあゲロったけど、何度もかいでつと癖になっちゃって。人間の適応力っておそろしいよね……!」

それを慣れている……!?

この人はどう考えても普通じゃない。

「いつもなら、もつとヤバいのを使つて首だけ残して身体をドロドロに溶かすんだけどね。その匂いの方もヤバくて。ほんと数秒だよ? 叫び声をあげることでもできず苦しんで死んでいくの……」

異常……いや、異常以上。

わかつてはいたが、彼女は——とち狂っている。

球磨川同様、どこまでも人格が捻じ曲がっているんだ。

「けど、あちきもこの部屋にいんじゃない。だったら……あちしには害のないやつ使つてこうかなって。まあ超レア品のためなら、ちよつとくらい死にかけてもいいんだけど」

白衣が汚れるのも構わず、手子生は鋭い蹴りを幾度となく球磨川にぶち込む。

蹴られるたびに我慢していたのか、胃の中の物と血が同時に口から飛び出している。

このままでは球磨川が死んでしまう。

理由はわからないが、この場所では大嘘憑きは使えないのだ。そうなったら復活はで

きない。

とはいえ、手子生が針妙丸たちを見逃すはずもない。

ここで彼女を、『悪魔』の能力持ち、手子生丸々を倒すほかない。

針妙丸は腰にさした針の剣、輝針剣に手を伸ばし――

「同感」

「!?!」

針妙丸は輝針剣を抜こうとする手を止める。

「あちきが少名ちゃんなら……この場であちきをぶつ殺すしかない。そう判断する。けどさあ……あちきがそれを予想しないと思う？ 少名ちゃんがあちきに都合よおおく、不意打ちなんてしてこないって、そーんな能天気だと思う？ それってさああ、あちきを頭湧いてるみてえにバカにしてるとちやう？」

「……!?!」

「あちきが渡したマスク……あれになんの仕掛けもないと思つたのかい？」

針妙丸はすぐに異変を感知し、手子生に被された防護マスクを外そうとする。

――が、外れない。それどころかいくら引つ張つてもビクともしない。

「あちきを攻撃したり邪魔してごらん――絶対に後悔するよ。お願いしま

「す早く殺してください、って泣き叫ぶくらいに」

「……!?! て、手子生さん、いったい何を——」

「塩素って、知ってる？ プールの水の消毒とかによく使われてるんだけどさあ」

球磨川から目線をズラさず蹴りながら、手子生は針妙丸に話しかける。

「あれってさあ……水の中にいる雑菌どもや、害ある生物を殺すための薬品なんだわ。つまり殺すための物質なんだわ。わかる？ あちきらに害がないのは塩素が致死量に至っていないから」

「なにが……言いたいの」

「さあ？ 知りたかったら——攻撃してみ？ 地獄見せたげる」

急に雪原地帯に素っ裸で放り出されたかのような寒気。

とてつもない嫌な予感に足がすくみ、剣を抜こうとした手が動かなくなる。

「——いい子だね。少名ちゃん。えらいえらい」

手子生は言いつけを守る子供に向ける母親のように穏やかな顔を針妙丸に向け頭をなでる。針妙丸は凍り付いたように動くことができない。

「さて……襦サマもさっすがにもう失神したかな？」

手子生は指鳴らしをし、ピクリとも動かない球磨川の脈を調べようと顔を近づけようとすが、

『……甘いよ』

同時に球磨川の腕も彼女の顔に近づいていた。

「—— つ!! まだお前生きて……っ!!」

『……よつと』

球磨川は先ほどまでの死にかけの身体をそれこそ嘘のように俊敏に動かし、螺子を投擲。

「ぐっ……っ!!」

器用に身をかわし、手子生は針妙丸を抱えて化学室のドアの方へと退却。

『ひどいなあ。肋骨と大胸骨と背骨とあばら骨が全部いかれちゃったよ』

全身ガクガクの状態でふらふらと立ち上がる。

しかし次の瞬間、にこつと児童番組のヒーローのような明るい顔で彼は笑う。

『けど僕は負けないぞ! 数か所の骨折なんて気合でどうにかなるな!』

ならない! ならないから、と針妙丸はぶんぶんと手をふる。

第三者から見れば彼の今の状態とあまりにも乖離しすぎている発言と表情に、とてつもない嫌悪感を感じるだろう。

『ようし負けないぞお。——こうなった報いは、きつちりと数倍にして返さな

きゃ』



「……なるほどネ。『大嘘憑オールフイクションき』っていうよりも、こいつの精神性がそもそも不死身なワケ、か。いいねえ。モルモットにびつたり」

声色を低くし球磨川は螺子を出し、手子生はニヤケ顔で乱れた白い研究衣を着直す。

加害者であり、罪悪感など一切感じず冷静に分析をするあたり彼女にも当然。

どちらも……人間としてどこか歪んでいる。

「じゃあ、じゃあじゃあじゃあじゃあ、モルモットらしくう！ あちきの実験に付き合えよおおおおつ!!」

『……手子生ちゃん。盛り上がつてるところ悪いんだけど』

「———っ!! ……んあ？ あによ、盛り上がってたのに」

『やつぱりさあ、僕考えたんだけど……僕達がこんなに争う必要はないと思うんだ』

……!?! 球磨川くん……?!

「へえ？ えーと、えーと、それまたどうして？ あちきが欲しいもの手に入れるためにはお前ら殺さんとダメなんだけど。おバカなあちきに教えておくれよ」

そう、彼女の目的は人間標本。

わたしたちを殺して薬品漬けにすることなのだ。

たしかに、と球磨川は螺子を地面にぶっ刺し突き立てる。

『よく考えてみてよ。僕らのホルマリン漬けを眺めるよりも、もつと楽しいことがある

と思わないかい?』

「……………きはっ」

手子生はにつこりと一笑。必死に勧誘しようとする球磨川をおかしそうに嘲笑っているようにも見える。

「あいにく一人が好きでね」

『そう言わないでさあ、一緒に友達になろうよ。その方が絶対に楽しいって! マッ〇とかで一緒にバーガーとか食べてさ! ジ〇ナサンとかファミレスでドリンクバーやパフェでも頼もうよ! 休日とかは遊園地とかユニバーサ〇スタジオとか夢の国とかさあ!』

「……………くく、それはそれは楽しそうだね」

ま、まさかこんなヤバイ人を仲間に引き入れるつもり!?

「———けどね、禊サマ。それはちよつと勘違いだねえ」

ニヤリとしたり顔で彼女は微笑む。

「あちきはあんたらの人格とか、友情とか愛とかどーーーーーっでもいんだわあ。ただあ。あちきは永遠に腐らない長持ちする人体が欲しいの」

手子生は空想で切断した腕でも抱いているのであろうか。

すりすり自分の手に

……やはりマトモではない。

「サンタさんにも頼んで手に入らなかったあちきの欲しいもの。あんたらをまとめてチヨメチヨメして、漬けたいのよ、こっちは」

『それは、気に入らない人の監視下で、できるものであってもかい?』

球磨川の指摘に虚を突かれたのか、手子生の表情が激変する。先ほどまでの嗜虐に満ちた笑みではなく。

「……」

どこか虚しき、やり切れなさ。どこか諦めを覚えたような。

『無』の表情を浮かべていた。

『僕にはわかる。君だって、大多羅全土くん達、生徒会は嫌いだろう? 様付けだって、本当はしたくないはずだ』

無言。肯定しているも同然だ。

『大丈夫。僕は君が過去に何をしてきたか。何人殺してきたかなんて僕は問わない。それよりも、僕は君の意思で決めてほしい』

球磨川はクワツツと真剣な顔で尋ねる。

『僕と一緒にエロ本を買いに行ってくれるのかを!!』

最低だあああああつああああ!!!

仲間に引き入れる流れだったのに、この男は全部、全部自分でその機会を不意にした！

「球磨川くん!! あなた馬鹿でしょう?」

『最寄りの本屋さん。品揃えいいんだけど、レパトリーがなかなか多くて決められな  
いんだよ。手子生ちゃんとかそういうの、よく知ってそうだし。SMプレイとかかな  
?』

「失礼な上に最っつっつ低っ!!」

すつと晴れ晴れした顔で手子生は球磨川の手を握る。

「あちきの一押しはリヨナ（ドS）ものだよ」

「こいつもこいつだったああああああ!!!」

『本当?!』

「それ以外にもオススメのいくつか知ってるよ。今度紹介するよ」

『ありがとう、手子生ちゃん! あ、そうだ! 一つ忘れてたことがあったんだけどさっ  
!』

「ん? 襦サマが忘れてたことって?」

目が鋭くなると共に、球磨川は床に刺した螺子を右足で地面に押し込み、深くねじ込む。

そしてニンマリと口元を歪めて、

『報復の件、まだ終わってなかったよね』

## 第38話 過負荷 V S 過負荷 その2 悪魔の化学実験

球磨川が足元に刺した螺子。

そのいくつもの切っ先が床を通り、床から生えたいくつもの螺子が掘削機のように手生子の身体を穿つ。

『それで——さっきの分はチャラだ。友達同士、許しあわなきゃね』

そう彼は先ほどと変わらぬにこやかな表情で告げる。

『ほら！ 殴り合うことで生まれる友情ってね！』

……やはり球磨川も危険だ。

針妙丸の警戒は手生子と共に球磨川にも向く。

「……けど助かつ」

「——なああああに、勘違いしてんの針妙丸ちゃん。それに裸サアマアツ」

『!!』

が——

「あちきのバトルフェイズはまだ終了してないゼエ!!」

螺子は手生子の身体を貫いてなどいなかった。

「螺子は地面から出た瞬間、粘土のように形が歪み、原型が残らぬくらいドロドロに溶けたのだ。」

「さっきの台詞。同感だね。友達はゆるしあわなきやあだね。あちきへの報復も——

——これでチャラだ」

そして、球磨川はがっしりと握られた自分の手へと目をやる。

『つつつ?!?』——あああ——『!!!!』

『『悪魔の化学実験』』  
デビルズケムストリ

球磨川の右手が一瞬でドロドロに溶け、かつて彼の右手だったものが床に異臭をばら撒きながら溶け落ちる。

「それがあちきの持つ学園最悪の過負荷<sup>マイナス</sup>。よ——くその手に刻みやがれよ、このダボがあ——」

溶け落ちた腕を、無事な方の手でおさえ球磨川は悲鳴をあげる。

『う、裏切ったな……ひどいよ手子<sup>てじまる</sup>生ちゃん! 僕は信じていたのに!』

「——おお聖書は言っている。騙される方が悪い。騙す方はもつと悪いってさ

……きひっ!」

……言っていないだろう。脈絡なしになぜ聖書出てきた。

針妙丸は半分くらい呆れる。

「……あと裏切り者って球磨川くんが言えるセリフだっけ?」

「くくつ……同感。友情を反故するような奴にロクなのはいいないねえ」

「だまし打ちしたあなたがそれを言う!?!」

「きははっ!」

もうこの頭のおかしな連中といえると思いが一周回って冷静になるらしい。

球磨川くんの場合、不意を突かれても何も言えない。自業自得とも言える。

「……しかし全身をドロツドロに溶かすつもりだったんだが……この野郎、手を引いて被害を最小限にしやがった……」

手子生は針妙丸にしか聞こえないくらい小さく……しかし恐ろしい内容を呟く。

『……手子生ちゃん。君の持つそのスキルについても、詳しく教えてくれるかな?』

……僕、正邪ちゃんに協力するのもあるけど、君たち<sup>スキルホルダー</sup>能力持ちの能力についても興味があるからね』

それにしても球磨川禊。

『……そう。安心院さんを殺せる能力なのかは……まあ、期待はしないけど』

右手が溶けたというのに何という精神力か。普通ならもつとパニックになってもおかしくないのに。

「いいよ。ただし————テメエが死んだらだけだなあ!!」



手子生はエアコンのリモコンを持ち、スイッチを入れる。

理科室の全方向からエアコンが一斉作動。

エアコンから出る風は集中的に球磨川の方へ向かっていつている。

「流石にコレはあちきも危ないな」

防毒マスクを装着し、手子生はエアコンから吹かれた風に手をかざす。

『悪魔の化学実験』——三フツ化塩素』

球磨川へ向かう風の色が一変。

風の色が……徐々に淡い黄色になり、ツンとくるような臭いが辺りに広がる。

『ぐ、……あああああつあつ?!?!』

「きはっ！ どう？ 禊サマ！ 三フツ化塩素の心地はあ！ ……『チオアセトン』なんかよりもはるかに危険な化学物質だよお!？」

三フツ化塩素。簡単に言えば、毒ガス。

少し吸い込むだけでも息苦しきや喉の腫れに苦しみ、触れるだけでも重度の火傷を負ってしまう。

「っ?! あああ……!! 痛い……いだっ……あああつ……!!」

「きはははっ！ 同感っ！ 同感だよ、少名ちゃん！ けどさあ……調節した量とはいえ、集中的にそれを浴びてる禊サマはもつと辛いだろうなあつ……つあ!?! ……ぐつ

!？」

そして、うずくまっっているのは球磨川や針妙丸だけではない。

「……………あああちきしよう。痛い……………痛い……………！ クソが……………！ 禊サマ、まだイカねえのかよ、こんだけやってるっていうのにしぶてえな……………!!」

よく見ると、手子生の手がボロボロだ。

手の皮膚が酷く焼けただれ、大きな火傷を負ってしまったている。マスク越しに崩した彼女の息遣いの荒さがわかる。

——これは演技じゃない。

本当に痛がっている。

球磨川を集中的に包む黄色の煙が自然消滅する。

『……………なるほどね。さっきの化学薬品の説明……………それにその防護マスク。なるほど、君のデビルズなんちやら……………たしかに恐ろしいスキルだ』

「きはっ！ おいおい、あちきのスキルの名前くらい覚えてから死んでけよ!? ほら、デビルズケメストリーだ！ ほら！ あちきのスキル名を言ってみろ！」

『……………ごめんね。記憶力は良くない方だからさ』

息苦しうにゴホゴホと咳き込みながら球磨川は笑みを絶やさない。

『「酸素を操るスキル」……………たしか、水槽学園でもそんなスキルを持つ人がいたっけ……………」

けど、手子生ちゃんのはもっと厄介かも』

仮にも……世界中の酸素を無かったことにすれば、酸素は操れなくなり、その能力持ちは無力化されるだろう。

「酸素を、ねえ……なるほどねえ。勉強になるよ。きひひひっ」

『エアコンの風……学生が絶対に気軽には持てない危険化学物質……』

だが、彼女のは『違う』。

一つのもの無くしたことにすれば、それこそ取り返しのつかない、それぐらい身近にあるものを操る能力。

『——触れたものを好きな化学物質に変えられるスキル』

そう言われ、『悪魔』はにいつと嗤った。

# 第39話 過負荷 V S 過負荷 その3 最低の仲間意識と

『「酸素を操る能力」。僕が螺子伏せた彼女のスキルは、彼女自身に害はなくて、異常染みてたけど……それに比べ君のスキルは、実に過負荷だ』

球磨川は臓器も身体もボロボロの状態でフラフラと立ち上がる。

『……その能力、より危険な物質を手から直接出そうとすればするほど。その被害を本人も受ける危険性も当然多くなる。……素敵だよ。素敵なまでに過負荷だ』

球磨川は嬉しそうに口を三日月に変えている。

『だから君は、普段は他の物を変化させることで、自分への被害を最小限にしてる……けど、さっきのは違う』

『君がダメージを受けたのは、あの三ツツ化なんちゃらを直接出したから……いや、扱うものがその手に余るくらい危険なものだったからだね』

「……………きはっ」

手子生は肩をプルプルと震わせ、そして、

「きはははっ！ 同感っ！ あちきのスキルで直接出すのは結構危ない。けどなあ……」

汚れずに傷つかずにできることなんざあハナっから少ねーんだよ!! 自分だけ傷つかずに目的達成とか……なーんて! ムシが良すぎるってモンでしょーよお! きはは!

『……感動的だね。ぬるい友情、尊い犠牲……と過負荷マイナスのモットーに加えたいところだ』  
球磨川は口元に微笑を浮かべる。

「手子生さん。リスク上等………とはいったけど、あなた、ずいぶんと球磨川くんのスキルを警戒してるみたいね」

「あん?」

針妙丸の突然の挑発に、手子生は顔をしかめる。

「だって、そうでしょ? だれのスキルかは知らないけど……球磨川くんのスキルだけをピンポイントで封じて、集中的に狙う。これは明らかに球磨川くんをあなたが恐れるって証拠。けど残念だったね。球磨川くんが予想以上にしぶとかったうえに、自分の能力の正体まで見破られた。………さっさと降参したほうがいいんじゃない?」

『……針ちゃん、何もしてないよね』

「黙ってて」

隙を突こうとしても、全く見せないのだから仕方がないだろう。

「なるほどなるほどお………ふうん………少名ちゃんはそう考えてる、と。まあ、少

名ちゃんをイジメないであげてるのは、あちきのコレクション魂のせいだけど、さあ「うえっ」

何とも言い難い不気味な視線を向ける手子生に、針妙丸は顔をしかめる。

「まあけどさあ……わかつたからって、どうなの？」

「……………タネがわからない手品をさせるよりも、タネをバラされた手品をさせる方が手品師は困るでしょ？」

「きはははっ！ 困るう？ あちきがあ!？」

一笑。

「あちきが『大嘘憑き』を恐れる？ 封じたのは悪までも保険だよ。お前らを確実にぶつ殺すための。いいこと少名ちゃん、例えばさあ、アルコールは消毒にも使われるよね？」

塩酸だつて実験だけじゃない、医療用や農薬にも使われてる!」

困らない。『大嘘憑き』など存在消去以外は彼女にとつては何も困らない。

束縛し、永遠に殺し続けることができる能力こそ『大嘘憑き』攻略の糸口。

少なくとも、彼女のスキルを使い、毒ガス室を作れば永遠に殺し続けることはできる。

そして逆に球磨川がやけくそでスキルを使ったとして……世の中消されたら困る物質が多すぎるのだ。

仮に消すとして、どれくらいの化学物質を消せばいい。彼曰く「『大嘘憑き』は乱用で

きない』。

——下手をすれば、世界を無かつたことにしてしまふのだから。

「他にも薬品の用途は様々！ 他にも無数にある化学薬品、化学物質を！ どうやって消し去ろうと、無かつたことにしようと言うんですかねえくく!!? 消し去った後が困るよねえ、んん？ 少名ちやああああん？」

「!!」

「それにあちぎの能力の正体が、バレようとバレなかりょうと、どうだつていいんだよお！ あちぎはなあ、禊サマの無限コンティニューと全回復さえ封じればそれでいいのさ！ あとは一回！ たった一回このモブ顔をあちぎがぶつ殺せばいいんだからなあ!!」

『……………モブ顔つて、酷くない？』

彼女は自分の能力が『大嘘憑き』に無力化されにくい性質を理解してここへやつてきた。

球磨川の推測が本当なら、彼女の『デビルズケメストリー悪魔の化学実験』。

手に触れたものを好きな化学物質に変え、手からも直接好きな化学物質、危険な気体や液体、薬品を生産し出すことが可能。

その危険性あふれる能力と歪みまくった人格。

それらがあれば、十分球磨川と戦えると、見通しの甘い者なら思うだろう。

「——まあ、禊ちゃんなら、世界中の化学物質を無かつたことに……だなんて無茶もするかもだしねえ」

先ほどまでの興奮が嘘のように手子生は冷静に話す。

彼女の推測を受け、球磨川は、はっはっはっ、と両手をあげて笑う。

『嫌だなあ、僕はそんなことしないよ』

「きははっ、どうだか……禊サマのツラ。あちきの見立てだと、目的のためならどんな手段だって使いそうだからねえ」

『……』

口元が笑っているもの。説得力なんてあったものじゃない。彼女も、短期間で球磨川の心理を正確に分析しているようだ。

「だから——あちきや美妃様の進言で、全土さまにお力を貸していただいたよ。

彼曰く、『大嘘憑き』を無力化する力を、この施設全体に適用してくださいましたのさ」

「オール……フィクションを……？」

針妙丸は手子生から語られた衝撃的な話の内容に、口をぽかんと開ける。

……彼女の口ぶり。では、あの銀髪の男。

学園支配者、大多羅全土の能力は能力の無効化なのか……？



『……少名ちゃん、今は彼の能力のことなんて考えなくていいと思うよ。今探っても、単なる憶測でしかないからね』

「……………」。球磨川くん、ずっと思ってたけど、わたしへの当たりきつくくない?」

『僕は君が嫌いだからね』

「そんなストレートに言う?!」

一切悪びれることなく平然と球磨川は言い放つ。

「あああああー……にしても。くつそしぶとい奴だなあ禊サマ。三フツ化塩素まで使ったのに……いい加減ジワジワぶつ殺すのも面倒になってきたなあ。――

――つまりらんが一瞬で殺すか」

先ほどまでマイペースに浮かべていた笑顔が、彼女が顔を覆っていた手を外した瞬間、別人のように様変わりする。

手子生の攻撃を受けず、一番余裕のある針妙丸が周りを見渡す。

たしか彼女の代理をしていたラグビー部の……たしか石垣と言ったか。

彼の姿が見えない。

「……………」。(実験室の端……?) 何してるの!?)」

後ろを向くと、意外とすぐに彼を発見できた。

しゃがみこんで何かしているようだ。

よく見ると、部屋の端の方から何かが溶ける音とともに、異臭がする。

「時間稼ぎは……まあこんなところか。——おい、そろそろ起きたか、なんの可愛げのねえクソゴリラあ!! あえてそつちにはあちきの能力が届かないようにしてやってんだ、きちんと仕事はしたのかあ、ああ!?!」

『!?! あのとぶんスッゲー周りから忘れられそうなモブキャラ生きてたの!?!』

手子生が乱暴な口調で後ろへ怒鳴る一方、球磨川は驚いた表情でひどい発言。

「……は、はい。ご、ごほっ! ごほっ! もちろん準備はすでに……!」

手子生の存在感が濃くてすっかり忘れていたゴツい男、石垣が咳き込みながらヘコヘコと頭を下げる。

返事を聞き取った手子生はにいと崖から人を突き落とすかのような笑みを浮かべる。

「オーケーイイ……じゃあ……こいつで締めだなっ!!」

ゲス顔のまま地面に思いつきり地団駄を叩きつけ、彼女は針妙丸を抱きかかえる。

—————  
チャンスだ。これならゼロ距離で攻撃が放てる。

「輝針け—————」

「さあて少名ちゃん。死にたくなかったら暴れないでね?」

ハートマークが付きそうなくらいに甘ったるい声で手子生がささやく。

「あんまりおいたが過ぎると——腕もぐよ?」

彼女の警戒は針妙丸にも忘れられず向いているにゾツとする。

「手子生さん、わしは——」

石垣は

地面の揺れが足元から伝わる。

「すまないね。代理ゴリラ。おまえの生存は計算に入れてなかったわ……アホなあちきを許しておくれ」

へ……? と大男に見合わぬ間拔けな声が漏れる。

「じよ………冗談ですよね……?」

手子生はテヘペロっと両手を合わせて首を傾げ、

「ま、仲間だからさ! 大目に見てよ!」

「は……!?!」

やはりこいつも球磨川同様の過負荷だ。最低の仲間意識。

彼女にとって、彼はあくまで作戦遂行の道具でしかなかった。

瞬間、実験室の床が抜け、手子生は小型フックシヨットを袖から発射。アンカーが突き刺さり実験室の天井に固定され、手子生だけが落下から助かる。

「きはははははははっ!! 落ちろクソどもがっ! まとめて旧体育館の幽霊にでもなれ

よっ!! きはははっ!」

「球磨川くん!!!」

思わず手を伸ばすが、当然届かず。

『!! うわああああああああつ!!』

「うわあああああああ、手子生さまあああつあ!!」

実験室の天井は——遙か遠く。

\*\*\*\*\*

手子生丸々。

あらゆる化学物質を手から生み出し、直接触れたものを好きな化学物質に変化させる  
マイナス過負荷の持ち主。

——あらゆる化学物質を? 便利ではないか。

——これほどまでに社会に役立つものはない。

何も知らないものはそう言うだろう。

だがこの能力が過負荷たらしめるのは、

彼女は、常に何かしらの化学物質を出し続けなければならぬからだ。

現在に至る前に背負っていた彼女の以前の過負荷<sup>マイナス</sup>。

それは——常に手から、危険化学物質を垂れ流すというものだった。

彼女の手からは常に、運の良い日はアンモニアや二酸化炭素。

悪い日は、塩酸、水酸化ナトリウム……彼女が使っていた超危険化学物質の一つ、チオアセトンが生まれ出た。

それらが彼女の周りを覆い、手に纏う中、握手はおろか、彼女に近づけるものなどない。

文字通り、彼女の半径数メートル以内には、立っていることさえできない。

全身の感覚を麻痺させるほどの悪臭と危険液体で、周囲の人々の失神、入院など当たり前前。

逆に彼女に少しでも近づいた者は、一生他人に嫌われるほどの臭いをまとわなくてはならないというオマケ付きだ。

故に当然、

『おい、薬品オンナ！ 相変わらずクツセエな！』

『こいつをかけたらちよつとはマシになるんじゃないか!? あははは』

彼女はだれかに遠ざけられる毎日だった。

だれかと共にいることを物理的にも精神的にも禁じられた世界。しかし、本人は、そんな自分を不幸とは思わなかったようだが。

一番安全な食塩水の日。

クラスでみんなと一緒に過ごせるわずかな時間。

その給食の時間、ほぼ毎日牛乳を頭にかけられるのが日課だった。

『うわぁークツセエ』

笑い声、笑い声。笑い声に嗤い声。

嫌だというより

彼女としてはうつとおしくて仕方がない。

けどまあ、この時はまだ良心なんて枷が手子生にはあつた。

自分はまだ優しいのではないかな？ と彼女自身も思っていた。

『おいおい、また手子生のノート黄ばんでるぜー？』

『まあ、手からなんか出したんですか？ けらけらけら』

彼らも、彼女らも、自分と同じ能力を手にしてみれば、がらりと世界は変わるだろう。

そんな能天気な気分でした。

『……ま、まあ。そうかもね。そういう色の薬品も出るから……』

テストも勉強でも、友達でも体育でもトップのクラスメイト達。

まあ彼らもストレスがたまっているのだろう。周囲からの重圧とかなんとか。様々な思考の中、彼女が導き出した最大の悩み。

それは将来有望な彼らの人生を、何時にめちやくちやにしようかどうか、だった。

『……きもちわりい！ 寄るんじやねえよ、くつせえな！』

『冗談じゃなくてマジで氣い失いそうになるわー』

『死ね！ さつさと死ね害虫！ カメムシ野郎！』

しかたがない。

親とかからもプレッシャーとかをかけられて、イライラがたまっているんだ。

よくよく自分が読む漫画でもいるじやないか、こういうキャラ。

嫌いではない。それも人間のもつ本能の一つだ。

自尊心と、優越感。

そういう類の者にはこの二つがいる場合もあるのだ。

彼ら、彼女らは自分とは違うのだろう。

『悪魔め！ なんで……なんでお前みたいな人間が僕らの娘なんだ！』

中には親も優しい人もいるのだろうな。中にはモンスターならぬ、虐待ペアレンツ？ もあるのかもしれない。

正直、同情する。

『……消えろ、消えてしまえばいいのに、この悪魔め!』

隔離したりせず、有無も言わず『怖いよな。大丈夫。〇〇と〇〇はいつも一緒だよ』  
『〇〇は僕らの娘だ。たとえどんなでも、それは変わらない』とかカッコいいセリフを吐いてくれるんだろうなあ。

飯もうまいものを喰わせてもらっているんだろうな。

残飯や霞とか生ごみとかじゃなくてね。

まあ—————そういう良い親から死んでくんだらうけどね。現実でもフィクションでも。

ほら、師匠キャラでも良い親の模範に近いもの、モブキャラでもすぐに死んでいくだろう?!

箱庭学園の総合病院。

異常と呼ばれる子供たちの診断をし、その程度を測る施設……なんとも面倒なものだ。

『……精神面、異常なし……健康状態……あれ?』

『どうかしましたか? 人吉先生』

『……あの、手子生さん』

『はい』



『あなたの手……普通では見られない火傷の跡が多くあるわ』

『……』

ロリ医者が。余計なことを勘づきやがって。その童顔を溶かしてひん剥いてやろうか？

人親でその若さだと？ お前、何歳にピーしたんだよ。

『……それだけじゃない。これはずいぶんと前みたいだけど……足と二の腕にも似たような跡があるわ』

『……すみません。言えないんです』

『そ。じゃあ……その腕……見せてもらっていい？』

異常かどうかを診断する診療所。

頭の切れる医者がほとんどか数人か。

少なくとも、医者はバカではない。欺く人には準備がいる。

しかも中でもこの……人吉、とかいう医者。かなり頭が切れる。

数多い異常どもを今まで見てきてきているんだ。他の馬鹿どももみたく簡単には自分の本性をごまかせない。

『……汗かしら。ちよつと緊張しちやつたのかな？』

そのおかげで……日程をできるだけずらして食塩水の日調整しなくてはならな

かった。

『……いい、言えないんです。人吉先生。……ごめんなさい』

『どうしたの、手子生さん。わ、また汗が……。今はあなたのお父さんはいないわ。私  
でよかつたら……。話してくれる?』

『……や、……。焼かれるんです。お父さんに……。お母さんに。わけのわからない水まで  
手にかけてきて……。あちき、わけがわからなくて……。痛くて……。痛くてたまらないの  
に、二人とも笑つて……。ひ、人吉先生、あちし……。どうしたら……。』

『……お父さんを選んできてもらえる?』

診断は、人吉先生から両親への呼び出しと、怒声の混じった説教と……。警察行きの注  
意勧告で終わり。……。かなり警告に近いものだったが。

普通、それがそこそこ上に合わせる。

そういつた理性的な面も、手子生丸々が社会に溶け込むためには重要なのだ。

『先生っ!! 違いますっ! この子は――』

だが、人吉先生との面談途中はすこしヒヤツとさせられた。

冗談じゃない。せつかくまともで、かわいそうな境遇の純粹女兒を演じたというの  
に。

こいつのせいで全て台無しではないか。

『お父さん——ぎゅってしていい?』

……が、こう言えば、済む。

すぐに両親の顔がゾツと青ざめるからだ。

『……すみません。取り乱してしまって……』

ちなみに、診断が終わって帰るときに手子生は父にこう言った。

『……お父さん、だあいすき』

『近づくな、この悪魔め!』

『きはっ』

いつか——こいつらの顔を、クラスメイトも、自分を見下ろして笑

う彼らを泣き崩し、グチャグチャにしてやったら、どれだけ気持ちのいい悲鳴をあげてくれるのだろうか……

その裏、手子生は小学生生活をそんな想像を走らせながら一人、喜悦を浮かべていた。

\*\*\*\*\*

『うつぐ……うつぐ。おまわりさあん……助けてください……父さんが、父さんがおかしくなってしまったんです。……毎日、毎日あちきにこんな火傷をお……うつぐ』

『……ち、違う!! こいつが……こいつが自分でつけたんだ!! 妻もこいつに殺された

んだ!!』

『とりあえず、あなたを署まで連行させてもらいます』

『……ち、ちがうんだ!! はなせええ!!』

『……ひつぐ……ひつぐ…………きはあつ』

そして新たに『何かを』失い、今の過負荷を手にしたのは、中学一年の頃。

内心、これまでの人生を不幸とは思ってはいない。

嫌われようが、遠ざけられようが、隔離されようが、愛されなからうが、友達がいなからうが、仲間がいなからうが、踏みじられようが、生意気な奴がいようが、殴ってくる奴がいようが、犯そうとするやつがいようが、なんだろうが。

『ああああああつ!!! かおがつ、うでがああああ!!』

『あつそ。あつそあつそあつそあつそ。しつかしかわいくねー面だなあ。皮もいらねーや』

通う中学校の放課後の帰り道はまさに阿鼻叫喚の地獄絵図。

毎日毎日下校時に殺人事件とはおつかない。

しかも完全犯罪ですって旦那。まあ、死体も残らないからね。

世間では行方不明事件なのだが。

『いやだつ!! いやだついやだいやだいやだつ! 助けてえええ!!』

『あ、川森さん顔の皮だけ全部くれるー？ 最近、顔洗ったら皮溶けちゃってさー。流行りの移植ってやつー？』

夜に起こる殺人を殺人事件と知るのは実行犯一人。

だれも、何も知らずに、日々を過ごして送っていく。

『あやまる!! いままでのこと全部謝るから！ 頼む、助けてくれ！ なんでもする!!』

だから身体を返してくれえええ!!』

『……きはつ、何でもお？ 迷っちゃうなあ……だが断るう』

そろそろー、廃校かな？

『手子生さん!! おねがいつ！ やめて！ もうやめてよおおおつ!!』

『ごめんねー吉田さん。正直、君のことは嫌いじゃあなかったよー？ 人生で一番あちきと接触した時間が長かったし。けどまあ………可愛く生まれたのが運の尽きってやつだね。ま、将来男に汚されるよりは、良いじゃん！ 代わりに——あちきが大事にしたげるっ!』

自分より優れて、いつだって自分の……手子生丸々のマウンツをとりたい奴ら。

『どうして………どうして、手子生さん………こんなことしても、なんにも………』

思えば、理由を問われたのは初めてだったかもしれない。



横にいる少名針妙丸も、見逃せない。

ぜび二人と一緒に瓶越しに話したいものだ。

ぜびぜび、自分のトモダチコレクションに加えたかった。

しかし………思ったよりも、彼はしぶとかった。

常人なら絶対に失神する化学物質『チオアセトン』。その極悪臭を嗅いでも倒れず。

少量でも激痛の中で死んでいくほどの殺傷性と危険性をもつ、『三フツ化塩素』。

これらを喰らわせても、球磨川禊は倒れず、なお自分に向かってきた。

さすがにイラつきを超えて、尊敬の念を抱いてしまう。

だが——もう、始末してやった。

今の球磨川は『大嘘憑き』は使えない。回復も、復活も、床をくりぬいたことを無かったことにもできない。

抜け落ち崩れゆく床と共に、下の体育館へと真つ逆さま。

生きていたとしても、落下の衝撃と瓦礫で戦闘不能。即リタイアだ。

「どうかな？ あちきの切り札の一つ……人体やあんな脆い床なんぞあつという間に溶かす最悪の化学物質……『超酸』の威力は」

コンクリートの床を老朽化させ、人体に大火傷を負わせるほどの威力をもつ濃硫酸。

だが……この超酸はその威力をはるかに超える。

「純粋な硫酸の二京倍の威力……触れれば人体だけじゃない……肌も！ 骨も皮も肉も全部溶け落ちる!! それを床の端から端へブチまけて床を切り抜いてやったのさっ！」  
フックショットでぶら下がった手子生と針妙丸は、実験室の床が下へと落ちていくのを見下ろしていた。

「酸性雨でもコンクリを腐食させるんだ。濃度がより強く、量もバカにならん、あちきの超酸をお！ ブチまけまくったらトーゼン！ 腐り落ちちまうでしょうよお！ きはははっ！」

「……ああ……！」

針妙丸は無駄と知りながらも手を伸ばす。

実験室の床だったものが下層に到着。落下の衝撃に耐えきれず、床だったものが轟音と共に一瞬で瓦礫と化す。

「きはっ……知ってる？ 少名ちやあん、人がエレベーターに乗ったまま安全装置なしで最下層まで落下したら、助かる確率なんて全くないらしいねえ。今がまさに、そういう状況なんじゃないかなあ？」

手子生は耳をすませ、何かに気がついた様子で下に指を指す。

「ほら見てえ、あそこ。落ちた床が崩れて全部、下の階の体育館に落ちちゃってる。あら



あらあら！ あれも見てよお〜！ お前らがあちしだと思つて倒した石垣の死体。見事にぐつちやぐつちやだあね。かわうそ〜」

「……………」

仲間の無残な死さえ、彼女の心は痛まないのか。

針妙丸はそう言いたいのだろう。

「そう睨まないでよー。あちきだつて残念に思つてるんだよ〜？ せつかく禊サマの苦痛に歪んだシヨタ首を、ゲットだぜ！ できなかつたんだから」

「……………つ。どうでもいいんだね」

「はえ？ なあにが？」

手子生は訳が分からな〜い、とフックシヨットのワイヤーを少しづつ、足場になりそうな鉄骨に下ろしていく。

こいつに同情の余地なし。

彼女の心境的に、そう判断せざるを得ないと言つたところか。

高度が下層の体育館の天井近く、端から端へまっすぐと伸びた長く太い鉄骨の上に二人は降り立つ。

球磨川がどうなったのかはわからない。けど、まだ遺体が見つかっていない以上、死んだとは考えられない。

彼の生命力は大嘘憑き無しでもゴキブリ並だ。  
いや、そう言うとゴキブリに失礼なのか。

と、おそらく少名ちゃんは考えているのだろう。

\*\*\*\*\*

「少名ちゃん、今、それでも球磨川禊なら。そう思ったでしょ？」  
「!!」

「希望なんて持たずとも、禊サマもきつとあの瓦礫の中で原型とどめないくらいにぐちやぐちやになつてゐるからさあ！」

手子生はゲラゲラゲラ、と腹を抱えて笑う。

彼女は目的を達成したと思ひ油断している。

自ら避けにくい地形に降り立ち、針妙丸との距離も油断して詰めている。  
この機会を逃すわけにはいかない。

針妙丸は今一度輝針剣に手を伸ばそうとする。  
が、

「言つたよねえ？ 少名ちゃん、後悔するよつて」

手子生の目玉がギョロリと針妙丸の方へ。

「!!」

「殺気があゝゝ……ダダ漏れなんだよっ!!」

手子生が手に持ったスイッチを押しした瞬間、水が噴出しマスクの内に溢れる。

「……!!?」

溺死……いや、違う!!

『悪魔デビルスケメストリの化学実験』

今まで吸い込んだ水が突然変異する。

息苦しい、だけじゃない。

「……!?!」

~~~~つ~~~~つ!!!!」

「致死量の塩素水の中で溺死しろオ! きははははははっ!」

苦しい! 痛い! なんだこれなんだこれ!?

めまいもする、吐き気が止まらない、いがいたい痛い痛い痛い!! くらくらする、

息ができない、すえない、吸いたくない、怖い。怖いこわいこわい!!

「ああ……っ……! 少名ちゃん、今のあなたの表情はさいつここの苦しみに……恐怖

に歪んでて……っ……!」

目が……視力までやられた。

もう何もかもがぼやけて見える。死ぬんだ。

少名針妙丸は死ぬんだ。こんな訳のわからない場所で。

誰にも、だれにもその死を悟られないまま、苦しみ抜いて死んでいくんだ。

「さいつこう!! 今のあなた最高だよ!! 少名ちやあん!」

最後に見るのが、自分の死にゆく顔を見ながら悶絶しているやつなんて……

霊夢。魔理沙……そして……正邪。

みんなごめんね。

「……………ぼっ」

もう……だめ………みたい。

——「もう終わりか? お姫様」

………正邪?

——「このまま、終わるのか? それはあつげなさすぎねえか? くくつ……

情けないねえ。それでも私と共についてくるっか。脆くて話にならない」

「……………(ぼ)ぼっ。(んなわけないでしょ)」

「……ん？」

手子生丸々。わたしをなめるな。

少名針妙丸を——なめるな。

「少名ちゃん……なんで？」

もう人形じゃない。

わたしはあの頃みたいな……物言わぬ人形じゃない。

「なんでそんな、まだ諦めてない面してんの？ これから死ぬんだよ、おまえ。もう何もできないんだよ？ 逆に何ができるんですかね？」

——「まだ倒れるなよ。まだやれるだろ」

「(ぼ)ぼ(ぼ)……!! (うるっさい……!!)」

目が霞むくらいなんだ。痛いのが何だ。

頭なんてどうでもいい。視界なんてどうでもいい。

ぼやけていても、彼女がどこにいるのかさえわかれば。

——「そうだ。奴の調子に乗った、くそつたれな面に」

一撃っ、かましてやるっ!!!

「(い)び(い)び(い) (輝針剣っ)!!!」

「なっ——?!？」

閃光。

針妙丸の針の剣が光を纏い、速く、最速の一撃が。

手子生の顔面に向かい最期の一撃が飛ぶ。

「クソっ!! 『デビルズケメストリー』 いいいいいい!!!」

「っ!?!」

全く予想もつかない痛みが走る。

頭でも、顔でもない。

身体中を溶かされるような。焼ける激痛が。

走る。

「なっ!?!」

針妙丸の攻撃はそれでも止まらなかつた。……が。

輝針剣の狙いはズレ、手子生の頬をかすめる。

「……そんな……」

届かなかつた。私たちの……

「ふう。……コレクション対象の身体を少し傷つけたのは、痛かつたけど。まあ……少

名ちゃん。よく頑張ったよ」

針妙丸は最後の気力も体力もつき、鉄骨の上に倒れる。



「球磨川くん……」

『君の一撃はたしかに届いたぜ。針ちゃん。素直にここは褒めておこうかな』

「……………なんで若干偉そうなの？」

血が、血が噴き出し止まらない。手子生はしばらく悲鳴をあげたのち、今までにないくらいの殺気を込めた目で球磨川をにらむ。

「くううう……まああ……がああああわあああつ!!」

『さあ————第二ラウンドといこうか。手子生ちゃん』



## 第40話 男女平等、顔面鷲掴み

『やー助かったよ。しばらくの間、螺子を壁にブツ刺してぶら下がってたけど、もう手が痛くて。もう手を離しちゃうかなーって思ってたんだよね』

球磨川が制服の襟部分に空いた穴を見る。

『あ、はい。これ。針ちゃんの針』

「え………いやない」

『!? いやそんなに嫌われてるの!? 普通にちよつとシヨック!』

そんな漫才をやっている間、手子生は全身を震わせ額に青筋を立てていた。

「第二から先はねえええつ!!! これでくたばれゴキブリがアアアアツ!!!」

投げつけられたのは何の変哲もない水風船、

『どうしたの、手子生さん。急に川で遊ぶ子供のような童心が蘇った———』

「んなわけねえだろ、ボケ!! 『デビルズケメストリー』!!!」

———は突如ピンの抜かれた手榴弾のように爆発を引き起こす。

「球磨川くん!!」

「きは、きははははっ!! 無駄無駄、直撃だっ!! 生きてるわけが……ね、え、き……は……!!」

球磨川は——言葉で表現するのも控えたいくらいに『損傷』していた。

「ええっ!!? ぎや、ぎやああ!! 右半身がああ!!」

『……なんで針ちゃんがか叫んでるのさ。実際に喰らってるのは僕なのに』

「な、何で……!!? は、ははっ、痩せ我慢ってやーっー?」

『……ふ』

「……!!? へ、へ、へらへら……へらへらとお……っ! その顔、すぐに苦痛に歪ませて生きてることを後悔させてやるよっ!!」

手子生は再び水風船を投げつける。

当然ふらふらの状態の球磨川は避けられず、直撃!

「!? み、水っ!! あっ……!! 球磨川くん、早くその水を払って——!!」

『……? あっ、そういう』

「——『デビルズケメストリー』いい!!」

その瞬間、球磨川にかけられた水は人体を容易に溶かす『超酸』と化す!!

「ああっ……!!」

『うう……あああ——っっ!!』

「きは、きははは!! そ、そうそう! そ、その顔だよ!! そのまま苦痛の中で死んで—

しかし手子生は気がついた。

いや——気がついてしまった。

そして針妙丸も……何となく察してはいた。

「……く、球磨川くん」

「き……は、は——はあっ!」

身体の半分が人体模型のようになったとしても。

「え……ちよ、う、嘘で、しょ……?」

「……」

球磨川の歩みは。手子生への前進は。

『……僕、痛覚は『無かったことにした』つけ? してたっけかな……まあいいや』

止まらないことに。

『とりあえずは——チェック』

「!? —— づあ!？」

ホラー映画のモンスターさながらの気持ち悪い動きで球磨川は手子生との距離を一気に詰める。そして彼女の頭を鷲掴みにする!

「き、きは? み、襦袢、なにを……? 女の顔ですよ? え、ちよつと、なにを」

『最近、読んだマンガだね。悪役がこんなことをしてたんだけど—— 男女平等って大事だよね?』

球磨川は顔に残った超酸を無事な方の手に塗ると—— 時間差なく、その手を手子生の顔に押しつける!

「う、づああああつあああ!!!! やめろやめろやめろやめろおおおお!!!! ああああああ!!!」

『—— 僕は悪くない』

「く、球磨川くん!! や、やりすぎ!! もう流石に……」

『僕は悪くない。僕は悪くないよね、針ちゃん? —— あ、そうだ。手子生ちゃん』  
球磨川は何かを思いついたかのように眉を上げる。

『仲直りして一緒にデートしない?』

—— 何言ってるんだ、こいつは。

針妙丸は耳を疑った。

『さすがに僕も、一緒にデートする相手の顔は傷つけてたくないから——うんって言ったら手を離してあげる……どう?』

「もう信じられないくらい傷付けてるけど……! 手子生さん! はやく降参して!!  
そうじゃないと本当に顔が……!」

そして手子生は……

「わ、わかった!! わかったよおお!! 行く! デートでも何でも行くから!! もう、これ以上、顔焦げっこげになりたくないよお!! デートでも何でもするから離してえ!!」  
手子生には悪いが正しい判断だと思う。デートをしたからって死ぬわけじゃないし、死ぬほど嫌なことには限らないけど。

そう針妙丸は内心少しだけ手子生に同情した。

『ほんと?! じゃあ、離すね!』

球磨川は断面図と化した顔に笑みを浮かべると、手子生から手を離した。

『じゃあ、さっそくデートプランを——』

「いや、そんな場合じゃないから球磨川くん! オールフィクションもないんだし早く手当を……!」

「そ、そうだね、禊さま。けどさ、もうデートの行き先は決まってるんだよね。ほ、ほら！ 先着二名様の子ケツトをもう予約したんだ！」

『ほ、ほんど?! 嬉しいなあ、そんなに早くなんて、もう！ 行く気満々じゃないか！ げふっ?!』

「いや、球磨川くん、致命傷だから!! それどころじゃないから!!」

「けどね禊様……行くのはあちきじゃないよ? 針妙丸ちゃんで行ってくれる?」

『……?』

手子生の口が大きく歪む。

「————ただし行き先は地獄だがなああああつっ!!!」

「!!」

手子生は二人に向かって両手を伸ばす!!

手子生は両手を酸で溶かしながら、二人の顔に手を押しつけ——

『やれやれ……君も、用意周到だね』

間一髪で球磨川の螺子で串刺しになった手子生。

しかし——彼女が溶かしていたのは自らの手だけでは無かった。

球磨川が足場としてゐる鉄骨を溶かしていたのだ。

「き、きは……お前、だけ……は……ころ」

『……また勝てなかった』

手子生は串刺しのまま、鉄骨の上に残り、足場を失った球磨川はそのまま天井から落

下

『……手を離してくれるかい？』

「……っ!!」

……しなかった。

針妙丸がその腕を掴んでいたからだ。

『僕の腕も、あいにく溶け落ちかけてるんだ。こうしている間にも、ほら』

「……!」

『まあ、死ぬのは嫌だけど。敵を倒して自分も死ぬ。……ただ死ぬ人生にしちや、僕にし  
ては上出来じゃないかな?』

手子生の超酸のせいで

『いやん、丸見え』

「うっさいわっ!! 今真剣にやっつてんだから黙ってて! ……小槌よ……この者の傷を癒したまえ」

『……!?! 針妙丸ちゃん、何を……? あっ、まさか僕の傷口をそれで抉って落とす気かい? あげて下げるなんて……なんて君はサディストなんだ!』

「いや違うからっ!! ボケないでよ!!」

笑って少しでも気を抜けば落としてしまいうそのなのに。こつちも満身創痍なのだから少しは考えてほしい……というかなぜ致命傷を喰らってそこまで余裕があるのか、球磨川。

「……はあっ……! はあ……打ち出の……小槌……はあ……! はあ……! 持ち主の……願いを、なんでも叶える小人族の秘宝。……ただし持ち主の魔力を、時には命を代償に……うっ」

『……どうして』

そこまでと言う前に針妙丸は答える。

「……最初にこれを使った時、正邪は小槌の代償ことを教えてくれなかったけど」  
少し遠くを思い返す。

「——本当はあんたなんかに使いたくなかった」

針妙丸は球磨川の目を見る。濁っていて、どこまでも深い、底なんて見えない闇色の



瞳を。

「わたしはあなたが嫌い」

『なら、突き落とした方がいいと思うぜ?』

「だけど——あなたはどこか正邪に似てる。そんな気がする。あなたがいなくなったら正邪がきつと寂しがるかもしれないから」

まっすぐに尖った針のような針妙丸。

捻じ曲がった針金のような正邪。

二人は真逆。だが先端は二人とも同じく——尖っている。

「……それに、少なくともここに居る間はあなたは仲間だから」

尖っている。それは確実に相手に刺さる。

『……なるほどね。正邪ちゃんが連れ歩くわけだ』

球磨川はため息をつく。

今日は敗北の多い日だと、いやいつもか。

そうつぶやいて。

「負けたよ。僕の負けだ。君は……愚か者の方にいれておくとするよ」  
球磨川は苦笑する。

「……もう少しいい枠はないの?」

「……君は弱くはないからね」

——そうだろう? 少名針妙丸。

\*\*\*\*\*

「……まだ正邪に付きまとい続けるなら、あなたは知っておいて」

長い廊下の中、致命傷だけを回復させたものの疲労困憊の二人。

針妙丸が球磨川をおぶっている形になる。

『くんくん——これは……女の子の匂い! あと、ビオレ……あ!? あ、違う、アン

モニア臭だった!! うわ、くっさ!!』

「人の話聞け!! あと、女の子に臭いっていうんじゃないわよ!! あと、それ言うなら、

あんたも臭い!」

——手子生の薬品のせいだ。

あのね……と感情を引っ込めて針妙丸は続ける。

「わたしと正邪は、この世界から隔離された楽園……別の世界から来た妖怪。人間じゃない」

『……………！』

容姿は、人間に似てはいるけれど。

「あなたが言うところの、安心院さん。それに近い人外よ。わたしは一寸法師の末裔の小人族。正邪は——知ってのとおり、天邪鬼」

『へえ……………』

一瞬目を見開くも、すぐにまた興味なさげ……………というか、豆知識を知った程度のリアクションをする球磨川。

「いや、リアクションうつつすつ!?!」

『いや……………まあ……………酸素操ったりとか、支配者を操る能力を持つてる人だとか……………人間離れた人らを相手にしてきたから、感動も薄くて』

『……………はは』

ああ、なるほどね。

針妙丸は苦笑する。

『でもまあ、安心してよ！ 僕は君たちに態度を変えたりとかはしないからさ！ むしろこれまで通りにやろうよ！』

「その神経の図太さだけは大したもんだね……」

「……ていうか、もうありえないくらいに年月生きてる人外もいるから、正直迫力に欠けるっていうか……」

「? 急になんか素っぽくなったね」

『——気のせいだと思うよ。それよりも早く進んでよ。これだとうさぎに追いつけないぜ!』

「……置いてってやろうか、このアブラムシ」

そういえばさ、と針妙丸。

「球磨川くん、よく勝てなかった勝てなかったって言うけど……普通に今回は根性で勝ってたんじゃない? オールフィクションも無しにあそこまで追い詰めてたし」

『オールフィクションなんて、ただの手品さ。……それに、僕は手生子ちゃんの心は折れなかった』

—— 『わ、わかった!! わかったよおお!! 行く! デートでも何でも行くから!! もう、これ以上、顔焦げっこげになりたくないよおお!! デートでも何でもするから離してえ!!』

『あれも、嘘だったしね』

「あんな誘い方しかできないの……？ ていうかあれで行くと？」

『ああいうプロポーズの仕方しか僕は知らないのさ。愛情を伝えるには肉体的接触は不可欠なのさ……』

「いや、あんたの場合、接触じゃないでしょ。暴行と脅しじゃん」

—— 『けどね禊様……行くのはあちきじゃないよ？ 針妙丸ちゃんで行ってくれる——』  
ただし行き先は地獄だがなああああつっつ!!!

『あそこまで追い詰められていても……あの子は戦意をこれっぽちも失ってなかったんだ。僕を完膚なきまでに叩くっていう意志を……』

「……？」

『だから——また勝てなかった』

## 第41話 小槌の代償

「——黒神めだかは箱庭の方へ届けたか？」

角明学園最上階。

ガラスの下を見ればすぐに学園全てを見下ろせる頂きに、学園の支配者は君臨していた。

おおだら ぜんど  
大多羅全土は優雅に紅茶を飲み、彼の背後にいるA組生徒に話しかける。

「はい、全土さま。記憶消去……もとい改ざんは無事成功。球磨川との当学院での接触はさっぱり忘れていきます」

「確認の際に球磨川の名前は出していないな？」

全土は次なる紅茶を口に含む前に問う。

「まさか」

A組の生徒は苦笑する。

「それよりもよろしかったのですか？ 完全にしくじった堂々千太郎への処罰は？」

全土はつい先日の件について脳内で振り返る。

\*\*\*\*\*

ちようど、それは今……全土がいる場所と同じところで起こったことだった。

『も、申し訳ないでありますっ!! じ、自分としたことが……完全なる失態!! 生徒会の名に泥を……!!』

『……』

『アルカナを……生徒会を脱会させられた自分に、戦車の称号など不要……死を!! 死をもって……』

ふっ、と小さく全土は銀髪を揺らして笑う。

『神井くんは厳しいな。たった一度の、それも小さい失敗でそんなに厳しい処罰を命じたのかな?』

『ぜ、全土さま……!!?』

思いもよらぬ言葉に堂々は驚愕するなか、全土は堂々に歩み寄る。

『君は死を恐れずに俺の前に謝罪を述べるためだけに現れた。それは……何よりの忠誠の証だ』

『ぜ、全土さま……!!』

『むしろ俺としては君のことを誉めてあげたいくらいだ。堂々くん、君は球磨川と……』

もう一人、名前はなんだったかな？ あのコスプレ小娘との戦いで俺に大きな利をもたらしてくれた』

全土はいつも浮かべる獯猛な笑みではなく、満足そうな表情をしていた。

堂々は震えながら顔を下げたままだ。

『生徒会は除名になっても、これからも『戦車』として学園の秩序を維持してくれ。神井くんには俺から言っておくから、引き続き協力してくれたまえ』

『は、はは……っ!!』

堂々は頭を下げたまま後ろへ下がるといふ奇異な動作をしながらドアへと向かう。

『もったいない言葉!! これからも……これからも尽くさせてください!!』

あまりの感動によくわからない動きをしてしまっているのに気づいていないのだろう。

『ああ、そうだ。堂々くん』

『はっ!!』

『剣道の大会は一ヶ月後だったね。がんばってくれ』

『ふ、粉骨碎身の努力を尽くすでありますっ!!』

\*\*\*\*\*



「——役に立たないのなら、消してしまった方が……」

「そして自分が『戦車』の座を、と？」

「!？」

おや凶星だったかな、と全土は笑みを浮かべる。

「なにも後ろめたいことではないだろう。むしろ、向上心があることはいいことだよ」

「——」

A組の生徒は一瞬絶句した後、すぐに表情を戻す。

「堂々くんの件ね。かまわないさ。彼は自分の行動が裏目に出ることは多いが、何も殺すことはない。私のために意欲的に動いている者を無為に消すのはあまりに早計だ」

「おっしゃる通りです……」

「それに彼は私に害を与えるどころが、何も問題を起こしてもいないし、利益しか与えていないよ」

「益……ですか？」

A組生徒は不思議そうに尋ねる。

「それで、球磨川の件は？ 美紀はうまくやっているかな？ それとも、圧勝してもう終わってしまったのかな？」

カッポの紅茶を揺らしながらA組生徒へと尋ねる。

「い、いえ……まだ決着は」

「そうか——美紀の戦況は芳しくないようだな」

「!？」

動揺するA組生徒をよそに、全土は揺らしていたカップをテーブルへと置く。

「あ、あの……そ、その」

「表情と声色でわかるさ。隠さなくてもな」

A組生徒の額に大量の汗が浮かぶ。

「も、申し訳ありません!!」

「美紀から伏せられていたということだろう？ まあ、君の立場からすればそうするしかないだろうからな。美紀には君に厳しくはするな、と伝えておくよ」

「よ、よろしく願います……」

「少し退室してもらっていいかな？」

A組生徒はすぐさまに部屋を出る。

全土はテーブルの端にある携帯に手を伸ばし、ある番号へと電話をかける。

「もしもし？ 美紀、全土だ。聞こえているか？」

『全土さま!! も、申し訳ありません！ まだ反乱分子の処分とかは、』

「鬼人正邪は捕縛。しかし球磨川の抵抗で『悪魔』の手子生が敗北寸前。残る手札は自身

と捕虜の慶賀野功名。それと『死神』の次木つぎきというところかな？」

『……はい』

電話越しに諦めるような声が聞こえてくる。

「そう気を落とすな。責めようというわけじゃない。俺は激励しに声をかけたんだ」  
『全土さまが……私様に!?!』

「焦ることはない。君のあの二つの能力が健在ならば、お前の勝利は揺るがない。そうだろう?」

『は、はい!! それはもちろん!! 私様が負けることなどありません!!』  
意気込んで張り切る美紀の姿が目には浮かぶ。

「それとも——俺の手助けがいるかな?」

『その必要はありません!! 私様が絶対の絶対に! ああ負け犬反乱分子を駆逐してみせます!!』

「そうか。なら任せろ」

全土は電話を切る。

「失礼します、全土さま」

次の瞬間ノックをして入ってきたのは白い制服に身を包む男だった。

それは角明学園生徒会に所属する人間ならば絶対に見たことのある顔で、

「……美紀には後で責任を取らせませす。あんなカス如きに手こずるなど、学園の生徒会私刑執行部の面汚しです」

「神井生徒会長。君はもう少し心に余裕をもちたまえ。部下のちよつとした失敗ですぐに怒り殺そうとするなんて、アニメの二流悪役のすることだ」

「はっ！ こ、心がけます!!」

全土は再び紅茶のカップを手にとって学園全体を見下ろす。

「新生徒会か。ふっ……ふっふっふっ……」

「全土さま？」

「いや。滑稽だなと思ってね」

全土は獐猛な笑みを浮かべて、今正邪たちがいるであろう多目的館を眺める。

「球磨川禊。鬼人正邪。実に滑稽だな。お前たちが生徒会と正面きつて戦っている時点で、お前たちは俺に圧倒的に敗北しているというのに……はっはっは……」

笑う全土に息を呑む神井。

当然だ。

「神井くん。後学のために君も見ておかないか？ きつとためになるはずだぞ？」

——美紀のいる多目的館には密偵や監視カメラはない。

しかしどういいうわけか、携帯の画面に某動画サイトの配信のように垂れ流される映像。

そこに映っているのは逃げる鬼人正邪と、『悪魔』の手子生と死闘を繰り広げる球磨川。

「……はい。私も一緒させてよろしいでしょうか」

こんなものなど……彼の能力の一端に過ぎないのだろう。

神井の目に映るのは自分の想像を遥かに超えている全土の『世界』<sup>スキル</sup>だった。

\*\*\*\*\*

突如、扉の音がして目が覚める。

「——はっ!?!」

手は……鎖で縛られ、足も柱に固定されている。

まるで囚人のようではないか。

「いいザマでありますな。鬼人正邪」

入ってきた人物。道具の殺傷力を高める元能力者『戦車』——百々千太郎。

今は球磨川に能力を無かったことにされている筈だ。

「ドードー鳥か」

「誰が絶滅動物でありますかつ!! どうどうだ、百々!!」

「伸ばしたらそう聞こえんだろ」

「伸ばすなであります、鬼人正邪!!」

手足は……手錠、鎖などでガツチガツチに拘束されている。関節を外して抜けるなんていう方法もありそうだが、目の前の竹刀男がいてはそれもできなさそうだ。

「……なるほどね。私は今とらわれの身ってわけだ」

「くつく……貴様も大胆なことをしましたでありますなあ。生徒会に表立って牙を剥くとは。潜むべきを潜まず。とんだ天邪鬼でありますな」

百々は憎たらしい笑みを浮かべながら正邪へと近づくと。

「お生憎様、こつちは生まれつき身も心も天邪鬼だよ……そつちこそ。球磨川にやられて能力を無くされたせいで生徒会からハブられてねーか心配してたぜ」

「……きつさま……まあいいであります。これからたつぷり憂さを晴らすであります」

確か体が石になっていたはずだが……今は生身。

そうか、あの石化小僧の能力には時間制限でもあるのか。

そうとくれば脱出を。

チラリと百々が入ってきた扉を見る。

見るからに頑丈そうで内から蹴り倒そうとしても並の力ではびくともしないだろう。

「結構頑丈そうじゃあないか」

「この部屋は独房としても使われるであります。あんまりにも行儀の悪い生徒はここに閉じ込めて苦痛の毎日を過ごしてもらうでありますよ」

よく見ると部屋の隅に血の跡がある。

一体どんなことがおこなわれているのか。

少し鳥肌が立ちそうだが悟られるのもなんか悔しい。正邪は挑発的な態度は崩さない。

「おお怖い怖い」

「まさか最初に来るのがお前とはな……ちよつと運を感じるぞ。お前にとっては——悪運だが」

「それはどうでありますかな？」

「ここに自分が何をしに来たか知ってるでありますか？ と手に持った鞭をしならせる。

「——がつ!？」

「貴様に苦痛を……終わらない苦痛を与え、たっぷり後悔させてからこいつで楽にしてやるであります」

何度か鞭をしなければ、正邪の身体に傷をつける。

足に綺麗な一筋が入り、血の滴ができる。

「はっはっはは!! どうでありますかな? じゃあ次はこれで——骨をぶちおってやるであります!!」

百々は手に持った木刀を振り上げる。

「全土さまに泥を塗らせた恨みを——!!」

「思ったけどさ……お前——結構馬鹿なのな」

「あ?」

ニマツと笑う。

「リバースイデオロギー——私とお前の位置を入れ替える」

すると、鎖で繋がっているのは百々。鞭を握っているのが正邪となる。

「じゃ、SMプレイは終わりだ。ついでに財布ももらつとくぜ」

正邪はスツと百々から財布をくすね、鞭を投げ捨てる。

「本当は何回か仕返ししてやりたいが……時間もなさそうなのでな。じゃな!」

「きつつさああまあああああああつ!!」



「おっと長くは持たんようだ」

頑丈そうな扉が音を立てて軋む。スキルを实质失ったとはいえ、彼自身も強かったようだ。

「ふんっ!!」

扉を蹴飛ばし百々が姿を現す。

「!?」

「……やっぱり竹刀は携帯しておくべきでありますな」

鎖を自力でぶったぎり、扉をぶち破ってきたようだ。

「お前本当に人間かよ……」

人外が言うことではないが。

「物の位置の反転……そういえば最初に使っていたのも、その芸当でありましたな」

百々はゴキリゴキリと肩を鳴らす。

「まさかミイラ取りをミイラにするような特性まであるとは……やはりお前は生かしておいてはならないです。『死神』は実に甘いであります」

「能力も無くしてゐるつてのに、なんて脳筋つだよ……!」

「逃がさん……絶対に逃さぬ……この不手際、貴様の首で償わせて全土さまに……!!」  
ぐりゅつと百々の目が正邪の方へ向く。

その瞳は年相応の少年のものではない。凄まじい殺気を秘めた殺し屋のような目つきだった。

正邪は全力でその場から逃走した。

「たぶん、もうありやあ油断なんかしねえな。追い詰められすぎて逆にクールになってやがる……!」

油断もない。情もない。遊びもない。

本気で殺しにかかってきた時の強者の目は実に恐ろしい。

「うおわっ!? コウジ!」

「お、つとと!! 姉御!! ここにいたんですか! 探しました……!」

廊下の曲がり角で桜街と鉢合わせるが、あまり嬉しい状況ではない。

もうすぐ後ろにまで殺人鬼が迫ってきている。

「おう、いいとこに来たな舎弟、囷になれ」

「は、えええ!」

「お前らまとめて死ねえアアアアア!!!」

二人とも同時に身体を真つ二つにしそうな勢いで百々が迫ってくる。

「いやどういふ状況!」

「憎しみを餌にバカが釣れたってとこ」

「いや意味わかんないっす!!」

逃げつつ話している間に百々は徐々に距離を詰めてくる。

「だてに喧嘩やってないだろ? あれぐらい抑えられるだろ。私より力あったりするんじゃないか?」

「そ、そんな無茶な……!」

「ほれ、やってみ?」

「じゃなきや殺されるから……!」

「おああああ死ねえええええ!!!!」

正邪はコウジを前に押し出す。

「打ち合わせ通りに頼むぞ!」

「してない!! ひっ……やっけくっそだ、おらああああ!!!」

百々の殺人級の速さを乗せた竹刀をすんでのところで受け止めようとする桜街。

「バカめ!! 受け止められるものか! そのままミンチにしてやる!!」

百々は狂笑を浮かべて竹刀を振り下ろす。

「リバー——」

「——それで自分の『剛力』を『非力』にでも変えるつもりだったでありますか?

「鬼人正邪」

——無意識からの奇襲。

「んなつ——っ?!?!」

正邪の顎に向かつて鋭い突き。

「!? げ、な……」

瞬きの間に正邪の後頭部は床に叩きつけられる。

正邪は気を失いかける。

「やべ、あ、死ぬ……しぬ」

百々は片手で竹刀を。

先ほど突き出されたもう片方の手には——木刀が握られていた。

「あ、姉御……!! て、てめえ……オレの方には手を抜きやがったな!!」

コウジの方へは竹刀。それも利き腕ではない。

「……ふむ。やはり今までスキルに頼った弊害でありますか。本来なら二人とも——

——なんなら鬼人正邪は頭が吹き飛んでいてもおかしくなかったであります」

「う、あ……りよ、りようとう」

「囀を使つての時間稼ぎ——そして再び『反転』の能力を自分に使つてくることなど

百も承知。故に、桜街一年には多少本気で——正邪には本気の一撃を打ち込んだ。それだけの次第であります」

「てんめ——」

「そしてお前は二撃目で卒倒するであります」

桜街の後頭部に木刀の柄を叩き込む。

「うっ!?! が——」

「舍弟……! くそ……」

「しかし意識すら失わないとは大したものであります鬼人正邪。——次はその喉を突く」

百々は木刀を振り上げ突きの構えを——

「……? 木刀が……消え——」

それは突然のことだった。

百々の木刀がまるで意思を持ったかのように、彼の頭に一撃食らわせたのだ。

「が——!?! な、なにがっ!?! そ、そんなばか——!?!」

一人でに動き始めた木刀は荒れ狂うように所有者である百々を何度も打ちつける。

「こ、これは……針妙丸の……打ち出の小槌の副作用……!」

以前、幻想郷にて針妙丸を騙し打ち出の小槌を使わせた時に同じ現象が起こった。

突如、普段使っていた道具が、意思をもった付喪神へと昇華する現象——！  
 ポルターガイストに似たものが勝手に動き出す現象。それが百々の木刀に起こったのだ。

これはラッキー！

「自分の——ぐほっ?! ぼ、木刀がなぜ……?! ぐおおお、貴様の仕業か鬼人正邪あ

……! あぐか!」

「さ、さあな……どうやら私の悪運もまだまだ尽きてないみたいだな……! 行くぞ舎

弟!」

ぶお——。

謎の悪寒が目の前に迫る。

——これは死だ。

反射的に身をかわすと、自分の頭があつた場所に何者かの手が突き出される。

「……お、おいしい……ボ、ボクの手で、も、もう一回、石像にできたとお、思ったのに……」

「ちいひい!! またお前かよ……!!」

『死神』次木<sup>つぎき</sup>。——たしか片手に触れられた対象を石にできる奴だ。

「ちよ、ちようどいい……挟み撃ちにするであります『死神』のー!」

百々は付喪神と化した木刀を捕まえて叫ぶ。

——しかし次の瞬間、次木が飛びかかったのは百々の方だった。

「なっ!!」

触れて石化させる手とは『反対』。

もう片方の手を伸ばす次木。

『!?!』

避けた百々の代わりに掴まれた木刀は突如霧散。砂となって床に落ちる。

「き、きさま……どういふつもりでありますか!!」

「どういふつもりはこつちだよ! よくも……よくも……っ」

逆ギレされて困惑する百々。

「よくも正邪ちゃんに傷を!!」

次木は正邪の太ももや頬あたりに残った傷跡を指差す。

「? いや、敵だから傷つけて何が……」

「また石にしたときに傷が残るじゃないか!! それじゃあダメなんだ!!」

「……自分、耳がおかしくなつたみたいでありますな。ちよつと何を言っているのですか、次木二年生……?」

百々は理解もしたくないと言いたげに顔がひきつっている。

「なんでわからないんだ!! 美しく整っているツルツルとした石の肌を感じたいんだ!!」

頬擦りしてスーツ、スーツで!!」

次木は頬に手を当てる。まるで自分の欲望をシミュレートするかのよう。すりすり。

「傷が残つたまま石にしたら一部分だけ感触が違うだ——」

「——ああああ!! もうてめえ喋んな気持ち悪い!!」

正邪はつい大声で次木のスピーチに割り込む。

「なあ、あんた……なんでこんなのが仲間なんだ?」

「……自分もなんで寒井美紀がこんなのを頼りにしてるか理解に苦しむであります」

自分も同じアルカナ持ちとして扱われるの嫌だなー、と顔をコウジから逸らす百々。

「次木二年生!! 何をボヤボヤつとしてるでありますか!! 鬼人正邪は治療して渡すから、とにかくやつの手足と口を封じて……!!」

「……わ……た」



「はあ?」

「嫌……われた!! 正邪ちゃんにきら、嫌われたあ!!」

急に次木は泣き出してしまふ。

「な、なんでありますかマジでこいつ……情緒不安定すぎるであります」

「ああ……うわああ……あ」

次木はその場でうずくまって泣き出してしまふ。

「正邪の姉御、今チャンスじゃないですかね? な、なんで後ろに下がるんですか」

「……いいか、コウジ。ああいうのはな……」

正邪が続きを言おうとした矢先、

「——お前のせいだ、竹刀野郎!!」

「え」

次木が百々の体に『右手』で触れる。

正邪を石にしたのは左手。

故に。

——ばさあ……

あつけない音を立てて、百々の身体が砂と化した。

「ああいう危ない奴とは距離を取るのが正解なんだよ、コウジ。何をしてくるかわかったもんじゃない」

「な、なるほど……」

「おかげでよくわかった。百々のやつが生贄になってくれたおかげでな。あいつの能力は……」

次木はニタニタと壊れた笑みを向けてくる。

「嫌われるくらいなら……一緒に石になろう。それが死のう。一緒に死のう。それですつとずつと一緒だ……よね？」

『死神』のアルカナ持ち、ホルダー次木要二つぎき ようじ。

能力名『死神』(アーストウアース)。

右手で触れたものを砂に変える。

左手で触れたものを石化する。

「——とにかく、ヤバイ」

焦りのあまり、正邪は語彙力を失っていた。